



日本語・日本学研究 vol.5 (2015)

論文

《公募論文》

〈研究ノート〉

日台の意見文における「主張」の現れ方
——日本語版と母語訳版のタイトルと文章構造
の分析——

高橋圭子・林淑璋・伊集院郁子

〈研究ノート〉

引揚者をめぐることばの紐帯について
——奄美出身台湾引揚若年層を中心とした聞き
取り調査報告——

高嶋朋子

『古今集遠鏡』と本居宣長の歌論

藤井嘉章

ビルマ語のhà、kâに関する考察
——日本語の「は、が」との対照から——

トウザ ライン

自立の基礎を育てる教育についての研究
——小幡肇学級の卒業生へのインタビューを通
して

劉妍

〈研究ノート〉

1893年シカゴ万国宗教会議における日本仏教代
表 釈宗演の演説

——「近代仏教」伝播の観点から——

那須理香

《寄稿論文》

「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査」
データベース中間報告III—学部教育における日本語教育
の教材と教育上の問題—

小林幸江・鈴木美加

「e-Japanologyの構築のための基礎的研究」活動報告
友常勉

**夏季セミナー2014・大学院生サマースクール報告
および大学院生報告要旨**

執筆者一覧

国際編集顧問一覧

編集後記

東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』要項および編集・応募規程

発行の目的: 国際日本研究センターにおける研究や研究活動と関連を有する研究成果を公表することを通じて、日本研究の発展に寄与することを目的とする。

発行回数並びに発行時期: 年 1 回、3 月 (2010 年度より開始)

編集規程:

- ・国際日本研究センターは『日本語・日本学研究』の発行のために編集委員会を置く。編集委員会はセンター長、副センター長、編集幹事および各部門から選出された教員により構成される。
- ・投稿論文について 『日本語・日本学研究』は、本センターの研究活動に関連した日本研究の諸論考を受け入れる。(本センターの研究活動については、本センターのホームページを参照のこと)
- ・査読 投稿された研究論文については、編集委員会の責任において査読者を選定し、査読審査をおこなう。査読は、委員会が依頼した 2 名の査読者が査読要領にもとづき審査し、採否の決定をする。その際、編集委員会は外部の査読者を依頼することができる。
- ・編集委員会は、東京外国語大学教員ならびにセンターの研究活動に積極的に参画した者、および必要に応じて外部の者に寄稿を積むことができる。
- ・その他、編集上の細則については編集委員会が適宜これを定める。

応募規程:

- ・日本の文化・社会・歴史並びに日本語・日本語教育に関する研

究論文 (20 ページ程度、400 字 × 60 枚)、海外の研究動向・研究潮流の紹介 (20 ページ程度)、研究ノート (10 ページ程度)、書評 (1 ページ)

- ・原稿の書式 寄稿・投稿論文は日英いずれかの言語とする。日本語論文には、英語の概要 (300 語程度)、英語論文には日本語の概要 (800 字程度) をつける。
- ・投稿エントリーとエントリー締め切り: 論文の投稿を希望する場合は、指定の期日までに、下記編集委員会アドレスに E メールで投稿予定の旨を連絡すること。メール本文には、氏名・論文の題名 (仮題でもよい)・所属機関名 (該当者のみ)、および連絡先 (住所・電話番号・メールアドレス) を明記すること。また、メールの Subject (件名) には「『日本語・日本学研究』投稿希望」と記入すること。

公開、複製、公衆送信に関する権利: 掲載された論文等の公開、複製、公衆送信の権利は、本センターに帰属する。本誌に発表されたものを転載する場合は、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに、当該論文等の初出を明示すること。

【連絡先】 東京外国語大学国際日本研究センター
『日本語・日本学研究』編集委員会
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
電話 / FAX : 042-330-5794
E-mail : icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL : <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/>

Call for papers and the information The Journal of the International Center for Japanese Studies, *Journal for Japanese Studies*

Editorial Policy and Guidelines of Journal for Japanese Studies

Purpose :

To contribute to the development of Japanese Studies through publishing efforts and results pertaining to the research activities conducted at the International Center for Japanese Studies.

Publication Period and Frequency : Starting from the fiscal year of 2010, published annually.

Editorial Policies :

- ・ Editorial Committee: For the publication of International Japanese Studies, the International Center for Japanese Studies will establish an editorial committee. The committee will be composed by the director of the Center, the associate director, a chief editor, and a staff member each from five divisions of the Center.
- ・ Articles: The articles to be submitted for the Journal are selected considering their relations to the Japanese studies conducted by our center (please refer to the official website of the Center as below for details on our research areas and activities.)
- ・ Reference: Two referees appointed by the editorial committee will review and select the submitted articles based on the selection guidelines. The editorial committee is permitted to request experts for referees from outside of Tokyo University of Foreign Studies (TUFS.) The editorial committee may request submission of articles from faculty members at TUFS, or other individuals who have actively contributed to the Center' s research activities. The editorial committee will add or modify any other details as needed.

Submission Requirements:

Topics: Research article on Japanese culture, society, history, language, and language education (double space, approx. 20 pages,) international research trends (approx. 20 pages,) research report (approx. 10 pages,) book review (1 page.)
Format: The articles may be written in Japanese or English. For articles in Japanese, attach a summary in English (approx. 300 words,) and for articles in English, attach a summary in Japanese (approx. 800 letters.)

Policy Acknowledgement: All rights relating to the publication, reproduction, and public transmission of the articles published on the journal shall belong to the International Center for Japanese Studies. Any contents shall not be reproduced without showing the credit, first appearance of the article, nor the express written permission given by the editorial committee.

【For further information, please contact】

International Japan Studies Editorial Committee, International Center for Japanese Studies, Tokyo University of Foreign Studies

【Address】 3-11-1, Asahi-cho Fuchu-shi, Tokyo 183-8534 Japan
Telephone and Fax: +81 (0) 42-330-5794
E-mail : icjs-editorial@tufs.ac.jp
URL : <http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/>

目 次

《公募論文》

〈研究ノート〉日台の意見文における「主張」の現れ方

——日本語版と母語訳版のタイトルと文章構造の分析——高橋圭子・林淑璋・伊集院郁子…… 1

〈研究ノート〉引揚者をめぐることばの紐帯について

——奄美出身台湾引揚若年層を中心とした聞き取り調査報告——…………… 高嶋朋子… 13

『古今集遠鏡』と本居宣長の歌論 …………… 藤井嘉章… 27

ビルマ語の hà, kâ に関する考察

——日本語の「は、が」との対照から——…………… トウザ ライン… 49

自立の基礎を育てる教育についての研究

——小幡肇学級の卒業生へのインタビューを通して…………… 劉妍… 65

〈研究ノート〉1893年シカゴ万国宗教会議における日本仏教代表 釈宗演の演説

——「近代仏教」伝播の観点から——…………… 那須理香… 81

《寄稿論文》

「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査」データベース中間報告 III

——学部教育における日本語教育の教材と教育上の問題——…………… 小林幸江・鈴木美加… 95

「e-Japanology の構築のための基礎的研究」活動報告 …………… 友常勉… 109

夏季セミナー 2014・大学院生サマースクール報告および大学院生報告要旨 …………… 117

執筆者一覧

国際編集顧問一覧

編集後記

〈研究ノート〉

日台の意見文における「主張」の現れ方 ——日本語版と母語訳版のタイトルと文章構造の分析——

高橋圭子(東洋大学)・林淑璋(元智大学)・伊集院郁子(東京外国語大学)

【キーワード】 意見文、主張、タイトル、文章構造、母語の影響

1. はじめに

高等教育機関における日本語教育においては、アカデミックな文章を日本語で執筆する能力の育成が求められている。アカデミックな文章とは、論文やレポートなど、「主張」とそれを支える「根拠」が論理的に組み立てられた文章であり、その準備段階として「意見文」の指導が行われている日本語教育機関も多い。

伊集院・高橋(2012)は、日本人大学生と台湾・韓国の日本語学習者の意見文を分析し、論理的な文章のための指導項目として、タイトル及び文章構造の重要性を指摘している。タイトルは、読み手が内容を推測したり本文を読むか否かを選択したりする際の重要な情報源であり、アカデミックライティングに不可欠な要素である。また、文章構造とは、「主張」や「根拠」の配置を中心とした文章全体の展開のことである。読み手が論旨を的確に把握できるかどうかは文章構造の適否によるところが大きい。木戸(1992)、杉田(1994)、佐々木(2001)、Lee(2006)など先行研究も多い。しかし、意見文の主張展開をタイトルまで含めて分析した先行研究は、伊集院・高橋(2012)を除き見当たらない¹。

本研究では、日本語母語話者(JP)と学習者の相違の要因の1つとして母語の影響の可能性を探るため、伊集院・高橋(2012)のうち、台湾(TM)の日本語学習者に焦点を当て、同一執筆者による日本語の意見文(TMJ)と同じ内容の母語による意見文(TMT)を分析に加え、日本(JP)の大学生による日本語意見文と比較し、それぞれのタイトルの形式・機能、文章構造上の主張の位置の異同を明らかにすることを目的とする。

2. 分析データ

本研究では、「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」(http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/koukai_data1.html)から、日本及び台湾の大学生による日本語の意見文(JP、TMJ)と、台湾の同一執筆者による母語訳版(TMT)を分析データとして用いる。TMTは、日本語意見文(TMJ)執筆後に、逐語訳ではなく、同じ内容を自然な母語で執筆

1 日本語の文章構造に関する先行研究は、伊集院・高橋(2012)にまとめられている。

するよう依頼したものである。

データの意見文は、次の課題文に基づき、辞書などは使用せず、800字程度で執筆されたものである。

今、世界中で、インターネットが自由に使えるようになりました。ある人は「インターネットでニュースを見ることができるようになったから、もう新聞や雑誌はいらない」と言います。一方、「これからも、新聞や雑誌は必要だ」という人もいます。
あなたはどのように思いますか。あなたの意見を書いてください。

JP・TM はともに大学生であり、同等のアカデミック能力や知識が想定されている。TM は、旧日本語能力試験2級相当（学習時間600時間相当）以上の日本語学習者を対象として募集を行い、集まった学生である。実際の日本語能力を測定する目安として筑波大学留学生センターで開発された日本語能力簡易試験（SPOT ver.2）も実施した。SPOT の平均点は65点満点中45.3点であった。

分析対象のデータの概要を表1にまとめる。「本文中の文数」は、意見文の全体からタイトルを除いた部分、すなわち「本文」を構成する文の数を表す。「文」は、作文に用いられた句点によりカウントした²。段落は、作文執筆者自身が原稿用紙上に設けた空白マスや改行によって認定した。

表1 分析データの概要³

データ名	作文数	タイトル数	本文中の文数 (平均)	段落数 (平均)
JP	134	133	2176 (16.2)	553 (4.1)
TMJ	57	57	1050 (18.4)	252 (4.4)
TMT	50	49	—	223 (4.5)

3. 分析と考察

3.1 タイトルの形式と機能

まず、タイトルの形式を表2、機能を表3のように分類した。以下、タイトルに付されているのは、データベースによる作文執筆者IDである。TMTのタイトルには、本稿執筆者が日本語訳を（ ）に記入した。

2 ただし、TMJについては、明らかな文末形式でありながら句点のない場合、共同研究者のうち日本語母語話者2名で協議して句点を補った箇所もある。具体的箇所については「データベース」エクセルファイルの「日本語テキスト注」欄に注記されている。また、TMTの本文中の文数は、文の定義の問題があるため、カウントしていない。

3 「作文数」に比して「タイトル数」が少ないのは、タイトルが空欄で提出された作文があるためである。また、TMJに比してTMTの作文数が少ないのは、7名が母語訳版を提出しなかったためである。

表2 タイトルの形式の分類

形 式		例
不完全文	名詞	JP 008 新聞・雑誌の必要性
		TMJ 016 インターネットと新聞、雑誌
		TMT 020 報紙和雑誌 (新聞と雑誌)
	句	JP 123 新聞や雑誌の必要性について
		TMJ 046 新聞や雑誌の必要性に就て
	末尾の省略	JP 092 新聞・雑誌よりもインターネット
		TMJ 040 インタネットがあればこそ新聞も雑誌も必要
		TMJ 053 新聞と雑誌は必要
	完全文	平叙文
TMJ 051 新聞や雑誌は必要だ		
TMT 051 報紙和雑誌是必要的 (新聞と雑誌は必要だ)		
疑問文		JP 012 インターネットは新聞・雑誌を駆逐するか?
		TMJ 023 新聞や雑誌は必要でしょうか。
		TMT 023 新聞或雑誌是必須的嗎 (新聞や雑誌は必要か)

表2のタイトルの形式のうち、「末尾の省略」は、完全な文とは言えず、文の末尾に省略が見られるものである。具体的には、TMJ053「新聞と雑誌は必要」のように文末の「だ」が省略されたものや、JP073「手間がかかるからこそ」のように述部の用言が省略されたものがある。ただし、後者の用言の省略形式が見られたのはJPのみである。

表3 タイトルの機能の分類

機 能	定 義	例
主張明示	書き手の意見・主張が明示されているもの	JP 005 新聞擁護論
		TMJ 020 新聞や雑誌は必要だ
		TMT 049 新聞或雑誌是必要的!(新聞や雑誌は必要だ!)
主張示唆	主張明示とも主張不明とも解釈可能なもの	JP 016 新聞・雑誌の意義
		TMJ 022 新聞や雑誌の必要性
		TMT 032 報紙和雑誌的必要性 (新聞と雑誌の必要性)
主張不明	単なる話題提示など書き手の意見主張が明示されていないもの	JP 130 新聞・雑誌の将来について
		TMJ 004 インターネットと新聞
		TMT 021 不平衡的世界 (アンバランスな世界)

タイトルの機能は、李(2008)を参照し、表3のように「主張明示」「主張示唆」「主張不明」の3種類に分類した⁴。例えば、JP005「新聞擁護論」、TMJ020「新聞や雑誌は必要だ」、TMT049「報紙或雑誌是必要的!」は、いずれも新聞や雑誌を擁護する立場であることが明示されているため、「主張明示」と名付けた。一方、JP016「新聞・雑誌の意義」は「新聞・

4 タイトルの機能の認定及び3.2節で示す文章構造の認定は、共同研究者(本稿執筆者3名に加え、韓国東国大学の盧「女主」鉉氏)と台湾の母語話者2名の協力を得て行った。伊集院・林・盧・高橋(2012)での発表に際し、機能の認定に関するマニュアルを精緻化した上で人数を増やして見直し作業を行ったため、伊集院・高橋(2012)の表6の数値と若干異なる箇所がある。

雑誌には意義がある」という主張（＝新聞雑誌擁護論）を伝えているとも解釈できるが、「新聞・雑誌の意義について」という話題を提示しているという解釈も可能である。同様に、TMJ022「新聞や雑誌の必要性」は、「新聞や雑誌は必要だ」という主張が読み取れると同時に、「新聞や雑誌の必要性について」という話題提示でもある。そこで、このようなタイトルは「主張示唆」と名付けた。また、TMJ021「不平衡の世界」のように主張が読み取れないタイトルは「主張不明」と名付けた。同様に、TMJ023「新聞や雑誌は必要でしょうか。」のような「疑問文」の形式のタイトルも、問題提起による話題提示と解釈し、「主張不明」とした。

表2・表3に基づきタイトルの形式と機能を分析した結果が表4である。

表4 タイトルの形式と機能

JP		主張明示 (%)		主張示唆 (%)		主張不明 (%)		合計 (%)	
不完全文	名詞	28	(21.1)	38	(28.6)	21	(15.8)	87	(65.4)
	句	2	(1.5)	9	(6.8)	3	(2.3)	14	(10.5)
	末尾の省略	2	(1.5)	0	(0.0)	5	(3.8)	7	(5.3)
完全文	平叙文	10	(7.5)	1	(0.8)	3	(2.3)	14	(10.5)
	疑問文	1	(0.8)	0	(0.0)	10	(7.5)	11	(8.3)
合計 (%)		43	(32.3)	48	(36.1)	42	(31.6)	133	(100.0)

TMJ		主張明示 (%)		主張示唆 (%)		主張不明 (%)		合計 (%)	
不完全文	名詞	3	(5.3)	7	(12.3)	14	(24.6)	24	(42.1)
	句	0	(0.0)	2	(3.5)	0	(0.0)	2	(3.5)
	末尾の省略	2	(3.5)	0	(0.0)	0	(0.0)	2	(3.5)
完全文	平叙文	16	(28.1)	0	(0.0)	0	(0.0)	16	(28.1)
	疑問文	0	(0.0)	0	(0.0)	13	(22.8)	13	(22.8)
合計 (%)		21	(36.8)	9	(15.8)	27	(47.4)	57	(100.0)

TMT		主張明示 (%)		主張示唆 (%)		主張不明 (%)		合計 (%)	
不完全文	名詞	0	(0.0)	10	(20.4)	14	(28.6)	24	(49.0)
	句	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
	末尾の省略	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
完全文	平叙文	12	(24.5)	1	(2.0)	0	(0.0)	13	(26.5)
	疑問文	0	(0.0)	0	(0.0)	12	(24.5)	12	(24.5)
合計 (%)		12	(24.5)	11	(22.4)	26	(53.1)	49	(100.0)

まず、形式について見てみると、JP・TMJ・TMTのいずれも最も多いものは「名詞」である。「句」「末尾の省略」はTMTには見られない。これはTMの母語と日本語の統語上の相違も一因であろう。「末尾の省略」形式のTMJの2例（表2参照）はともに「必要だ」の「だ」が省略されているものである。一方、完全文はJPに比してTMJ、TMTに多い。JPに比してTMJのタイトルに完全文が多い理由として、「名詞」のタイトルに必要な連体修飾部の産出が学習者にとっては容易でないこと（伊集院・高橋2012）に加え、母語訳版（TMT）でも完全文の使用が多いことから、母語の影響の可能性も考えられる。

次に、機能を見てみると、JPは「主張示唆」が、TMJ・TMTは「主張不明」が多い。JPの「主張示唆」48例のうち、38例は「必要性」「重要性」などの「名詞」の形式、9例はそれに「について」などが付された「句」の形式である。一方、TMJ・TMTの「主張不明」のうち約半数（TMJ27例中13例、TMT26例中12例）は「疑問文」の形式である。このような形式上の特徴にも、母語の影響が見られると言えるだろう。タイトルの形式と機能には密接な関係が

あるため、中級以降の文章表現指導では、短いタイトルの中で主張を明示あるいは示唆したい時、話題として提示したい時、読み手に問いかけたい時、それぞれの場合にどのような語彙や文法形式を用いると良いかを指導することも有効であろう。

さらに、TMの同一執筆者によるタイトルを見てみると、日本語版(TMJ)と母語訳版(TMT)でタイトルの形式と機能が異なるものは以下の4例であった⁵。

- TMJ020 新聞や雑誌は必要だ〈文・主張明示〉
TMT020 報紙和雑誌(新聞と雑誌)〈名詞・主張示唆〉
- TMJ037 これからも、新聞や雑誌は必要だ〈文・主張明示〉
TMT037 報章雑誌的重要性(新聞と雑誌の重要性)〈名詞・主張示唆〉
- TMJ041 新聞や雑誌は必要だ〈文・主張明示〉
TMT041 報紙與雑誌の必要性(新聞と雑誌の必要性)〈名詞・主張示唆〉
- TMJ053 新聞と雑誌は必要く末尾の省略・主張明示〉
TMT053 無形取代有形?(無形が有形にとって代わる?)〈疑問文・主張不明〉

TM053は、日本語版と母語訳版で意味が異なる例外的なタイトルである。TM020・TM037・TM041の3例からは、母語の影響の可能性よりむしろ、学習言語では「名詞」で主張を示唆するより「文」で主張を明示の方が容易である可能性が考えられる。

3.2 タイトルの機能と本文の文章構造との関係

次に、タイトルの機能と本文の文章構造との関係について分析する。

文章構造を主張の位置によりまとめたものが表5である。型名は、表1で認定された段落に基づき、「主張」が「はじめ」(第一段落)、「おわり」(最終段落)、「なか」(それ以外)のどこに出現しているかにより決定した⁶。「主張」は、「テーマに関する書き手の意見が明確に表されているもの」(伊集院・高橋2012:4)と定義し、共同研究者間の判定が異なった場合は、李(2008)を参照し、主に「叙述表現が主張を表すもの(特に、第三者に対する要望や当為の文の機能をもつもの)」、「意味の完結度の高いもので、文脈への依存度が低く、他の文からの独立性が高いもの」という基準を満たしているか否かという観点から協議の上、判定した。表3・表5に基づき、タイトルの機能と文章構造の型を分類したものが表6である。

5 TMの同一執筆者によるタイトルで形式が異なるものはこの他に3例あるが、いずれも、TMJが「末尾の省略」「句」というTMTには見られない形式のものであり、意味や機能は変わらない。なお、形式が同じで機能が異なるタイトルの例はない。

6 作文執筆者が原稿用紙に設けた空白マスや改行では本文が3段落以上の構成であると認定できない意見文については、内容を考慮に入れ共同研究者を中心に3段落以上に認定し直し分析を行った。

表5 主張の位置による文章構造の型

型名	はじめ	なか	おわり
頭型	○	—	—
中型	—	○	—
尾型	—	—	○
頭尾型	○	—	○
頭中型	○	○	—
中尾型	—	○	○
分散型	○	○	○
非明示型	—	—	—

表6 タイトルの機能と本文の文章構造

JP	主張明示 (%)		主張示唆 (%)		主張不明 (%)		合計 (%)	
頭型	1	(0.8)	1	(0.8)	0	(0.0)	2	(1.5)
中型	0	(0.0)	1	(0.8)	1	(0.8)	2	(1.5)
尾型	3	(2.3)	4	(3.0)	11	(8.3)	18	(13.5)
頭尾型	33	(24.8)	29	(21.8)	19	(14.3)	81	(60.9)
頭中型	1	(0.8)	0	(0.0)	1	(0.8)	2	(1.5)
中尾型	4	(3.0)	8	(6.0)	9	(6.8)	21	(15.8)
分散型	1	(0.8)	4	(3.0)	1	(0.8)	6	(4.5)
非明示型	0	(0.0)	1	(0.8)	0	(0.0)	1	(0.8)
合計 (%)	43	(32.3)	48	(36.1)	42	(31.6)	133	(100.0)

TMJ	主張明示 (%)		主張示唆 (%)		主張不明 (%)		合計 (%)	
頭型	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
中型	0	(0.0)	0	(0.0)	6	(10.5)	6	(10.5)
尾型	2	(3.5)	1	(1.8)	9	(15.8)	12	(21.1)
頭尾型	8	(14.0)	5	(8.8)	5	(8.8)	18	(31.6)
頭中型	1	(1.8)	0	(0.0)	1	(1.8)	2	(3.5)
中尾型	7	(12.3)	1	(1.8)	6	(10.5)	14	(24.6)
分散型	2	(3.5)	2	(3.5)	0	(0.0)	4	(7.0)
非明示型	1	(1.8)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(1.8)
合計 (%)	21	(36.8)	9	(15.8)	27	(47.4)	57	(100.0)

TMT	主張明示 (%)		主張示唆 (%)		主張不明 (%)		合計 (%)	
頭型	1	(2.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(2.0)
中型	0	(0.0)	1	(2.0)	4	(8.2)	5	(10.2)
尾型	0	(0.0)	0	(0.0)	4	(8.2)	4	(8.2)
頭尾型	6	(12.2)	6	(12.2)	4	(8.2)	16	(32.7)
頭中型	0	(0.0)	1	(2.0)	1	(2.0)	2	(4.1)
中尾型	5	(10.2)	1	(2.0)	9	(18.4)	15	(30.6)
分散型	0	(0.0)	2	(4.1)	3	(6.1)	5	(10.2)
非明示型	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(2.0)	1	(2.0)
合計 (%)	12	(24.5)	11	(22.4)	26	(53.1)	49	(100.0)

JPの文章構造は、「はじめ」と「おわり」で主張を述べる「頭尾型」が81例(60.9%)を占め、他の型を大きく引き離している。これに対し、TMJとTMTは、「頭尾型」が最も多い型ではあるものの、それぞれ18例(31.6%)、16例(32.7%)であり、次点の「中尾型」がそれぞれ14例(24.6%)、15例(30.6%)に迫り、JPほど圧倒的ではない。TMの文章構造はJPほどには「頭尾型」が標準とは言えず、そのような母語の特徴が日本語版(TMJ)に影響を与えた可能性も考えられる。また、TMJ・TMTの「中尾型」や「尾型」の特徴を見てみると、問題提起、話題提示といった前置きの部分が長く、それだけで最初の段落を占め、主張が第2段落以降に来ている例が少なくない。このような文章構造の意見文において、さらにタイトルが「主張不明」であると、読み手は主張が読み取れない状態のまま読み進めなければならなくなり、読み手にかかる負荷はかなり大きくなる。

むしろ、文章の前半では主張が明確にならないような手法でも、高度なレトリックで読み手の興味を引き付け、むしろ説得力のある結論に結び付けることも可能であろう。しかし、日本語表現にも誤用が見られ、意図が伝わりにくい文が散見されるような習得の段階では、前置き部分と本論のバランスを考えて執筆するよう指導する必要があるだろう。

次に、タイトルの機能と文章構造の関連を見てみると、JPに特徴的な意見文は、「主張明示」「主張示唆」のタイトルで、本文でも「はじめ」と「おわり」で主張を述べる頭尾型のものであり、62例(47%)を占める。これは、読み手にとって主張が読み取りやすく、負荷が少ないが、TMJは13例(23%)、TMTは12例(25%)に過ぎない。

一方、タイトルが「主張不明」で、本文でも「はじめ」の部分に主張の明示がない文章構造(中型・尾型・中尾型・非明示型)の意見文は、JPで21例(16%)のところ、TMJは21例(37%)、TMTは18例(37%)あり、JPに比して日本語・母語ともTMに多い。これも、日本語版(TMJ)に対する母語の影響の可能性が考えられる。

例えば、以下に示すのはTMJ026の意見文である。行頭の数字は文番号、□は空白マスによる段落の開始、■は改行による段落の終了、■Lは意見文の終了を示す⁷。誤用も含め、執筆者が書いたとおりに提示する。

- 00 インターネットの発展と伝統 mass media の関係
- 01 □もう21世紀に入った今日、科学の進展のスピードは昔より速い、いろんな新しいも
 開発されました。
- 02 この中、もっとも大切なのはインターネットの発明だと思います。■
- 03 □最初、インターネットは軍事の用途として使われますが、その後、民間に開放して、
 学術と商業の用途になりました。
- 04 インターネットはいい点がいろいろ、例えば、台湾にいる筆者はもし緊急な仕事が米
 国の同僚に伝えたかったら、昔、私はただ手紙やFAX 或は電話という方法が選ば
 ました。
- 05 遅くて費用も高いです。
- 06 今、そういう場合があれば、ただインターネットで e-mail を使って、数分間私の仕

7 データベースには、原文に関するその他の記号(字体の相違、判読不能の文字など)も付されているが、ここでは省略する。

事が終わります。

- 07 その他、われわれもインターネットでインフォメーションをもらえます。
- 08 米国でプロ野球をしている松坂とイチローは今どうだった？
- 09 日本のプロ野球選手ダルビッシュ今試合は勝ちますか？
- 10 韓国の大統領の選挙は終るそうですね……
- 11 そういうことはただインターネットを使ってすぐ分ります。
- 12 これは昔想像できないことです。
- 13 インターネットは地球を小さくなって、世界中の人人を結んだとも言えます。■
- 14 □でも、インターネットの速い発展に連れてしたのは伝統のマス・メディアの衰退です。
- 15 その中、もっとも重い衝撃を受けたのは新聞です、
- 16 インフォを伝うスピードはインターネットより遅くて、費用も要ります。
- 17 ですから、ある人人が新聞が代られるかという疑問を出しました。
- 18 しかし、私はそう思いません。
- 19 伝統のマス・メディアは今厳しい冬に直面していますか、もし新しい戦略を出したらこれからも生き生きと存続していきますと思ひます。
- 20 方法はいくつがあります：
(中略)
- 27 ですから、自分の新聞社の利益と民衆の利益とも注意すべきです。■L

タイトル「インターネットの発展と伝統 mass media の関係」は話題を提示する「主張不明」である。第1段落(文01-02)、第2段落(文03-13)は背景的情報⁸とインターネットの長所を、第3段落のはじめ(文14-16)も背景的情報と新聞の不利な点を述べており、ここまで読んだ段階では新聞・雑誌は不要という主張かと予測するのが自然だろう。しかし、文17に至って問題提起、文18で新聞不要論の否定という主張が示され、予測は覆される。全27文の意見文のうち、半分以上の文01-16が「譲歩⁹」のマーカーもないまま「主張」とは逆の意見の根拠になりうる情報で占められており、バランスに欠けている。

このような意見文は、上述のとおり、読み手が主張を読み取るまでに時間を要し、負荷が大きくなる可能性があるため、主張に至るまでの情報が主張を支える効果的な内容であるか、論の流れが明快であるかを十分に確認するよう、指導する必要があるだろう。

なお、台湾の同一執筆者による日本語版(TMJ)と母語訳版(TMT)の意見文で、文章構造が異なる例が、50組中18組あった。この要因はさまざまであり、例えば、学習言語である日本語版(TMJ)の方が文章表現を簡素化できず母語訳版(TMT)より多く「主張」を述べるため、と考えられる場合もあれば、TMはJPより最終段落で「補足¹⁰」を述べる傾向にあり、その影響によるためと考えられる場合もある。また、母語訳版(TMT)の日本語版(TMJ)との異同も、意見文の冒頭から最後までほとんど逐語訳に近いものもあれば、内容的には

8 「背景的情報」とは歴史的背景や社会的、個人的状況を説明する箇所を指す。

9 意見文における「譲歩」については、伊集院(2010)、工藤・伊集院(2013)などで詳しく分析されている。

10 「補足」とは、主張についてそれまでとは別の角度から補足的に言及しているもので、私的または感情的な見解や、主張の認定基準を満たさなかったコメントが含まれる。

TMJと同一でも表現的にはより自由で自然な母語で執筆されたものもある。TMJとTMTの文章構造の相違は、これらの要因が複雑に絡み合ったものと考えられるが、同時に、母語訳版を用いた分析の限界を示しているとも言えるだろう。日本語学習経験のない台湾の母語話者が母語で直接執筆した意見文の分析が、今後の課題である。

4. まとめと課題

本研究は小規模ではあるが、台湾人日本語学習者が日本語で執筆した意見文(TMJ)と同内容を母語で執筆し直した母語訳版の意見文(TMT)を、日本語母語話者による意見文(JP)と対照し、タイトル及び文章構造上の主張の現れ方について考察した。また、分析結果から考えられる、台湾人日本語学習者への文章表現指導上の留意点についても言及した。本研究で分析したTMJデータは57編に過ぎず、本研究の結果を一般化することはできないが、台湾人学習者による日本語意見文は母語での執筆のし方と同様の傾向を示し、日本語母語話者による日本語意見文とは相違する点があることがわかった。この結果から、台湾人学習者による日本語意見文には、母語が影響している可能性が考えられる。

しかしながら、この仮説を検証するためには、今後、さらにデータを増やして検証するだけでなく、日本語学習経験のない台湾の母語話者が母語で直接執筆した意見文の分析も行い、本研究データのTMTに見られた特徴がさらに色濃く表れるか否かを明らかにしなければならない。また、学習者が母語で受けた文章表現指導の内容についても調査する必要があると考える。

【付記】本稿は、伊集院・林・盧・高橋(2012)ポスター発表の一部に加筆修正を行ったものである。また、本研究はJSPS科研費19720119の助成を受けたものである。

引用文献

- 伊集院郁子(2010)「意見文における譲歩構造の機能と位置-『確かに』を手がかりに-」『アカデミックジャパニーズジャーナル』第2号、pp.101-110.
- 伊集院郁子・高橋圭子(2012)「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴-『主張』に着目して-」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』vol.2、pp.1-16.
- 伊集院郁子・林淑璋・盧「女主」鉉・高橋圭子(2012)「意見文のタイトルの形式と機能-日本・台湾・韓国の比較-」『2012年日本語教育国際研究大会予稿集』p.118.
- 李貞旼(2008)『韓日新聞社説における「主張のストラテジー」の対照研究』ひつじ書房
- 木戸光子(1992)「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』55号、pp.9-19.
- 工藤嘉名子・伊集院郁子(2013)「超級学習者の意見文における『譲歩』の論理性」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第39号、pp.1-15.
- 佐々木泰子(2001)「課題に基づく意見の述べ方-日本人大学生の場合・日本語学習者の場

合—」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成11年度～12年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書(課題番号11691041)、pp.219-230.

http://jpforlife.jp/pdf/pr_01-27_sasaki.pdf (2014年12月19日)

杉田くに子(1994)「日本語母語話者と日本語学習者の文章構造の特徴—文配列課題に現れた話題の展開—」『日本語教育』84号、pp.14-26.

Lee 風子(2006)「留学生の書く日本語意見文の分析—日本人学生との比較において—」『立命館法学別冊 山口幸二教授退職記念論集』、pp.399-412.

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/law/lex/kotoba05/LEE.pdf> (2014年12月19日)

Expression of Assertion in Opinion Essays by Japanese and Taiwanese

The Analysis of Titles and Textual Structure in Japanese and Taiwanese Mandarin Writing

Keiko TAKAHASHI, Shuchang LIN, Ikuko IJUIN

【Keywords】 opinion essay, assertion, title, textual structure,
influence of themother tongue

This paper analyzes opinion essays written in Japanese both by Japanese (JP) and Taiwanese Mandarin (TMJ) speaking university students along with mother tongue versions (TMT). The data extracted is from “The Database of Japanese Opinion Essay by University Students from Japan, Korea, and Taiwan.” The material is analyzed as follows:

- (a) Form and function of the title
- (b) Textual structure from the position of assertion
- (c) Structural characteristics including both the title and the text

The results revealed the following characteristics:

(1) As for the form of the title, TMJ and TMT utilize full sentence or interrogative forms more than JP.

(2) As for the function of the title, many JP authors suggest their assertions by utilizing noun or phrase forms. On the other hand, many of the TMJ and TMT writers do not demonstrate their assertions clearly. The use of interrogative forms make their assertions less definitive.

(3) As for textual structure, more than 60% of the JP writers assert their opinions in the introduction and the conclusion. TMJ and TMT authors often include a long “preface,” which may raise a question and reveal the topic in the introduction without demonstrating an actual assertion.

(4) As for title and main body textual structure, 47% of the JP contributors have titles that demonstrate or suggest the assertion, along with introductions and conclusions further asserting their opinions. Conversely, 37% of the TMJ and TMT essays have titles that do not express the assertion clearly, followed by introductions that do not state the assertion clearly.

These results suggest that the mother tongue exerts influence on the characteristics of opinion essays in Japanese by Taiwan learners, and that we need to focus the learners’ attention on the structural importance of the title and text in Japanese writing classes.

〈研究ノート〉

引揚者をめぐることばの紐帯について

——奄美出身台湾引揚若年層を中心とした聞き取り調査報告——

高嶋朋子(東京外国語大学)

【キーワード】 引揚者、台湾、奄美、ことば

0. はじめに

第二次世界大戦の敗戦によって、日本の勢力範囲にあった「外地」、つまり、台湾・朝鮮・満洲・関東州・サハリン・千島列島・南洋諸島に居住していた300万人を上回る日本人たちが引揚げてきた。この引揚げについては、彼らが敗戦以前の各地域でおくった生活の様子や引揚時の過酷な状況についてのオーラルヒストリー、引揚げ関係史料の整理、引揚者文学研究、エリート層引揚者の戦後の公的な活動についてまとめた研究など、多分野に渡って枚挙に暇がないほどの研究蓄積がある。そして、内地に引揚げた後の一般の引揚者の生活に着目する研究も、近年になって着手され始めており、島村恭則編『引揚者の戦後』(関西学院大学先端社会研究所、2013年)や藤井和子「引揚者をめぐる排除と包摂：戦後日本における「もう一つの『他者』問題」(『関西学院大学先端社会研究所紀要』11号、2014年)などに成果がみえる。

例えば藤井氏は、朝鮮から両親の郷里である長崎県に引揚げ、戦後開拓が行われた同県内の開拓村に入植した引揚者へのライフヒストリーをまとめるなかで、「引揚者の中でも若い世代は、地元特有の方言、ふるまい、生活習慣、考え方などを身につけていないこともあり、周囲からは異質な他者として排除のまなざしが向けられることが強かった。」¹と、外地で生活した若い世代が引揚げ先の地域文化一般に関する知識を持っておらず、それが彼らが戦後社会に参加していくなかで困難につながったことに触れている。このことは、決して長崎でのケースに限らず、広く引揚者が抱えた問題のひとつだったと考えられるのではないか。

近代以降の「日本語」・「国語」による紐帯の多層性をとらえるグループ研究において、筆者は、「シマグチ」とよばれ、区分としては琉球語に包括される地域語を持つ奄美群島出身者(または両親が奄美群島出身者)で日本統治期の台湾で生活した経験のある者、つまり「奄美出身台湾引揚者」をインフォーマントとして、聞き取り調査を遂行してきた。周縁として位置づけられてきた奄美という地域にルーツをもつ者のなかで、特に外地に居住した経験のある引揚者に突きつけられたことばによる紐帯は、具体的にどのような問題をはらんだのか。「内地」以上に国語の推進が焦点化された外地に居住した奄美出身者は、その外地で、また引揚げ後、米軍政下の奄美や内地の各居住地で、どのような言語経験をしたのか。この点を

1 藤井和子「引揚者をめぐる排除と包摂：戦後日本における「もう一つの『他者』問題」(『関西学院大学先端社会研究所紀要』11号、関西学院大学先端社会研究所、2014年) 81頁

重視しながら聞き取り調査を行った。

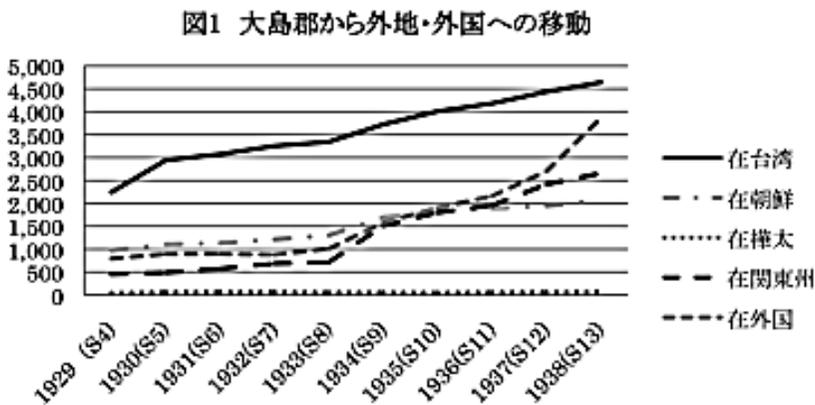
本稿は、こうした聞き取り調査の結果を整理し、特に引き揚げ当時に若年層だった人々が戦後社会へ参与するにあたって直面した問題を考えるための試みとして、彼らの言語経験をとらえていくことを目的とする。

1. 奄美から台湾への人的移動

まず、近代における奄美から台湾への人的移動とそれに関する研究の現状について、簡単に説明しておきたい。

明治から大正期の爆発的人口増加と地域内産業の零細性という問題を抱えた奄美群島からは、人口流出が途絶えることはなかった。特に、1920年代からは阪神地方を目指し、工業地帯で就労する男性や紡績女工として働く女性が非常に多く、そのままこの地域に定住する者も少なくなかった²。よって、奄美群島からの人的移動をテーマにした研究は、この阪神地域がフィールドの中心である。他方、同じ時期に行われた外地への移動については、長い間、研究の俎上にあがることがなかった。

そもそも、奄美群島からの渡台者は、台湾総督府や鹿児島県などの大きな統計資料には表れず、大島郡の統計書をいくつか突き合わせてもなお、全ての年度の明確な実数を掴むことは難しい。しかし、各旧村の調査書を通覧すると、地域によって偏りは見られるものの外地への人的移動のなかでは渡台者が圧倒的多数だったことが看取された³。現存する1929～1938年『大島郡勢要覧』所収の統計より作成したグラフは以下のとおりである。



各年『大島郡勢要覧』より作成⁴

2 『奄美ほこらしや』(和眞一郎著、奄美を語る会編、南方新社 2005年)によれば、奄美在住人口が約13万人だった2005年当時、阪神地域居住の奄美群島出身者(及び二世・三世ら)は200,000人と推定されている。

3 これについては、拙稿「大島農学校をめぐる人的移動についての試考」(『日本語・日本学研究』vol.3、東京外国語大学国際日本研究センター、2013年)にまとめた。

4 拙稿「奄美調査報告 日本統治期台湾に居住経験を持つ奄美出身者とそのことばについて」(『紐帯としての日本語』(2011-2013年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)) 研究成果報告書 課題番号:23310176、研究代表者:野本京子) 58頁より転用。

奄美の近代史をとらえるにあたって、台湾への人的移動は等閑視できない現象であることが理解できよう。にもかかわらず、この移動が研究主題としてとりあげられなかったのは、容易には明確化されない統計実数の問題だけでなく、有用な史料に関する情報が未整備であることも一因といえる。筆者は、奄美市博物館が所蔵している『芝田義則史料』⁵に含まれている、これまで取り上げられることのなかった1931年の大島農学校同窓会及総会への出席に関する回答一覧⁶の記載事項から、当時台湾に居住していた大島農学校出身者が多かったことを確認し、公的な統計を補完する史料として拙稿で紹介したが、このような微細で具体的な統計や記録を積み重ねていく作業は、これからも地道に行われる必要がある。

同様に、奄美出身台湾引揚者への聞き取りも、研究蓄積はないに等しい。筆者のインフォーマントが筆者以外から聞き取り調査を受けたケースは1例（後に書籍化）、自分史として台湾時代の記憶を文章化しているケースが2例あった（うち1例が同人誌に発表）が、他については家族にも台湾時代の生活に関する詳細を話すことはあまりなかったようである。インフォーマントたちが高齢化してきている現状をふまえれば、彼らの経験や記憶を残す作業は火急に進められるべきといえよう。

2. 奄美出身台湾引揚者のことばに関する証言

上述したように、奄美では多くの人々が仕事を求めて故郷を離れた経験を持つ。奄美から内地へ移住した人々や出稼ぎに出た人々の経験は、「シマグチを話すと馬鹿にされる」、「標準語を話せないと仕事先で困る」といった言説として持ち帰られ、戦後も長く奄美のシマグチ排斥が続く一因であったことが、前田達朗「「経験」としての移民とことば——「奄美人」とシマグチを事例として」（『ことばと社会』12号、三元社、2010年）で明らかにされている。では、奄美出身台湾引揚者は台湾で、また引揚げ後、米軍占領下の奄美や「内地」の居住地でどのような言語経験をしたのだろうか。

インフォーマントは8名で、今回は全員が奄美大島または加計呂麻島出身か両親が両島いずれか出身の湾生（日本統治期台湾で生まれた日本人を指す呼称）に限定された。各インフォーマントの性別、生年、渡台の経緯や引揚げ後の居住地といった簡単な概要は、以下のとおりである。

5 前掲の拙稿「大島農学校をめぐる人的移動についての試考」において、『芝田義則史料』についての明確な情報と筆者のアクセス時の史料の状態についての説明が不足していたため、ここに改めて記す。本史料は、徳之島出身で大島農学校卒業後、大島郡の農会職員を経て大島支庁の農政に深く関わった芝田義則氏が私蔵していた史料群で、遺族より当該機関に寄贈されたものである。雑誌、新聞のスクラップの類から学生時代の試験答案やノート、大島支庁時代にあった仕事に関する文書に至るまで幅広い史料が含まれており、貴重な研究資料といえるものもみられる。筆者は、当該機関による整理と簡単なリスト作成が済んだ状態の史料を閲覧した。

6 「茶封筒①（総曾出席二関スル件）」芝田義則史料 奄美市博物館所蔵

	性別	生年	出生地	渡台年	台湾での居住地	渡台の経緯	引揚年	引揚先
A	女	1913	奄美	1933	苗栗	在台の製糖会社勤務の奄美出身男性と結婚	1947	奄美
B	男	1922	奄美	1937	台北	高等小学校卒業後に台湾の夜間学校に進学	1941	福岡
C	女	1927	サイパン	1931	高雄	父が高雄州の郡役所に転職	1947	奄美
D	女	1932	台湾	湾生	嘉義	湾生 父が農学校教員	1946	鹿児島
E	男	1934	台湾	湾生	台北	湾生 父が警察官	1946	奄美
F	女	1935	台湾	湾生	台中	湾生 父が警察官	1946	奄美
G	男	1937	奄美	1939	嘉義	湾生 父が製糖会社勤務	1946	奄美
H	男	1940	台湾	湾生	花蓮港	湾生 父が公学校勤務	1946	鹿児島

* * *

2-1. 近代の奄美における標準語指導

最高齢である A は、高等小学校卒業後に大阪で紡績工場に勤めていた。その後、島に戻って家事手伝いをしていたが、1933年頃、奄美出身で台湾の製糖会社に勤務していた男性と結婚するために渡台している。夫婦の会話はシマグチを使っていたとの証言を得たが、それ以外の言語生活については詳細な記憶をもっておらず、深く話を聞くことはできなかった。

B は、高等小学校卒業後の1937年、おばに連れられて沖縄経由で渡台している。兄やいとこが既に台湾で就職しており、自身も進学するために渡台することは始めから決めていたという。いとこ宅に下宿し、総督府で給仕をしながら台北第二商業学校に通った。渡台初期にことばの問題がなかったかを問うと多くを語らなかったが、

台湾に行って日本語が使えるようになった。最初はまあそういうあれがあったですね。だけど、あとはもうぴしゃっと標準語を使うようになってですね。うん。

(B、2011年8月7日インタビュー)

との返答を得ている。B が初等教育を受けた昭和初期の奄美では、ハスンゲルンの「昭和期の奄美における標準語教育の実態」(『平成19年度 加計呂麻方言調査報告書』2007年)にあるように、校庭でマラソンをさせられたりバケツを持たされたりするなどの体罰を伴った標準語教育が行われていた。他にも方言札など沖縄同様の方策がとられていたことが、西村浩子「奄美諸島における昭和期の「標準語」教育—方言禁止から方言尊重へ—」(『松山東雲女子大学人文学部紀要』6号、松山東雲女子大学・松山東雲短期大学、1998年)などで明らかにされており、当時の奄美で初等教育を受けた者にとって、標準語指導は体罰やシマグチの使用禁止とともに思い起こされる記憶といえるのである。

国語、標準語と呼ばれた統一言語の推進は、戦前から学校教育を中心に標準語指導の名で全国的に展開されていた。内地では、その活動は各地域によって温度差があったが、鹿児島県は非常に積極的に取り組んだ地域のひとつだった。教員の手引きとなる指導書である『鹿児島県話言葉指導書』(鹿児島県話言葉改善委員会、1943年)を刊行したり、年単位で20名

ほどの訓導を東京の各学校に派遣して「きれいなことば」を習得させながら研究会を行わせて帰県後の指導に活かしたり、精力的な活動の痕跡がみえる。こうした動きは、1944年に奄美の各学校が作成した標準語指導の取り組みに関する報告書からも看取される⁷。また、訓導の東京派遣は戦時体制に入ったことで2度しか行われなかったが、1942年に行われた第1回の派遣者17名のうち、奄美からも古仁屋国民学校の訓導嘉本文夫が赤羽国民学校に派遣されていた⁸。奄美は鹿児島県の一地域として、県の方針による標準語指導の下にあったということが明言できよう。しかし、このような学校教育を通じた標準語指導は、実際のところ徹底していたとはいえない。標準語とはなんなのかを、現場の教員たちが探しながら進めてきた指導であったことが指摘されている通り、そもそも到達点としての標準語の具体的ビジョンがあったとはいきれないものだったからである⁹。だからこそ、国語・標準語による紐帯が図られながらも、各地域のことばによる紐帯も保持され続けていた。

Bは「台湾に行って日本語が使えるようになった」という語りの後、島での小学校時代には標準語指導はなかったのかとの問いに「あった」と回答したため、島にいるときには標準語は話せなかったのかと更に質問を重ねたが、この問いには直接答えずに、台湾で生活した後に軍隊に入ると他地域出身でなまりのひどい人間がいたが、自分はそういう人々とは違ってきちんと標準語を話せたというエピソードを語った。明確なことばにすることはなかったが、つまり彼は台湾に渡るまでは標準語を使っていなかったのだろう。これはBが渡台した1937年頃までの奄美の言語社会は、地域語であるシマグチによって紐帯されていたことを示す証言といえる。

また、この当時の奄美の言語社会については、Cによる証言も記しておきたい。幼稚園から女学校を卒業して就職した年まで台湾に居住していたCは、父親が軍属にとられて不在となった数ヶ月間だけ一家で台湾を離れ、母親の郷里であった奄美大島南部で過ごし、当地の尋常小学校に通学した経験を持つ。そのときに驚いたのが、他の児童たちが話すことばであったという。

おともだちの話すことばはね、初めて聞いたことば。今ではシマグチってわかりますけど、話しかけてくれるけど全然わからない。私たちなんかは台湾で生活をしておりましてでしょう。しばらくいるうちにわかるようになりましたけど、初めは全然。

(C、2012年8月6日インタビュー)

Cが一時的に転入した学校では、授業中以外はみなシマグチを使っていたという。台湾で生活していたCはシマグチを理解できず、初めは同級生と会話することが難しかったこ

7 この報告書は、「話言葉普及徹底ニ関スル件 大島教育会」と表紙に明記されて一綴りになっており、奄美大島教育会館に所蔵されている。

8 吉嶺勉「鹿児島県国語教育のあゆみ(戦前)」『鹿児島県国語教育』第7号、鹿児島県国語教育研究会、1958年)、18頁

9 鹿児島県の事例について、前田達朗「鹿児島県の国語教育における標準語/方言イデオロギー——戦中の「指導書」と戦後の教育雑誌をてがかりとして——」(『日本語・日本学研究第3号』、東京外国語大学国際日本研究センター、2013年)がまとめている。

とを記憶していた。

以上のように、1930年代後半から40年代にかけて、奄美での標準語指導は行われてはいたものの、地域で共有されたシマグチの存在は依然として非常に大きかったことがわかる。

そしてここで取り上げた証言から言及したい点はもうひとつある。言語学的に琉球語に包括されるシマグチは他地域出身者には容易にはわかりにくいことばであったということや島差別というまなざしが存在したことなどの、奄美をとりまく事情をふまえてもなお、生まれ育った各地域から他地域の都市部に出て行き、自身が保持してきた地域語と都市部で話されることばとの相異を体感したといえるBの経験自体は、日本各地の地方出身者の経験の類型と考えられ、必ずしも奄美出身であるがゆえの特異なものとは言い切れない。むしろCの語りが見す、初等教育を外地で受けた引揚者による、内地の各地域出身者とは異なる言語経験にある種の特異性をみることはできるのではないか。そこで、当該インフォーマントCからHの6名を台湾引揚若年層と捉え、彼らから得た語りに着目してみたい。

2-2. 近代の台湾における統一言語による紐帯

外地においては、異民族への包摂と排除を深めるため、統一言語の推進が内地以上に焦点化されてきたことは改めて説明するまでもないだろう。しかし、それは在台した日本人を均質的に統合するためにも使われていたことは指摘しておかねばならない。

日本統治初期の台湾において日本人初等教育に深く関わった新井博次は、在台日本人が「各府県人ノ集合ナルコト」に起因する問題として、当該期の台湾社会に内地各地の方言が混在したことを挙げている。1901年、国語学校第二附属学校（日本人のための初等教育機関）の児童は「学校在籍ノ生徒ノ如キモ、殆ント各県人ヲ網羅シ、之レナキハ唯青森群馬ノ二県ノミ」であり、次のような状況が生みだされた。

地方ニヨリ方言ヲ異ニスルヨリ起ルノ困難ニシテ、師弟ノ間ハ勿論、生徒相互ノ間ニ於テモ、意志疎通ノ上ニ一方ナラヌ不便ヲ生シ、殊ニ奥羽ノ北部及ヒ九州ノ南部ノ児童ハ、口ヲ開ケハ他ノ児童ノ笑ヲ博スルコトアルヲ以テ已ムヲ得ズ、言ヒタキコトモ成ルヘク沈黙ヲ守ルノ弊アリテ、教授上ノ管理ノ上ニ於テ、常ニ隔靴搔痒ノ憾ナクンハアラズ（新井博次「本島に於ける内地児童教育の特徴」『台湾教育会雑誌』1号、1901年、68頁）

内地においては、これほどの各地方出身者が同じ教室で授業を受けることは考え難い。教師と児童の間において意思疎通に不便があれば、平常の授業を円滑に進めることは不可能に近かったであろうし、児童全員に授業内容を理解させるにはかなりの時間を要したと考えられる。国語は日本人の精神的血液だと唱えた上田万年の『国語のため』が出版されたのは領台した年と同じ1895年であった¹⁰が、まさにこうした思想を以て国語を通して行われた国民統合は進められ、異民族を包摂して均質化された日本人の創出が図られたのである。そして新井が発表したような台湾での日本人教育の状況を鑑みれば、日本人に対する国語による国家への回収も、台湾では内地以上に焦点化されたとみえる。

10 上田万年『国語のため』富山房、1895年

CからGの5名のインフォーマントは台湾で小学校に入学している。それぞれ父親の職によって官舎や社宅住まいをしていたことがわかっており、Cは郡役所の社宅、Dは農業学校の教員宿舎、E、Fはともに警察官舎、Gは製糖会社の社宅に居住していた。都市部の大きな学校に通学していたのはC、D、Eで、対照的な地方の小さな学校に通学したのがF、Gである。Hは小学校入学の前年に敗戦をむかえて引揚げたが、それまでは台湾東部の教員宿舎に住んでいた。この6名への聞き取りで共通して得た回答に、シマグチの存在を知らなかったというものがある。Fは、両親が聞いたことのないことばで会話していたため、それはどこのことばなのかと問うたが、はぐらかされて教えてもらえなかったことを覚えていたが、それ以外の5名は両親がシマグチで会話をしていた記憶がない。Cは前述の通り、一時帰島中にシマグチの存在を知ったが数ヶ月の滞在ではシマグチを話せるようにまではならず、その後台湾に戻ってからも両親によるシマグチの会話を耳にしたことはなかったと振り返っている。

(両親が家庭で使うのは) 日本語ばかり。方言なんてひとことも使ったことなかったから、方言全然しらなかったもんね。

(D、2011年8月6日インタビュー)

と回想したり、

他の日本人の方言も聞かなかった。佐賀の先生いたけど佐賀弁なんか使ってなかったよ。

(D、2011年8月6日インタビュー)

東北の青森だったか秋田だったかのご家族がいて、近所にね、名前は忘れてしまったけど。親しくしてたんですよ。でも、そんな東北のことばなんて聞いたこともなかったし、気が付きもしなかったんですよ。

(C、2012年8月6日インタビュー)

と、シマグチだけでなく他地域の方言についても耳にした記憶がないと語っている。こうした証言をみると、上掲の新井が指摘した領台当初の方言混在問題は、昭和期に入るともはや顕在化していないようにみえる。しかしそれは、公学校教師だった川見駒太郎による「台湾の方言」と題された文章における記述から、更に考察を加えることができる。この文章が発表された1935年当時、台湾では「台湾の方言」すなわち台湾で徐々に形作られた独自の「比較的標準語に近い言葉」が使用されているという。こうしたことばが発生した理由は他外地同様に各府県からの人々が集住しているので、意思疎通を円滑にするためということが第一義であるが、ほかにも、

方言使用者は内地の田舎者であると軽蔑視されることを恐れ、努めて標準語を使用するが為である

(川見駒太郎「台湾の方言」『台湾教育』393号、台湾教育会、1935年 103頁)

という理由も付記されている。そして更に、川見は以下の様な見解を述べる。

けれども幼少時期をその郷里に生活し、方言訛言を根強く植え付けられた中年以上の人は、どうしてもその地方語から抜け切らないので、二言三言会話すれば大抵何地方出身の人か想像がつく。ところが其の子弟で、幼時台湾に渡つたか、台湾で生まれたという青少年は殆んどお国訛から解放せられて、ドスエもズーズーも聞くこともできない位標準語に近い言葉を使ひこなしている。

(前掲、川見「台湾の方言」、103頁)

インフォーマントたちのように、台湾で生まれ育ったか幼少期に渡台した者は、内地の各地域文化一般についての知識を有していなかった。台湾社会のなかで創出されていく「標準語に近い言葉」へのアクセス以外、具体的及び積極的に各地域の方言に触れるのは難しかったといえるだろう。しかし成人してから渡台した人々は、例えば、奄美出身者の複数の在台同郷会が集って、宴を催しシマ唄を楽しんだり、シマグチで語り合ったという報告が同郷会メディア『奄美大島』¹¹に散見されるように、それぞれの出身地の方言や文化を保持していたことがわかる。しかし、こうした地方色は「恥ずべきもの」として排除される空気が広がっていたのである。

では、「標準語に近い言葉」とは具体的に何を指すのか。この台湾でつかわれている「標準語に近い言葉」は、(1)日本語の方言が一般化されたもの、(2)新しく作られた単語、(3)台湾語が翻訳されずにそのまま使用されたもの、(4)台湾語を直訳したもの、(5)日本語と台湾語に共通する語の5つのカテゴリーに分類されるという。例えば、(1)のカテゴリに注目してみる。

台湾は全国各地の人々の集合地帯ではあるが、その中で比較的多数を占めているのは九州人である。そこで九州地方の方言が全般的に使用されるようになったのである。

(前掲、川見「台湾の方言」、104頁)

1935年の『国勢調査結果表』(台湾総督官房臨時国勢調査部編、1937年)によれば、在台北日本人270,000余人のうち、東日本出身者は73,000人弱、西日本出身者は197,000人余と、圧倒的に西日本出身者が多かった。中でも九州は、鹿児島が約34,000人、熊本が約29,000人、福岡が約16,000人と、上位3県を締めている。そこで、絶対数の多い九州出身者が共有する方言に含まれる単語の意味や文法的特徴などが、一定の地位を得て反映されたというのである。このような現象は、簡月真著・真田信治監修『台湾に渡った日本語の現在—リンガフランカとしての姿—』(明治書院、2011年)などでも指摘されているが、インフォーマントEの証言からも明らかである。Eが台北で小学生だった頃、東京から来た転校生が「ラジオから聞こえてくるようなことば」を話すため、みんなで笑ってからかったことがあった。

11 奄美出身の同郷者のための雑誌。1925年創刊。1927年7月号より『奄美』と改称され、1944年まで発行された。

それはつまり、自分達が話していたことばはラジオから流れてくるような正しい標準語じゃなかったんですよ。台湾で特定の地域の方言を聞いたことがあるかという、そういうおぼえはないんだが、標準語みたいなことばだけど標準語じゃないことばをみんなしゃべってたですね。

(E、2013年3月12日インタビュー)

インフォーマントCからHの世代が台湾で習得したことばは、川見のいう「標準語に近い言葉」である「台湾の方言」であった。D、F、G、HはEのような具体的なエピソードはなかったが、自分たちのことばがいわゆる標準語とはちがう「台湾標準語みたいなことば」(F、2014年2月24日インタビュー)であったという認識をもっていた。彼らはこの「標準語に近い言葉」によって紐帯された台湾の日本人社会に参加していたといえるのである。

但し、「台湾に行って日本語が使えるようになった」と語ったBもこの「標準語に近い言葉」を習得したと考えられるが、本人からはこうした点についての証言は得られなかった。またCは、自身が台湾で習得したことばをきれいな標準語だと自認しており、個人レベルでの言語観の相異が見られる。これは引揚後の言語経験などとの連関性があるのではないかと考えられる。

2-3. 引揚げ後にみることばの紐帯

奄美出身引揚者には鹿児島市で数ヶ月の足止めをされた者が多い。日本から行政分離されアメリカの統治下に置かれる範囲が確定するまで、沖縄県と北緯30度以南の鹿児島県に本籍を持つものは鹿児島港周辺や旧飛行場などに作られた引揚者宿舎での生活を余儀なくされたからである¹²。インフォーマントらの証言によれば、宿舎での食糧事情や衛生状態は悪く、なんとか親戚や知り合いを頼って宿舎を出る人々が多かったという。また、生活のために衣服の修繕や海産物を仕入れて販売するなどの一時的な仕事をする者も少なくなかったという。学齢期の子どもたちは、鹿児島市内の学校に通った者もいるが、差別的な呼称で呼ばれたり侮蔑的態度をとられたりしたことで、次第に登校するのをやめてしまう子どもも多く、各島に引揚げまでの厳しい生活があったことがわかる。

インフォーマントE、F、Gの3名は、奄美への引揚げが完了した後、現地の学校に転校した。Eは、転校後の言語生活について、初めはシマグチを理解できなかったが、そのうちだんだんわかるようになって、流暢とはいえないまでも友達同士で会話するぐらいのシマグチを使えるようになったと述べている。また、Gは、

そのころのね、学校の先生は、教育方針としては、学校では島の言葉は一切認めない。もし学校で使ったらゴツンってやられる。山羊の餌当番とか、鶏の餌当番とかもね。で

12 沖縄、吐噶喇、奄美へ直接戻れず鹿児島市内で一時的居住あるいは定住した引揚者とその集住地については、本山謙二「鹿児島島のシマ」(鹿児島県地方自治研究所編『奄美戦後史 揺れる奄美、変容の諸相』、南方新社、2005年)に詳しい。

も、休み時間とかみんなで遊ぶでしょう。そうするとね、たちまちわからなくなるわけですよ。みんなシマグチを使うから。だれも教えてくれなくて、シマグチができないから意地悪をするんですよ。それもなんと知っているのかはわからないわけだけれども、いやなことをいわれてるのはわかるからね。だんだん、集落の行事とか生活なんかの遊びのなかで、シマグチを覚えていってね、わかるようになっていったんだけど。

(G、2012年2月19日インタビュー)

と語った。またGは、集落にいた県外から嫁いできた女性が上手にシマグチを話すのを見て、どのように学ばばよいのか尋ねに行ったこともあるという。この証言集は、戦後、軍政期の奄美においても戦前同様の標準語指導が行われていたことを示唆しつつ、地域社会におけるシマグチの重要性を示している。言い換えれば、この頃もシマグチは「わるいことば」として排斥される対象であり、「きれいなことば」である標準語が励行される渦中であった。にもかかわらず、EとGの証言からは、「きれいなことば」しか話せない台湾引揚げ児童は、懸命に「わるいことば」であるシマグチを覚えることで、島のこども社会に参加していったことがわかるのである。また、彼らの話す「きれいなことば」は、厳密には台湾社会を紐帯していた「標準語に近い言葉」であったが、周囲からはこの両者の違いが指摘されることは全くなかった。

Fは、引揚げ後に通った小学校で男子生徒から「あらくだりやまとっちゅ」と呼ばれたことを覚えている。これは「新下大和人」と漢字書きできるが、近世に使われたことばで薩摩から新しく島にやってきた役人を指す呼称である。Fがシマグチを解さず、台湾で使っていた標準語しか話せなかったことをからかったということであろう。Fは父親からシマグチを話すことを禁じられたのである。

友達と話すようなシマグチは覚えられるわけですよ、だんだん。一緒に遊んでいくなかで。まあ上手に使えるかどうかはともかく、理解できるわけよね。でもね、父にしたらね、こういうんですよ。同級生なんかと使うシマグチを目上の人に話したら失礼だから、きちんとシマグチの敬語を覚えるのは難しいから、そこまで覚えられないのだから使うのはやめなさいとね、そういわれたのよね。

(F、2013年3月3日インタビュー)

就職で台湾に出るまでは奄美で育ちシマグチを使えるFの父親は、シマグチの複雑な敬語は学習して体得するのは難しいため、公的な場では自分が使えることばを使って失礼のないようにするように、と指導したのである。シマグチの待遇表現（敬語）の体系は年齢と社会的階層の組み合わせによって構成されるため、非常に複雑であったと現在でもいわれているが、その全容は明らかになっておらず、また実際いつごろまでこの体系が維持されていたかもわかっていない。例えば、1937年に出版された北村力馬編『奄美大島語案内』（復刻版国書刊行会、1975年）には敬語について詳細を解説した項目は見あたらず、他の史料からもシマグチの待遇表現の変遷を明らかにするのは非常に難しいといえる。ただ、シマグチによって紐帯された社会がこうした言説を継承してきたという事実がある。ことばそのものだけで

なく、ことばをめぐる共通認識もまたシマグチによって紐帯された社会のものなのである。

以上の証言から、戦後すぐの米軍政下の奄美では、シマグチを知らない引揚者がシマグチによって紐帯された地域社会に参加するにあたっては大きな壁があったことが示されるが、これは、本稿の「はじめに」で取り上げた藤井氏が長崎県での例をあげて提示した、若年層の引揚者が戦後社会に参加するにあたっての問題と同種のものだといえよう。

19歳で引揚げたCは母と父を亡くし、兄弟を養うために農業から焼酎づくりまでいろいろな仕事をしたが、1952年から小学校教員になった。「台湾育ちでことばがきれいだったから」、読み聞かせやことばの指導を任されたことがあったという。そして自身はシマグチを聞いて理解することはできるようになったが、話せるようにはならなかったと語った。

弟なんかはね、台湾は小学校までいましたけどね、(シマグチを)もう、すぐ覚えましてよ。べらべらべらべらね。だけどね、私は今でも、あの、聞くのはわかりますよ、でも上手にあんなに話しきらん。教員になってから家庭訪問なんかに行くでしょう。するとね、おばあさんしかいないお宅なんかではね、そのおばあさんがすまなそうにされるんですよ。日本語がわからないからって。だから、シマグチは聞いてわかりますから大丈夫ですよ、シマグチで話してくださいっていうんだけど、あまり話してくれなかった。

(C、2011年8月1日インタビュー)

Cは、引揚げ後に周りの人々から、台湾で教育を受けたから「きれいなことば」を話せるのだと称されたと語っており、こうした経験によって、台湾で話されていたことばは「標準語に近い言葉」ではなく「正しい標準語」だったという自認が補強されているようにみえた。自身が任されたことばの指導についても、児童がいずれ就職や進学する際に、

標準語ですらすらと話ができないから、ついつい引っ込み思案になってだめになって帰ってくる。だから、日本に行ってすらすらお話ができるためには、学校では標準語で暮らさないと教育にならないってことを職員会で言われましたよ

(C、2011年8月1日インタビュー)

と高い必要性があったことを自負している。しかし、一方で、先掲したシマグチを聞いて理解できるだけでは受け入れてもらえなかったという経験を語った後に続けて、以下の様な思いを吐露してもいる。

父と母のように島を好きな人はいないんですよ。そして、(台湾にいるころ)島はもう宝の島みたいなこと話すんだけど、方言があるっちゃしらんかったです。なんでことばのことを教えてくれなかったかっち思う、本当に。

(C、2011年8月1日インタビュー)

米軍政下の奄美では、物的資源はもちろん人的資源の新たな供給を群島外に求めることは困難を極めた。こうした歴史的社会事情をふまえれば、少なくとも1953年までの数年間にお

いては、奄美における若年層の引揚者は、シマグチを解せないある種の「他者」として存在し、シマグチとどのように向き合うかを自らに問うことで、戦後社会へ参与を進めていったといえるのではないか。

3. むすびにかえて

本聞き取り調査によって、1930年代ごろから1953年の日本復帰¹³前後までの奄美においては、国語や標準語ということばによる紐帯が強いられたことだけでなく、当時の地域社会を形成する人々を紐帯したシマグチということばの存在が大きかったということが、浮かび上がってきた。そして、日本統治下の台湾における「標準語に近い言葉」による紐帯を経験した奄美出身台湾引揚若年層にとっては、引揚後にそのシマグチによる紐帯とどのように向き合うかが、戦後社会への参与に直接的につながっていったことが確認できた。しかし、このふたつのことばによる紐帯が及ぼす影響は必ずしも画一的ではなく、各人の来歴や立場によって、または時々の場合によって異なった。Gは、「日本語も中途半端、シマグチも中途半端だから自分が何語を話しているのか。よく考えたら何語でもなくてなんだかいろんなことばの寄せ集めなんでしょうね」と語っていた。こうした証言からは、ことばによる紐帯が幾重にも重なって存在していることがみえてくる。

そして、本調査を奄美におけることばの紐帯をとらえる研究として発展的に継続させるためには、1950～70年代における奄美の言語社会を明らかにしていく必要がある。E、Fは成人後、復帰してすぐの頃に奄美で教職に就いた。米軍政下では、奄美群島居住者のなかだけで教員を供給してきたが、復帰後に鹿児島県下の他地域から奄美に教員が赴任するようになると、戦後、標準語指導から「共通語」指導へと名を変えて熱心に活動してきた鹿児島県の国語教員を中心とした研究会や児童用共通語学習教材及び教師用指導書の作成などといった活動の一部が、奄美へと持ち込まれていくのである。Eは放送の担当教員だったため、共通語によるラジオ劇などの作成にも取り組んだ。Fは、シマグチを話してはいけないと指導したことについて振り返ると複雑な思いが湧くと語ったことがある。まずは、EやFの教え子にあたる世代が受けた奄美での共通語指導の実態について調査を進展させることで、奄美におけることばの紐帯の変遷を探ることができると考えられる。

また、本調査の対象であった引揚者をめぐる研究として継続させる意味では、フィールドを奄美に限定することなく、鹿児島県全体の引揚若年層を中心とした聞き取り調査に広げる必要がある。上述したような戦後の鹿児島県の共通語指導活動の背景には、薩隅方言のアクセントやイントネーションにおける「特殊性」の自認があったと指摘されている。つまり、前田達朗、原田大樹が触れているように、教員たちも児童たち同様に鹿児島方言話者であり、共通語指導にあたるためには彼ら自身も共通語を「学ぶ」必要に迫られていた。それは「共通語指導」が推進される反面、薩隅方言を仲介とする社会的つながりが、失することなく強

13 1945年9月2日以来米軍政下に置かれていた奄美群島は、1953年12月24日に日米間の復帰協定が調印され、翌25日に日本へ「復帰」した。

固に存在していたことの証左といえよう。こうした状況下において、戦後に出現した薩隅方言話者ではない「外地」生まれ・育ちの引揚げ児童は、ある種の異質な存在となった蓋然性が高い。例えば、また、1950年代、「共通語指導」が徹底されたとみなされた「模範的」学校の状況を示す際に、方言を使う児童が少ないため引揚者が多い学校だと勘違いされたというエピソードが引き合いに出されている。¹⁴ また、父親の仕事の関係で引揚げ先が鹿児島県本土であったHは、鹿児島で入学した小学校での共通語指導について以下のように回想していた。

みんなは方言をうっかりしゃべって方言札をかけられとるわけな。でも自分は薩摩の方言なんかわからなかったわけだ。標準語ってういか台湾で使っていたことばな。それしかしゃべれんから。それを使ってしゃべったら、方言使わないから偉いなんて表彰されて。でも自分は引揚げだから、方言使わないんじゃないんで使えなかったのに。

(H、2014年11月17日インタビュー)

こうした証言から垣間見える、戦後社会において引揚若年層が地域言語と直面することで抱えた迷いや戸惑いは、とりもなおさず引揚者の戦後社会への参与をめぐる問題である。当該事項への調査は、着手され始めた一般引揚者の生活に着目する研究の一分野を担う視角を以て進められる必要があるといえよう。

参考文献

- 川見駒太郎「台湾の方言」『台湾教育』393号、台湾教育会、1935年
 島村恭則編『引揚者の戦後』関西学院大学先端社会研究所、2013年
 高嶋朋子「明治期の「在台内地人」初等教育について－『台湾教育会雑誌』所収記事から見る問題」蘭信三編著『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版 2008年
 西村浩子「奄美諸島における昭和期の「標準語」教育—方言禁止から方言尊重へ—」『松山東雲女子大学人文学部紀要』6号、松山東雲女子大学・松山東雲短期大学、1998年
 ハスングルン「昭和期の奄美における標準語教育の実態」『平成19年度 加計呂麻方言調査報告書』、2007年
 原田大樹「共通語指導のための教員研修～昭和30年代における鹿児島県春山小学校の場合～」『全国大学国語教育学会発表要旨集』118、2010年
 藤井和子「引揚者をめぐる排除と包摂：戦後日本における「もう一つの『他者』問題」『関西学院大学先端社会研究所紀要』11号、2014年
 前田達朗「「経験」としての移民とことば——「奄美人」とシマグチを事例として」(『ことばと社会』12号、三元社、2010年

14 新名主健一「鹿児島県話しことば教育史資料および文献改題」(『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』39号、鹿児島大学教育学部、1988年)、355頁。

“Language as a Bond” for Repatriates —focusing on young Amamian repatriates from Taiwan—

Tomoko TAKASHIMA
(Tokyo University of Foreign Studies)

【Keywords】 repatriates, Taiwan, Amami, languages

This paper presents the findings of an interview survey conducted as part of group research into the multiple binding effects of Japanese as an official, national language in modern times. The interviewees were either native Amamian themselves or had parents who were native Amamian. All are so-called “Amamian Repatriates from Taiwan” (奄美出身台湾引揚者), having resided in Taiwan during the period of Japanese colonial rule.

What sorts of practical linguistic issues have arisen for those with roots in the Amami islands, which have been treated as a peripheral region of Japan, and particularly for repatriates who have had the experience of living outside of Japan? What have been their linguistic experiences of their time in the “gaichi” (外地：outer territories), where the Japanese language was promoted even more vigorously than in the “naichi” (内地：mainland)? Following repatriation, what were their linguistic experiences of different regions of the “naichi” or in Amami under American military control? These were the main issues explored in the survey.

Two of the eight interviewees had undergone elementary education in Amami, and their stories are a guide to understanding the facts about the standard Japanese education in the islands. The other six interviewees had undergone elementary education in Taiwan, or were “Wansei” (湾生：Japanese born in Taiwan). Their stories show us two linguistic bonds. The first was the “language close to standard Japanese” they spoke in Taiwan; this bond was broken with Japan’s defeat in the Second World War. The second was formed by the regional “dialect” each interviewee came into contact with through their participation in Japanese society following their repatriation. Considering interviewees’ personal experiences and the social context of the period can help provide an insight into the issues faced by young repatriates emerging into post-war Japanese society.

『古今集遠鏡』と本居宣長の歌論

藤井嘉章(東京外国語大学大学院博士前期課程)

【キーワード】 本居宣長、歌論、『古今集遠鏡』、もののあはれ、あはれ

はじめに

本論の目的の第一は、本居宣長の歌論を『古今和歌集』の口語訳テキストである『古今集遠鏡』を通じて検討することである。一般的に歌論とは、「和歌とは何か」という問いの下に展開される和歌の本質論と、「和歌をいかに読む／詠むか」という和歌の表現論とに大別することができる。そのうち、本居宣長の歌論として取り上げられてきたものは、「もののあはれ」を中心とした和歌の本質論に関する論考にほとんど尽きていたと言える。その理由は、宣長が歌論として残した著作『排蘆小船』及び『石上私淑言』において和歌の本質論に関わる著述が大部分を占めているためであると考えてよいだろう。先行研究においても、宣長の歌論について論じる際、対象とされるテキストはこの二書が中心であった。そもそも、宣長の歌論は、彼の古事記研究を中心とした古道説¹との関わりの中で論じられることがほとんどであった。それゆえ、宣長の歌論は和歌本質論として、和歌の表現論という具体論から抽象度を一段上げた相で捉えられてきた。そうすることで初めて宣長の歌論を、古道説に典型的に見られる宣長の思想との関係という水準において論じることができるようになるのである。

宣長が和歌表現論として行った研究は注釈書という形式で残されており、現在の『古今和歌集』『新古今和歌集』等の注釈ないし評釈において必ず言及される業績である。しかし、宣長の思想ないし学問論を主題とする研究においては、宣長の歌論研究における車輪の片方としての和歌表現論に関する分析が欠如していると言わねばならない。本論において試みる『古今集遠鏡』を通じた宣長の歌論の研究とは、まさにこの間隙を埋めることを目的としている。『古今集遠鏡』は『古今和歌集』の口語訳テキストであると同時に、その注釈書でもあり、古典和歌の解釈に他ならない。そこでは、和歌の一首一首について、宣長がどのように和歌を読んだのかが克明に示されている。そういったテキストの性格ゆえに、和歌の本質論を述べた著作からは引き出すことのできない宣長の歌論の一側面を照射することができると思われる。

1 村岡典嗣は、『増補 本居宣長』(平凡社・二〇〇六年)において、宣長の研究を『字音仮字用格』『詞の玉緒』などの語学説、前掲二書及び『紫文要領』『新古今集美濃の家づと』などの文学説、『古事記伝』を代表とする古道説とに大別している。

本論の第二の目的は、後述するように近年脚光を浴びだした『古今集遠鏡』が持つ意義について、新たな視点を加えることである。『古今集遠鏡』は、その翻訳手法の周到さが評価される一方で、先行研究のほとんどが解釈態度に関して従来の論理的一貫性を重んじるという宣長像に引きつけて『古今集遠鏡』を捉えてきた。それは、おそらく『古今集遠鏡』を宣長研究全体に対して位置づける際、宣長の思想を主題とした研究に依拠した既存の観点に頼らざるを得なかったことが原因であると思われる。しかし、『古今集遠鏡』、あるいは宣長の注釈的著作の分析は、そのような論理的一貫性とは異なる宣長像を提示することを可能にすると筆者は考えている。『古今集遠鏡』が持つ、宣長の思想、学問における意義を再検討、再評価することが本論の第二の目的である。

そのためにまず、第一節において『古今集遠鏡』というテキストを用いることで、宣長研究における伝統的な問いに対して一定の回答をなし得ることを示したい。それは具体的には日野龍夫の「もののあはれ」に関する議論と、それに対する近年の応答である水野雄司の議論に対する検討を通じて行われる。そこで、筆者の「もののあはれ」に対する見解を述べたい。具体的には、共同性としての「もののあはれ」論と個別性としての「あはれ」論という構図を示す。次に、第二節、第三節では宣長の古典解釈に対して研究史の中で行われてきた評価を、具体的な議論に沿って概観する。そこで、『新古今集美濃の家づと』と共に注釈的著作という性格を持つ『古今集遠鏡』の研究史を、より一般的な宣長研究史の中に適切に位置付けることで、宣長研究一般に対して、『古今集遠鏡』研究が有効な視点を提供し得ることを示したい。最終的に第四節において、『古今集遠鏡』という俗語訳・注釈的著作を参照することで、より立体的に宣長を理解し得る視点を提供できれば、本論の目的は果たされたことになるであろう。

第一節 本居宣長と「もののあはれ」論

『古今集遠鏡』は、十世紀初頭に編纂された『古今和歌集』中の仮名序と短歌を、十八世紀後半の口語に訳したテキストである。成立は寛政六年（1794）と考えられており、刊行されたのはその三年後の寛政九年（1797）である。翌年、寛政十年（1798）、宣長畢生の大著『古事記伝』の完成、及び長年の研究の蓄積からなる学問論『うひ山ぶみ』の出版を見、また宣長が享和元年（1801）に没していることを考えると、『古今集遠鏡』は宣長の最晩年の著作にあたるということが出来る。

宣長の歌論といった際、その最も重要な概念が「もののあはれ」であることに異論はないであろう。「もののあはれ」は『源氏物語』に関して述べた『紫文要領』においてはじめて言及された。それは、仏教や儒教的な教戒主義的読解態度から物語を人間性の陶冶を行うものとして読むのではなく、作品そのものに素直に感動し、それを読み込んでいく態度と言えるであろう。

儒仏の教は、人の情の中に善なる所をそだて長ぜしめて、悪なる所をはおさへいましめて、善になをさんとする物也、さて其教によりて、悪なる情もなをりて善に化する事有

也、歌物語は、其善悪邪正賢愚をはえらはず、た、自然と思ふ所の実の情をこまかにかきあらはして、人の情はかくの如き物ぞといふ事を見せたる物也、それを見て人の実の情をしるを、物の哀をしるといふなり、²

従来の教戒主義的読解に対して主情主義的な読解を主張する中で、「もののあはれ」が中心的な役割を担うことになるのだが、本節の議論において最も重要なことは、この「もののあはれ」という言葉が中心的に論じられたのは、宣長の生涯において、上記で示した源氏物語文学論としての『紫文要領』と、歌論としての『石上私淑言』という共に宝暦十三(1763)年成立と考えられる著作に限定されるという事実である。このことに着目し、従来無批判に宣長思想を捉える際の中心概念と考えられていた「もののあはれ」を、宣長独自の発想と切り離そうとしたのが日野龍夫である。日野の見解によれば、「もののあはれ」という言葉は、当時の俗文学において広範な使用例が認められており、そもそも宣長独自の概念だったのではない。日野は『紫文要領』『石上私淑言』以降、「もののあはれ」という言葉が姿を現さなくなっただけでなく、あまりにもありふれた言葉であったために「忘れるという意識もなく使用しなくなってしまった」³ためだと述べている。

日野の論への近年における有力な批判に水野雄司の論考がある。水野は日野が「忘れるという意識もなく使用しなくなってしまった」とする「もののあはれ」と古道論との関係を「段階論」、「二元論」、「一元論」の三つに分類し、「なぜ古道論の文脈で宣長は『もののあはれ』という言葉を使わなかったのか、という疑問に答えなければならない」⁴と問題を設定した上で、「否定からの再生論」という第四の論を展開する。文芸理論としての「もののあはれ」は対象世界の把握に関わるものである。しかし、古道論としての古事記的世界の把握に関して不可知論の立場を取る宣長は、現象としての対象世界の把握に関わる「もののあはれ」に関する理論をも否定せざるを得なかった。これが、古道論において「もののあはれ」という言葉が使われなかった理由であると水野は考える。しかし、宣長の生涯にわたる著作において、宝暦十三年以降にも寛政八年(1796)成立の『源氏物語玉の小櫛』及び、寛政十年成立の『うひ山ぶみ』において「もののあはれ」の使用例が見出せる。水野はこの現象の説明として、いわゆる『呵刈葎』等に見られる論争期を経て、皇国の絶対性を担保するためには、「漢意」批判と言うネガティブな側面だけではなく、「漢意」に対する積極的な反措定が必要となったと考え、そこで要請されたのが「真心」としての「もののあはれ」であったとする。

以上、やや詳しく見て来た水野論は、日野龍夫が提出する宣長は宝暦十三年以降、「もののあはれ」という言葉を「忘れるという意識もなく使用しなくなってしまった」という見解に対する有力な反証であろう。

以上の日野と水野の議論を念頭に置きながら、本節では、『石上私淑言』と『古今集遠鏡』という三十年以上の時を隔てた二つの著作を通して、従来のもののあはれ論の再考を促すも

2 『紫文要領』、第四卷、九五頁。以下、『本居宣長全集』(筑摩書房・一九六八—一九九三年)からの引用は、書名、巻数、頁数の順で記載する。なお全ての引用に関して、横書きという書記形態に鑑み、「くの字点」は用いず、そのまま文字を繰り返して引き写す。

3 日野龍夫校注『本居宣長集』(新潮社・一九八三年)解説、五一—八頁

4 水野雄司「『もののあはれ』の行方」(『鈴屋学会報』第二九号・二〇一二年)

のとして、「もののははれ」論と「あはれ」論の峻別という観点を提出したい。

まずは『古今集遠鏡』「はしがき」部分を検討する。この「はしがき」は『古今集遠鏡』の冒頭に置かれ、俗語訳に関する方法を前もって記した部分である。全体は大きく四つに分けて考えることができるだろう。以下に「はしがき」の内容を分類して列挙する。

- 【第一分類】(一)導入 (二)うひまなびなどのために (二四)凡例
(二五)ひらがなして書る (二六)訳のあらため
- 【第二分類】(三)京わたりの詞 (四)打ち解けたる詞 (五)いきほひを訳す
(六)訳語の異なること (七)つらねてうつす (八)意をえて訳す
(九)詞をかへてうつす (十)詞のところをおきかへてうつす
- 【第三分類】(十一)ぞ・こそ・も・や (十二)ん (十三)らん (十四)らし (十五)かな
(十六)つつ (十七)けり (十八)なり (十九)ぬ・つ・たり・き
(二十)あはれ (二一)あなた・こなた
- 【第四分類】(二二)ふし・縁の詞 (二三)枕詞・序⁵

第一分類とした(一)(二)(二四)(二五)(二六)は導入、あるいは凡例的な記述である。第二分類は(三)「京わたりの詞」から(十)「詞のところをおきかへてうつす」の部分とし、俗語訳の方法論に対する総論的部分と見なすことができる。そして第三分類として(十一)から(二一)までが、具体的な語ひとつひとつに対する訳語の一般的通則の提示部分であり、本論において最も注目すべき部分である。第四分類とした(二二)(二三)は和歌の修辞法と俗語の訳出の関係について述べた部分である。

「はしがき」は『古今和歌集』中歌の俗語訳を行うに際しての宣長の方法論の提示であると考えべき箇所であり、そのうち第三分類は特に語彙レベルでの訳語の一般的通則を示している。古代語と近代語において最も語彙的な変化が激しく、かつ使用頻度の高い助詞・助動詞についての訳語の提示が主であり、俗語訳の方法論の提示という観点からは必須の条項であると言えるだろう。しかしそれゆえに、(二十)「あはれ」、及び(二一)「あなた」「こなた」が、自立語としては例外的に取り上げられていることが注目される。ここで、「あはれ」の項を見てみると、

あはれを、ア、ハレと訳せる所多し、たとへばあれにけりあはれいくよのやどなれやを、何ん年ニナル家ヂヤゾヤ、ア、ハレキツウ荒タワイと訳せる類也、かくうつす故は、あはれはもと歎息く声にて、すなはち今ノ世の人の歎息て、ア、ヨイ月ヂヤ、ア、ツライコトヂヤ、又ハレ見事ナ花ヂヤ、ハレヨイ子ヂヤなどいふ、このア、とハレとを、つらねていふ辞なれば也、あはれてふことをあまたにやらじとや云々は、花を見る人の、ア、ハレ見事ナといふ其詞を、あまたの桜へやらじと也、あはれてふことこそうたて世の中

5 「古今集遠鏡」「はしがき」の記述から筆者が作成。なお、本論では稿本板本の校異を通覧できる利便性を考え、『古今集遠鏡』については、今西祐一郎校注『古今集遠鏡1・2』（平凡社・二〇〇八年）を使用し、頁数もそれに準ずる。

を云々は、ア、ハレオイトシヤト、人ノ云テクレル詞コソ云々也、大かたこれらにて心得べし、⁶

第一に、「あはれ」は「ア、ハレ」という俗語訳を当てる事が多いということ、第二に、その理由は「あはれ」はもともと歎く声を表している事が述べられている。続いて、特に後者の言及を念頭に置きながら、『古今集遠鏡』成立の三十二年前、宝暦十三年の著作であり、宣長の歌論において「もののあはれ」が中心的に論じられた『石上私淑言』の記述を見ると、「物のあはれを知る」の項において、次のような端的な記述を見出すことができる。

さて阿波礼といふは。深く心に感ずる辞也。是も後世には。たゞかなしき事をのみいひてアハレノをかけ共。哀はたゞ阿波礼の中の一ツにて。阿波礼は哀の心にはかぎらぬなり。…〈中略〉…阿波礼はもと歎息の辞にて。何事にて心にも深く思ふ事をいひて。上にては下にてはも感ずる詞也。⁷

『石上私淑言』において、『古今集遠鏡』と同様に「あはれ」とは、本来的には人の歎息を表す言葉であることが述べられている。人の心が何かを感じ入り、動くとき、思わず出る歎息が「あはれ」なのだ。

以上で見てきたように、「あはれ」に関する宣長の記述は、『石上私淑言』と『古今集遠鏡』において一致しており、かつ大きな重要性を担っていると言える。それは一言で言えば「歎息」である。菅野覚明は、この「歎息」としての「あはれ」に注目して、宣長の「もののあはれ」が感情の内容ではなく、その深浅に関わる概念である事を述べている⁸。歌の発生を「心に思うこと」に求めるのは、『古今和歌集』仮名序以来の基本的な見方ではある。しかし、歌を心に思う内容から発生するものと捉えようとすると、その内容の道徳的善悪を論ずる教戒主義的態度が導きだされ、正当化されることになる。それとは対照的に、宣長が和歌の発生の原理として求めたのは、感情の内容ではなく、感情の深浅であったと菅野は述べる。

菅野自身は、「もののあはれ」と「あはれ」を区別なく用いているように見えるが、ここで今まで特に断ることなく用いてきた「もののあはれ」と「あはれ」を、区別することが可能であるのかを考察したい。宣長自身の記述を見ると、「もののあはれ」とは「しる」ものである。

さまざまにおもふ事のある是即もののあはれをしる故に動く也。しる故にうごくとは。たとへば。うれしかるべき事にあひて。うれしく思ふは。そのうれしかるべき事の心をわきまへしる故にうれしき也。又かなしかるべき事にあひて。かなしく思ふは。そのかなしかるべきことの心をわきまへしる故にかなしき也。されば事にふれてそのうれしくかなしき事の心をわきまへしるを。物のあはれをしるといふ也。⁹

6 『古今集遠鏡1』二三頁

7 『石上私淑言』、第二巻、一〇〇—一〇一頁

8 菅野覚明『本居宣長一言業と雅び』（ペリカン社・一九九一年）、一七二頁

9 『石上私淑言』、第二巻、九九頁—一〇〇頁

ここで注目に値するのが、「うれしかるべき事の心をわきまへしる」という表現である。この「べし」の表現から、宣長が、うれしいと感じることが妥当であるという領域を想定していることが伺える。「物のあはれをしる」者であれば、「うれしい」と感じ、それを知らぬ者には「うれしい」とは感じられない美的空間を想定しているとも言えるだろう。このような「もののあはれ」の捉え方は、百川敬仁¹⁰の、「もののあはれ」に宣長が日本的共同性の概念化を託していたとする考えに典型的に表れている。すなわち、「もののあはれ」は、それを知る者と知らぬ者が排他的に区別されるような共同性を前提にしている、少なくともそのような共同性へと至る可能性を含意していると考えられる。いわゆる「もののあはれ」論が、古道論との関係において、「物」や「事」をありのままに感じることをその背後にある神への従順へと繋がる論じる相良亨¹¹のような議論へと導かれていく理由は、この排他的な共同性を前提にした空間を「もののあはれ」が胚胎していることに拠るものであると考えられる。

しかし、我々は「あはれ」の中に、「もののあはれ」とは異なる位相を読み取ることはできないだろうか。繰り返せば、「あはれ」は「歎息」であり、感情の深浅の問題であった。宣長は三代集における「あはれ」を含む和歌を列挙しながら、様々な表現の方法を示した上で、次のように言う。

さてかくのごとく阿波礼という言葉は。さまざまいひかたはかはりたれ共。其意はみな同じ事にて。見る物きく言なすわざにふれて。情の深く感ずることをいふ也。俗にはたゞ悲哀をのみあはれと心得たれ共。さにあらず。すべてうれし共おかし共たのし共かなしともこひし共。情に感ずる事はみな阿波礼也。¹²

ここには先に「もののあはれ」の引用で見た「べし」の語はなく、ただ「情の深く感ずること」が「あはれ」であると述べられている。さらに、

されば阿波礼といふ事を。情の中の一ツにしていふは。とりわきていふ末の事也。その本をいへばすべて。人の情の事にふれて感くはみな阿波礼也。故に人の情の深く感ずべき事を。すべて物のあはれとはいふ也。¹³

ここで「あはれ」と「もののあはれ」の対比がはっきりするだろう。「べし」の有無を考慮すれば、「あはれ」はある人の情が事に触れて動くことである。一方、「もののあはれ」とは、人というものの情が深く動くことが妥当であるような物事のことを言っている。すなわち、「あはれ」とは、極めて個人的な体験における位相の言葉なのである。そこには「もののあはれ」が含

10 百川敬仁『内なる宣長』（東京大学出版会・一九八七年）

11 相良亨『本居宣長』（東京大学出版会・一九七八年）

12 『石上私淑言』、第二巻、一〇五頁

13 同上、一〇六頁

意していた共同性へと向かう契機とは逆の、いわば個別性へと向かう可能性が胚胎していると言えるのではないだろうか¹⁴。

以上、日野と水野による「もののあはれ」をめぐる議論を起点とし、「もののあはれ」と「あはれ」を峻別するという観点が、歎息としての「あはれ」という認識から導き出された。「もののあはれ」とは、共同性へと向かう概念であり、それゆえ古道論との関係においてその位置を与えられ得る理論的可能性を有している。一方「あはれ」とはむしろ個別性をその本質としていると考えることができる。

本論では最終的に、『古今集遠鏡』における「あはれ」という言葉への俗語訳の実体を見ることで、研究史において散見される、宣長が古典解釈に際して論理的一貫性を重視するという通説に対する対案を提出したい。論理的一貫性という見方は、宣長の古典解釈が実証主義的かつ統一的な解釈をなし得る基盤であると共に、解釈の細部においては融通が利かないという特徴を持つとする宣長像をも帰結する。それは取りも直さず、いわゆる「もののあはれ」論におけるような共同性を志向する宣長が、その排他的共同性には包摂されないものを論理的一貫性によって排除していく、という構図が想定されていると言える。しかし、宣長は他方で「あはれ」論とでも言うべき、個別性への志向を有していたと考えられる。この「あはれ」論の位相の実証こそが、『古今集遠鏡』を通して「あはれ」の個別的分析を行う方法論的な動機となっている。

第二節 宣長の古典解釈をめぐる二つの立場

— 『新古今集美濃の家づと』の研究史を事例に

『古今集遠鏡』を直接議論の俎上にあげる前に、宣長の古典解釈が研究史の中でいかに捉えられてきたかについて、別のテキストを用いた事例を検討しよう。ここでは、第八番目の勅撰和歌集である『新古今和歌集』の注釈書『新古今集美濃の家づと』を対象としたい。『新古今集美濃の家づと』は寛政三年(1791)年に成立し、宣長が『新古今和歌集』中歌六九六首に対して注釈を加えたものである。

『新古今集美濃の家づと』を宣長の古典解釈に対する態度との関係から研究する中で、藤原定家歌の改作が一つの大きなテーマとなっている。宣長は、『新古今和歌集』を最上の歌集であると考えていた。しかし、その注釈をひとつひとつ見ていくと、『新古今和歌集』歌に対する「添削」とも言える処置が散見されるのである。例えば、三五番歌

晩 霞

なごのうみの霞のまよりながむれば入日をあらふおきつしら浪 後徳大寺左大臣

初句のもじ、やとあるべき歌なり、此ながめは、かすみの間ならでも同じことなれ

14 以上の整理は、友常勉『始原と反復 本居宣長における言葉という問題』(三元社・二〇〇七年)における「〈体験〉を昇華する操作は主観的経験から出発して、経験に普遍的な〈意味〉を与えるひとつの美学的構造をなしている」(一七二頁)から基本的なモチーフを得ている。すなわち、「あはれ」という「主観的経験」と、「もののあはれ」という美学的概念の導入による排他的共同性の創出という「普遍的な〈意味〉」の対立を参考にしている。

ば、題の意はたらかず、¹⁵

初句の「なごのうみの」を「なごのうみや」とすべきであることを述べている。このように宣長における『新古今和歌集』に対する改作の多くは、和歌中の一部分の助詞の改変を主張することが主であるが、一首全体の改作に及ぶものが全部で三首ある。四〇番歌、三六三番歌及び四二〇番歌である。そしてこれら三首は全て藤原定家作の和歌である。寛政七年（1795）の板本を底本とする筑摩書房版本居宣長全集中の『新古今集美濃の家づと』では、これらの改作は「或人の云」という表現で、改作の主体が曖昧になっており、宣長による改作であると断言することはできない。しかし、石川泰水が自筆稿本と校合した際、それらの主体が全て宣長自身であることが明示されていることを示している¹⁶。宣長による定家歌の改作例を、原歌と共にここで列挙する。

大空は梅のにはほひにかすみつゝ、くもりもはてぬ春の夜のつき（春歌上）
 大ぞらはくもりもはてぬ花の香に梅さく山の月ぞかすめる
 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮（秋歌上）
 見わたせば花ももみぢもなにはがたあしのまる屋の秋の夕暮
 さむしろやまつよの秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫（秋歌上）
 さむしろにまつ夜の月をかたしきて更行影やうぢの橋姫

一首目の四〇番歌は、「梅のにはほひ、かけ合たる詞なき故に、はたらかず」¹⁷と注されて、改作歌では「梅のにはほひ」が除かれている。『八代集抄』、『尾張の家づと』などが主張する、「梅のにはほひ」それ自体が霞となっているという「景気」を重視する解釈を否定し、詞と詞の続き様に焦点を絞った解釈を示している。

二首目の三六三番歌においては、「けり」を詠嘆の助詞と解釈し、あると思っていた花や紅葉が、浦の苦屋に来てみたらなかったのだという趣意を表すことになるが、『源氏物語』明石巻を念頭に置いている浦の苦屋には、もともと花も紅葉もないはずであるので、詠嘆の意味での「けり」が現れるのはおかしい、と宣長は考える。その上で改作歌において、「花も紅葉もなかりけり」を「花も紅葉も難波潟」とし、「難波潟」に「なし」を言い掛ける秀句として改作している。

三首目の四二〇番歌は、「さむしろや」の「や」への不信から、「に」へと改作し、「月のあへしらひの詞」¹⁸の必要性から、「影」を挿入している。このことによって、「てにをは」の問題としての「や」と、詞と詞の繋がり上の問題であった「月のあえしらえの詞」の問題が改作歌によって、解決されたことになる。

このような一連の改作の特徴を野口武彦は「われわれが見出すのは、一方における宣長の

15 『新古今集美濃の家づと』、第三卷、三〇二頁

16 『新古今集古注集成 近世新注編1』（笠間書院・二〇〇四年）解説参照

17 『新古今集美濃の家づと』、第三卷、三〇四頁

18 同上、三四六頁

言葉の論理的運用への特殊な執着であり、他方における「景気」への無感覚なのである¹⁹と規定する。「景気」とは和歌において機知的に表現される情景を指すが、野口の論に見られるのは、定家歌の改作という事実から見られる宣長の論理的一貫性への執着という観点である。

また付言すれば、日野龍夫も『新古今集美濃の家づと』を取り上げた論文で、異なる視点から野口と同様の見解を表明している²⁰。定家の一一四二番歌を取り上げて

年も経ぬいのる契ははつせ山をのへのかねのよそのゆふぐれ

二の句以下めでたし、詞もめでたし、下句、尾上の鐘なる故に、よそに遠く聞ゆる意にて、よそとつゞけたり、さてよその夕暮とは、よその人の、入相のかねに、来る人をまちてあふ意也、さてそれは、わが祈る契なるに、わが祈りは、しるしなくしてよその人のあふ契なるよと也、そのよその人にあふ人は、わがおもふ人なり、こはいとめでたき歌なるに、年も経ぬといへること、はたらかず、かけ合へる意なきは、くちをし、²¹

上記の歌に対する宣長の注の最終部分「こはいとめでたき歌なるに、年も経ぬといへること、はたらかず、かけ合へる意なきは、くちをし」を、日野は「その表現（筆者注：ここでは「年も経ぬ」）を必線的なものとらしめるような言葉が一首の中に見出されないため、あってもなくても歌意に影響のない表現になってしまっている²²と解釈する。ここで言う「必線的」とは、「年も経ぬ」という初句の言葉と後続する表現「いのる契ははつせ山をのへのかねのよそのゆふぐれ」との繋がりを示す表現である。一方、石原正明『尾張の家づと』は宣長のこの見解を批判して「別に何のかけ合をかまたん²³と述べ、久保田淳『新古今和歌集全評釈』も「祈ってもその甲斐がなく、年月が経っているので、『年も経ぬ』と言ったのである。この句は、この一首の中で必然性のない句ではない。しかし、この初句切れが唐突な感じを与えることは事実である。その唐突さに伴う違和感、調和を破るような意外性こそは、この歌を詠んだ頃の定家の狙いであったと思うのだが、『美濃』の非難は、そういう違和感に由来する反撥から発しているのではあろう²⁴と宣長『美濃の家づと』の解釈を分析する。

だが日野は石原・久保田の宣長評を検証した上で、

しかし宣長はそう考えなかった。原文は「いのる契ははつせ山」であって、「いのりし契はつせ山」などではない。過去の助動詞「き」が用いられていない以上、この「いのる」はあくまで現在只今の行為である。宣長の理解は恐らくこういうことで、そのよう

19 野口武彦「本居宣長における詩語と古語—『新古今和歌集美濃の家づと』の定家批判を中心に—」（『文学』第三八巻第四号・一九七〇年）六五頁

20 日野龍夫「宣長と過去の助動詞」（『江戸文学』第五号・一九九一年）

21 『新古今集美濃の家づと』、第三巻、四〇四頁

22 日野「宣長と過去の助動詞」、三頁

23 石原正明『新古今集尾張の家づと』（『国文注釈全書 卷十』すみや書房・一九六八年）一六六頁

24 久保田淳『新古今和歌集全評釈 第五巻』（講談社・一九七七年）三三三頁

に解すれば、確かに、「年も経ぬ」という第一句は第二句以下と結びつかず、浮き上がったものとなる。一体、宣長には過去の出来事を述べる場合にはきちんと過去の助動詞を用いるべきであるという持論²⁵

があるとし、「常識や慣例よりも論理に従うという宣長の面目が躍如とするのは過去の助動詞が用いられていない表現に対して、文脈上すこしでも現在の出来事と解する余地があれば、たとえ歌の情緒を損なおうとも、現在の出来事と解してしまおうとする姿勢である」²⁶と述べる。これもまた、野口と同様に、宣長の古典解釈を論理的一貫性への執着として捉える立場である。

鈴木淳は野口と同様に『新古今集美濃の家づと』における宣長による定家歌の改作を対象とした論考の中で、宣長の改作において先に見た野口の論を次のように表現し直す。

宣長の改作が「理のみを先にして、縁語言葉のいひくさを求て」なされたもので、「風致」をないがしろにしたとの指摘は、改作批評の意図をよくいひ当てたものとみるべきである。けだし、宣長の改作批評には、原歌の持つ新古今的な「風致」を犠牲にしてまで、あへて意・詞の整合性を優先させようといふふしが認められるからである。²⁷

また、

宣長の改作批評は、みな「すべて歌は、かやうにいたづらなる詞をまじへず、一もじといへどもよしあるやうによむべきわざそかし、」（『美濃の家づと』三九八頁）といふ、彼一流の歌観にもとづいてなされたものである。しかし、改作批評を通して具体的に知られる限りでは、新古今風といふにはほど遠く、正明が「無用のもじを一もじもいれじと構ふるは、草庵などの風骨也、」（『尾張』一五頁）といふとほり、歌風はかの「草庵体」に近く、歌観も二条家流のそれに立つたものだ。²⁸

とも述べる。その議論は野口の論と大きく変わることはないように一見思われる。すなわち、石原正明以下、野口は宣長の改作が縁語の繋がりを、歌の表現する「風致」より先行させるという態度を宣長が定式化し、その強引な適応をしていくものであると見る。しかし、鈴木淳は、『玉勝間』の「おのが帰雁のうた」〔六一九〕項において宣長が以下のように逡巡していることに注目する。

帰雁の題にておのれ、「春くれば霞を見てやかへる雁われもとそらに思ひたつらむ、いまひとつ、「かへるかりこれもこしぢの梅香や風のたよりにさそひそめけむ、とよめり

25 日野「宣長と過去の助動詞」、四頁

26 同上、六頁

27 鈴木淳「本居宣長『美濃の家づと』における定家歌の改作」（『國學院雑誌』第七十九巻第六号・一九七八年）五一頁

28 同上、五六頁

ける後なるをよく思へば、末の二句に、雁の縁なくて、いかにぞやおぼえければ、又とかく思ひめぐらして、「うめがかやさそひそめけむかへる雁これも越路の風のたよりに、となんよみなほしける、これはしも、こしちを末の句にうつしたるにて、雁の縁はさることながら、歌ざまは、いさゝかおとりておぼゆるは、いかならむ、歌よく見しれらむ人、さだめてよ、²⁹

この記述から鈴木淳は、必ずしも宣長の中で縁語表現が風致に先行して表出されるものではないのではないかという疑問を提出する。また、実際は宣長によるものであった改作歌の提示が、「或人の云、…などあらまほし」という他者に仮託され、また願望の表現によって表されていることを指摘した上で、

宣長は、新古今歌についても、自詠についても、かなり深刻な評価の分裂をきたして見たといへないだろうか。改作批評とは、縁語や言ひ掛けによる「かけ合ひ」を重んじようとする二条家流の態度と、それよりも風体を重んじようとする態度との分裂から生まれたもので、かならずしもそこで、一方を良しときめつけたわけではない。『玉勝間』の記事がさうであるごとく、最終の判断を、読者に預けた格好である。³⁰

と結論付ける。これは、改作の際に、自筆稿本では「我ならば」と自身の改作であることを前面に押し出していたのに対して、板本において「或人云う」と改作の主体をぼかしたことへの、一つの理由説明にもなり得るであろう。鈴木淳においての眼目は、定家歌の改作から、必ずしも論理的一貫性に執着するのではない宣長の態度を重視する観点を導入することの必要性を主張するものであると言えるだろう。

以上のように、『新古今集美濃の家づと』を例にして見たものは、宣長の古典解釈に関しては、論理性・合理性に執着すると考える立場と、その性格を一部で認めつつも、柔軟な解釈態度に光を当てる立場があったということである。

第三節 『古今集遠鏡』と宣長の古典解釈をめぐる研究史

以上を踏まえた上で、『古今集遠鏡』をめぐる議論はどのようになっているのであろうか。結論から言えば、『新古今集美濃の家づと』をめぐる一連の論考と同様、宣長の古典解釈に対して、論理的一貫性を強調する立場と、柔軟な解釈を重視する立場の二つを見出すことができる。

『古今集遠鏡』研究史の中で、そのテキストを近世期の資料として体系的に記述したものとして永野賢の論考³¹がある。『古今集遠鏡』「はしがき」において、宣長が俗語訳の通則と

29 『玉勝間』、第一巻、三〇八頁

30 鈴木淳、五八頁

31 永野賢「本居宣長「古今集遠鏡」の俗語文法研究史における位置」（『東京学芸大学紀要 人文科学』第二十四集・一九七三年）

して一般的に妥当する訳出方法を述べた箇所を検証し、

以上、ざっと見わたしたまでであるが、宣長は、古今集所収の千百十一首の歌（長歌を除く）の俗語訳を試みるに当たって、帰納的に雅俗の対応関係を考え、通則を整理したものと断定してよかろうと思う。

細かく検討すれば、はしがきの原則論と実際の俗語訳との間に食いちがいのあるものがあるけれども、大局的には、きわめて精密な俗語の通則——換言すれば、雅語と俗語との対応関係の原則——を打ち立てたものというべきである。³²

との見解を示している。

また近年、論理的一貫性を備えたものとして『古今集遠鏡』を評価する研究に田中康二、及び鈴木健一両氏のほぼ同時期に書かれた二つの論考がある³³。

まず田中は、「ことならば」という『古今和歌集』中歌における言葉の訳語が、『古今集遠鏡』においては、「トテモ〜クラキナラバ」として一貫して訳出されている事を指摘し、次のように述べる。

宣長は「詞」が外に出ることによって「心」が芽生えてくると考えていた。それが歌の表現である。そういった意味で、宣長の和歌観は詞主心従である。それゆえ、歌の「詞」は常に宣長の理解した「心」を媒介にしながら、一対一対応で俗語に置き換えられる。

さらに

人は物を見るとき、多少なりとも対象を歪めて見ている。おそらくそれが理解するということの本質であろう。したがって、宣長の『古今集』理解が誤解を含むのは必然である。むしろ問題なのは、常におれない虚像を映そうとする宣長の信念である。それは『遠鏡』に限らず、宣長の注釈に常に付きまとう問題である。³⁴

というように『古今集遠鏡』における俗語訳に対する態度と宣長の思想の接合を図ろうとする。

また、鈴木健一は、『古今集遠鏡』が今までは言語学的な研究対象にほぼ独占されていたことを指摘しながら次のように述べる。

国語学の研究対象にはよく取り上げられるが、それ以外にはあまり注目されることの少

32 同上、一九二頁

33 田中康二「俗語訳の理論と技法——『古今集遠鏡』の俗語訳」（『本居宣長の思考法』ペリかん社・二〇〇五年、原題「近世国学と古今集——『古今集遠鏡』における俗語の理論と技法」『古今和歌集研究集成』3 風間書房・二〇〇四年）及び、鈴木健一「『古今集遠鏡』の注釈方法」（長島弘明編『本居宣長の世界：和歌・注釈・思想』森話社・二〇〇五年）

34 以上共に田中康二、一四八頁

ないこの書が、宣長の学問の特質を考える上で非常に有益な視座を提示してくれるということを明らかにしてみたいと思う。³⁵

『古今集遠鏡』が宣長の思想学問の研究にとって重要な位置を占めることを示そうとする本論の試みは、基本的に田中康二・鈴木健一の態度と動機においては同一なものであると言える。

しかし、その内実を見ると鈴木健一は、『古今集遠鏡』において宣長が真淵批判を行っている注釈を含む和歌三首を分析の対象とし、そこに見出される一貫性をもとに、「真淵との比較によって認められる『古今集遠鏡』の記述からは、限定的な解釈に拘泥してしまう宣長の厳密性が見てとれるだろう。…〈中略〉…ここで指摘したような、ことばの意味を限定的に捉えようとして厳密性を守ろうとする姿勢からも、やはり合理性への志向を見て取ることができるだろう」³⁶とする結論を提示する。この結論は永野の論考における「第一通則」と等価なものを見なすことができるだろう。

一方で、永野の論を受けながら、宣長の俗語訳の一般通則的側面をさらに精緻に追求したものに、高瀬正一の論³⁷がある。高瀬は『古今集遠鏡』「はしがき」に挙げられた助詞・助動詞の訳出に関する一般通則の適用の実際を検証した永野賢の論文に倣い、宣長の助詞・助動詞に関する最も詳細な研究著作である『詞の玉緒』における『古今和歌集』中歌の助詞、助動詞の解釈が、『古今集遠鏡』の俗語訳とどのような関係にあるのかを検証した。結果として、『詞の玉緒』で試みられた解釈と『古今集遠鏡』の俗語訳の訳出の対応は、三分の一以下のデータを得た高瀬は、「「遠鏡」の俗語訳が、規範に捉われない自由な独自性をもっていることの一つの証と云えよう。」³⁸と述べるに至っている。

以上、『古今集遠鏡』の分析を通じた宣長の古典解釈の態度として、論理的一貫性を指摘する立場と、柔軟な解釈を重視する立場の二つがあることを見た。前節では『新古今集美濃の家づと』における同様の二つの立場を示すにとどめたのに対し、本節では『古今集遠鏡』をめぐる議論において、何がその立場の違いを生んでいるのかを明確に指摘できるように思われる。それは、分析の対象とするテキストの扱い方に関わっている。

古典解釈の論理的一貫性を重視する立場が分析の対象とするのは、永野の論考のように「はしがき」という原則を示した部分であり、また田中及び鈴木健一のような数か所の用例に限られたものであった。一方、解釈の柔軟性を重視する論考は、永野の議論を引き継いでより綿密な調査を行った高瀬の論考に見られるように、『古今集遠鏡』の俗語訳を一定の基準に照らした上で悉皆的に行われた分析であった。

宣長の古典解釈に対する態度をめぐる議論の二つの立場が、分析対象の範囲の違いにあることを確認した上で、次節では出来る限り「はしがき」と俗語訳を相互に参照し、さらに『古今集遠鏡』以外のテキストとの関連も考慮しながら、『古今集遠鏡』における「あはれ」の

35 鈴木健一、六八-六九頁

36 同上、八二-八三頁

37 高瀬正一「『古今集遠鏡』と『詞の玉緒』について」(『国語国文学報』三五卷・一九七九年)

38 高瀬正一、二五頁

解釈を検討し、具体的な和歌の解釈、言葉の解釈から、宣長の歌論という一般的テーマに迫り得る可能性を示したい。

第四節 『古今集遠鏡』の「あはれ」俗語訳

ここで今一度「あはれ」の根本に立ち返るならば、「阿波礼はもと歎息タンソクの辞コトバにて。何事にても心に深く思ふ事をいひて。上にも下にも歎ナンずる詞」³⁹であった。また、本論では、分析の対象としないが『古今和歌集』仮名序の「めに見えぬおに神をもあはれと思わせ」は、『古今集遠鏡』の俗語訳では「目ニ見エヌ鬼ヤ神ヲ感ジサシタリ」⁴⁰となっているように、ものに触れた際のこころの動きが「あはれ」であった。この事を念頭に置いて、第一節で触れた『古今集遠鏡』「はしがき」の「あはれ」の条項の後半部分に目を通してみたい。

さてそれより転りては、何事にまれ、ア、ハレと歎息ナゲかる、事の名ともなりて、あはれなりとも、あはれをしるしらぬなども、さまざまひろくつかふ、そのたぐひのあはれは、ア、ハレと思はる、事をさしていへるなれば、俗言には、たゞコトにア、ハレとはいはず、そは又その思へるすぢにしたがひて、別に訳言ウツシコトバある也、⁴¹

元来歎息の言葉であった「あはれ」がいわば名詞化して、「あはれなり」や「あはれを知る」というように使われることがあり、その場合は歎息を誘発するものを指しており、「ア、ハレ」という歎息の言葉としてだけで訳すのではなく、歎息を引き起こすものに従って訳すとしている。宣長は総論部である「はしがき」においてははっきりと、「あはれ」に一对一对の訳語を付けるのではないことを述べている。

それでは、具体的に「あはれ」を含む『古今和歌集』中歌の検討に進みたい。『古今和歌集』を通して「あはれ」という言葉は、二十三箇所抽出することができる。その内、三箇所は先にあげた仮名序中にあり、「あはれ」を含むもう三首は長歌である。分析対象を一定にするために、散文である仮名序中の「あはれ」は分析の対象から外し、また全面的な俗語訳の施されていない長歌も除外すると、本論で分析の対象となる「あはれ」を含む短歌は全部で十七首となる。新編国歌大観に従って歌番号を示せば、三三・三七・一三六・二四四・四七四・五〇二・六〇二・八〇五・八五七・八六七・八七三・八九七・九〇四・九三九・九四〇・九四三・九八九である。

これら十七首における「あはれ」の『古今集遠鏡』における俗語訳はいったいどのような様相を呈しているのであろうか。その俗語の訳出における特徴に則って分類すると、以下のように五つの種類に分けることができる。

39 『石上私淑言』、第二巻、一〇〇—一〇一頁

40 『古今集遠鏡1』二八頁。なお、この「感ジ」という俗語訳は、宣長自身『石上私淑言』の頭注で「古今序ニ、オニカミモアハレトオモハセト云ルモ、真名序ニハ感ニ鬼神一ト云リ、コレ感スルハスナハチアハレトオモフ事也」（一〇〇—一〇一頁）と述べている事と一致する。

41 『古今集遠鏡1』、二三頁

- (1) 「ア、ハレ + a」のように歎息の詞 + その他の成分として訳すもの
三三・三七・一三六・四七四・六〇二・八七三・八九七・九三九・九八四
- (2) 「ア、ハレア、ハレ」と、歎息の詞のみで訳しているもの
五〇二・九四〇
- (3) 「ア、+ a」として訳すもの
二四四
- (4) 「アハレ」と直接単独に訳出するもの
八〇五・八五七・八六七・九四三
- (5) 歎息の詞を用いない意識と考え得るもの
九〇四

以下ではそれぞれの分類における俗語訳に即して検討していく事にする。

まず(1)「ア、ハレ + a」のように歎息の詞プラスその他の成分として訳すタイプであるが、本論冒頭で見た「はしがき」の「あはれ」の条項において、具体的な訳出法としても挙げられているものであり、数量からいっても俗語訳の訳出法として最も一般的なものである。再度、「はしがき」の(二〇)「あはれ」の項において触れられていた内容をまとめれば、(1)「ア、ハレ + a」は、九八四番歌である「あれにけりあはれいくよのやどなれやを、何ん年ニナル家ヂヤゾヤ、ア、ハレキツウ荒タワイと訳せる類」や、一三六番歌である「あはれてふことをあまたにやらじとや云々は、花を見る人の、ア、ハレ見事ナといふ其詞を、あまたの桜へやらじと也」及び、九三九番歌「あはれてふことこそうたて世の中を云々は、ア、ハレオイトシヤト、人ノ云テクレル詞コソ云々也」⁴²のように示されている訳出法である。ここでは、「はしがき」では言及されていない三三番歌について詳しく見てみたい。

色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅ぞも (春歌上・よみ人しらず)
○梅ノ花ハ色モヨイガ 色ヨリ香ガサナホヨイワイ ア、ハレヨイニホヒヂヤ 此ヤウ
ニヨイニホヒノスルハ タレガ袖ヲフレタ此庭ノ梅ノ花ゾイマア⁴³

俗語訳箇所の下線は、『古今集遠鏡』本文にあるもので、原歌中に該当する表現がないものの、俗語訳において理解の上では補うべき言葉であることを示している。また、「ゾイマア」に付されているルビも原文のもので、原歌中の表現と、俗語として訳出された言葉の対応を示している。「あはれ」に対応する俗語訳の部分への網掛けは筆者で、以下同様である。「梅」の「香」を「あはれとおも」うと詠む中で、「あはれ」を、歎息の「ア、ハレ」と、心を動かし歎息を誘う当の具体的な事柄を加えて、「ア、ハレヨイニホヒヂヤ」という形で訳出している例である。

第二に(2)「ア、ハレア、ハレ」と、歎息の詞としてのみ俗語訳しているもので、

42 以上、すべて『古今集遠鏡1』二三頁から引用。

43 同上、六八頁

五〇二、九四〇番歌を見ると、

あはれてふことだになくは^〇は^〇な^〇にをかは恋のみだれのつかねをにせむ（恋歌一・よみ人しらず）

○思ヒガ胸ニーツ杯^ハニナルトキニハ 声ヲアゲテア、ハレア、ハレトイヘバコソスコシハ胸モユルマレ ソノア、ハレア、ハレト云コトサヘナクバ 恋スル者ハ何デ心ヲヲサメウゾ テウド萱^カナドヲ薊^カテ乱レタ時ニ 一トコロヘトリアツメテ緒デユヒツカネルヤウニ 恋デ心ガ乱レタ時ニハ ア、ハレア、ハレト云ノガ東^{ツカ}ネ緒ヂヤ⁴⁴

あはれてふ言の葉ごとにおく露は昔をこふるなみだなりけり（雑歌下・よみ人しらず）

○昔^四ヲ恋シウ思ウテ ア、ハレア、ハレト云^ニタビゴト^ニ涙ガコボレル スレバソノア、ハレア、ハレト云言ノ葉ヘ 草ノ葉ヘオクヤウニオク露ハ 涙ヂヤワイ⁴⁵

後者の九四〇番歌においてルビのような形でいくつかの漢数字が付されているが、これも原文に付された記号であり、原歌の句の番号に対応している。すなわち、「四」とは第四句を指し、ここでは「昔をこふる」を指しており、また「一」は初句で、「あはれてふ」を示している。五〇二番歌において歎息の詞として表出された「ア、ハレア、ハレ」という言葉が、恋が乱れるのを抑える「東ね緒」になるという趣意である。九四〇番歌において歎息を誘うのは昔への恋慕であるから、ここは、(1)のように「ア、ハレ恋シウ」と訳しても良さそうであるが、「あはれ」という歎息の詞が「言の葉」として実体化し、そこに露としての涙が置かれるという趣意を述べているため、「ア、ハレア、ハレ」というそのままの歎息の言葉として訳出されていると言えるだろう。両者とも、「ア、ハレア、ハレ」という歎息の言葉が具現化しているものとして見ていることに、共通点を見出すことができる。

続いて(3)「ア、+ a」として訳す二四四番歌の実例を見てみたい。

われのみやあはれと思はむきりぎりすなく夕かげのやまとなでしこ（秋上・素性法師）
○キリギリスガ鳴テオモシロイユフカゲニ見事ニ咲テアルアノ撫子^{ナデシコ}ト云児ヲ 母親ヤ乳母ナドモ打ソロウテトモドモニテウアーイスルヤウニタレニモカレニモ見セテ賞翫サセタイモノヂヤニ タツター一人ノ手デソダテル児ノヤウニ オレバツカリガア、ヨイ児ヤト云テ独り見ハヤサウコトカヤ アツタラ此花ヲ⁴⁶

なぜ、二四四番歌中の「あはれ」のみが、「ア、+ a」の形式で訳出されているのかに対する決定的な答えを出すことはできない。ここでは、和歌の解釈として北村季吟『八代集抄』、契沖『古今余材抄』、賀茂真淵『古今和歌集打聞』といった、宣長の『古今集遠鏡』が参照している先行注釈書がこの歌を花としてのナデシコを愛でるものとして解釈するのに対し

44 『古今集遠鏡2』二〇頁

45 同上、一八九頁

46 『古今集遠鏡1』、一四五―一四六頁

て、『古今集遠鏡』は俗語訳として端的に示されている通り、「なでしこ」に「撫でし子」として「子」を読み込んでいる、という点を指摘するに留める。

(4)「アハレ」と直接訳出するものは、八〇五・八五七・八六七・九四三番歌の四首である。

あはれともうしとも物を思ふときなどか涙のいとなかるらむ(恋歌五・よみ人しらず)
○物ヲアハレト思フトキモ ウイト思フトキモ トカク涙ガホロホロホロホロホロホロ
ホロホロトコボレル ナゼニ此ヤウニ涙ガ^五イソガシウコボレルコトヤラ⁴⁷

かずかずに我をわすれぬものならば山の霞をあはれとは見よ(哀傷歌・よみ人しらず)
○御-深-切ニ思召テワタシガコトヲ御忘レ下サレヌモノナラバ 山ヘタチマス霞ヲ
アハレトハ思召テゴラウジテ下サリマセ 山ノ霞ガ ワタシガ煙ニナリマシタ跡ノユカ
リデゴザリマスルホドニ⁴⁸

紫の一もとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る(雑上・よみ人しらず)
○武蔵野ハー一本ノ紫ヲアハレニ思フ故ニ 其縁^{チウ}デ同シムサシ野中ノ草ガ皆ノコラズアハ
レニサ思ハレル⁴⁹

よの中にいづら我身の有てなしあはれとやいはむあなうとやいはむ(雑下・よみ人しらず)

○世ノ中ニ^ニレドコニ我身ガアルゾ 人ト云モノハ 明日死ナウモシレヌガ 明日ニモ
死ネバチキニ埋ミカ焼キカシテシマヘバ 此ノ身ハアツテモナイ物ヂヤ ソレヲ思フテ
見レバ^四 アハレトイハウカ ア、ウイトイハウカ サテモサテモ人ノ身ハハカナイ物
ヂヤ⁵⁰

八〇五、九四三番歌に関しては、「うし」との対比として「あはれ」が用いられているため、「アハレ」と「ウイ」とを併置する訳の工夫がなされていると言える。実は八〇五番歌の「あはれ」の意味解釈は必ずしも自明なものではない。この「あはれ」を、契沖『古今余材抄』は「うし」の対義語として、真淵『古今和歌集打聴』では「うし」の類義語として捉えるという先行する注釈が存在するからである。意味理解のみを追求する俗語訳であれば、ここで宣長は自身の解釈を明示する必要があり、「あはれ」の解釈及び訳出の方法としても、(1)「ア、ハレ+a」と言ったような手段を宣長は持ち合わせていた。それにも関わらず、「あはれ」を単に「アハレ」としたのは、俗語訳として「ウイ」との併置を優先させた結果であると考えるのが妥当であろう。

八五七・八六七番歌の「アハレ」とする訳出方法に、明確な理由を述べることはできないが、「あはれ」を「見る」という表現になっていることが共通している。ここで試みに同様に『古今和歌集』の原歌が、「あはれ」を「見る」という表現となっている三七番歌、及び六〇二番歌が

47 『古今集遠鏡2』、一三二頁

48 同上、一五五頁

49 同上、一六〇頁

50 同上、一九〇頁

よそにのみあはれとぞ見しうめの花あかぬいろ香はをりてなりけり（春歌上・素性法師）
 ○オレハアハウナ今マデハ 梅ノ花ヲタゞヨソニバツカリサア、ハレ見事ナコトカナト
 思フテ見テ居タガ 梅ノ花ノドウモイヘヌ色ヤ香ハ 折テカウ近ウ見テノコトヂヤワイ
 ノ 又々ヨソニ見タヤウナコトデハナイ⁵¹

月影に我身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見む（恋歌二・壬生忠岑）
 ○月ヲバ惣躰人ガア、ハレト思ウテ見ルモノヂヤガ ワシガ身ヲ月ニカヘラル、モノ
 ナラ カハツテ月ニナツテミタイ ソシタラツレナイ人モ見テ ア、ハレカアイヤト思
 フテクレルデモアラウカイ⁵²

のように、(1)「ア、ハレ + a」として訳出されていることを見ると、少なくとも「あはれ」を「見る」という表現の訳出に関して論理的一貫性を見出すのは不可能である。

最後に(5)「ア、ハレ」や「ア、」などの歎息の詞を用いず意識と考えるものが九〇四番歌である。

ちはやぶる宇治のはし守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば（雑上・よみ人しらず）
 ○日宇治ノ橋守ヨ ホカノ人ヨリハ 其ノ方ヲサオレハフビンニ思フ オレト同シヤ
ウ二年ヘタ老人ヂヤト思ヘバサ⁵³

ここで日とあるのは、枕詞は訳出しないとする「はしがき」での原則に従って、初句の「ちはやぶる」の訳を省略したことを示している。歎息の言葉を用いずに「フビン」と別の訳語で表されている唯一の例であるが、「あはれ」の俗語訳のバリエーションをさらに広げている一例として考えておく。

以上、『古今集遠鏡』における「あはれ」の俗語訳における五つのパターンを見た。改めて言うまでもなく、以上で見た「あはれ」の訳出法に関して、「一対一対応で俗語に置き換えられる」⁵⁴と述べることは不可能であり、「法則性に固執し、教条的なまでに合理性を発揮」⁵⁵していると言うことはできないであろう。

宣長の「あはれ」に対する訳出の様々を見ていると、まさに本来は歎息の詞としての「あはれ」が、様々な対象に対して様々に動いていく感情を表しているという個別性への着目という観点が明瞭に見て取れる。和歌本質論としての「もののあはれ」論であれば、「みやび心」と結びつけられ平安朝文芸の理念を表すものとされ、その徹底が主張されたり⁵⁶、和歌の社会的無用性というテーゼの中から自律的な文学理論として歌論を再構成するもの⁵⁷として、「もののあはれ」の意義が論じられていく事だろう。しかし、まずは「あはれ」と心が動く

51 『古今集遠鏡1』、六九頁

52 『古今集遠鏡2』、五三頁

53 同上、一七四頁

54 田中康二、一四八頁

55 鈴木健一、八二頁

56 和辻哲郎「もののあはれについて」（『日本精神史研究』岩波書店・一九九二年）

57 子安宣邦「本居宣長・和歌の俗流化と美の自律——「物のあはれ」論の成立——」（『思想』第八七九号・一九九七年）

対象を宣長が具体的にどう解釈し、表現してきたのかについて今一度立ち返ってみると、「もののあはれ」論が持つ排他的な共同性へと向かう傾向と、宣長の古典解釈に対する一つの評価である論理的一貫性という宣長像とから、「あはれ」論にける個別性と、柔軟な解釈への志向性という宣長の側面へと導かれることになるだろう。その可能性の一端を、『古今集遠鏡』における「あはれ」の解釈群が担っていることを本節では示し得たのではないだろうか。そしてこういった古典和歌解釈という一つ一つの積み重ねからなる具体論と組み合わせさせて初めて、和歌本質論と和歌表現論、「もののあはれ」論と「あはれ」論、共同性と個別性、論理的一貫性と柔軟な解釈とを兼ね備えた立体的な宣長の歌論に迫ることができると筆者は信じている。

おわりに

本論では本居宣長の歌論における「もののあはれ」及び「あはれ」の捉え方を中心にして、その峻別の可能性を論じ、宣長の古典解釈態度への評価に二つの立場が研究史的に並立してきたことを述べた。特に『古今集遠鏡』の研究史において顕著に見られるように、その差異が分析対象の範囲の違いに規定されていることを示し、その上で『古今集遠鏡』中の俗語訳の実相を、その両者の立場がテキストに向かう姿勢をいわば折衷する形で検討する事で、より立体的な宣長の歌論へと迫る可能性の提示を試みてきた。

まずは、本研究の今後の課題を示したい。本論では、『古今集遠鏡』における「あはれ」の分析を行ったが、今後は『古今集』以外の和歌群における検討がまずは必要であろう。『古今集』における「あはれ」を含む短歌は上述のように十七首でしかない。今後、より多くの用例に基づいて、宣長の解釈態度を評価していく必要がある。また、「あはれ」の分析は、当然他の感動詞や抽象名詞、または直接感情を表す形容詞等の分析との比較を待ってはじめて総合的な研究たり得るであろう。これも、今後の課題としたい。また、宣長の注釈的著作という限定を取り払えば、宣長自身の詠草や、他の歌学者の解釈、及び詠草にも分析対象の範囲を広げることができるだろう。

冒頭で筆者は、宣長の歌論研究において、和歌本質論が中心になっており、和歌表現論が等閑視されていることを述べた。本論は、その研究史上の空白を埋めることを目指した宣長の歌論に対する和歌表現論的な研究であるが、また和歌本質論と和歌表現論の研究状況がなぜこのような関係にあるのかを示す説明の一つでもあり得ると考えている。やや構図的な見方を述べれば、和歌本質論は「もののあはれ」論を中核に共同性への志向を胚胎し、その共同性は排他的な論理的一貫性を有する宣長の古道説へと繋がっている。宣長の思想が古道説に凝縮していると考えられている以上、宣長の歌論が和歌本質論として捉えられることは避けられない。しかし、一方で和歌表現論的視点からは、「あはれ」論としての個別性への着目、さらに古典テキストの柔軟な解釈という宣長の古典に対する解釈態度が見出される。いまだこの視点は、古道説とは接木されていないが、古道説の中核的テキストである『古事記伝』が他でもない注釈学的著作である事には、大きな可能性を予見できるであろう。

筆者が宣長研究を始めた頃、ほとんどの論考が宣長の理論的著作を対象として進められて

いることに大きな違和感を持ったことが、このような研究に興味を抱いた理由であった。無論、自らの思考を直接的に表明するのではなく、古典作品内における語義や表現内容の解釈を目指す注釈的著述から、一定の視座に基づいた論理を掬い上げることはたやすい事ではない。本論で試みたことは、時に過剰とも言える論理的一貫性という宣長に対する視座と対置される、解釈の柔軟性を重視する立場の妥当性を、『古今集遠鏡』における「あはれ」の訳出を通じて傍証するに過ぎなかったかもしれない。上でも述べたように、解釈の柔軟性を持つ宣長という像が、今回主に対象とした歌論を含む文学説に関わる領域以外の、語学説の領域、及び古道説の領域における宣長像とどのような関係にあるのかという事を示す方向へと踏み出さぬ限り、論理の一貫性という視座から蓄積されてきた宣長研究を乗り越えていくことはできないであろう。本論は、そういった研究への足掛かりのほんの一步に過ぎないが、『古今集遠鏡』を中心とした注釈的著作を通して宣長を照射することの有意義性を多少なりとも示すことができたのではないだろうか。

Kokinshu Tokagami and Motoori Norinaga's Poetics

Yoshiaki FUJII
Tokyo University of Foreign Studies

【keywords】 Motoori Norinaga, Poetics, Kokinshu Tokagami, mono no aware, aware

Kokinshu Tokagami, is a colloquial translation of Kokinwakashu by Motoori Norinaga. It has often been looked upon as a material for researching spoken language of Japanese of early modern times which few researchers have been interested in for the study of Motoori's Poetics. The purpose of this paper is to show that this text is not only an important material for research on Motoori's Poetics but also for research on Motoori Norinaga itself.

First, I note that the text can provide a new point of view on an idea about 'Mono no Aware' proposed by Hino Tatsuo. Secondly, drawing references from Shinkokinshu Mino no Iezuto, which is an annotated edition of Shinkokinwakashu, I will study the differences of opinions on Motoori's commentary on Japanese classics. One thinks that Motoori was a rigid rationalist, and therefore had a tendency to force his thoughts. Other researchers think that Motoori was not always a rigid rationalist and accepted the diversity of the interpretation of the texts. Through the history of research on Kokinshu Tokagami, I will try to point out that the differences of opinions on Motoori's commentary are due to the differences in their approaches to the research on Motoori Norinaga.

Among the previous researches on Motoori Norinaga, most are based on his theoretical books which I believe show limited aspects of Motoori Norinaga. In this paper, I attempt to seek the possibility to expose new aspects in the research of Motoori Norinaga by mainly focusing on annotated texts.

ビルマ語の hà、kâ に関する考察

—日本語の「は、が」との対照から—

トウザ ライン (東京外国語大学大学院博士後期課程)

【キーワード】 文語体、見かけの口語体、口語体、主語、無標

1. はじめに

ビルマ語の基本語順は SOV 型であり、名詞類の文法関係などが後置詞によって標示されるなど日本語によく似ている。そのため日本語とビルマ語の主語を表す助詞についての対照研究もいくつかある。ビルマ語には、主として発話に用いられる口語体と書記に用いられる文語体とがある。口語体と文語体の主な違いは助詞類のセットが異なることであり、澤田 (2012: 1) は「ビルマ語の特徴の一つとして、特に文法機能を担う機能語 (各種小辞や指示表現など) において口語体と文語体の差異が大きいことがあげられる」と述べている。そして、口語体ではあるが、日常の対話に現れず、講演・演説や独り言など一方的な話に見られる「見かけの口語体」¹ も存在する。

ビルマ語には主語を表す助詞として *tì*, *hà*, *kâ* という形式が見られる。*tì* は文語体、*hà*² は口語体・見かけの口語体、*kâ* は文語体と口語体ともに現れる傾向がある。下の(1)a. は文語体であり、(1)b. は(1)a. の単なる口語訳であれば、講演・演説や独り言など一方的な話にしかなれない「見かけの口語体」でもある。このため、(1)b. の形式は互いに言葉を交わすような対話の場面には現れにくいのである。(1)c. と(1)d. は純粋な口語体である。³

(1) a. cǎnɔ̀= <i>tì</i> / <i>kâ</i> ⁴	sʰà yà wùn	pʰyí? = pà = <i>tì</i>	(文語体)
私 (男) = <i>tì</i> / <i>kâ</i>	医者	[繫辞] = [丁寧] =vs. [現実]	

1 澤田英夫氏との私信 (2014年) による。ビルマ語の文体に「見かけの口語体」があるということを断言するにはまだ検討の余地があるが、少なくとも *kâ* と比べて *hà* の分布に明らかに偏りがあることが何人かの研究者によって指摘されている (2章で後述)。このことは *hà* と *kâ* の分析の際に無視できないと考えられる。そのため、本稿では仮に「見かけの口語体」が存在するものとして分析を進めることにする。

2 ただし、*hà* の使用には制約がある。場合によって無標で現れることもある。(2章で後述)。

3 本稿での音韻表記は全て岡野 (2009)「頭子音 (阻害音) p-, pʰ-, b-; t-, tʰ-, d-; t-(d); s-, sʰ-, z-; c-, cʰ-, j-; k-, kʰ-, g- (共鳴音) m-, hm-; n-, hn-; ñ-, hñ-; ŋ-, hŋ-; l-, hl-; y-, hy-(j); w-, hw- (その他) h-, ʔ-, f-, r-: 母音 (単母音) -i, -e, -ɛ, -a, -ɔ, -o, -u (二重母音) -ai, -au, -ei, -ou (軽声) -ǎ: 末子音 -ʔ, -N: 声調 (低平調) -à (高平調) -á (下降調) -â. 頭子音の規則的有声化については、*ʔ* で示した」に統一してある。グロス中の vs. は動詞文であることを指す標識 (verb sentence marker) で、nc. は名詞化節であることを指す標識 (noun clause marker) である。いずれも [現実] [非現実] という法の対立を示す文法要素である。なお、ビルマ語の用例に関しては、先行文献から引用した用例は末尾に典拠を記載し先行文献のグロスは原文のままに用いた。それ以外はすべて作例である。

4 ビルマ語の助詞類は環境によって頭子音が有声化する。

- 〈私は医者である。〉
- b. cǎ̀n̄=hà sʰǎ̀yàwùn pʰyi? = pà = t̄è / sʰǎ̀yàwùn=pà (見かけの口語体)
私_(男) =hà 医者 [繫辞] = [丁寧] =vs. [現実] / 医者 = [丁寧]
- 〈私は医者である。〉
- c. cǎ̀n̄=kâ sʰǎ̀yàwùn=pà (純粋な口語体)
私_(男) =kâ 医者 = [丁寧]
- 〈私が医者です。〉
- d. cǎ̀n̄ sʰǎ̀yàwùn=pà (純粋な口語体)
私_(男) 医者 = [丁寧]
- 〈私は医者です。〉

本稿では、ビルマ語の hà, kâ をすでに研究が進んでいる日本語の「は、が」と対照しながら考察を行う。ビルマ語の主語を表す助詞には hà, kâ の他に無標となる場合もあるが、これまでの先行研究では無標と主語を表す hà, kâ とがどのように関わっているのかという記述が殆どみあたらない。本稿では、無標となる場合も含めて考察を行うことにする。

本稿は先行研究での日本語の「は、が」とビルマ語 hà, kâ に関する主張について再検討し、日本語の「は、が」との対照からビルマ語の hà, kâ の使い分けを再考することを目的とする。研究方法としては、日本語とビルマ語の主語を表す助詞の類似点と相違点を日本語による「は」と「が」の使い分けの5つの原理(野田1996)から考察を行う。主にビルマ語の kâ は日本語の「は」または「が」に相当するが、hà は判断文の場合のみに日本語の「は」に相当することを主張する。

2. 先行研究及び関連する現象

日本語の「は、が」とビルマ語 hà, kâ の対照研究として小林(1984)と加藤(1997)が挙げられる。小林(1984: 96)は日本語とビルマ語の対応関係を「日本語の {は} {が} には、ゼロ助詞 {ø}、{hà} {kâ} またはそれに相当するビルマ語⁵が対応し、その中でも特に、{は} に相当する表現が多く、細分して使い分けられていることが分かる」とし、{は} ≠ {hà}、{が} ≠ {kâ} であることを明らかにしている。加藤(1997)は、加藤(1996)で述べた hà の特徴を踏まえ、特に、hà を用いた際に日本人ビルマ語学習者が意識すべき点を指摘している。その際に「kâ が主語につく標識のうち hà とともに最もよく現れるもので、かつ具体的音形を持つものだから」として、比較の対象にしている。加藤(1996)は hà の特徴についての研究であり、「hà が文頭の要素につきやすいこと、従属節に現れにくいこと、主語と述語の間に従属節が現れたときその従属節が引用文である場合を除けば主語が hà で標示さ

5 小林(1984: 94)では日本語の「は」に相当する語として、ゼロ助詞 ø, hà, kâ の他に、sʰòdê 《～というのは》, hmà 《～おいては》, ?ápʰò 《～にとって》, ?ätwe? 《～のために》, ?änènê 《～の立場としては》, pʰyín 《～としては》が挙げられている。

れることが多いこと、主語以外の名詞句につきやすいこと」などを明らかにしている。本稿では、用例などから実際の使用を検証し、これらの主張を再検討する。

日本語の「は」と「が」については早くから研究が盛んでいて、現在に至るまで様々な観点から多くの研究がなされてきた(例えば、角田(2009)のSilversteinの名詞句階層からの観点、野田(1996)の主題から統一した観点など)。本稿では野田(1996)の「は」と「が」の使い分けの5つの原理を参考にビルマ語の *hà* と *kâ* の考察を行うことにする。野田(1996)は「は」と「が」の使い分けの原理を5つの段階に分けて説明している。そして「『は』と『が』の使い分け全体を無理なく説明するためには、ただ1つの原理によるものではなく、いくつかの原理を組み合わせて考える必要がある。つまり、『は』を使うか『が』を使うかが決まる段階がいくつかにわかれていて、それぞれの段階でそれぞれ違う原理が働いていると考えるのである」と指摘し、「たがいに違う5つの原理によって『は』と『が』の使い分けが決まること」を明らかにしている。

本稿で用いた5つの原理は以下の通りである。⁶

- 1) 新情報と旧情報の原理—新情報には「が」、旧情報には「は」
- 2) 現象文と判断文の原理—現象文には「が」、判断文には「は」
- 3) 文と節の原理—文末までかかるときは「は」、節の中は「が」
- 4) 対比と排他の原理—対比のときは「は」、排他のときは「が」
- 5) 措定と指定の原理—措定には「は」、指定には「は」か「が」

本稿はこの5つの原理を用いて考察するものであるが、具体的な考察に入る前にビルマ語の主語の名詞・名詞句に後置される要素を確認し、それらの性質を整理する。ビルマ語については無標の場合も含めて考えないと対比が不可能になる恐れもあると考えられるため必要に応じて無標のことも述べることにする。まず、先行研究からの定義を整理し、先行研究で記述していない無標を外見する。

・ *hà*

従来の記述の多くは、*hà* は主語や主題を表す、と分析している。*hà* は文語体 *ṭ* に対応する見かけの口語体として主語を表す場合もあれば、主題を表す場合もある。*hà* について、Okell and Allott (2001: 248) は“Marks the subject or topic of the sentence”とする。Myanmar Language Commission (2001: 515, 528) の記述は、“word indicating nominative case”であり、主格を表す助詞 *ṭ* と同様である。澤田(2012: 14) は主語を表す助詞に分類して文語体 *ṭ* と対応関係にあることを示し、「口語では \emptyset が一般的な形式だが、文語では *ṭ* が一般的」であることを指摘している。大野(1983: 166-167) は、「主語を表わす助詞で、最も一般的な形。肯定文、否定文のいずれにも用いられる。文型的には主語と補語、主語と述語をつなぐ。日

⁶ そのあと、この5つの原理は新しい5つの原理に再編されている。野田(1996: 112)は、「基本的には、この5つだけで十分だと思われる。しかし、これまでの研究では、これら5つの原理は、それぞれ別々の例文を説明するために、別々の視点から、ばらばらに述べられていた。ここでは、5つの原理の関係をあきらかにしたり、5つの原理を体系化したりすることはむずかしい」とし、「主題」という統一した視点からとらえなおしている。ただ、本稿でのビルマ語との対照を考察する際には便宜上旧原理のみを用いる。

本語の<~は>に相当する」としている。岡野 (2007: 165) は hà を副助詞に分類している。いずれにしてもこれらは辞書や初学者向けの教科書という性質上のもので、hà と kâ を対照して書いているわけではない。

また、hà の特徴についての研究で加藤 (1996: 171) は「従来、助詞 hà は『主語』や『主題』を表すとされてきた」ことを受け、加藤 (1997: 102) は「hà は口語体に属し、文語体の òi に対応する」としていると述べている。本稿ではこのように主語や主題を表す hà が次に述べる見かけの口語体 hà とどう違うのか、見かけの口語体と純粋な口語体など異なる文体の中ではどのように振る舞うかについて考察する (3章で後述)。

・見かけの口語体 hà

前述のようにビルマ語には口語体ではあるが、日常の対話に現れなく、講演・演説や独り言など一方的な話に見られる「見かけの口語体」の形式が存在する。hà はこの見かけ口語体に見られる形式であると考えられる。加藤 (1997: 102) は「hà が多用されるのは、口語体で書かれた文章や、演説、学校の講義、テレビドラマの台詞などの、比較的かしこまった場面においてであり、日常会話で hà を多用すると奇異な印象を与える」と指摘している。岡野 (2007: 165) も「副助詞 hà は実質的な会話などの純粋な口語体で使われることはほとんどなく、講演やテレビ放送など、伝える側から受け取る側への一方的な情報伝達の場面でのみ用いられるようである。このような特徴ゆえか、口語体の民話などにも hà はよくみかけられるものだし、授業などで先生が話す場合など『これはね、こういうことなのだよ』と反論の余地を与えないニュアンスを出す場合にも使われることがある」と述べている。本稿でも原則的にこれらの主張を支持する。従って、hà は反論の余地を与えない一方的な話や独り言などにしか見られない形式である。この形式の hà は省略可能な場合もあれば、kâ と交替可能な場合もある (3章で後述)。

・kâ

kâ は主語・主格を表す。Okell and Allott (2001: 1) は “Marks Noun as subject of sentence”、Myanmar Language Commission (2001: 1) では、“Postpositional marker to indicate nominative case”としている。澤田 (2012: 14) によれば、「kâ は主語が動作者であるという含みを表す際や、取り立ての意味を表す際に用いられる」。大野 (1983: 166-167) は、「主格を示す助詞として hà と同様よく使われる。kâ には主語を強調する働きがある。日本語の<~が>または<~は>に相当する」とし、加藤 (1996: 169) は、「kâ の重要な用法のひとつに『主語』につく用法がある」とする。岡野 (2007) も kâ は主格を表すとしている。

・無標

1章の(1) d に見られるようにビルマ語には無標の主語が観察される。無標の主語の総合的分析はまた稿を改めて論ずるべきだと考えるが、以下に本稿に関わることについて述べておく。ビルマ語では主語の名詞・名詞句に hà と kâ などの助詞が付加されていない無標の形式が2種類あると思われる。第一の無標は、3.1. で述べる現象文にみられる無標の形式である。ビルマ語では、目に見た時に得た情報をそのまま表現する場合にその主格名詞・名詞句が無

標となるのが最も自然である。例えば3.1. の(4)b. で示す現象文の場合である。第二の無標は、主語を表す *hà* と *kâ* が省略されたとみられる形式である。*hà* と *kâ* が省略されても先行文脈の支えによって意味の解釈が与えられる場合である(3.3.、3.4.、3.5. で後述)。従って、現象文には無標の主語がしばしば現れ、現象文以外の場合で *hà*、*kâ* の省略された無標の主語が現れることがある。

以上本章では、*hà* と *kâ* はいずれも主語名詞・名詞句に付く助詞であり、*kâ* は文語体か口語体かにかかわらず用いられるのに対し、*hà* は見かけの口語体に現れることが多く、*ti* は *hà* の文語体形式であること、そして現象文の場合での主語に *hà* と *kâ* が付きにくいときの無標の形式と現象文以外の場合で *hà* と *kâ* が省略されたとみられる無標の形式があることを述べた。

3. 対照及び考察

日本語の「は」と「が」について野田(1996)は、「昔から『は』は係助詞に、『が』は格助詞に分類されてきたように、『は』と『が』は非常に違う性質をもった助詞である」と述べている。これに対しビルマ語の *hà* と *kâ* にはこのような違いはない。ビルマ語の *hà* と *kâ* の違いは機能上の問題ではなく、単に文体の違いと考えられるところが多くみられる。しかし、これは *hà* と *kâ* に決して機能上の違いがないというわけではない。3.1. で述べるように判断文の場合は *hà*、現象文を除くその他の場合は *kâ* が使われるなど一部機能の違いがある。また加藤(1996)にもあったように *hà* が文頭の要素に付きやすい、従属節に現れにくいなどの特徴があることから、岡野(2007)のように副助詞として分類する立場もあるが、それも必ずしも副助詞として断定できるものではない。

前にも述べたように本稿の目的は野田(1996)の「は」と「が」の使い分けの5つの原理を参考にビルマ語の *hà* と *kâ* について考察するものであるが、ビルマ語の *hà* と *kâ* はこの5つの原理で十分に説明できるとは限らない。

判断文と現象文の原理(3.1)と対比と排他の原理(3.2)で説明するときは *hà* と *kâ* の使い分けが重要であるが、それ以外の文と節の原理(3.3)、新情報旧情報の原理(3.4)、措定と指定の原理(3.5)で説明するときの *hà* と *kâ* の違いというのは性質による機能上の問題ではなく、単なる文体の違いであると考えられる。Myanmar Language Commission(2005)にも「動作主や主語を指したいとき、口語体と文語体両方とも *kâ* のみを使う」と文体の重要性を示唆している。この章では *hà*、見かけの口語 *hà* 及び *kâ*、無標の性質を確認しながら日本語との類似点と相違点を考察する。

3.1. 判断文と現象文の原理

この「判断文と現象文」の原理はモダリティの面からの分類によって「は」と「が」の使い分けを説明するものである。つまり、現象文の主格に「が」がつき、判断文の主格に「は」がつくという原理である(野田1996)。

野田は、この原理を最初に提案したのは三尾（1948）であるとし、三尾（1948）の例文を引用し以下のように説明している。

- (2) 雨が降っている。
 (3) それは梅だ。

(2)は、現象をありのまま、判断の加工を施さないで、心にうつったままを、そのまま表現した「現象文」であり、「が」が使われる。それにたいして、(3)は、課題である「それ」にたいして、話し手の主観が判断をくだして、「梅」が解決として真であると主張する「判断文」であり、「は」が使われるというのである。つまり、現象文とはありのまま、判断の加工を施さないで、心にうつったままを、そのまま表現した文であり、これに対して、判断文とは話し手の主観が判断をくだす場合に用いられる文である。

このように、日本語の場合、判断文には「は」、現象文には「が」が用いられる。日本語の「は」とビルマ語「hà」が類似していると考えられるのは、この判断文の場合に限られる。このように hà が判断文に現れるのは岡野（2007: 167）が主張する「反論の余地を与えないニュアンスを出す場合」があるからだと考えられる。話し手の述べる事柄について（あるいは反論の余地があるかもしれないが）そのような判断を話し手はしており、それゆえに反論することを許さない、というニュアンスを出すことが重要になる場合がある。そのため hà が判断文に現れやすいと考えられる。事実をそのまま述べるのであれば、話し手が「反論の余地を与えないニュアンス」を出す必要は特にないのであろう。hà が判断文以外で現れる場合は単なる「見かけの口語体」と解釈すべきである。判断文の場合 hà は「～というのは」の意味である sh'òtâ などに交替可能な場合がある。ビルマ語では現象文の場合、無標で表すのが最も自然である。ただ、岡野（2007: 29）が指摘しているように「主語を特別に強調する理由がある場合に主格 (nominative) 助詞 kâ を用いることがある。このとき『他ではなく～が』『～こそが』といったニュアンスを持った表現となる」という3.2. に述べる排他的な意味が生じる。

- (4) a. cígán-ʔ̀-ʔ̀àn=hà ʔ̀èʔ̀-là=mê nămeiʔ̀=pẽ
 カラス - 鳴く - 声 =hà 客 - 来る =nc. [非現実] 前兆 = [焦点]
 〈カラスの鳴き声はお客さんが来るという前兆だ。〉
- b. cígán ʔ̀̀=nẽ=ʔ̀̀
 カラス 鳴く = [進行] =vs. [現実]
 〈カラスが鳴いている。〉
- (5) n̄wè=hà lúbāwā=kò pyáunlé=ʂè=nain=ʔ̀̀
 お金 =hà 人生 = [対格] 変える = [使役] = [可能] =vs. [現実]
 〈お金（というの）は人生を変え得る。〉

(4) a. と(5)は日本語の「は」とビルマ語の hà が類似している判断文である。判断を表して

いる文脈の場合、ビルマ語の *hà* は *s^hòtà* に交替可能な場合がある。(4) b. の現象文では、日本語は「が」で標示されるが、ビルマ語は無標である。

ここで現象文として分析するものは、以下(6)から一般化を出している小林 (1984:92) の「単文で、眼前にある、あるいは眼前で起こっている (起こった) 具体的な事象は、焦点が既に決まっているので、ゼロ助詞が使われる傾向は強いと考えられる」という説と一部重なるところもある。この(6)に対して「は」を使った(7)を「焦点を定めて際立たせたい場合には、{*hà*} が使われる」としているが、(7)はそもそもきわめて不自然な文であること、またこの場合の際立たせとしてはむしろ *kâ* を使うと考えられることから、この *hà* についての小林 (1984) の考察には同意できない。

(6) *cănô* *pyi?sítwè* {*∅*} *si?pítápà*
 私の 荷物 は 検査済です (荷物が目の前にある場合) 小林 (1984: 93)

(7) *cănô* *pyi?sítwè* {*hà*} *si?pítápà*
 私の 荷物 は 検査済です (荷物が目の前にない場合) 小林 (1984: 93)

3.2. 対比と排他の原理

「対比と排他の原理」とは、野田 (1996: 111) によれば、「主格名詞が、その文の中にない同類の名詞との関係でどのような意味をもつかによって『は』と『が』の使いわけを説明するものである。つまり、同類の名詞にたいして対比的な意味をもつときは『は』が使われ、排他的な意味をもつときは『が』が使われるという原理である。」

野田 (1996) によれば「対比」と「排他」という用語を使って、この原理を最初に提案したのは三上 (1963: 第三章一) である。その後、久野 (1973: 第2章) は、「対照」と「総記」という用語を使って、この原理を精密にしている。久野 (1973) は、次の(8)のような「は」や、その次の(9)のような「が」について説明している。

(8) 雨は降っていますが、雪は降っていません。

(9) 太郎が学生です。

久野 (1973) によると、(8)は、「雨が降っています」と「雪が降っていません」の対照を表しているため、「は」が使われる。一方、(9)は、「(今話題になっている人物の中では) 太郎だけが学生です」という総記の意味を表しているというのである。

従って、日本語では、対比のときは「は」、排他のときは「が」が使われる。これに対しビルマ語ではいずれの場合も *kâ* が使われる。

(10) a. *cígán=kâ* ?ò=pí *k^hwé=kâ* *hàun=tè*
 カラス =*kâ* 鳴く = [接続] 犬 =*kâ* 吠える =vs. [現実]
 〈カラスは鳴き、犬は吠える。〉

- b. $cígán = kâ$ $ʔə = t̚è$
 カラス = $kâ$ 鳴く = vs. [現実]
 〈カラスが鳴く。〉

(10) a. の「カラスは鳴き、犬は吠える」というカラスと犬を対比させる文ではビルマ語は助詞 $kâ$ が使われる。また(10) b. の「カラスが鳴く」という排他的な意味を表す場合もビルマ語では $kâ$ で標示される。

加藤 (1997: 95) も、久野 (1973) の「対照」という用語を用いて、ビルマ語の $hà$ には対照を表す用法はないとしている。従って、対比と排他の原理では $hà$ は現れにくい。

3.3. 文と節の原理

野田 (1996: 110) による「文と節の原理」とは、「主格がどこまでかかるかによって『は』と『が』の使い分けを説明するものである。つまり、文末までかかるときは『は』が使われ、節の中だけにしかかからないときは『が』が使われるという原理である。」

同書では、次のような説明をしている。この原理を最初に提案したのは山田 (1936: 第二十章) である。山田 (1936) は、次の(11)と(12)を挙げて、「は」と「が」の違いを説明する。

- (11) 鳥が飛ぶときには空気が動く。
 (12) 鳥は飛ぶ時に羽根をこんな風にする。

山田 (1936) によると、(11)の「が」の勢力は「飛ぶ」までしかおよばないのにたいして、(12)の「は」は「飛ぶ」には直接関係しないで、「羽根をこんな風にする」という陳述と結びつくというのである。

加藤 (1996: 180) は「 $hà$ は従属節内部に現れにくい」とし、加藤 (1997: 98) はビルマ語の $hà$ と $kâ$ について「従属節の内部に現れる可能性において異なる性質を持つ」として、日本語と同様の分析を行っている。

しかし日本語で主格が文末までかかるときは「は」、節の中は「が」を用いると分析できるとしても、ビルマ語の $hà$ と $kâ$ にこの原理を当てはめて説明することは必ずしもできない。というのは、前述のようにビルマ語には口語体と文語体の他に見かけの口語体というのが存在し、ここで現れる $hà$ はその見かけの口語体として使用されている場合であり、 $kâ$ は口語体として使用されているからである。つまり、このように $hà$ と $kâ$ の二つの形式があるのは単なる文体の違いであり、機能上の違いではない。

また加藤 (1997) に挙がっているビルマ語の文は文脈が与えられないと自然とは言えないものがあり、ここで再検討をする。なお例文(13) a、(13) b の容認度の判断は引用者/筆者のものである。加藤 (1997) は完全に容認可能な文と判断していると考えられる。

- (13) a. ?? $mámùn = hà$ $jāpàn$ $t̚wá = nàin = yìn$ $wún̄t̚à = mè$
 人名 = $hà$ 日本 行く = できる = と 嬉しい = [非現実]
 〈マ・モンは日本にいけると喜ぶだろう〉

b. ?	mâmùn=kâ	jāpàn	twá=nàin=yìn	wúnṭà=mè
	人名 =kâ	日本	行く = できる = と	嬉しい = [非現実]
	〈マ・モンが日本にいけると喜ぶだろう〉			加藤 (1997: 98)

加藤はこれらの例文に対して、次のように説明している。

(13) a.⁷ の文では、「喜ぶ」のは「マ・モン」だと解釈される。これは、mâmùn が主文の要素だからである。一方の(13) b. では、「喜ぶ」のは「マ・モン」である場合と、誰か別の人である場合のふたつの解釈が可能である。すなわち、(13) b. の mâmùn は主文の要素である可能性と、従属節内部の要素である可能性とがある (加藤1997: 98)。

しかし(13) a. も(13) b. も wúnṭà 「喜ぶ」のは「マ・モン」でもあれば、それ以外の人でもあり得る。つまり両文において「マ・モン」は twá=nàin (=yìn) 「行ける (と)」の主語であって、主節の述語 wúnṭà 「喜ぶ」の主体が未指定である、というのが正しい分析である。要するに加藤の分析とは異なり、「マ・モン」は従属節内の要素であって、主節の述語とは呼応しない。だから主節の述語「喜ぶ」の主体に「マ・モン」がなり得るか、ということは問題ではない。両文の違いは(13) a. は見かけの口語体、(13) b. は口語体という単なる文体上の違いであり、実質的に同じ意味の文と言ってよい。

即ち、ビルマ語の hà と kâ の違いに、日本語の文と節の原理のような使い分けの原理は存在しない、ということである。

この文と節の原理に関して、小林 (1984: 96) は「日本語の {は} と {が} には、機能上の違いがある。{は} は従属節を越えて主節の文末と呼応するが、{が} は従属節の中にとどまる。一方、ビルマ語の方は、{hà} {kâ} 共に従属節を越えて主節の文末と呼応するので、機能上の違いはない」と主張している。hà と kâ に機能的な差異がない点では本稿の分析と一致するが、本稿の分析では hà も kâ も共に従属節を越えず、従属節の述語と呼応する。

なお(13) a.、(13) b. のいずれも自然な文とは言えないことを指摘しておきたい。特に(13) a. のように hà を使うのは極めて不自然である。また kâ が現れる(13) b. もそれほど自然とは言えない。(13) a.、(13) b. とも絶対に容認不可能とは言えないものの、ここでは無標が最も自然である。

(14)	[mín	mă=là=yìn]	dou?k ^h â	yau?=mè
	君	[否定] = 来る = [条件]	困難	至る =vs. [非現実]
	〈君が来ないと困ることになる。〉			

(13)と同様に(14)の例から解釈できることは dou?k^hâ yau?=mè 「困ることになる」のは mín 「君」でもあれば、それ以外の人例えば tù 「彼」や ṇà 「私」でもあり得る。mín 「君」は mă=là (=yìn) 「来ない (と)」の主語であり、主節の述語 dou?k^hâ yau?=mè 「困ることになる」の主体が未指定である。

7 本稿に引用するにあたり、例文番号は付け替えた。

以上述べたことはいずれも主語 1 つの文の場合である。これからは従属節と主節の両方に主語が現れる場合の主語 2 つの文について考えてみよう。

- (15) [mín mā=là=yìn] [mín dou?k^hā yau?=mè]
君 [否定] = 来る = [条件] 君 困難 至る =vs. [非現実]
〈君が来ないと君は困ることになる。〉

- (16) [mín mā=là=yìn] [tù dou?k^hā yau?=mè]
君 [否定] = 来る = [条件] 彼 困難 至る =vs. [非現実]
〈君が来ないと彼は困ることになる。〉

(15)は従属節内の主語と主節の主語が同一者を指す場合であり、(16)は従属節内の主語と主節の主語が異なる場合である。この2つの例から分かるように主節内に主語が明示される場合があり、文頭の要素が必ずしも主文の主語であるとは言えない。

ただ、以下の(17) a. と(18) a. のように従属節内に主語が明示される場合、文頭の名詞・名詞句は主節の主語になる。(17) a. の mín 「君」と(18) a. の tù 「彼」はそれぞれ dou?k^hā yau?=mè 「困ることになる」の主語である。この場合、主語は主文の述語と呼応する。しかし、(17) b. と(18) b. のように従属節内の主語を省略することはできない。省略すると(17) b. では文頭の mín 「君」は主節の述語 dou?k^hā yau?=mè 「困ることになる」とは呼応できなくなり、従属節内の述語 mā=là (=yìn) 「来ない (と)」の主語となる。同様に(18) b. では文頭の tù 「彼」は主節の述語の dou?k^hā yau?=mè 「困ることになる」とは呼応できなくなり、従属節内の述語 mā=là (=yìn) 「来ない (と)」の主語となる。いずれにしてもそれは hā と kâ の使いわけの問題ではなく、日本語の文と節の原理のように「は」と「が」が機能しているわけではない。

- (17) a. mín [tù mā=là=yìn] dou?k^hā yau?=mè
君 彼 [否定] = 来る = [条件] 困難 至る =vs. [非現実]
〈君は彼が来ないと困ることになる。〉

- b. mín [* (tù) mā=là=yìn] dou?k^hā yau?=mè
君 彼 [否定] = 来る = [条件] 困難 至る =vs. [非現実]
〈君が来ないと困ることになる。〉

- (18) a. tù [mín mā=là=yìn] dou?k^hā yau?=mè
彼 君 [否定] = 来る = [条件] 困難 至る =vs. [非現実]
〈彼は君が来ないと困ることになる。〉

- b. tù [* (mín) mā=là=yìn] dou?k^hā yau?=mè
彼 君 [否定] = 来る = [条件] 困難 至る =vs. [非現実]
〈彼が来ないと困ることになる。〉

以上で示したように、少なくとも hā と kâ の機能に関しては従属節を超えるとは考えられ

ない。

3.4. 旧情報と新情報の原理

「新情報と旧情報の原理」とは、野田(1996)「主格名詞が、話の現場や文脈とどのような関係をもっているかによって『は』と『が』の使いわけを説明するものである。つまり、主格名詞がまだ知られていない新情報のときはその主格に『が』がつき、主格名詞がすでに知られている旧情報のときはその主格に『は』がつくという原理である。」

野田(1996)はこの原理を早くに提案したのは松下(1930: p.339-p.343)であり、松下は「未定可変の概念」と「規定不可変の概念」という用語を使って、「は」と「が」の説明をすることを述べ、次の松下(1930)の例文を挙げて説明している。

- (19) 私は吉田と申します。社長に御取次を願います。
 (20) 私が先日履歴書を差上げました吉田でございます。

松下(1930)によると、(19)はなにも知らない受付の人に言う文で、目の前にいる「私」は既定の概念で、「吉田」は未定の概念である。このような既定の概念の「私」には「は」がつく。それにたいして、(20)は「吉田」という名前を知っている社長に言う文で、「吉田」が既定の概念で、「私」は未定の概念である。このような未定の概念の「私」には「が」がつくというのである、という説明である。

このように、日本語では、旧情報には「は」、新情報には「が」が使用される。これに対し、ビルマ語はいずれの場合も *kâ* が使用される。以下、(21) a. 「は」を用いる旧情報のときも(21) b. 「が」を用いる新情報のときもビルマ語は区別せずに *kâ* を用いることが分かる。ただし、この(21) a. と(21) b. のような旧情報・新情報の原理で説明するような場合は *kâ* の代わりに無標で表されることもある。つまり、*kâ* の省略が可能な場合であり、省略によって意味の違いは生じない。なお、*hà* は現れにくい。

- (21) a. *s^hâyàwùn=kâ* *bètù=lé*
 医者 = *kâ* 誰 = [疑問]
 〈医者は誰ですか。〉
- b. *bètù=kâ* *s^hâyàwùn=lé*
 誰 = *kâ* 医者 = [疑問]
 〈誰が医者ですか。〉

日本語の場合、旧情報は「は」で標示され、新情報は「が」で標示されている。一方、ビルマ語の場合、(21) a. の旧情報 *s^hâyàwùn*「医者」も(21) b. の新情報 *bètù*「誰」も *kâ* で標示される。日本語では、「が」で標示される名詞・名詞句は話し手が初めて導入する新情報であり、もう一方のほうは旧情報である。それに対応するビルマ語ではいずれの場合も *kâ* で標示される。従って、ビルマ語の *hà* と *kâ* の使いわけは新情報・旧情報の原理には関わりがない。

3.5. 措定と指定の原理

「措定と指定の原理」とは、野田 (1996) によれば、「主格名詞と述語の意味的な関係によって『は』と『が』の使い分けを説明するものである。つまり、述語が主格名詞の性質を表す『措定』のときには『は』だけが使われ、主格名詞と述語名詞が同じものであることを表す『指定』のときは『は』か『が』が使われるという原理である。」

野田 (1996) は「措定」と「指定」という用語を使って、この原理を最初に提案したのは三上 (1953: 第一章六) であることを述べ、次の三上 (1953) の例文を挙げている。三上 (1953) は、次の(22)のような「は」の文と、その次の(23)のような「は」の文の違いを指摘している。

- (22) いなごは害虫です。
 (23) 君の帽子はどれです？

三上 (1953) によると、(22)のような文は「いなご」について「害虫だ」と解説する措定の文なので、(24)のような「が」の文にかえることはできない。それにたいして、(23)のような文は、「君の帽子」と「どれ」の一致を確認する指定文なので、(25)の文にかえることができる、という説明である。

- (24) * 害虫がいなごです。
 (25) どれが君の帽子です？

従って日本語では措定には「は」、指定には「は」か「が」が使用される。これに対しビルマ語はそのような区別がなく、いずれの場合も kâ が用いられる。hā は現れにくい。以下、「は」を使う (26) a. 措定の場合も、それぞれ「は」と「が」を使う (26) b. と (26) c. の指定の場合もビルマ語は kâ が使われる。また (26) b. を除き、(26) a. と (26) c. のような文は 3.4 の旧情報・新情報の原理で説明するような場合と同様に kâ の省略が可能である。従って、ビルマ語の hā と kâ の使い分けは措定と指定の原理にも関わらない。

- (26) a. t̃ù=kâ s^hāyàwùn=pà
 彼 =kâ 医者 = [丁寧]
 〈彼は医者です。〉
- b. s^hāyàwùn=~~kâ~~ t̃ù=pà
 医者 =kâ 彼 = [丁寧]
 〈医者は彼です。〉
- c. t̃ù=kâ s^hāyàwùn=pà
 彼 =kâ 医者 = [丁寧]
 〈彼が医者です。〉

4. まとめ

日本語とビルマ語の主語を表す助詞の類似点と相違点を野田(1996)の5つの原理から考察を行った。よく似ていると思われる日本語の「は」とビルマ語の *hà* の類似点は判断文の場合のみであり、日本語の「が」とビルマ語の *kâ* の類似点も排他的場合のみである。相違点は、現象文では日本語は「が」で表すが、ビルマ語は無標になる。また、対比と排他の原理で日本語は「は」と「が」で使い分けているが、ビルマ語はいずれの場合も *kâ* で表す。その他の原理において、ビルマ語の主語に *kâ* を後接する場合はあるものの、日本語のような違いがあるというわけではない。

表1 両言語における助詞の現れる可能性

助詞	日本語		ビルマ語						
	は	が	文語体			口語体			
			<i>tì</i>	<i>kâ</i>	無標	見かけ <i>hà</i>	<i>hà</i>	<i>kâ</i>	無標
判断	○	×	○	×	×	○	○	×	×
現象	×	○	×	×	○	×	×	×	○
対比	○	×	○	○	×	○	×	○	×
排他	×	○	×	○	×	○	×	○	×
文	○	×	○	○	(○)	○	×	○	(○)
節	×	○	○	○	(○)	○	×	○	(○)
旧情報	○	×	○	○	(○)	○	×	○	(○)
新情報	×	○	○	○	(○)	○	×	○	(○)
措定	○	×	○	○	(○)	○	×	○	(○)
指定	○	○	○	○	(○)	○	×	○	(○)

表1の「○」と「×」はそれぞれの助詞の現れる可能性を示している。この表1から分かるように *hà* がよく現れるのは話し言葉を文語体で書くときの単なる見かけの口語体の場合であり、純粹の口語体で *hà* が現れるのは判断文の場合のみである。ビルマ語には、文の中に同じ助詞の重複を避けるため *hà* と *kâ* を適宜使用している場合もある。以下(27)は主文の主語 *s'āyà* 「先生」に後置する助詞として *kâ* あるいは *hà* を選択することができるが、引用文内の主語 *mín* 「君」に付く *hà* との重複を避けるため主文の主語に *kâ* を優先する可能性が高い。

- (27) *s'āyà=kâ/?hà tū=kò* *mín=hà lùlè=pé=lò* *pyó=lai?=tè*
 先生 = *kâ/hà* 彼 = [対格] 君 = *hà* 悪賢い人 = [焦点]=[引用] 言う = [適時] = vs. [現実]
 〈先生は彼に君は悪賢い人だと言った。〉

以上本稿では、日本語の「は、が」との対照からビルマ語の *hà*、*kâ* について考察し、現象文での無標で表される場合を除き、ビルマ語の *kâ* は日本語の「は」または「が」に相当し、*hà* は判断文の場合のみに日本語の「は」と相当するという結論を得た。また、先行研究中

で記述されることがすくなかった無標についても考察し、現象文の場合での主語に hà と kâ が付きにくいときの無標の形式と、現象文以外の場合で hà と kâ が省略されたとみられる無標の形式があることを明らかにした。更に先行研究中では議論があった「文と節の原理」に関して少なくとも hà, kâ の機能に関しては従属節を超えるとは考えられないことを示した。

参考文献

- 庵功雄 (2009) 『新しい日本語学入門』、スリーエーネットワーク
- 大野徹 (1983) 『現代ビルマ語入門』、泰流社
- 岡野賢二 (2007) 『現代ビルマ (ミャンマー) 語文法』、国際語学社
- 岡野賢二 (2009) 「ビルマ語の格標示」、澤田英夫編『チベット=ビルマ系言語の文法現象1: 格とその周辺』 pp.239-268、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 加藤昌彦 (1996) 「ビルマ語の助詞 -ha_ の特徴について」、『東京大学言語学論集』 15号 pp.167-201
- 加藤昌彦 (1997) 「ビルマ語の -ha_ と日本語の「は」についての覚え書き」、『No.76民博通信』 pp.90-105
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』、大修館書店
- 小林純子 (1984) 「日本語の助詞 {は} {が} とビルマ語の助詞 {ha} {ka} の対照研究」、『日本語教育54号』 pp.89-98、日本語教育学会
- 澤田英夫 (2012) 『文語ビルマ語文法』 [改訂版]、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語』改訂版、くろしお出版
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』、くろしお出版
- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』、中文館書店 (復刊 誠社 1977)
- 三尾砂 (1948) 『国語法文章論』、三省堂
- 三上章 (1953) 『現代語法序説—シンタクスの試み—』、刀江書院 (復刊 くろしお出版 1972)
- 三上章 (1963) 『日本語の論理』、くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』、大修館書店
- 藪司郎 (1992) 「ビルマ語」、亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』 第3巻世界言語編 (下 -1) pp.586-590、三省堂
- 山田孝雄 (1936) 『日本文学概論』、寶文館
- Okell, John (1969) A Reference Grammar of Colloquial Burmese, Part II , Oxford University Press.
- Okell, John and Allott, Anna (2001) Burmese/ Myanmar Dictionary of Grammatical Forms, Curzon Press
- Myanmar Language Commission (2001) , Myanmar- English Dictionary, Myanmar: ThetgatoMya PonHnaiteTai Press

Myanmar Language Commission (2005) , Myanmar Thadar, MayanmarsarAhphweHnit30pyae
(1975-2005) AhHtainAhHmat, Myanmar: ThetgatoMyaPonHnateTai Press
Mg Khin Min (2011) YaeHanPyinnyarNidan (Stylistic) , Myanmar: SeitKuuChoCho publishing

The differences between “hâ”, “kâ” in Burmese

—Contrast from Japanese “Wa”, “Ga”—

Thuzar Hlaing
Tokyo University of Foreign Studies

【keywords】 Written Style, Pseudo-Spoken Style, Spoken Style, Subject, Unmarked

Burmese is a SOV type of Language, and is quite similar to Japanese in the grammatical structure, such as, the relationship of noun and noun class are marked by postpositions. This study is concentrated on the differences between “Wa”, “Ga” in Japanese and “hâ”, “kâ” in Burmese based on the 5 theories of Noda (1996). Basically, in Japanese, “Wa” is used to indicate the topic of a sentence and “Ga” indicate the case of nominative. But, as for Burmese, we usually use “kâ” to indicate both cases.

In the theory of phenomenon statement and judgment statement, “Wa” is appeared in the statement which shows the judgment of commentator, and “Ga” shows the phenomenon of environment. But, “hâ” is preferably used for judgment statement, and used to represent by unmarked for phenomenon statement. The point is that except from the judgment statement when “hâ” is appeared, it should be taken as a “Pseudo-Spoken Style” of Burmese. In the theory of exclusion and contrast, “Wa” is used for the contrast and “Ga” for the exclusion. But, Burmese uses “kâ” in either case. In the theory of clause and sentence, “Wa” is used in sentence and “Ga” in clause. As for Burmese, it is difficult to explain by using this method. In the theory of old information and new information, “Wa” expresses the old information and “Ga” expresses the new information. But, in Burmese, it is not like Japanese and both of “hâ” or “kâ” can express both old and new information. In the theoretical statement and specified statement theory, “Wa” is used for theoretical statement and either “Wa” or “Ga” is used for specified statement. As for Burmese, it is mostly expressed by using “kâ” in both theoretical statement and specified statement.

As a result, it can be said that the particle “kâ” corresponds with the particle “Wa” or “Ga”, and the particle “hâ” corresponds with the particle “Wa” only in the case of a judgment statement, except when it is represented by the unmarked in the phenomenon statement.

自立の基礎を育てる教育についての研究

——小幡肇学級の卒業生へのインタビューを通して

劉妍(東京外国語大学博士後期課程)

【キーワード】 学校教育、子ども、自立

1 研究の課題及び小幡肇実践の紹介

1-1 問題設定と先行研究の概観

本研究の問題の所在に入る前に、中国人である筆者が日本における自立の基礎を育てる教育について研究しようとする理由と研究の立ち位置について述べておきたい。

日本と中国は、歴史的な経緯の共通性が見られ、文化、伝統において類似している部分もある。しかし、教育において、発展のスピードが異なり、中国は日本の後追いをしていると言われている。中国では、「要想成人必先自立」「不自立則不成人」ということわざがある。意味は「有能な人材になるには、自立することが第一歩だ」である。しかし、私の被教育時代(1994年小学校入学)は、学校教育の現場では、教師が強い権力を持っており、子どもが教師の指示に完全に従っていた。筆者の場合は教師の指示や要求がないと、何をやればいいのか分からない。そして、自分で考えようとしないので、戸惑ってしまう。

日本に留学する機会に恵まれ、日本人と接したり、交流したりする機会が多くあった。筆者は、日本の学校教育の中、どのように子どもに自立を育てているのかを考えるようになった。このようなことを考えながら、日本の多くの教育現場を見学させてもらった。筆者の見た限りでは、子どもたちはまだ小学生であるのに、堂々と多くの人の前に立ち、自分で調べてきたものや自分の考えを発表していた。グループ活動、班討論で自分の意見を言ったり、他人の意見を聞いたりする。熱い議論する場面が多かった。筆者はこれらの場面に出会い、衝撃を受けた。日本の子どもたちの自立を強く感じ、中国人である筆者は、中国教育における自立という問題も視野の中におきながら、日本の学校教育における子どもの自立を育てることに関する研究をしようと思うようになった。ここで述べた自立の意味内容についての定義は後で述べる。このような研究を通して、自分自身を成長させることは言うまでもなく、日本の文化や教育事情についてより深く学ぶと同時に、母国である中国の文化や社会、教育に対する理解を深めていくことになるだろう。

中国は改革開放政策を実施して以降、グローバル化が進み、経済を速やかに発展させた。しかし、中国の改革開放の進行に伴って、社会の格差が経済、教育などいろいろな方面に広がっている。一方、日本の現代社会において、高齢化・高度情報化社会の進展という大きな変化が起こっている。長い人生の中で、自分自身の生き方や価値観があらためて問われている。しかし、近年、増加する無業者、フリーターなど、若者を取り巻く雇用情勢は極めて厳

しい状況にある。いくら学校の勉強を頑張っても、よい成績をとったところで、社会に出てみれば何の役にも立たないどころか、自立することもできないという現状がある。

人間が生きていくことは自立していくことである。将来社会で生きていくのに、必要となる社会に通用する力を身につけなければならない。久世敏雄（1985）、梶田叡一（1990）によると、自立性を育てていくことは、人間教育の大きな目標の一つである。自立を身につけていくことは、生涯を通じて追究されるべき大課題である。学校教育だけで十分に達成できるわけではないが、その基盤づくりは、学校でのあらゆる活動を通じて追究していかねばならない課題であるという。

小学校指導要領生活科の目標とされている学習上の自立、生活上の自立、精神的な自立という三つの意味での自立、将来自立した大人になるための基礎である。つまり、子ども時代で自立を身につけるかどうかというのは、将来自立した大人になれるかどうかということを支えるものであると考えられている。

教育学における先行研究では自立についてはさまざまな定義があるが、本研究では、自立を他者とのかわりの中で、主体性を発揮し、学び続けることと定義する。

ところで、自立を育てる教育実践は短い時間では検証できない。村井淳志（1996）は「学習経験の意味づけは非常に長期にわたるプロセスで、学校を卒業した後も続き、年齢とともに深化していくのがふつうである。大人になってから、初めてかつて受けた授業の意味が分かる、ということもある」と指摘している。つまり、当時の学びが子どもの中にどんな意味が残ったのかのような教育の成果は、十年後、二十年後になって初めて現れるということである。自らの学びを評価するには、自分にとっての学びの「意味」を理解することが必要だと考える。村井（1996,p11）は「社会科を中心とした人文・社会科学系教科の教育実践を分析するには、子どもにどの程度『学力』がついたかではなく、その実践が子どもにどんな『意味』を残したのかということ、分析の包括的なものさしとすべきだ」と「意味」の重要性についても述べている。十数年経って、子どもたちが一人前の社会人になり、学校教育で学んだことが将来生きていくにはどの程度役に立つのか。当時に受けた教育実践は自分にとってどんな意味を残しているのかなどが問われる。

本研究の対象とする小幡肇（2012）は、教育実践の中で、子ども同士の間につながりを大事にしながら、自ら課題を見つける力、調べる力、考える力や表現力を大事にしてきた。これまで小幡実践の意義を明らかにしようとする試みはいくつかなされてきた。例えば、藤井千春（2003）、守屋淳（2003）は、授業における子どもの主体的に自分で問いを見つけ、考え、表現する能力を育てることを評価している。また、荒木寿友（1999）、松本康（2003）、木全清博（2003）、森脇健夫、岩崎紀子（2004）は、子どもたちが主体的に学習活動を行えるように、子どもを鍛える「舞台」を作り出す教師としての役割を評価しているなど。しかし、ほぼそのすべてが実際の授業について授業観察やインタビューを行いながらその意味を抽出しようとする試みであった。

本研究では、小幡学級の卒業生へのインタビューを通し、成人になった当時の子どもたちの中に残っている小幡教諭の教育実践の意味を明らかにすることが一つの目的である。そして、当時受けてきた自立を育てる実践の当事者の中に、自立がどんな形として残っているのか、またどんな力に発展していたのかを検討することで、自立の基礎を育てる教育の意味を

明らかにする。

1-2 奈良女子大学附属小学校と小幡肇実践

1-2-1 奈良女子大学附属小学校の教育と小幡肇実践の関係

小幡教諭は、1990年から2011年まで、奈良女子大学附属小学校に勤めていた。奈良女子大学附属小学校と言えば、大正自由教育における八大主張の一つであった木下竹次の「学習法」生誕の地でもある。これまで明らかになったように、奈良女子大学附属小学校の授業は発足以来オリジナリティーに溢れるものであり、その伝統は今日に受け継がれている。「ほんとうに子どもを育てるとはどういうことか」という根本的な問いに挑み続け、自分で自分の学習を創っていく子どもを育てる「奈良の学習法」の実践と研究に取り組んでいる学校である。

そして、奈良女子大学附属小学校では「奈良プラン」と呼ばれる独自の教育構造をもち、それは「しごと」「けいこ」「なかよし」の3つの領域からなる。奈良女子大学附属小学校の教育目標として、「1、開拓、創造の精神を育てる。2、真実追究の態度を強める。3、友愛、協同の実践力を進める」の3点が掲げられている。奈良女子大学附属小学校の『学校要覧』によれば、「しごと」「けいこ」「なかよし」という教育構造は、この目標から発したものであって、単なる形態上の区分だけでなく、教育目標の目指す人間形成の立場から、相互に力動的・有機的関係をもって成立するものであると説明されている。

その中の「しごと」の教育目標を「①新鮮な感覚と知性に立って、自由な視点から弾力的に考えることのできる、いわば人間としての幅を育てる。②自然、人間、社会の真実のすがたを求めて、その知見と視野を広げ、身近な事実の問題を追及して新しい社会生活のあり方を洞察させ、それに向かって自己の生活態度ならびに生活環境をつくりかえていく意欲と実践力を育てる」と設定している。「しごと」と文部省社会科との関連について、小幡(2012)は、「奈良女子大附小が独自に作成したプラン『しごと・けいこ・なかよし』は、文部省社会科の発展したもの」と述べている。

奈良女子大学附属小学校の独特な学校文化背景の中で、教師たちはどのように実践を行っているのだろうか。森脇・岩崎(2004)の研究は、同校のどの学級においても実践されている一つのスタイルが、同校に着任した教師たちの授業づくりの「技術」のみならず、子どもをみる目、子どものとらえ方、子どもに内在する「力」に対する感覚、教師の出方や居方など、諸技術を支える「観」(授業観や子ども観)と呼びうるものの変革を呼び込んでいるということを明らかにしている。また、森脇・大西・岩崎(2006,p63)は、「いずれの教員も自立した子どもの姿を目指して実践に取り組んでいくわけだが、奈良女子大学附属小学校における教師の学びは必ずしも制度化されているわけではない。子どもと同様に自立した学習を自ら実践することを求められる」と述べている。

では、学校が設定する「しごと」の教育目標と、小幡教諭の教育目標はいかに関連しているのだろうか。荒木(1999,p92)は、「しごと」の教育目標の①の「新鮮な感覚と知性に立って、自由な視点から弾力的に考えることのできる、いわば人間としての幅を育てる」という箇所は、小幡教諭の目標では「生活を拡充する経験を積んでいくことができるようにする」と捉えている。また、②の「自然、人間、社会の真実のすがたを求めて、その知見と視野を広げ、身近な事実の問題を追及して新しい社会生活のあり方を洞察させ、それに向かって自己の生

活態度ならびに生活環境をつくりかえていく意欲と実践力を育てる」という目標は、「高齢化に向かう現代社会の中で生活をする年長者」に接することを通じて育成されるものとして明らかにしている。また、小幡教諭は「児童が自ら課題に取り組み、問題を発見し解決できるようにする」ことを指導目標として掲げている。

また、実践の背景にある小幡教諭の教師としての歩みと指導観の転換について、田中(2004,p52)は以下のように述べている。奈良女子大学附属小学校では、「学習法」の伝統をふまえながらも自由な校風のなかで教師一人ひとりが独自の実践を展開していた。子どもに対しても同僚に対しても「教えてやる」という姿勢をとらない同人たち。朝の会から「しごと」「けいこ」「なかよし」の学習まで、学校生活のあらゆる場面において前に出て自分の言葉で話をし、「おたずね」をしあって学習生活を進める子どもたち。子ども観や指導観を揺さぶられるなかで、次第に「『子どもは自力でのりきり、自分で自分を変えていく力をもっている。……そのもっている力を発揮する場と機会を創っていく』のが授業」だと考えるようになっていった。

1-2-2 小幡肇実践の特徴

学校背景や学校文化で紹介したように、奈良女子大学附属小学校は、木下竹次が創始した「学習法」に基づいて教育が行われている。木下(1923)は、「自律的学習法」を唱導しており「学級の画一教育法を打破した自律的学習法は、いずれの学習者も独自学習から始めて相互学習に進み、さらにいっそう進んだ独自学習に帰入する組織方法であって、実に性質能力の異なったものは異なったように活動し、しかも、自由と協同とに富んだ社会化した自己を建設創造しようというのである」と述べている。

上記より、小幡教諭の勤めている奈良女子大学附属小学校は基本的に「自立的」ではなく「『自律的』な学習法」が行われていることが分かる。これについて、小幡教諭は以下のように述べている。

「…ちょうど生活科が生まれるごろに、立つという自立がね、出てきたり、うちの学校でもどっちなのか(自立か自律)という議論があったんですよ。で、文部省はこの立つの自立なんですけどね。で、僕らはあえてその自立を使わないのは、そのやはり学習法は独自学習、相互学習、独自学習という形態として進んでいくというものを背景として持っているんですよ。そこにおいて、独自学習を徹底する。そして、そこから持ち込む自分で見つける。それを相互学習で議論する、また自分独自学習でそれを持ち帰って、自分で考え続けるという、やっぱ自分を律するという意味合いが強いような気がするんですね①。それで、自律という言葉を使ったんですよ。で、この立つのほうは、イメージ的には自分で行動するというか、自分で生活するというか、自分の行動面を指すような気がするんですね②。僕のイメージでね。そういう一般的な行動面ですよ」

(注：2011年6月28日インタビュー・筆者の卒業論文の「学校実践の中における子どもの自立に関する研究——生涯発達の観点から」より)

下線部①より、小幡教諭は奈良女子大学附属小学校の独自学習、相互学習、独自学習とい

う形態の学習法をもとにして、子どもを指導していることが分かる。また、「自立」と「自律」が一致してない点も小幡教諭の話から読み取れた。小幡教諭の考えでは、奈良女子大学附属小学校の独自の学習法の意味に自分を律するという意味合いが強いということが分かった。そして、下線部②より、自立について、小幡教諭は自分で行動する、自分で生活する、といった自分の行動面を指すというように捉えていることも読み取れた。

小幡教諭の教育実践が上淵寿(1998)の子どもの自立の概念にも当てはまると考えられる。子どもの自立について、上淵(1998,p178)は、「近年は『自己教育力』の向上が謳われているように、子どもは自らの関心や興味に応じ課題設定や解決方法、学習結果の活用について自己決定し、学習過程を自ら制御する主体となることが、学校教育における子どもの『自立』であり、発達の一つのあり方として期待されている」と述べている。

小幡教諭は目標として自立という言葉を明確的に述べているわけではないが、小幡教諭の考えている自分で考えて、行動する、自分で自分をコントロールするという自立の中身は、筆者の考えている自立の概念の核心的な部分であり、筆者の考えている自立の概念に含み込んでいると言えるだろう。したがって、以上述べたように、小幡教諭の行ってきた教育実践が自立の基礎を育てる教育実践だと言えると思う。

小幡教諭の考えている自立を分析する際に、「しごと」学習『『気になる木』の『はっぱ』をふやそう』の授業を用いながら説明していきたいと考える。

小幡教諭の授業では、毎回一人の子どもが独自学習の成果を土台に授業者を担当し、四五分の授業を進行する。授業者の子どもは、自分で調べてきた内容を紹介する。次に、一人調べを通してとらえた「気になること」を、それに関する自分の現在の考えとともに聴き手の子どもたちに投げかける。一方、聴き手の子どもたちは、粘り強く「おたずね」を重ねて自分の知りたい情報を引き出しながら、さらには、それぞれが独自学習で調べたことや経験したことを拠り所に、新たな事実を出し合い、意見を関連付けながら、「たぶん」の話を広げ、探求を深めていく。

子どもたちが対話を重ねていく間、小幡教諭はほとんど介入しない。子どもたちの話し合いには互いに返答に窮し言いよどむ場面もあれば、思わぬ方向へと進むこともあるが、そのような場合でも、小幡教諭はけっして慌てて口を挟むということはしない。聴き役に徹し、じっと子どもたちの話を聴き止め、それぞれの出した事実や考えとそのつながり、また、そこでの論点や対立点分かるように、子どもたちの対話を色チョークで構造的に板書していく。対話が進み、黒板が対話の記録でいっぱいになったら、授業は終盤に入る。一人ひとり「気になる木のはっぱ」(葉の形をした緑色の画用紙)に自分の考えを書いて、それを披露しあう。そして、友達の考えを取り入れた学習作文を書いて、学習は終わる。子どもたちが授業の最後に自分が書いた「はっぱ」を教室の天井を覆う緑のシートに貼り付ける。学級の全員がその時間の学習の証を四〇枚の「はっぱ」に茂らせて『『気になる木』の『はっぱ』をふやそう』の授業は終わる。

森脇(2004,p56)によると、小幡教諭は、『『気になる木』の『はっぱ』は、「学級における、子ども自身の存在感」であるという。と同時に、「その子の、創造し続ける要素が、子どもらの『気になる存在』になるようにするもの」、さらには「その子の、学習が広がっていくことへの歓喜の要素が、共に味わえるようにするもの」だという。そのために、「七夕」感

覚で楽しくことができるように、「書いてすぐ天井に飾る」ことも重要だと語っている。

小幡教諭の授業の一つ特徴とは、それぞれの「気になること」を題材に、授業者の子どもと聞き手の子どもとが協力して自力で学習を進めていく「子どもによる授業」であるということである。小幡教諭は、「独自学習」「相互学習」「独自学習」の順次性にしたがって授業を展開している。また、小幡教諭は正解を教えることや教師として授業の結論をまとめることより、子どもの自分からの納得を大事にしている。

小学校学習指導要領解説・生活編（平成20年8月）によれば、「自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで行うことができるということであり、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できるという学習上の自立である」が述べてある。小幡教諭は子どもの自立を育てるには、まさに小学校学習指導要領解説・生活編の中の学習上の自立を重要視している。

一方、「しごと学習」について、小幡はどのようにとらえているのか。小幡（2012,p89）は、「子どもが、生活の中で問題をとらえて、その解決を試みることによって、目当てをもって、周囲の世界に働きかける学習を『しごと』ととらえた。そして、子どもが、社会及び自然の事物事象を科学的に理解し、その合理的な処理のしかたを会得することを、『しごと』の目標ととらえた。また、子どもの関心の動向をとらえて適切な『しごと』の計画を立てることが『しごと』における教師の役割ととらえた」と述べている。

小幡教諭が自分の実践の中で、考えている子どもの自立をまとめてみると、以下のようである。①精神健全②自己を建設・発展することを図る③思考の発展④人間として強い人間⑤持っている「力」を発揮することができる（自分で乗り切り、自分で自分を変えていく力；子どもは「おたずね」を連続させる力；多面的・多角的に「たぶん」の話を考える力；話を聴き止めて「ありがとう」と言える力）。

以上述べたように、小幡実践の特徴は、教師が子どもの力を信じ、表面に出ず、授業者の子どもと聞き手の子どもたちが「おたずね」や「たぶん」の話を使って自力で学習を進めていく、「子どもによる授業」という形態をとることであり、また、子どもが自分の力を主体的に発揮し、人とかかわりの中、人の助けを借りながら、その場を乗り切るという自立の側面に重点を置いていることだと考える。

2 研究の概要及び小幡肇学級の卒業生へのインタビュー分析

2-1 研究対象と研究方法

2-1-1 研究対象

研究対象は、小幡教諭及び小幡教諭の送り出した卒業生4人である。

研究対象を選んだ理由は以下のようなものである。まず、対象となった卒業生の入学年の1995年度は『『気になる木』の『はっぱ』をふやそう』実践の誕生の年であった。また、対象となった卒業生の4人は今でも小幡教諭と緊密に連絡を取っている。

4人の卒業生の基本情報は以下のようなものである。

名前	性別	奈良女子大学附属小学校 入学年	仕事(2012年12月時点)
Uさん	女	1995年	スーパーマーケットの宅配
Hさん	男	1995年	郵便配達
Tさん	女	1995年	専門学校学生
Mさん	男	1995年	公務員

対象となった卒業生だけでは、小幡教諭の教育実践の全体像をとらえられないかもしれない。しかし、研究対象の選択について、村井(1996)は以下のように述べている。村井(1996)によると、すべての当事者から話を聞くのは不可能である。しかし、聞き取りができるのは現在でも教諭にかなり強く影響されたと自覚する人々であって、そうでない人々はインタビューに応じないと考えられることがある。また、「『意味』を感じなかった学習者から意味を聞き出そうとする試みには、それこそ意味はない。『意味』を語るができるのは意味があったという実感をもつ学習者だけである」という。

本研究で明らかにしていきたいのは、小幡実践に意味があったかどうかという問題ではなく、小幡実践にどんな意味があったのかという問題である。

2-1-2 研究方法

研究方法は、半構造化インタビューである。半構造化インタビューとは、質問項目や枠組みにある程度の構造化をほどこしつつ、実際のインタビュー場面では、興味深いトピックや語りについては適宜質問を加え、話題の展開に応じて問いの順序を変える等、インタビューの反応やインタビュアーの関心に応じて、十分な柔軟性をもたせるインタビュー法である(徳田、2007)。筆者は具体的な質問項目をあらかじめ準備し、それらを使ってインタビューを進めていたが、話題の展開に応じてある程度質問項目を変更した。

当時小幡教諭の教育実践を受けた当事者の卒業生に、小幡実践を振り返る半構造化インタビューを行う(以下はインタビュー①と呼ぶ)。そして、卒業生たちの証言を小幡教諭に報告し、小幡教諭に半構造化インタビューを行う(以下はインタビュー②と呼ぶ)。

まず、筆者は2012年12月15日、奈良女子大学附属小学校(卒業生たちの母校であり、小幡教諭の勤務校であった)で、インタビュー①を行った。対象となった卒業生の4人が1995年入学し、一年生から三年生まで、小幡教諭の担任したクラスで勉強した子どもたちである。

インタビューの質問項目は以下のI~IVである。

I、今どんな仕事をなさっていますか。その仕事をやり始めたのはどういう経緯があったのですか。自分で何らかの決断を下したのですか。

II、小幡教諭の授業は、発表者である子どもが教室の前方に立って、描いた絵や調べてきたことを発表し、「おたずね」を受けて、また発表者の「気になる」ことを聞き、思い浮かんだ話を披露し、最後に考えを書くという構成だと思います。お立ち台に登って、小さな発表者として、みんなの前で立ったということを覚えていますか。どんな内容を発表しましたか。その時のことを思い出す限り、お話をさせていただきますか。

III、小さな発表者として、みんなの見ている中で、ほかの子どもたちからの「おたずね」

に答えられなかったことがありましたか。助けてくれた子がいましたか。どのようにその場を乗り切りましたか。

Ⅳ、当時の小幡についての思い出についてお聞きしたいのですが、こんなことをしていたとか、こんなことを言われたとかのような記憶がありますか。当時の小幡はどんな教諭でしたか。小幡に対して、今の持っているイメージと昔の持っていたイメージと違いますか。同じですか。社会人になった今、当時授業で経験してきたことをどのような意味があると思いますか。

インタビューの限界で当事者が語る意味は、必ずしも小学校時代に受けてきた教育実践の意味とは限らない。しかし、過去のことを思い出す意味について、やまだようこ（2007,p126）は、「『過去』は、『現在』と照合されて絶えず再編成され、読みかえられて変容していくのである」と述べている。村井（1996,p17）は、「『意味』は、学習後の経験と有機的に反応し発酵するものである」と述べている。

したがって、本研究で、当事者たちがインタビューで語るのは、自分の今まで経験してきたことに関係して再構成されたものである点に留意しておきたい。

2-2 卒業生へのインタビュー

まず、小幡肇学級の卒業生にインタビューする理由について述べよう。

小幡学級の実践分析について、数多くの研究がなされている。先行研究は子どもの主体性や教師の役割という観点から小幡実践を評価してきた。しかし、教育目標が、実際にどの程度達成されているのか。十数年経って、子どもたちが一人前の社会人になり、学校教育で学んだことが将来生きていくにはどの程度役に立つのか。学習者である子どもたちにとって、社会に入る時点で、意味のある学習とは何なのか。ときに受けた教育実践は自分にとってどんな意味を残しているのかなどが問われる。

学習経験の意味づけについて、村井（1996,p18）は「学習経験の意味づけは非常に長期にわたるプロセスで、学校を卒業した後も続き、年齢とともに深化していくのがふつうである。大人になってから、初めてかつて受けた授業の意味が分かる、ということもある」と述べている。また、本多（1980）は、「教育実践の評価はその時々になされるものであろうが、本当の評価は、その子どもたちが一人前の社会人になってからなされるものだ。その時の教育が、成人になって、本当に役立つものとなっているかどうか、が問われるのだ」と語っている。

村井は本多が自分の教育実践が子どもたちの生にどのような意味をもったのかを問い続けてきたのである。村井（1996）によると、このような問いかけは、当の教師自身が行うには限界がある。自身の実践を対象化すること自体が難しいし、また元生徒の側では恩師を前にしてその実践を批判的に検討するという作業は躊躇や苦痛がともなうのが普通である。そこでは第三者として取材者の役割が大きいと言われている。

筆者は2012年12月15日、奈良女子大学附属小学校で、当時小幡教諭の教育実践を受けた当事者の卒業生に、小幡実践を振り返る半構造化インタビューを行った。インタビュー項目と卒業生の基本情報は述べたので、ここで省略する。

小幡教諭は1990年奈良女子大学附属小学校に着任した。1994年最初の卒業生を送り出すこ

とになった。インタビューの対象になった4人の卒業生は1995年に奈良女子大学附属小学校に入学した子どもたちであった。1995年度は、『『気になる木』の『はっば』をふやそう』実践の誕生の年であった。1995年度の「しごと」実践のテーマは、「さんぽと身近な人からはじめる、『気になる木』の『はっば』をふやそう』であった。

具体的には、<1学期>は「ヒツジさんとのさんぽ」、「校内のさんぽ」、「『気になる木』の『はっば』をふやそう～給食室のおばさん～」であった。<2学期>は「『気になる木』の『はっば』をふやそう～給食室のおばさん～」「『気になる木』の『はっば』をふやそう～ぼくの、わたしの家でのお母さん～」であった。<3学期>「『気になる木』の『はっば』をふやそう～ぼくの、わたしの家でのお母さん～」「『気になる木』の『はっば』をふやそう～お手伝い・大研究～」であった。

ここで、十数年経った今、卒業生たちにとって、当時の自立を育てる教育実践はどんな意味があるのかについて検討していきたい。当事者の証言は以下のものであった。

Uさん

「自分の考えをまとめるというか、ちゃんと出すという力になったのかもしれないですね。やっぱり吸収するだけが、アウトプットしてこそ知識があると思うんですけれども、こういう授業、発表するばかりだとか、聞いているばかりではなくて、何らかの質問を言わなければならないという状況に置かれていたので、葉っぱを書く、質問内容を答えて、どう思ったかとか、書かなければいけないという授業だったので、必ず質問をしようという態度で授業を聞いているという意識がついたのかなと思います。……結構質問したくなる、今でもその会社訪問だとか、大学の授業でもそうですけど、なんか気になると、質問しようかなと思って、書いたりとかするので、それはよくよく考えてみたら、こういう授業からもしたたので、プラスになったのかなという感じですかね」。

Uさんの話によると、当時の実践で身につけた質問力が今でも「必ず質問をしようという態度で」授業を受けたり、仕事をしたりしていることが分かる。また、Uさんの話から、小幡教諭の授業構成が見える。小幡教諭の授業構成は「一人の子どもを発表者（『小さな授業者』）として立たせ、その子への『おたずね』と、その子が『話（応答）をする』場を創る』であった。小幡教諭は「子どもが話を始めたら、介入せず、その話の背景にあることを読み取り、それを確かめたり強めたりするのに必要な活動を見つける」という指導法に徹している。当時、子どもたちは「おたずね」を受けたり、他の子の話を聞いて、引き出したりする経験を積んだことや、授業を楽しみながら、表現力、考える力、質問力をつけていったことが分かる。当事者の発言から、当時の授業構成や指導法が当事者に影響を与えていることが言えるだろう。

授業で、子どもに「たぶん」「きっと」「でも」などの接続詞を使わせ、表現力や考える力を鍛える。なぜなら、小幡（2003,p59）は「それは、『たぶん』を使って『一つの』意見をみつけ、さらに『きっと』を使って補足・強化する意見をさがし、『でも』を使って『一つの意見に対する現実』を自分の考えを創る根拠（足場）としていくという過程である。このような、二つの思考過程が、その子の中に育っていくことが『自分の考えを創る』子どもを

育てることになるのだろう」と述べている。藤井（2003）によると、小幡実践では、子ども自分なりの「問い」を見つけて、それについての自分の「考え」を持ち、それを主張しようとする力が育っていることが示されている。

Tさん

「自分で調べようと思って、フットワークは軽くなったと思います、っていうのは成長したのかなと思います。…専門学校の件でもいいですかね。例えばクラスの人たちは教科書と国家試験の受験勉強になるんですけど、その先生が指定された教科書からの文章しか読んでなくて、私はまあそういうのがすごく嫌いなタイプで、逆に。図書館に行って、図鑑を調べたりとか、そういうのは最近ありますね。あとは去年もホテルで働いてたんで、自分の予算の範囲内で、行けるホテルとか、結構いろんなところに、いろんなホテルに泊まって、玄関から見て、花瓶がどう置いてあるのか、そういうのをすごく調べたりとかはしました」。「中、高ではあまり活用というか、あまり活かせなかったんですけど、大学に入ってからとか、今になって、またその違いが出てきたなとか、調べたいことはとことんやる、やりたいことをとことんやるっていうまだ蘇ってきたなという気がします」。

Mさん

「飛び込みで、家に挨拶しに行ったりしてすることもけっこうあるんですけど、普通の小学校だったら、ちょっとだいぶ戸惑ってたかなと、小学校の時から先生の名刺を持って、いろいろやってたんで、全然抵抗はなかったですね。社会人になって、他の人より楽をしているような感じがします。飛び込みで行ったり、他の人と討論を言い合うとか、あとみんなの前でプレゼンテーションをするとか、やっぱり学校でもあんまり得意じゃない子もいるんじゃないですか。でも、自分は小学校の時に、みんなの前で立ったから、人よりもたけてると思えるようになっていたと思いました」。

Tさんは今の勉強の中でも、つねに自分の課題を見つけ、自分から物事を積極的に調べたり、行動したりしようとしている習慣を身につけたことが分かる。Mさんは小学校で経験してきたことを誇りに思って、今の仕事上にも大いに活かしていることが分かる。Tさん、Mさんの発言から、当事者たちは当時の教育実践から自分の「問い」を見つけ、「自分の考え」を持ち、自分のもっている力を発揮する能力を身につけたことが分かる。小幡教諭が「一年生の子どもでも、自力でのりきり、自分で自分を変えていく力をもっている」、「『そのもっている力を発揮する場と機会を具体的に創っていく』のが授業だ」という考えが当事者たちに影響を与えていると言えるだろう。

なぜ十数年経っても、当時に身につけた調べる力や行動力がまだ活かしているのだろうか。次のMさんの語ってくれた当時の教育実践の話から要因を見出すことができるのではないかと考える。Mさんは「小幡先生は自分の名刺の裏に子どもが勉強するんで、いろんなことを教えてくださいっていうのを書いて、それをみんなに渡してたんですよ。で、名刺を渡して、先生が今から二時間、町に出てこい、町に行って、自分の気になるなと思ったところを、店長さんにこの名刺を見せて、どんどん質問をしてこい、分からないことがあったらな

んでも聞いてきてっていうのは、はじめの授業ですごい印象的でした」と言っている。このように、町に出て自分の気になることについて知らない人にたずねた経験を持っているから、Tさんの話の中に出てきたように「調べたいことはとことんやる、やりたいことをとことんやる」という意識が今でも頭の中に力強く存在しているのではないかと考える。

2-3 卒業生へのインタビューの分析

インタビューの中で、大人になった子どもたちは当時の教育実践の授業構成や指導法を思い出したり、語ってくれた。主体性の中身として、問いを見つけ、考え、行動するという具体的な内容も出てきている。例えば、Uさんの話によると、当時の実践で身につけた質問力が今でも「必ず質問をしようという態度で」授業を受けたり、仕事をしたりしている。Tさんは今の勉強の中でも、つねに自分の課題を見つけ、自分から物事を積極的に調べたり、行動したりしようとしている習慣を身につけた。Mさんは小学校で経験してきたことを誇りに思って、今の仕事上にも大いに活かしているという。また、Uさんの話から、小幡教諭の授業構成が見える。小幡教諭は「子どもが話を始めたら、介入せず、その話の背景にあることを読み取り、それを確かめたり強めたりするのに必要な活動を見つける」という指導法に徹している。Tさん、Mさんの発言から、当事者たちは当時の教育実践から自分の「問い」を見つけ、「自分の考え」を持ち、自分のもっている力を発揮する能力を身につけたことが分かる。そこで、先行研究の成果を確認することができた。

卒業生たちの証言から、十年に経った今も、大人になった当事者たちは小幡教諭に影響されているように見える。しかし、育てる側の思いを貫くだけでは、育てられる側に伝えられない恐れもある。では、自立を育てる側の小幡教諭が大事にしていることはすべて育てられる側の当事者に影響を与えているのだろうか。

小幡(2003)は「『子ども同士で、子どもは育つ』ことを大切にしている」と述べている。また、「自分のもっている力を発揮する『子どもが育ち合う』ことにもつながっていかねばならない」という考えを持っている。しかし、当事者の発言の中で、友達の話聞き合う活動や「子ども同士で、子どもは育つ」「子どもが育ち合う」のような子ども同士についての発言は少なかった。そして、学習の構想を考える際には、小幡(2003,p59)は「まず、それぞれの子どもが独自学習を行い、次いで、その独自学習を持ち寄った相互学習を行い、さらなる独自学習を創っていく」ことを大事にしている。小幡教諭の自分なりの「問い」を見つけて、それについての自分の「考え」を持ち、それを主張しようとする力を育てたいと考えていることが十数年経っても、当事者に影響を与えている。しかし一方で、本研究で行ったインタビューで、小幡教諭が大切にしている「子ども同士で、子どもは育つ」や独自学習→相互学習→独自学習という学習の構想について、当事者の発言があまり見られなかった。

小幡教諭の子どもたちに対する働きかけがとても自然なので、子どもたちが意識していないのではないかと筆者は考えている。インタビュー②の中で、小幡教諭に報告し、尋ねてみたら、小幡教諭は昔の自分と今の自分についての話が出た。

小幡教諭は「最初に教師になった時、経験値もない、テクニックもない、権力を使おうとしてもない時、たまたま子どもたちの前で、自分が強く出てないとか、本当に子どものことを分からなくなった時とか、逆に自分のほうが悩みこんで、どうしようとか、見えなくなっ

たりしてる時のぼくのほうが自然に彼らに見られたりするかもしれません」と言った。

同じようなことが、当事者のMさんの証言の中にも出てきた。小幡教諭に対するイメージの変化について、Mさんは「今までの先生だったら、答えが分からへんのに、突き進むような先生だったのに、二年前（奈良女子大学附属小学校の授業を）見た時は、答えが分かって進む先生だったんで、ちょっと変わったなと思いました。（昔の小幡先生は）厳しい先生だけど、分からないことがあったら、先生も一緒になって考えてくれるような先生だった」と言った。

小幡教諭が当時悩んだり、苦しみながらも、子どもたちと一緒にになって、問題にチャレンジしていったことが、当事者である小幡と成人になった子どもの話の中に出てきた。それはまさに小幡教諭の言う「経験値もない、テクニックもない、権力を使おうとしても自然な自分」ということであろう。昔の小幡教諭には「経験値もない、テクニックもない、権力を使おうとしても自然な自分」という「自然な自分」はあった。それは当時の子どもにとってどういうことだったのか。当事者の証言から以下のようなことが分かる。

昔の小幡先生が仲間のように、自分と一緒に問題を考え、探求してくれた。子どもたちは、小幡教諭と一緒に問題を考えて、学んでいたことを楽しいということを実感するのは子どもたちにとっての小幡実践の意味だと言っていいだろう。筆者の他者とのかかわりの中で、主体性を発揮し、学び続けるという自立の定義で言うと、小幡教諭は子どもたちと一緒に悩みを分かち合い、喜びを味わい、学んでいたため、当時の他者の中に小幡教諭も入っていたということだろう。

3 まとめと今後の課題

3-1 まとめ

本研究では、筆者は半構造化インタビューという手法で、当時小幡教諭の教育実践を受けた当事者の卒業生に何十年前の被教育経験を振り返ってもらった。結果としては、振り返ってもらうことによって、成人になった子どもたちが当時の教育実践の授業構成や指導法を思い出したり、語ってくれたりした。主体性の中身として、問いを見つけ、考え、行動するという具体的な内容も出てきている。それで、先行研究の成果を確認することができた。

そして、小幡教諭の教育実践を実際に見て分析するだけで触れられなかった新たなことが明らかになった。

当時の小幡教諭は、教師としての自分自身の自立を図ると同時に、子どもたちの仲間として、子どもたちと一緒に悪戦苦闘することで、子どもたちの自立を励ましていたと考える。それに対して、今の教師としての小幡教諭は、昔の自分と比べると、力量や経験のある熟練教師になったため、子どもが問題を探求するという場から離れているが、子どもが子ども同士のかかわりの中で、自分の力を発揮できる場を提供することで子どもたちの自立を育てている。

時代が変わっても、教師としての立ち位置が変わっても、小幡教諭は自分なりに子どもの自立を育てたり、応援したりしていた。それは教師として心より子どもの自立に対する強い願いがあるからだろう。子どもに対する強い願いがあれば、自立に対する解釈が違っていて

も、教育実践の異なる側面に重点を置いて、教師の果たしている役割は、何年経っても、子どもに影響を与えたり、子どもの中に残ったりすることができると思う。

今の時代に規定された自立というものが教育の課題、社会の課題になっていると考えられる。子どもの自立を育てる小幡実践が、子どもの育ちと学びの過程全体を視野に置いた学校教育の方向を示唆するだろう。

3-2 今後の課題

本研究では、主にインタビューで過去のことを振り返らせるという研究方法を用いて、自立の基礎を育てる教育の意味について検討したが、以下の三点を今後の課題として取り組んでいきたい。

まず、インタビューデータは第一次インタビューにとどまっていること。理論的な飽和に到達するまでについて、能智正博(2004)によると、理論やモデルが形をなし、それを使えば新たなデータも説明ないし理解が可能になるまで、サンプリングは続けられることになる。本研究は一回以上のインタビューを実施しても、新たなデータも分析も既にないとは言えない。つまり、理論的飽和に到達したことを説明するには不十分だと考える。今後の研究で、当事者が小学校を卒業後にどのような経験をしたかのような設問をインタビュー項目に加える必要があると考える。

次に、振り返るインタビューの限界があること。当事者にとって、当時の教育実践が今の自分に影響を与えているが、インタビューで想起できなかったこともあるかもしれない。また、今でも勉強や仕事上でかなり役に立っているが、言葉にし、表現することのできない経験もないとは言えないと考える。

最後、本研究では子どもに対する強い願いがあれば、自立に対する解釈が違っていても、教育実践の異なる側面に重点を置いて、教師の果たしている役割は、何年経っても、子どもに影響を与えたり、子どもの中に残ったりすることができることが明らかになった。それは国境を越えても同じようなことが言えるのではないと考えている。今後の研究で、日中両国それぞれの文化や社会で目指される自立の内容を明らかにし、その自立を教育目標とした実践をどう展開させていこうとしているのかを比較研究したいと考える。

引用参考文献

- 荒木寿友(1999)「授業分析 『気になる木』の『はっぱ』をふやそう—おじいちゃん、おばあちゃん大研究—」田中耕治 『「総合学習」の可能性を問う—奈良女子大学文学部附属小学校の「しごと」実践に学ぶ』ミネルヴァ書房
- 上淵寿(2012)『自己制御と自己評価の教育』無藤隆・市川伸一(編)『学校教育の心理学』東京学文社
- 小幡肇(2012)『『子どもがつながる学習指導』の実践的研究』
- 梶田叡一(1999)「自立を『援助』する教育のために」/瀬戸真「教育における自覚と自立について」/牧田章「自立への教育『私の手帳』からの実践」教育フォーラム 特集

= 真の自立を目指す教育 人間教育研究協議会編

- 梶田叡一 (1998) 「自己教育への教育」 明治図書
- 木全清博 (2003) 「V-1 小幡肇実践—授業の魅力」 小幡肇 『やればできる！子どもによる授業』 明治図書
- 久世敏雄・久世妙子・長田雅喜 (1980) 『自立心を育てる』 有斐閣
- 小此木啓吾 (1978) 『モラトリアム人間の時代』 中央公論新社
- 田中耕治 (1999) 『学力評価論の新たな地平——現代の「学力問題」の本質とは何か』 三学出版
- 能智正博 (2004) 「理論的なサンプリング」 無藤隆等編著 『質的心理学』 新曜社
- 藤井千春 (2003) 「V-4 【気になる木】の【はっぱ】をふやそう』の事始めのころ」 小幡肇 『やればできる！子どもによる授業』 明治図書
- 松本康 (2003) 「V-2 『気になる木』になる果実—小幡実践と自律的学習法」 小幡肇 『やればできる！子どもによる授業』 明治図書
- 村井淳志 (1996) 『学力から意味へ 安井・本田・久津見・鈴木各教室の元生徒の聞き取りから』 草土文化
- 守屋淳 (2003) 「V-3 子どもが存分に生きることへの感受性」 小幡肇 『やればできる！子どもによる授業』 明治図書
- 森脇健夫 (2003) 「V-6 小幡学級の教室風景」 小幡肇 『やればできる！子どもによる授業』 明治図書
- 森脇健夫・大西宏明・岩崎紀子 (2006) 「ライフヒストリー的アプローチに基づく教師の授業スタイルの研究——奈良女子大学附属小学校の学校文化との『出会い』と授業の変革に焦点をあてて——」 森脇健夫 (研究代表) 『ライフヒストリー的アプローチを活かした総合的な教師の力量研究——新たな教員養成プログラムの開発を見据えて——』 平成16年度～17年度日本学術振興会科学研究費補助金 {基盤研究 (B) (1)} 研究成果報告書
- 森脇健夫・岩崎紀子 (2004) 「小幡肇の授業変革とライフヒストリー」 森脇健夫 (研究代表) 『教師の力量形成へのライフヒストリー的アプローチ——授業スタイルにかかわる教師の実践的知識を中心に——』 平成14年度～15年度日本学術振興会科学研究費補助金 {基盤研究 (C) (1)} 研究成果報告書
- やまだようこ (2007) 『質的心理学の方法 語りをさく』 新曜社 「半構造化インタビュー」 徳田治子

An Education Practice Study
On Training the Basis of Self-reliance
— Based on Interviews with Obata Elementary School Graduates

Ken Ryu
Tokyo University for Foreign Studies

【Keywords】 School Education, Children, Independence

The author, a Chinese national, has focused on the children's problems in becoming independent within Chinese education, and studied how Japanese schools educate children to be independent. The process of independence continues throughout one's entire life. Although researchers currently use a variety of different definitions for "independence," my research will define it as the ability to exhibit individuality while interacting with others, and being a lifelong learner. The success of efforts to nurture independence in education cannot be confirmed over a short period of time, so the author will conduct interviews among adults, and consider what they truly learned from efforts to nurture their independence when they were young, what impressions those efforts left on them, and what changes arose in their development to become independent.

〈研究ノート〉

1893年シカゴ万国宗教会議における 日本仏教代表 釈宗演の演説 ——「近代仏教」伝播の観点から——

那須理香

(国際基督教大学大学院博士後期課程)

【キーワード】 シカゴ万国宗教会議、近代仏教、釈宗演、
ポール・ケーラス、鈴木大拙

はじめに

日本仏教の世界伝播において、1960年代のアメリカ禅ブームは海外では良く知られていることである。「世界の禅者」と言われる鈴木大拙のZENに関する英文著作等に端を発した社会現象である。しかしそれ以前にも、近代アメリカに日本仏教が受け入れられた歴史的な出来事があった。それがシカゴ万国宗教会議である。鈴木大拙の禅の師であった釈宗演が日本仏教の代表としてシカゴ万国宗教会議で演説をすることになり、鈴木は師の演説の英訳を引き受けた。これが、鈴木が世界へ向けてZENを発信する最初の契機となったと言う経緯がある。釈はこの演説の中で伝統仏教から脱却し、近代社会に合致した新しい普遍宗教としての仏教の可能性を提示することを試みた。最近の仏教研究の分野では、19世紀以降の近代社会におけるこの新しい仏教革新運動のながれを「近代仏教」と定義し、研究概念として定着しつつある。¹

本論では、アメリカ宗教史上一つの転換点と捉えられているシカゴ万国宗教会議で発表された釈宗演の演説をふりかえってみたい。²この会議の開催は、キリスト教以外にも真理を体現する宗教としての価値を認め得るものがあることをアメリカ社会に示し、宗教相対主義の概念を生み出すなどの役割を果たした。³またそこで発表された日本仏教代表の演説は、大乘仏教を基盤とする明治日本の「近代仏教」をアメリカ社会に初めて提示したという意義が認められるからである。シカゴ万国宗教会議の開催の概要をふまえ、日本仏教代表の一人、臨済宗円覚寺管長 釈宗演の演説の分析を試みる。

1 末木文美士「伝統と近代」『ブッタの変貌－交錯する近代仏教－』京都：法蔵館、2014年、pp.322-323参照。末木はドナルド・ロベスの『近代仏教－初心者のための読本』(2002年)をあげ、「近代仏教」が19世紀後半から20世紀にかけての世界史的な現象であることを明らかにした点を評価している。19世紀後半から、西洋の帝国主義を背景としたキリスト教宣教の脅威に対抗するために、アジアの仏教者たちが自らの仏教をグローバルな視点で位置づけ、近代的な意味づけを行なうようになった。それを「近代仏教」として、アジア全体にかかわる仏教革新運動ととらえたのである。

2 アメリカ宗教史研究家の Martin E. Marty はその著書 *Modern American Religion* (1986) の中で、20世紀アメリカ宗教史を1893年から始めている。その理由の一つとしてこの年にシカゴ万国宗教会議が開かれたことをあげ、この会議がアメリカ宗教史の大きな転換点であったことを示唆している。pp.17-24

3 Richard Hughes Seager, *The World's Parliament of Religions: The East/West Encounter, Chicago, 1893*. Bloomington, Indiana: Indiana University Press, 1995, p.144.

第一章 シカゴ万国宗教会議

1. 開催の意義および会議の概要

シカゴ万国宗教会議は、クリストファー・コロンブスの「新大陸発見」400周年を記念して開かれたコロンビア万国博覧会に併設する会議の一つとして1893年9月11日から27日までの17日間開催された。コロンビア万国博覧会は、近代化をとげたアメリカの経済発展を世界に示す場として物質的豊かさを誇るものであった。しかしそれと同時に経済優先、物質主義からくる人間性の喪失という側面についても問題提起する場として「物ではなくて人間、物質ではなくて心」という開催モットーを掲げていた。⁴

当時のアメリカ社会は、マーク・トウェインらによって名付けられた「金箔の時代」と呼ばれる金^{かね}を中心とする物質主義がはびこっていた。⁵ 科学技術の進歩により貨幣経済が浸透、人々は消費文化を享受するとともにアメリカ建国以来のピューリタンの労働規範が顧みられなくなっていた。金の魔力に魅了された人々は物品購入を精神救済の手立てとしてとらえるようになり、神への信仰より現世的な欲望を満たすことを優先するようになったという。⁶ すなわち貨幣経済における消費社会において、道徳社会倫理の規範としてのキリスト教の役割はその機能を停止するという状況に陥ってしまったのである。

またチャールズ・ダーウィンの進化論に基づく近代科学主義も、キリスト教の弱体化を招く結果をもたらした。キリスト教では神による天地創造が世界の始まりとして、信仰の礎となってきた。しかし進化論では、神による天地創造を否定、人類も自然の摂理に従って生存競争を繰り返すことによって進化したと考える。この説は、敬虔なキリスト教者たちを動揺させるとともに、科学の信奉者によるキリスト教批判を促進する結果をもたらした。キリスト教は絶対的規範としての地位を失い、国民は精神の拠りどころとしての宗教を失う不安にさらされてしまったのである。

このような社会背景のもと、アメリカのキリスト教界はシカゴ万国宗教会議をキリスト教の威信回復のための絶好の機会としてその開催を推進した。万国宗教会議の議長として選出されたジョン・ヘンリー・バローズ（シカゴ第一長老教会の牧師）による開会式の挨拶にその意気込みがみられる。

キリスト教界は、この宗教会議を真実と愛を照らし出す聖火として誇りを持って掲げよう。20世紀の明けの明星であることを証明しよう。アメリカがキリスト教国であることは、真に高潔な意味を持つものである。…我々の宗教がほかに勝るものであることは、一般に受け入れられ、認められている。⁷

4 Jackson Lears, *Rebirth of a Nation: The Making of Modern America, 1877-1920*. New York: Harper Perennial, 2009, p.167

5 Lears, 2009, p.53

6 同上

7 Richard Hughes Seager, *The Dawn of Religious Pluralism: Voices from the World's Parliament of Religions, 1893*. La Salle, Illinois: Open Court Publishing Company, 1993, p.25 (筆者による和訳)

バローズはキリスト教至上主義的立場から、この会議がアメリカにおけるキリスト教の威信を再び内外に知らしめる機会ととらえていた。

この会議の参加国及び参加宗教の多様性を見ると、シカゴ万国宗教会議が世界規模の一大宗教イベントであったことがわかる。

参加国：イギリス、スコットランド、スウェーデン、スイス、フランス、ドイツ、ロシア、トルコ、ギリシャ、エジプト、シリア、インド、日本、中国、セイロン（現スリランカ）、ニュージーランド、ブラジル、カナダ、アメリカ合衆国

参加宗教：有神論、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、仏教、道教、儒教、神道、ゾロアスター教、ローマ・カトリック、ギリシャ正教、プロテスタントの諸宗派⁸

西欧諸国およびアジアの国々から主だった宗教の代表団が参加し、この会議に対する期待の高さがうかがえる。

2. 日本仏教代表団

日本仏教の代表団は次の通りである。

積宗演：臨済宗円覚寺管長

蘆津實全：天台宗

土宜法龍：真言宗高野山大学林長

八淵蟠龍：浄土真宗西本願寺派

野口善四郎：通訳⁹

日本の仏教界では、シカゴ万国宗教会議に参加の招待を受けていたものの、この会議がキリスト教の拡張を図る野心を反映したものだとして参加を退ける意見もあった。しかし積宗演と蘆津實全は、会議参加が日本仏教を西欧世界に広めるチャンスになるとの考えから積極的な参加を呼び掛け、実現することとなった。¹⁰

日本の仏教界がシカゴ万国宗教会議に代表団を送る決意を促した背景には、当時の明治政府の宗教政策によって仏教が壊滅的な打撃を受けたということがあげられる。明治維新後、神道が唯一の国家宗教として認められ、1868年に神仏分離令が發布されると、廃仏毀釈運動がおこった。これにより地域差はあるものの、多くの寺が破壊され仏像が取り払われたりして、江戸期に地域の中心として機能していた寺¹¹がその役割を奪われ、仏教衰退の危機にみまわれていた。また明治のインテリをはじめとする上流階層は、政府の富国強兵策を背景に西洋近代科学を基盤とする物質文明を受け入れると共に、日本の宗教的基盤であった仏教を否定するようになる者も多く出ていた。¹²このような状況を打開するため、日本の仏教各

8 Seager, 1993, pp.19-20

9 森孝一、「シカゴ万国宗教会議：1893年」『同志社アメリカ研究 26』、1990年、p.6

10 鈴木範久『明治宗教思潮の研究』東京：東京大学出版会、1979年、pp.212-216

11 仏教による民衆教化と檀家の戸籍管理のために幕府は「寺壇制度」を施行していた。末木文美士『日本宗教史』東京：岩波書店、2006年、p.152参照。

12 鈴木大拙『新宗教論』京都：貝葉書院、1896年、『鈴木大拙全集 第23巻』東京：岩波書店1969年所収、pp.8-12参照。

派は旧弊を脱した新しい仏教の構築を模索し始めていたのである。

さらにこの時期他のアジア諸国においても、西欧帝国主義の植民地政策からキリスト教の宣教が強固に行われ、在来の仏教が迫害されていた。インド、セイロン、ビルマなどを訪問した日本人仏教者たちは、「汎アジア」的な仏教の危機を感じて、キリスト教に対抗し得る「近代仏教」を構築する必要を痛感していたという。¹³そして、その新しい仏教を世界に提示する場としてシカゴ万国宗教会議が絶好の機会であると、釈宗演や蘆津實全らは考えたのである。

第二章 シカゴ万国宗教会議における釈宗演の演説

シカゴ万国宗教会議に、日本仏教代表の一人として参加した臨済宗円覚寺管長釈宗演とはどのような人物であったのか。釈の演説によって提示された「近代仏教」とはどのようなものであったのか。そして釈の演説への現代の研究者の批判及び反論をあげ、釈の演説の果たした役割を考察したい。

1. 釈宗演 (1860-1918) の略歴

釈宗演は、伝統的な日本仏教の修行を積んだ禅僧でありながらも近代化の波に立ち向かった稀有の宗教者であった。釈は1860年（安政6年）幕末の若狭国（現福井県）に生まれ、12歳で京都妙心寺で得度、18歳で鎌倉円覚寺の今北洪川の法嗣（弟子）となる。禅修行に励むかたわら慶応義塾で福沢諭吉に英語と洋学を学び、ここで西洋科学や世界情勢などの知識を得ることにより、仏教近代化への道筋を与えられたとすることができる。1887年（明治20年）春より三年間セイロンに渡り、パーリ語とセイロンの上座部仏教¹⁴を学んだ。1892年34歳で円覚寺派管長に就任、翌年シカゴ万国宗教会議に出席したのである。その後も円覚寺で初めてアメリカ人の禅指導を行い、日露戦争では従軍布教師となり、1906年には再び渡米、鈴木大拙を伴ってアメリカで禅指導を行うなど、欧米への禅布教を積極的におこなった。¹⁵

釈が1887年（27歳）から1889年（29歳）の三年間セイロンに滞在し、当時イギリスの植民地となっていた現地の仏教事情に精通した経験は、釈がキリスト教の脅威に対抗しうる宗教として「近代仏教」を構築する上で大きな影響を与えたと考えられる。釈は、慶応義塾の恩師福沢諭吉の勧めで「禅の修行の完成、サンスクリットとパーリ語の学習、セイロン仏教の現状調査」などの目的で渡航することになった。¹⁶その滞在中に出会ったのが、アメリカの神智学者ヘンリー・スティール・オルコットがまとめた『仏教問答』であり、彼が中心に

13 ジャファイ、リチャード「釈尊を探して—近代日本仏教の誕生と世界旅行」『思想』2002.11. No.943, pp.65-66, p.82参照。ジャファイはこの論文で「汎アジアの仏教の一群」や「統一的仏教の創造」について言及し、日本の「仏教的国際主義」が後の日本の「仏教的帝国主義」の土台となったという見解を示している。

14 上座部仏教とは南西アジアを中心とした地域に広まった仏教で、出家者だけが悟りを開くことができると考える。在家の仏教者でも悟ることができるとした東アジアの大乗仏教と対照的な仏教の宗派である。

15 井上禪定『禅とZENを伝えた明治の高僧 釈宗演伝』禅文化研究所、2000年、p1

16 ジャファイ、2002年、p.74

なって布教していた「プロテスタント仏教」であった。¹⁷

『仏教問答』とは、キリスト教の宣教において入門者に問答形式で教理を教える『カテキズム / 教理問答』を模してオルコットが考案、「釈尊を中心とした合理的で科学的な宗教として仏教を提示した」ものである。¹⁸つまり、仏教をキリスト教プロテスタントの教義に照らし合わせ、西洋近代合理主義的観点からの仏教理解を基礎として、新しい仏教を構築したのである。ここに「近代仏教」の原型が生まれたとすることができる。釈宗演は、オルコットの『仏教問答』の一部を書き写すことで英語を修練したといわれることから、西洋の価値観によって翻案しなおされた「プロテスタント仏教」に熟知していたと考えられる。¹⁹この経験が釈の「近代仏教」の概念を形成する基盤となり、シカゴ万国宗教会議における釈の演説に反映されたと推測できる。²⁰

2. シカゴ万国宗教会議での演説

釈宗演の演説の日本語題は「仏教の要旨并に因果法^{ならび}」であり、鈴木大拙の英訳では‘The Law of Cause and Effect, as Taught by Buddha’となっている。この英訳の演題に「近代仏教」の特徴となる二つの点が集約されていると考える。それは「因果法」すなわち、近代科学の基礎となる「原因と結果の法則」からなる合理主義的観点と、仏教の教えが仏陀一人によって開かれたものにとらえる「一神教」的側面である。これら二点を強調してまとめられた釈宗演の演説は、日本の大乘仏教を近代的にとらえなおし、キリスト教を基盤としてきた西洋の人々にも受け入れやすいものとして提供したと考えられる。この2つの観点から釈の演説を検証していく。ここではデヴィッド・マクマハンが「仏教モダニズム」の分析で提示した「近代仏教」の概念をとりあげて、釈の演説が「近代仏教」構築へのアピールであったことを示したい。

マクマハン、チャールズ・テイラーが「近代的自我と道徳性の主要な要素」として挙げた三つの領域が仏教の近代化にも適用できると考え、それらを「仏教モダニズム」の特徴としてとらえなおした。それは、①西洋的な一神教、②合理主義と科学的自然主義、③ロマン主義的表現主義である。もちろんこれらは西洋の歴史的文化的背景から想定されたものであるが、「仏教モダニズム」の展開が西洋を含め世界的な広がりであることから分析に有効であるとしてマクマハン提案している。²¹この三点のなかで、釈の演説においては第一と第

17 ヘンリー・スティーラー・オルコットはブラヴァツキー夫人とともに1875年神智学協会を設立、仏教が真の宗教であるとして布教を推進していた。

18 ジャフィ、2002年、p.75

19 同上

20 大谷栄一は「アジアにおける「仏教と近代」『ブッタの変貌－交錯する近代仏教－』の中で、「プロテスタント仏教」の特徴として「①プロテスタント的、②キリスト教と植民地主義へのプロテスト、③伝統仏教（伝統教団）へのプロテストという三重のプロテストを認めることができる」と分析している。これは、日本及びアジアの国々の仏教の置かれた状況から発生した態度であり、釈の「近代仏教」にもあてはめることができる。神仏分離や廃仏毀釈によって疲弊し壊滅的な状態にあった明治日本の伝統仏教（伝統教団）にプロテスト（異議申し立て）することで、釈らは近代化した仏教を創出しようとしていた。また、明治維新後に宣教師によってもたらされたキリスト教が日本の知識層に広く受け入れられるようになり、仏教が圧迫される状況になっていたことにプロテスト（反発）し、キリスト教を超える普遍仏教としての「近代仏教」を構築する必要に迫られていたのである。

21 McMahan, David L., *The Making of Buddhist Modernism*. Oxford: Oxford University Press. 2008, p.10. 末木2014年、p.323参照

二の点について特に強く主張されていると考える。²²

釈の演説の英題 ‘The Law of Cause and Effect, as Taught by Buddha’ を二つの部分に分けると、マクハマンがあげた「仏教モダニズム」すなわち「近代仏教」の特徴がそれぞれに反映されていることがわかる。前半の ‘The Law of Cause and Effect’ は②「合理主義と科学的自然主義」という特徴であり、後半の ‘as Taught by Buddha’ は①「西洋的な一神教」にならった仏教の再構築の表現としてとらえられる。

‘The Law of Cause and Effect’ が示す概念について、釈は人間界の営みも自然界の事象と等しく、原因と結果の連鎖によって規定された「因果法」という自然の法則によってすべてが支配されているとし、演説では次のように「因果法」を説明する。

我々は、朝から晩まで常に楽苦、愛憎などの感情に心を乱され、あるいは野心や希望に満ち、あるいは理性や意欲の最高の興奮に突き動かされる。このように心の活動は、湧き出る水の果てしない流出のようである。外面的世界の現象が多様で驚くべきものであるように、人間の精神の内面の心境もまた然りである。このような驚くべき現象の説明を求めてみよう。宇宙はなぜ不断の流転なのか。なぜ物は変化するのか。なぜ心は不断の不安に支配されるのか。これらの問いに仏教は唯一つの回答を提供する。それは因果の法則である。・・・ 肉体の健康、物質的な富、素晴らしい才能、不自然な苦しみなどはすべて [仏教の] 因果法の絶対的な表現なのである。この因果法は、宇宙のすべての粒子と人間のすべての行動を支配する。仏教の倫理を私に尋ねるならば、答えよう。仏教における倫理の根源的権威は因果法に存する。自分の将来を輝かしいものにしたいのなら、親切で公正で慈悲深く正直でありなさい。不誠実で残忍で薄情な行為は、汝をみじめな墮落へと運命づけるであろう。²³

人間の内面に起こるあらゆる精神活動は、外面的世界の現象と同じように宇宙の原理である「因果法」によって規定され、変化し続けているものであると説明されている。また現時点の心の状態は以前の行為の結果として生まれ出たものであり、将来の希望は現時点の努力によって保障されるということである。

またこの「因果法」は、次の五つの特質を持つものされる。

- i 複雑な様相を持つ縁起 (the complex nature of cause)
- ii 縁起律の無限の連鎖 (an endless progression of the causal law)
- iii 三世 (過去・現在・未来) における縁起律 (the causal law, in terms of the three worlds: past, present, and future)

22 テイラーのあげた第三の特徴である「ロマン主義的表現主義」をこの分析で外す理由は、「ロマン主義的表現主義」の定義が「自然や人間の霊的精神の深みに隠された神聖さや神秘を再確認する運動」とされ、これに照らし合わせると西洋における仏教の受容がそのまま「ロマン主義的表現主義」の運動にあたるからである。シカゴ万国宗教会議における釈の演説を始め、その後起きた仏教伝播の過程がすべて「ロマン主義的表現主義」を推進する運動に含まれる。釈の演説もおのずからこのテイラーの第三の特徴を満たしていると考えられる。

23 Seager, 1993, p.406, p.409 (筆者による和訳、[] 内筆者加筆)

- iv 自己の責任において生ずる因果 (self-formation of cause and effect)
- v 自然法としての因果律 (cause and effect as the law of nature)

釈によると仏教の「因果法」は、過去現在未来における際限のない連鎖のなかで、我々自身の行為がすべての事象の原因になるという複雑な法則であるとされる。そしてこれは仏陀の意志からも人間の意志からも独立した自然の法であり、始まりも終わりもなく永遠に存在するものであるという。²⁴ 釈の説く「因果法」は、すべての事象が原因と結果の連鎖によって導き出され、世界を構成すると捉えている。これは近代科学の基本概念である原因と結果の法則が自然を支配するととらえる考え方に合致し、マクマハンが提案した「近代仏教」の特徴である②「合理主義と科学的自然主義」に相当すると言える。またこれは西洋近代科学の基礎となっていたダーウィンの進化論とも共通する世界観である。釈はこの演説で、「因果法」に焦点をあてて説明することで、仏教が西洋近代科学の概念に齟齬のない近代宗教であることを印象付けたのである。

釈の演説の英題後半部分の 'as Taught by Buddha' であるが、これは「因果法」が、仏陀自身が説いた教えであることを強調している。江戸期までの伝統日本仏教では、菩薩や如来信仰、各宗派の宗祖信仰が広まり、それぞれ別の仏教経典を唱えるなど、多神教的様相を示していた。また、日本の大乘仏教発展の歴史のなかで、仏教の始祖である仏陀は信仰の対象としてさほど関心を払われていなかったという事実がある。これに反し釈の演説では仏陀を仏教信仰の中心に据え直し、原始仏教²⁵に回帰することによって「西洋の一神教」に近い宗教であることを示そうとした。

また南西アジア地域で実践されていた上座部仏教は、原始仏教に近い形の仏陀のみを信仰する仏教であるが、釈はこの地域の仏教者との団結も視野に入れて日本仏教の「一神教化」を試みようとしたようである。²⁶ さらに、近代に入って南西アジアの植民地で行われていた仏教に初めて接した西洋の研究者たちも、一神教であるキリスト教に近い上座部仏教を宗教として認めていた。これらをふまえて、釈はシカゴ万国宗教会議の西洋の聴衆に向けた演説で「因果法」が仏陀自身によって説かれた教えであることを強調したのである。

仏陀としての釈迦牟尼²⁷を中心とする仏教を構築しようとした釈の決意は、次の一節に見られる。

本尊ハ何仏ガ尤モ恰好ナルヤト云ウニ予ハ釈迦牟尼仏コソ当撰ノ本尊ナルベシト信ズ…ナントナレバ釈尊ハ吾人ノ大恩教主ニシテ即チ現劫主位ニ在ス本師ナレバナリ…且ツ釈尊ノ名ハ畜仏教国ニ備スルノミナラズ今時ハ欧米各国ニ至ルマデソノ名ヲ知ルナ

24 Seager, 1993, pp.406-408

25 原始仏教とは釈尊入滅直後に実践された仏教を指し、釈尊の教えのみを中心とする信仰であった。その後時代を経るに従い、様々な部派に分かれ釈尊以外の者が著した経典を拝むなど、仏教の多様化が進んだ。特に日本における大乘仏教の展開の中で、宗派の多様化は著しい。

26 ジャフィ、2002年、p.77

27 本稿ではここまで、仏陀を釈迦牟尼の代名詞として使用してきたが、仏陀は本来「悟った者」という意味で、釈迦牟尼以外にも多数の仏者を指す。釈迦牟尼は仏教において初めて悟りを開いた、最初にして最も尊重される仏陀である。

り他ノ諸仏ノ名ハ西洋ハ勿論東洋ノ仏教国ニテモ西南部ノ仏者ハ過去七仏ノ他其ノ名ヲ
ダニ知ラザル者多シ是又釈尊ガ今ノ二十世紀ノ文明世界ニ因縁アル本尊ナリト云ベキカ
28

すべての仏教の宗派の「本尊」として仏教の開祖である釈迦牟尼がふさわしいこと、西洋にも知られた仏陀である釈迦牟尼が二十世紀の仏教の中心となるべきことを主張している。

以上、釈の演説の英題 'The Law of Cause and Effect, as Taught by Buddha' をもとに、シカゴ万国宗教会議における釈の演説の狙いが、仏教の開祖である釈迦牟尼が説いた「因果法」を中心とした新しい仏教としての「近代仏教」の構築であったことをみた。

さらに、釈が演説の最後で述べたことが、「近代仏教」が普遍宗教としての特質を備えた宗教であるとする主張を強化するものとなっている。それは、仏陀が「因果法」の創造者ではなく、最初の「発見者」であったということである。仏陀は自然法としての「因果法」を発見し、「従者たちを導く徳の完成へ導くもの」であったとされている。²⁹ これに対しキリスト教では、神が万物の創造者として絶対的権威者と理解され、信仰の対象として礼拝されていた。しかし近代合理主義の下でキリスト教の創造主は、人間を含むすべての動植物が自然淘汰により進化発達したというダーウィンの進化論に合致しないとして、科学信奉者たちから敬遠されることとなった。仏教の開祖である仏陀は、創造主ではなくキリスト教の「預言者」³⁰ に近い存在として理解されている。進化論に類する原因と結果の法則からなる「因果法」を教義の中心とする仏教は、近代合理主義に即した宗教としての特質を備え、近代の普遍宗教として成立し得ることを印象付けたのである。

釈宗演はシカゴ万国宗教会議における演説によって、「近代仏教」として新たに捉えなおされた日本の大乘仏教を、シカゴの聴衆に始めて披露したといえる。

3. 釈宗演の演説に対する現代の研究者の批判

シカゴ万国宗教会議は、西洋における仏教伝播の歴史の中で「近代仏教」が初めて提示された出来事であった。その後の仏教の進展にも大きな影響を与えたこの会議は、現在の研究者による「近代仏教」研究の対象となっている。特にアメリカの仏教研究者は、釈の演説について他の日本仏教代表者の演説と引き比べ、批判を加えている。ここではケテラーとスノドグラスの研究から、釈の演説がどう受け止められたかを見てみる。

ケテラーは、釈の演説が因果応報と縁起の論理を説明し、因果の「論理的循環」が「自然の法則」であることを示したと評価している。しかし、釈を含め八淵蟠龍や土宜法龍ら日本仏教代表の演説は、英訳されると「煽り付けるだけの不敵な主張に低質化してしまった」としている。それは「キリスト教と仏教徒の類似性を作りだそうとして、19世紀のプロテスタントの宗教言説を部分的に取り込んだため」であるという。³¹ 確かに、釈の演説の日本語の

28 釈宗演『西南の仏教』東京：博文館、1889年、p.46、ジャフイ、2002年、p.77参照

29 Seager, 1993, p.409

30 キリスト教の預言者は、創造主である神からの啓示を人々に伝え導く者とされる。神から「十戒」を授かり、イスラエルの民をエジプトから救済したモーゼは良く知られた預言者の一人である。

31 ケテラー、ジェームス・E『邪教／殉教の明治－廃仏毀釈と近代仏教』、東京：ぺりかん社、2006年、pp.233-234

原文では仏教の専門用語を駆使して余すところなく説明しているという印象を受ける。³² これに反し、英訳の方ではほとんどを因果応報の論理の説明に費やし、かなり意識的な表現になっているように思える。³³ しかしこれは、仏教の知識のない聴衆が理解可能な内容にするために、あえてとられた方法ではないだろうか。実際、真言宗高野山大学林長の土宜法龍の「仏教」という演説の後で、聴衆の一人は通訳の野村洋三に演説の内容が全く理解できなかったと述べたという記録がある。³⁴ 聴衆にとって未知の宗教である仏教が少しでも受け入れられるようにするには、聴衆の文化的背景を考慮し、それに合わせた提示の仕方をとる必要がある。鈴木英訳はその観点から配慮されたものと考えられる。ケテラーは、釈の演説のどの部分が「19世紀のプロテスタントの宗教言説」にあたるか説明していないので、何がどのように「低質化」してしまったか判定することが出来ない。しかし、この鈴木大拙による英訳のおかげで釈の演説が聴衆に理解可能なものになり、自然の法則である「因果法」が受け入れられる結果となったと言うことはできるだろう。

スノドグラスは釈の演説を仏教的観念論の観点から批判している。伝統日本及び東アジアの大乗仏教では「仏陀」の概念を、悟りを開いた釈迦牟尼である人間としての存在にとどまらず、「宇宙の現れの根本原理」である悟りの状態を体現するすべてのものを表わすとしてしている。³⁵ 「仏陀」という言葉の意味の拡張が大乗仏教の「鍵概念」とされていた。³⁶ しかしスノドグラスによると、釈の演説はこの基本概念について説明しておらず不十分であると、次のように述べている。

仏教的観念の十全な含意は、万物の本質としてのブツダという概念を縁起の概念と結びつけることに依拠している。この概念は、シカゴ会議における釈宗演の発表論文「ブツダの説いた因果法則」の中に、極めて印象的な仕方でもて提出されている。彼が述べるところによれば、「われわれの知る世界は、心の本質において作用している因果法則の帰結である」。しかしながら、彼の説明の主な焦点は、行為の結果の動かしえない作用が、神の介入しない道徳的応報の体系をいかにしてもたすのか、という問題だった。仏教的観念論の含意がより完全に展開されたのは、他の代表者たち、蘆津、土宜、八淵らの発表論文や、会議での配布のために準備された黒田真洞の『大乗仏教大意』においてである。³⁷

32 常光浩然編、『日本仏教渡米史』東京：仏教出版局、1964年、pp.39-41参照。釈の演説の原文を以下に一部抜粋する。「(前略) わが大聖人釈迦牟尼世尊は一切種智、三世洞観の眼をもって、無量無辺の衆生が、此処に死んだり、彼処に生まれたり、各々善と悪との二習慣に従って、苦と楽との報酬を受け、行きつもどりつ、輪廻きわまりなき有様を察して、その出世五乗の道路を開拓して、もって一切衆生を導き、かの汚染の虚妄なる習慣をのがれ、この浄円満なる大帝都に到着せしめんと誓い、この世に出現されたのです。(後略)」

33 Seager, 1993, pp.406-409. 本稿 pp.6-7参照。

34 同上、p.38

35 『大乘涅槃経』に「一切衆生悉有仏性」と表わされているように、大乗仏教ではすべてのものに「仏性」が宿るという考え方が基本とされた。現代の研究ではこの「仏性」を「ブツダ性」と表わし、最初の仏陀であった釈迦牟尼との共通性を表わす表現として用いられるようになっていく。

36 スノドグラス、ジュディス・M「近代グローバル仏教への日本の貢献－世界宗教会議再考」『近代と仏教－国際シンポジウム第41集－』京都：国際日本文化研究センター、2012年、p.64

37 スノドグラス、2012年、pp.65-66

スノドグラスによれば、釈の演説のほとんどが「縁起の概念」の説明のみについやされて、これに関しては「きわめて印象的な仕方」で提出されている」と評価している。しかし「仏教的観念の鍵」である「万物の本質としてのブッダという概念」は説明されておらず、他の日本仏教代表者の演説で補われるという形でしか提示されなかったとしている。³⁸つまり、釈の演説は仏教的観念論の重要な部分を省いた説明でしかなかったと批判している。しかしながらこれに対する反証として、スノドグラス自身の次のような説明から推論し、説明することができる。

シカゴ会議で提出された「ブッダ」概念は、今では極めてよく知られた概念だが、当時の西洋における「ブッダ」理解からはかけ離れたものだった。実際、聴衆に含まれる正統的なキリスト教徒にとって、そこで示された観念は単に考えられないものだった。³⁹

当時の西洋の仏教研究では、上座部仏教しか知られていなかったため「ブッダ」はすなわち唯一の教主的存在であり、預言者のような人間であると理解されていた。これに反して、人間を含むあらゆるものが「ブッダ」に類する価値を持つと解釈した大乘仏教の教義は理解不可能と受け止められても不思議はない。また、キリスト教を基盤とする西洋の宗教概念でも、唯一無二の神の「神性」は全能の神にのみ備わるものであり、人間を含む万物に「神性」に類する「ブッダ性」が共有されているとする仏教観念は邪教的と受け止められても仕方ないだろう。この二点に対する考慮から、釈は演説で大乘の「ブッダ」性の概念を提示せず、議論が起ることをあえて避けたのではないだろうか。不可解な宗教概念をつきつけられた聴衆の、仏教そのものに対する拒否反応を回避するというねらいから、「縁起の概念」に特化した演説を構成したと解釈することができる。このことによって釈は、他の日本仏教代表の演説に比べて聴衆の理解と賛同を得ることができたのである。

以上、ケテラーとスノドグラスの二人の現代の仏教研究者は、釈の演説の英訳が「低質化」した表現になっていること、「ブッダ性の概念」について説明が不十分であることをあげて批判している。しかし両者は、釈の演説が「因果法 / 縁起の概念」という自然の法則が「近代仏教」の基盤であることをシカゴの聴衆に印象付けた点については評価している。釈の演説の目的が、近代科学の合理性に合致した仏教を西欧社会に提示することだったとすれば、この目的は達成されたと言うことができよう。

シカゴ万国宗教会議に出席し演説した釈宗演自身の評価は、次の一節に語られている。

特に吾等が今回の大会に於いて、少なくとも内外人の注意を惹き起こせしものは、……
 仏教が如何なる程度まで日本国民の精神を支配して、古今の国主に関係を及ぼしたること。
 仏教は世界宗教にして而も現在の科学哲学と密合せること。大乘仏教は非仏説なりと云ふの妄想を打破せしこと。……等なりとす。⁴⁰

38 同上

39 スノドグラス、2012年、p.66

40 釈宗演『万国宗教大会一覽』鴻盟社、1893年、p.10。鈴木範久、1979年、p.223参照

仏教が、日本社会に深く浸透し精神基盤になっていること、近代の科学哲学に合致した世界宗教であること等についてシカゴの聴衆に印象付けることができたと評価している。また、日本の大乘仏教を認めていなかった西洋の仏教研究者に上座部仏教以外の仏教の真価を伝える使命をも全うしたととらえている。釈にとって、シカゴ万国宗教会議における自分の演説とそれに続く大乘仏教の受容は成功裏に終わったという実感があったようだ。

4. 釈宗演の演説がアメリカ仏教史に与えた影響

釈宗演はシカゴ万国宗教会議の後、ポール・ケーラス(1852-1919)の招きを受けて一週間ほどシカゴにとどまったという。⁴¹ ポール・ケーラスは近代社会における科学と宗教の整合性を追究したアメリカ宗教啓蒙者である。シカゴ万国宗教会議で仏教代表の釈宗演らの演説を聞き、仏教こそが近代科学に適合する宗教であるとして高く評価し、釈とともに仏教啓蒙活動を開始、鈴木大拙を助手として自身のオープン・コート社に呼び寄せ、アメリカ仏教史に大きな影響を与えた人物である。シカゴ万国宗教会議で釈らが代表する日本の「近代仏教」に出会ったことが、ケーラスによる仏教啓蒙運動をアメリカ社会に進展させる契機となった。

ポール・ケーラスはドイツで牧師の父のもとに生まれ、同じ職業を目指してチュービンゲン大学で博士号を取得したが、牧師にはならず1884年にアメリカに渡った。その時代の知識層の例にもれず、彼もダーウィンの進化論に触発され、キリスト教の神による天地創造論が科学に矛盾するとして、「宗教と科学の統一」が実現可能な宗教を模索していた。⁴²

シカゴ万国宗教会議翌年の1894年、ケーラスは「業と涅槃」『カルマ』⁴³『仏陀の福音』などの著作を相次いで発表、近代科学に適合する宗教として仏教を広める啓蒙活動を開始した。仏教の基本概念を解説した『仏陀の福音』は、当時最も権威のある解説書として西洋東洋を問わず受け入れられ、ケーラスの存命中でも13の版を重ねたという。中国語、マレー語、ウルドゥー語、タミール語、ベンガル語、シャム語、ドイツ語、フランス語、オランダ語、スペイン語など多数の言語にも翻訳された。⁴⁴ 日本語には鈴木大拙が翻訳し、『仏陀の福音』として1895年に出版された。これらケーラスの業績は、釈の演説が西洋に受け入れられるべく構築を試みた「近代仏教」の伝播に成功したひとつの証拠と考えることが出来る。シカゴ万国宗教会議における釈宗演の演説は、宗教と科学の共存を理念としていたポール・ケーラスに新しい普遍宗教としての「近代仏教」の可能性を印象付け、仏教啓蒙運動を開始させるという結果をもたらした。「近代仏教」はケーラスを通じて西洋の仏教研究者以外の人々にも広く知られ、理解されることとなった。

鈴木大拙の西欧へ向けたZEN布教の業績が、シカゴ万国宗教会議から始まったことも釈

41 Larry A. Fader, "Zen in the West: Historical Implications of the 1893 Parliament of Religions," *The Eastern Buddhist*, 15:1(1982), p.132

42 ケネス・タナカ『アメリカ仏教－仏教も変わる、アメリカも変わる』東京：武蔵野大学出版会、2010年、pp.106-107

43 『カルマ』は1896年鈴木大拙によって和訳され『因果の小車』という題で日本でも出版された。これを読んだ芥川龍之介は、『カルマ』の一部の逸話をもとに1918年『蜘蛛の糸』を創作、広く知られるようになった。アメリカの仏教研究者の著した物語が、鈴木大拙を介して日本に逆輸入され広まるという珍しい例である。タナカ、2010年、p.107参照。

44 Fader, 1982, p.141

宗演がアメリカ仏教史に与えた影響の一つと考えられる。釈の演説「仏教の要旨并に因果法」を英訳し、西洋の聴衆に受け入れやすい表現によって、釈の「近代仏教」提示に貢献したことは上述のとおりである。その後、釈の紹介でポール・ケーラスの主宰する出版社であるシカゴ近郊のオープン・コート社で働き、仏典や仏教解説書の翻訳によってケーラスの仏教啓蒙活動を支えた。シカゴ滞在後期には初の英語による大乘仏教解説書 *Outlines of Mahayana Buddhism* (1907) を出版、本格的な大乘仏教の研究書として欧米の研究者に広く読まれ、「世界の禪者」としての鈴木大拙の禪布教が始まったのである。1960年代のZENブームまでの間に、鈴木は二回（1936年：昭和11年、1949年～1958年：昭和24年～昭和33年）欧米各地で講義講演を行い日本の禪を広めた。⁴⁵ シカゴ万国宗教会議において釈が演説をするという機会がなければ、鈴木大拙の渡米も実現せず、禪布教も違った形になっていたかもしれない。

むすび

釈宗演は、臨済宗の法主として伝統仏教を体現する存在であった。それとともに、慶応義塾で福沢諭吉のもとで西洋の科学知識やキリスト教概念を修得し、またスリランカでは植民地支配のために壊滅寸前であった上座部仏教の現状を目の当たりにし、それに立ち向かって仏教復興をめざすオルコットらのアプローチを取り入れてアジアの統合を目指すものでもあった。シカゴ万国宗教会議における演説は、釈のもくろみを見据えた仏教界のアピールを、西欧を中心とする世界に向けて放つ絶好の機会であった。鈴木大拙によって翻訳された釈の演説「仏教の要旨并に因果法」は、「近代仏教」において強調された仏陀中心の信仰という側面と、因果法という合理性をそなえた側面を印象付けることができた。

また釈宗演がシカゴ万国宗教会議で行った演説は、次の三点においてアメリカ宗教史に足跡を残すものとなったと言える。第一点は、それまでのヨーロッパにおける仏教研究により上座部仏教（小乗仏教）しか知られていなかったところに、釈の演説によって「近代仏教」としての日本の大乘仏教を初めて正式に披露したということ。第二点はシカゴ万国宗教会議においてアメリカ宗教啓蒙者のポール・ケーラスと出会うことにより、仏教経典や仏教啓蒙書の英訳を多数出版することになる契機を得たこと。そして第三点は、シカゴ万国宗教会議における釈の演説を英訳した弟子の鈴木大拙が、ポール・ケーラスを介して渡米し、アメリカ禪布教の機会がもたらされたことである。

このシカゴ万国宗教会議以前は東洋の風変わりな異教としか受けとめられていなかった仏教が、近代合理主義にかなう宗教として認められるようになったことへの釈宗演の果たした役割は大きいと言える。

<参考文献>

- 井上禪定『禪とZENを伝えた明治の高僧 釈宗演伝』京都：禪文化研究所、2000年
大谷栄一「アジアにおける「仏教と近代」」『ブッタの変貌－交錯する近代仏教－』京都：法蔵館、2014年

45 鈴木大拙『鈴木大拙全集－増補新版 第40巻』岩波書店、2003年、pp.113-249

- ケテラー、ジェームス・E『邪教/殉教の明治－廃仏毀釈と近代仏教』、東京：ぺりかん社、2006年
- 釈宗演『西南の仏教』東京：博文館、1889年
 _____『万国宗教大会一覽』鴻盟社、1893年
- ジャファイ、リチャード「釈尊を探して－近代日本仏教の誕生と世界旅行」『思想』2002.11. No.943
- 末木文美士『日本宗教史』東京：岩波書店、2006年
 _____「伝統と近代」『ブツタの変貌－交錯する近代仏教－』京都：法蔵館、2014年
- 鈴木大拙『仏陀の福音』東京：佐藤茂信、1895年、1901年に森江書店より再版、『鈴木大拙全集 第25巻』東京：岩波書店、1970年所収
 _____『新宗教論』京都：貝葉書院、1896年、『鈴木大拙全集 第23巻』東京：岩波書店、1969年所収
 _____『因果の小車』東京：長谷川武次郎、1901年
 _____『鈴木大拙全集－増補新版 第40巻』東京：岩波書店、2003年
- スノドグラス、ジュディス・M「近代グローバル仏教への日本の貢献－世界宗教会議再考」『近代と仏教－国際シンポジウム第41集－』京都：国際日本文化研究センター、2012年
- タナカ、ケネス『アメリカ仏教－仏教も変わる、アメリカも変わる』東京：武蔵野大学出版会、2010年
- 常光浩然編、『日本仏教渡米史』東京：仏教出版局、1964年
- 森孝一、「シカゴ万国宗教会議：1893年」『同志社アメリカ研究 26』、1990年
- Carus, Paul. "Karma and Nirvana: Are the Buddhist Doctrines Nihilistic?" in *Monist* 4:3, 1894.
 _____. *Karma: A Story of Buddhist Ethics*. Chicago: Open Court Publishing Company. 1894, reprinted in 1917.
 _____. *The Gospel of Buddha*. Chicago: Open Court Publishing Company. 1894.
- Fader, Larry A. "Zen in the West: Historical Implications of the 1893 Parliament of Religions," *The Eastern Buddhist*, 15:1, 1982
- Lears, Jackson. *Rebirth of a Nation: The Making of Modern America, 1877-1920*. New York: Harper Perennial, 2009.
- Lopez, Donald. *Modern Buddhism: Readings for the Unenlightened*. Penguin Books, 2002.
- Marty, Martin E. *Modern American Religion Volume 1: The Irony of It All 1893-1919*, Chicago: The University of Chicago Press, 1986.
- McMahan, David L. *The Making of Buddhist Modernism*. Oxford: Oxford University Press. 2008.
- Seager, Richard Hughes. *The Dawn of Religious Pluralism: Voices from the World's Parliament of Religions, 1893*. La Salle, Illinois: Open Court Publishing Company, 1993.
 _____. *The World's Parliament of Religions: The East/West Encounter, Chicago, 1893*. Bloomington, Indiana: Indiana University Press, 1995.
- Suzuki, Daisetz T. *Outlines of Mahayana Buddhism*. London: Luzac and Company, 1907.

The 1893 World's Parliament of Religions in Chicago: From a perspective of the diffusion of 'Modern Buddhism' by Soen Shaku

Rika NASU
International Christian University, Doctoral Program

【keywords】 The 1893 World's Parliament of Religions in Chicago,
'Modern Buddhism,' Soen Shaku, Paul Carus, Daisetz T. Suzuki

The ZEN boom in the United States in 1960's is well-known as a diffusion of Japanese ZEN Buddhism caused by the influence of Daisetz T. Suzuki. There had also been a historical event before that, in which Japanese Mahayana Buddhism was accepted to the American society. That is the 1893 World's Parliament of Religions held in Chicago. Suzuki's Zen master, Soen Shaku gave a speech there and proposed "Modern Buddhism" that corresponds to modern science. With the help of Suzuki's translation of his speech, Shaku successfully introduced "Modern Buddhism" to the Western world.

Shaku's speech, entitled "The Law of Cause and Effect, as Taught by Buddha," presented Buddha's law as "the truth of the universe." "Modern Buddhism" proposed in Shaku's speech represents two of the characteristic features in McMahan's "Buddhist Modernism." They are (1) monotheism by the Buddha, and (2) rational and scientific property which deny "God, the creator."

Christian society in the United States planned the World's Parliament of Religions in Chicago to recover Christian authority, which was damaged by the degenerated social condition called the "Gilded Age," and the new scientific interpretation of religions by Darwin's theory of evolution. From about 20 countries, 12 religions were invited to the Parliament. The audience of the Parliament in Chicago was greatly impressed by the speeches of Asian representatives of Buddhism, including Shaku. They accepted Buddhism as a "Modern" religion, and some began to embrace Buddhism as their own religion. One of them was Paul Carus, a prominent figure of religious enlightenment in the United States. Carus began publishing books on Buddhism in English, and contributed to the study of Buddhism in the Western world. Carus' work is considered as the proof that Shaku's speech successfully presented 'Modern Buddhism' to the West.

「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査」 データベース中間報告 III

－学部教育における日本語教育の教材と教育上の問題－

小林幸江（東京外国語大学）、鈴木美加（東京外国語大学）

【キーワード】 学部教育 必須科目 日本語教材 教育上の問題
到達目標

1. はじめに

2009年に東京外国語大学・国際日本研究センター（以下、センター）が設置されて以来、国際日本語教育部門を中心に、国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査を実施している。これは、本センターの主要な業務の一つとなっている。本調査は、東京外国語大学の交流協定校を中心に世界の高等教育機関における日本語教育研究の現状と課題について関係者への聞き取り調査ならびに質問紙調査を行ったものである。本調査により構築されたデータが広く共有され、活用されることを目指し、センターのホームページ上に公開されている。

センターでは、これらのデータを基に、各国の高等教育機関における日本語教育の動向について分析を行い、2013年よりその結果を「国際日本研究センター 日本語・日本学研究」に『国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査』データベース中間報告」として、次の副題をつけて報告している。

発行年	副題	著者	主なテーマ	紀要
2013 中間報告 I	「欧米型（日本研究の中の日本語教育）と アジア型（日本語教育から日本研究へ）」	谷口龍子 坂本 恵	地域による日本語 教育の特徴	Vol.3
2014 中間報告 II	「日本研究に関連した海外の大学院教育」	谷口龍子 望月佳子	大学院における日 本語教育の特徴	Vol.4

今回は、中間報告 III として「学部教育における日本語教育の教材と教育の課題」という副題で、日本語教育の教材の使用状況、及び教育上の問題を中心に報告をするものである。

2. 調査概要

2.1. 調査対象の大学

センターの実施している国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査は、現在もなお調査が進められている。本稿では、現在センターのホームページに掲載されている以下の

全57大学（2014年3月31日現在）のデータを基に調査・分析を行う。表中の（ ）は大学数を表す。

(1) 〈アジア地域〉

	国名	大学		国名	大学
1	カンボジア (1)	王立プノンペン大学、	7	台湾 (6)	元智大学、台湾大学、東呉大学、国立高雄第一科技大学、中国文化大学、淡江大学
2	シンガポール (1)	シンガポール国立大学			
3	タイ (1)	タマサート大学			
4	韓国 (1)	韓国外国語大学校	8	フィリピン (1)	フィリピン大学ディリマン校
5	中国 (6)	上海外国語大学、大連外国語大学、復旦大学、北京大學、北京語言大学、大連民族学院	9	マレーシア (1)	マレーシア国民大学
			10	モンゴル (1)	モンゴル国立大学
			11	ベトナム (1)	ハノイ国家大学外国語大学
6	香港 (2)	香港大学、香港中文大學	12	ラオス (2)	ラオス国立大学、ラオス日本文化センター

(2) 〈アフリカ地域〉

13	エジプト (2)	カイロ大学、アインシャムス大学
----	----------	-----------------

(3) 〈ヨーロッパ地域〉

14	イギリス (4)	オックスフォード・ブルックス大学、マンチェスター大学、リーズ大学、ロンドン大学東洋アフリカ学院	21	ドイツ (2)	ボン大学、フリードリッヒ・アレクサンダー大学エアランゲン・ニュルンベルグ
			22	フィンランド (1)	ヘルシンキ大学
15	ウクライナ (2)	キエフ国立言語大学、キエフ国立大学 (タラフ・シェフチェンコ記念キエフ国立大学)	23	フランス (4)	グルノーブルスタンダール第三大学、パリ・ディドロ (パリ第七大学)・フランス国立東洋言語文化大学、プロバンス大学、リール第三大学
16	オーストリア (1)	ウィーン大学			
17	オランダ (1)	ライデン大学			
18	スイス (1)	ジュネーブ大学			
19	スペイン (1)	マドリード自治大学	24	ロシア (2)	モスクワ大学、サンクトペテルブルグ大学
20	スロベニア (1)	リュブリャーナ大学			

(4) 〈北南米地域〉

25	アメリカ (4)	ハーバード大学、プリンガム・ヤング大学、カリフォルニア大学・ロサンゼルス校、ハワイ大学
26	カナダ (5)	アルバータ大学、トロント大学、ビクトリア大学、プリティッシュ・コロンビア大学、モントリオール大学
27	ブラジル (1)	リオデジャネイロ大学

2.2. 調査方法

本報告では、ホームページ上のデータの調査項目のうち「IV 学部（日本語学科あるいは

関連学科)」にある、「必須科目の使用テキスト」、「学習上の困難点」をまとめ報告する。「IVの項目」は、次の小項目より成っている。

- 1 構成（組織・教員数・学生数）
- 2 日本語学習の主たる目的（言語スキル・知識など重視する点）
- 3 日本人教員情報（人数・専門・役割・採用条件・担当科目）
- 4 目標とする日本語のレベル（日本語能力試験など）
- 5 必修科目の使用テキスト
- 6 卒業生の進路
- 7 学習上の困難点

調査は、質問紙、及び聞き取りにより行われており、データの内容の質・量や更新の有無等にばらつきがある。そのため、各高等教育機関の日本語教育の状況を同じ基準でまとめることは難しく、本報告ではデータから見てきた日本語教育の傾向を可能な範囲で示すこととする。

3. 調査結果

3.1. 日本語教育の教材

各国の高等教育機関、主に学部教育で必須科目のテキストとして使用されている日本語教材を、(1)日本で開発されたものと、(2)国外で開発されたものと分けて示す。

次に、以下の表を見る際の留意点を示す。

- 本報告では、日本語教育に関わる教材に限定し、日本学、日本文学等の専門科目としての教材は取り上げない。ただし、翻訳・通訳科目についての情報は可能な範囲で記す。
- データ中の不明な教材は取り上げていない。
- 分冊、シリーズになっている教材の詳細な使用状況は、本データで統一して示すことは難しい。
- 台湾の大学で使われている教材の中には、日本で開発、販売された教材について現地の出版社が販売権を取得したものがある。したがって、これらは、日本で開発されたものとしてリストアップしている。
- 国内では開発された教材はレベル別に表示してあるが、海外のものはその種別が難しいため、ここでは出版社ごとにまとめてある。

(1) 日本で開発された教材

教材名	出版社	使用している教育機関 (機関数)
初級		
『みんなの日本語 初級』Ⅰ、Ⅱ	スリーエーネットワーク	王立ブノンペン大学、元智大学、台湾大学、淡江大学、マレーシア国民大学、ラオス国立大学、ラオス日本文化センター、アインシャムス大学、カイロ大学、マンチェスター大学、リーズ大学、キエフ国立言語大学、ライデン大学、ジュネーブ大学、マドリード自治大学、パリ・デイドロ（パリ第七）大学、リール第3大学、トロント大学、モンリオール大学（東アジア研究所）、リオデジャネイロ州立大学、モスクワ大学（21）
『げんき』	The Japan Times	フィリピン大学、マンチェスター大学、ボン大学、プロバンス大学、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校、ビクトリア大学、ブリティッシュ・コロンビア大学（7）
『初級日本語』	凡人社	タマサート大学、キエフ国立大学、サンクトペテルブルク大学（『会話』のみ）（3）
『新文化初級日本語』	文化外国語専門学校	台湾大学、東呉大学、中国文化大学、淡江大学、ウィーン大学、リユブリャーナ大学（Ⅱのみ）、ヘルシンキ大学（7）
『まるごと』	国際交流基金	ラオス日本文化センター（1）
『毎日の聞きとり50日 / 毎日聴力日本語：50日課程 - 初級Ⅰ・Ⅱ』	凡人社 / 大新書局	台湾大学（1）
『かな入門』	凡人社	ラオス国立大学（1）
『Basic Kanji Book』	凡人社	アインシャムス大学、マドリード自治大学、ヘルシンキ大学、グルノーブル・スタンダード第三大学（4）
『Kanji in Context』	The Japan Times	アインシャムス大学（1）
『日本語90日』（漢字教材）	UNICOM ヒューマンアカデミー	オックスフォード・ブルックス大学（1）
『かんじだいすき』	国際日本語普及協会	ラオス国立大学
中級		
『日本語中級 J301- 基礎から中級へ-』	スリーエーネットワーク	香港大学、国立高雄第一科技大学、トロント大学（3）
『日本語生中級初級編』	くろしお出版	トロント大学
中級		
『テーマ別中級から学ぶ日本語 改訂版』	研究社	タマサート大学、ライデン大学（2）
『新日本語の中級』	スリーエーネットワーク	香港中文大学・中国文化大学、ボン大学
『新文化中級日本語』	文化外国語専門学校	淡江大学（1）
『文化中級日本語』	文化外国語専門学校 / 雙大出版公司	台湾大学、アインシャムス大学、ウィーン大学（3）
『中級の日本語』	The Japan Times	オックスフォード・ブルックス大学、マンチェスター大学（2）
『日本語表現文型』中級	筑波大学日本語教育研究会	台湾大学（1）
『中級へ行こう』	スリーエーネットワーク	ラオス国立大学（1）

『中級を学ぼう』中級前期、 中級中期	スリーエーネットワーク	ラオス国立大学、ジュネーブ大学(2)
『輕鬆聴日語』1、2	文化外国語専門学校/雙大 出版公司	台湾大学、東呉大学、淡江大学(3)
『日本語中級読解入門』	アルク/大新書局	タマサート大学、東呉大学(2)
『読むトレーニング』	スリーエーネットワーク	タマサート大学(1)
『レベル別日本語多読ライブ ラリー』	アスク	タマサート大学(1)
『みんなの日本語中級I,II』	スリーエーネットワーク	キエフ国立大学、マドリード自治大学(2)
『留学生のための漢字の教科 書』	スリーエーネットワーク	キエフ国立大学(1)
『会話の日本語』		ライデン大学(1)
『Intermediate Kanji Book』	凡人社	マドリード自治大学、リュブリャーナ大学、 ヘルシンキ大学(3)
『ニューアプローチ中級基礎 編』	語文研究社	ボン大学、リール第3大学(2)
『J Bridge』	凡人社	ヘルシンキ大学(1)
『にほんご敬語トレーニング』	アスク	ヘルシンキ大学(1)
『Intermediate Japanese』(マグ ロイン花岡直美他著)	ジャパントイムズ	アルバータ大学、プリティッシュ・コロンビ ア大学(2)
中上級		
『中上級の日本語』	創作集団 日本語	タマサート大学(1)
『中・上級者のための速読の 日本語』	The Japan Times	タマサート大学
『New Approach 中上級日本語 (完成編)』	宇田出版社	中国文化大学(1)
『日本語生中継中上級編』	くろしお出版	トロント大学(1)
『楽しい日本語作文教室』	大新書局	淡江大学(1)
『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』	スリーエーネットワーク	トロント大学(1)
上級		
『日本語上級読解入門』	アルク/大新書局	東呉大学(1)
『上級へのとびら』	くろしお出版	リュブリャーナ大学、ビクトリア大学(2)
『新聞で学ぶ日本語』	The Japan Times	タマサート大学(1)
『上級日本語』	凡人社	復旦大学
『日本語上級話者への道』	スリーエーネットワーク	国立高雄第一科技大学
『日本語上級読解入門』	アルク/大新書局	東呉大学(1)
『ビジネスのための日本語、 商談のための日本語』	スリーエーネットワーク	オックスフォード・ブルックス大学(1)
『The Japanese Way of Life』 (video, 日本語)		モスクワ大学(1)
新聞記事		タマサート大学、リーズ大学、ライデン大学、 プリンガム・ヤング大学(4)
短編小説		プリンガム・ヤング大学(1)
日本で出版されたテキストを使用する授業もある		大連外国語大学(1)

(2) 海外で開発された教材

教材名	出版社	使用している大学
『新編日語』	上海外語教育出版社	上海外国語大学、復旦大学、大連民族学院(3)

『日語総合教程』	上海外語教育出版社	上海外国語大学、大連民族学院 (2)
『新編日語会話』	上海外語教育出版社	上海外国語大学 (1)
『新編日本語文法』	上海外語教育出版社	復旦大学 (1)
『総合日語』 (1~4)	北京大学出版社	北京大学、北京語言大学 (上級は、上海外語教育出版社の教材使用) (2)
『高年級日本語精読』 (1~3)	上海訳文出版社	北京大学、大連民族学院 (2)
『日本語聴力』	華東師範大学出版社	大連民族学院 (1)
『実用日語写作教程』	外語教学与研究出版社	大連民族学院 (1)
『日本語聴力』	華東師範大学出版社	大連民族学院 (1)
『日語汎独』	外語教学与研究出版社	大連民族学院 (1)
『日本語』 (1~4)	香港中文大学日本研究学科編	香港中文大學 (1)
『会話に挑戦』、『日語上達者之道』 『楽しい日本語作文教室』 I・II、 『聴想説初級日語會話』、『現代日語・口語語法』、『日語集中練習』、『日本語敬語運用表現』、『日本語敬語運用表現』	大新書局	国立高雄第一科技大学 (1)
『大家寫作文』、『適時適所日本語表現句型200』	大新書局	中国文化大学 (1)
『來學日本語』 初級 I、II、『來學日本語』 基礎進階 I	尚昂文化	中国文化大学 (1)
『日本語 GOGOGO』 II・IV	金石堂網露書店	中国文化大学 (1)
『日語語法之分析』 1・4	文笙書局	中国文化大学 (1)
『基礎・日語語法』	文笙書局	東吳大学 (1)
『一緒に読解 SCU 初級』	致良出版社 (東吳大学日本語学科編)	東吳大学 (1)
『日語精讀教材』	致良出版社	国立高雄第一科技大学 (1)
『日本語表現の教室 中級—語彙と表現と作文』、『日本語を書く楽しみ』	致良出版社	中国文化大学 (1)
『情境日本語初中級篇』 (『聞いて覚える話し方、日本語生中継、初中級編』)	大新書局 (くろしお出版)	淡江大学 (1)
『圖畫日本語作文入門』	豪風出版社	台湾大学 (1)
『中日口譯入門』	致良出版社	国立高雄第一科技大学 (1)
『教養日本語』 (『教養の日本語』)	致良出版社 (講談社出版サービスセンター)	淡江大学 (1)
『教養日本語高級』 (『教養の日本語上級』)	致良出版社 (講談社出版サービスセンター)	淡江大学 (1)
『商務貿易日本語【基礎編】』	大新書局	国立高雄第一科技大学 (1)
『新編日語閲読文選』	上海外語教育出版社	上海外国語大学 (1)

『新編日漢翻訳教程』	上海外語教育出版社	復旦大学(1)
『日漢翻訳教程』	南開大学出版社	大連民族学院(1)
『Toward Better Japanese』	Bunkyosha	プリンガム・ヤング大学(1)
『Intermediate Japanese: Japanese History and Culture』		プリンガム・ヤング大学(1)
『Intensive Course in Japanese Intermediate』	Language Services Co., 1980	モスクワ大学(1)
『Manual de Lengua Japonesa / 日本語マニュアル』	Ediciones UAM (マドリード自治大学出版)	マドリード自治大学(1)
『Grundstudium 1/2 (Noriko Katsuki-Pestemer)』(教科書)	Bildungsverd. Eins	フリードリッヒ・アレクサンダー大学、エアランゲン・ニュルンベルク(2)
Sodobni japonski jezik 1, Ljubljana: (『みんなの日本語』導入文型準拠型自作教科書)、Prvi koraki-Sodobna japonskaslovnica za začetno stopnjo. I .del (初級日本語文法I)、Osnove-Sodobna japonska slovnica za začetno stopnjo. II .del (初級日本語教育文法II)、Uvod v japonski pisavo: hiragana, katakana in prvih 854 pismenk (日本語表記入門)、Japonsko-slovenski in slovensko-japonski slovaček k učbeniku Sobodni japonski jezik 1 (現代日本語I - 日本語スロヴェニア語・スロヴェニア語日本語語彙表)	Filozofska fakulteta Univerze v Ljubljani (リュブリャーナ大学 文学部)	リュブリャーナ大学(1)
『日本語で話しましょう』	グルノーブル大学出版	グルノーブル大学(1)
韓国外国語大学校日本語大学学術図書編纂委員会著・出版の教材		韓国外国語大学校(1)
学内のオリジナルテキスト(市販)を使用		大連外国語大学(1)
オリジナル漢字教材(パリ第7大学)		パリ第7大学(1)
新聞・雑誌記事などを編集したオリジナル教材		ハーバード大学(1)
オリジナル教材(各大学制作)		フランス国立東洋言語文化大学、トロント大学(2)
教師編集教材		ブリティッシュ・コロンビア大学(1)

『初級日本語教科書』（2冊組、L. ネチャエヴァ著）・『日露/露日通訳法』（上級用、S. ブイコヴァ著）、『初・中級の日本語教科書』（E. ベッソノヴァ他著）・『中級日本語の読本』（E. ストロゴヴ、N. シェフテレヴィッチ著）・『日本語教科書、中級、2巻』（I. V. ゴロヴニン編）・『2年生用の日本語教科書』（2009年）	モスクワ大学出版	モスクワ大学 (1)
『中級通訳法』（M. ミシナ著）	モスクワ大学	モスクワ大学 (1)

(3) その他

自作教材	タマサート大学、モンゴル国立大学、ラオス国立大学、オックスフォード・ブルックス大学 (Reading and Writing)、モスクワ大学 (5)
教員が選んだ教材	復旦大学 (1)
一定していない	ロンドン大学東洋アフリカ学院 (1)

レベル別の教材の詳細な使用状況については、さらなる調査が必要となる。

3.2. 教育上の課題

(1) 日本語学習のレベル目標

各機関では日本語学習の目的とともに、以下のように日本語レベルの到達目標が示されている。(表中の「N」は「日本語能力試験」を表す)

卒業時の目標とするレベル (機関数)	大学名
N1 (9)	大連外国語大学、大連民族学院、香港中文大學、台湾大学、国立高雄第一科技大学、淡江大学、モンゴル国立大学、ハノイ国家大学外国語大学、モスクワ大学
N2-N1 (2)	タマサート大学、キエフ国立言語大学
N2 (12)	元智大学、東呉大学、中国文化大学、キエフ国立大学、ウィーン大学、サンクトペテルブルク大学、リオデジャネイロ州立大学、トロント大学、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校、パリ・ディドロ（パリ第七）大学、リール第3大学、カイロ大学（受験は課さない）
N3 - N2 (2)	王立ブノンペン大学、フリードリッヒ・アレクサンダー大学
N3 (3)	フィリピン大学ディリマン校、ラオス国立大学、ジュネーブ大学
CEFR・JF スタンダード (3)	アインシャムス大学 (B2)、オックスフォード・ブルックス大学 (C1)、ボン大学 (B1-B2)、オックスフォード・ブルックス大学 (C1)、ライデン大学（読みのスキル B1・その他のスキル B2）、
ほかの基準 (5)	韓国外国語大学校 (FLEX：大学開発標準・第1選考700〈N1〉/第2選考600)、復旦大学 (大学専攻生「日本語8級」)、フランス国立東洋言語文化大学 (3年次：簡単な本や自分の研究分野に関する文献を読むことができる。数ページの長い文章が書ける。日常会話ができる。日本文化に関する広く深い知識を身につける)、ライデン大学 (ALTECategory C では、Study Reading C1 レベルに到達する)

その他 (12)	マレーシア国民大学、トロント大学、ラオス日本センター（学生の日本語レベルに応じて日本語能力試験の対応レベル合格）、モンリオール大学、アルバータ大学（3年次で漢字800字の学習）、リュブリャナ大学（現代日本語で日常のコミュニケーションができる、一定のテーマについて簡単な文章にまとめることができる、日本語能力試験受験は必須ではないが奨励している）、マドリッド自治大学（日本文化を知るためのツールとしての日本語の学習。語学以外の科目との連携を目指している。）、プロバンス大学（2年次修了までに日本語能力試験4級合格を目指す）、リール第3大学（1年生：JLPT・N4レベル、2年生：JLPT・N3レベル、3年生：JLPT・N2レベルをめざす）、ボン大学（「自律学習能力」「問題解決能力」「協働学習能力」の育成）、ハワイ大学（日本語4技能のスキルを重視している） プリンガム・ヤング大学（OPI（Oral Proficiency Interview）のテスターが電話を用いて口頭試験を行う。全員受験だが結果は成績に反映しない。日本語能力テストまたは大学開発の能力テストも受験）
具体的設定なし (2)	マンチェスター大学、ビクトリア大学
記載なし (12)	シンガポール国立大学、上海外国語大学、北京大学、北京語言大学、香港大学、リーズ大学、ロンドン大学東洋アフリカ学院、ブリティッシュ・コロンビア大学、ヘルシンキ大学、グルノーブル・スタンダール第三大学、ハーバード大学

記載のある中では、日本語能力試験のN2レベルを卒業時までの到達目標としている機関が多く、地域的にも広がりが見られる。これに対して、N1としている機関は、主に漢字圏に集中している。一方、欧米等ではCEFRを参照レベルとすることも広まっている状況が認められ、能力試験以外の基準を設定している機関も増えている。

(2) 学習上の困難点

各機関の「学習上の困難点」は、上で見た到達目標と関連していると思われるが、データには、学習者、指導者の視点、日本語の問題、日本語教育環境の問題などいろいろな性質のものが混在しており、残念ながらその背景や要因までは読み取れない。本報告書では、指導上の困難点＝学習上の困難点と理解し、データから見えてきた学習上の困難点を次の表のように、大きく①日本語の言語要素面、②日本語の技能面、③学習を支える要因（動機づけ・運営・環境）、④それ以外の点、の4つの項目に分けて整理した。

1 日本語に関する困難点 (44)	(機関数)
漢字・表記	プノンペン大学、タマサート大学、フィリピン大学、ラオス日本文化センター、マンチェスター大学、リーズ大学、キエフ国立大学（タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学）、ハーバード大学、リオデジャネイロ州立大学、グルノーブル・スタンダール第三大学、パリ・ディドロ（パリ第七）大学、プロバンス大学、プリンガム・ヤング大学、モンリオール大学、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校、マドリッド自治大学(16)
表現	プノンペン大学、タマサート大学、大連民族学院(3)
敬語 待遇表現	タマサート大学、大連民族学院、北京語言大学、リーズ大学、グルノーブル・スタンダール第三大学、プリンガム・ヤング大学マドリッド自治大学、ハーバード大学(8)

文法・文構造理解	大連民族学院、レーシア国民大学、マンチェスター大学、ハーバード大学、ビクトリア大学、キエフ国立大学（タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学）、ボン大学（不正確さ）(7)
助詞、使役、受身の用法、自他動詞	タマサート大学、大連民族学院、東呉大学(3)
外来語の多さ・新語の増加	復旦大学、マドリード自治大学(2)
発音	ラオス日本文化センター、キエフ国立大学、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校(3)
語用	マンチェスター大学(1)
文体	北京語言大学(1)
2 日本語の技能に関する困難点(14)	
会話力・スピーキング能力（口頭表現） スピーチスタイル	フィリピン大学、中国文化大学、マレーシア国民大学、プロバンス大学、マドリード自治大学、ハーバード大学(6)
ヒアリング	中国文化大学(1)
ライティング（文章表現）能力	マレーシア国民大学、ライデン大学、グルノーブル・スタンダール第三大学(3)
運用能力	台湾大学、アインシャムス大学(2)
要求される高度の日本語能力	香港中文大學(1)
社会言語的知識とその活用	プリンガム・ヤング大学(1)
3 学習を支える要因（動機づけ・コース運営・環境）に関する困難点(9)	
教室・施設の設備、1クラスの人数	ハノイ国家大学外国語大学、リール第3大学、モントリオール大学（東アジア研究所）(3)
クラス編成（未習/既習、漢字/非漢字） レベル（初級クラス内のレベル差大）	リール第3大学、トロント大学、韓国外国語大学、モンゴル国立大学(4)
授業時間の少なさ・授業期間の短さ	台湾大学（Wメジャーのため）、オックスフォード・ブルックス大学（JAFL環境下）、ライデン大学、オックスフォード・ブルックス大学（大学の休みが長く、休み中に忘れてしまう）(4)
動機づけ（日本語または漢字の学習）、集中力維持	フリードリッヒ・アレクサンダー大学、エアランゲン・ニュルンベルク大学、リオデジャネイロ州立大学、マドリード自治大学(4)
授業以外に日本語を使用する機会がない	北京大学、大連外国語大学、キエフ国立言語大学、リュブリャーナ大学、トロント大学、モントリオール大学（東アジア研究所）(6)
教材、図書・資料（学生用・研究用）不足	上海外国語大学、ハノイ国家大学外国語大学、カイロ大学、オックスフォード・ブルックス大学（英国内向け教材がない・副教材作成に時間がかかる）(4)
習慣・文化について学ぶ機会の少なさ	ラオス日本文化センター(1)
4 その他の困難点(17)	
就職難のため、学習に専念できない	上海外国語大学(1)
日本語教師の人材確保	カイロ大学（1,2年で帰国）(1)
教師教育・研修の機会	リオデジャネイロ州立大学(1)

4. まとめと今後の課題

4.1. まとめ

以上の調査の結果をもとに、本報告書の二つのテーマ、「日本語教育の教材」「教育上の問題」についてまとめる。

(1) 「日本語教育の教材」について

各高等教育機関における日本語教材の使用状況は次のようにまとめられる。

- 『みんなの日本語』は初級段階の日本語教材として母語・地域を超えて広く使われており、教師用指導書を含む整備された総合教材の使い良さ、教師間の連携のしやすさが多くの機関での使用につながっていることが使用機関の協力者のコメントから窺える。
- 漢字圏の大学では、それぞれの大学、または自国で開発された教材で市販されているものがよく使われている。その他、非漢字圏の中でモスクワ大学やリュブリャーナ大学は出版会を持ち、日本語教材の開発・出版が活発に行われている。
- 英語圏の教材がないとの指摘（オックスフォード・ブルックス大学）が見られるが、実際には教材作成は海外の機関では難しい状況があるようだ。

(2) 「教育上の問題」について

データから見てくる海外の高等教育機関における日本語学習/指導の困難点は多岐にわたる。上記の1~4の困難点を、大きく〈日本語の問題〉と〈日本語教育〉の二つの問題に分けてまとめる。

〈日本語の問題〉

- 日本語の要素・表現等の指導/学習を困難としている機関が多い。これは、教育機関の運営、体制の問題によるものか、さらに調査が必要となる。
- 特に、漢字・表記の指導/学習は、漢字圏を除く多くの機関が困難としている。このことは各機関の到達目標にも影響しているものと思われる。
- 「文法に関すること」「敬語・待遇表現」がそれに続いて多い。これらは、漢字圏、非漢字圏を問わず困難とみなされている。
- 日本語の技能の中で、会話力の指導・学習を困難とする大学が多かった。これは、授業の目的にも関連するが、海外の大学では日本語環境が教室の中に限られていること（3の「学習を支える要因」）からくるものと言えるだろう。

〈日本語教育の問題〉

- 韓国、モンゴルの機関は「クラス内のレベル差が大きい」ことを困難点として挙げているが、これは高等教育以前でも日本語教育が盛んな両国ならでは日本語教育の大学教育への連結の問題が垣間見られる。
- 教材不足をあげた機関が多かった。オックスフォード・ブルックス大学は「英国内向け教材がない」ため、日本で市販されている教材を使っているとの答えがあった。市販の教材が海外で使われている理由にはいろいろな理由がありそうだ。また、日本語教育関係の図書の不足と答えた機関が多くみられる。日本語教育の振興、及び研究の推進に寄与するため、国内にあって使われなくなった図書の有効利用の仕組みなど検討する必要がある。
- 学習者の学習動機を高め、学習意欲を維持することを困難点としている機関も多く見られた。インターネットが普及している現在、海外にあって、HATTORI (2014) の日本を含む複数の国の学習者のネットを活用した交流・学習の取り組みなどのような双方向型の交流・学習の推進や、動機付けにつながるネットによる日本語学習支援ツールの

活用・開発が期待される。

4.2. 高等教育機関データ調査の課題

本報告では、海外の高等教育機関における日本語教育事情調査の一環として、日本語教育の教材、日本語教育に関する調査を行った。特に、海外の各国の高等教育機関でどのような教材が使われているかに関する調査は管見ではあまり見られないことから、現状を示す意味では目的は果たせたと思われる。しかし、機関によりデータのばらつきがあり、その背景にあるもの、問題について深く掘り下げるまでには至っていない。ここで取り上げたテーマは、海外の高等教育機関の日本語教育の実態を知るうえで重要なものである。今後、データの更新に当たり、データ収集の目的をさらに明確にし、データを得ることが重要と思われる。

おわりに

7年のプロジェクトとして創設された国際日本研究センターは、2015年度に最終年を迎える。国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査は、センター創設以来、海外の大学関係者の皆様のご協力のもとに、センターの研究者をはじめ、多くの本学教員の支援を得て実施されてきた。本年度、今まで構築されたデータをさらに使いやすく見やすく取り組みがされている。

日本語教育は、日本社会、世界の動きと連動している。変化の激しい現在、

本調査はこれで終わりということはない。本データが効果的に活用されるためには、新たな高等教育機関を対象とした調査、また調査項目の見直し等、コンテンツの充実とともに、それらの更新は欠かせない。国際日本研究センターのプロジェクト終了後、これをどうつなげていくのか、今後の大きな課題となる。

参考文献

国際交流基金（2013）『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より』

くろしお出版

HATTORI [SAITO] Rieko (2014) 「スウェーデン・韓国・中国・日本をオンラインでつなぐ—複文化能力育成を目指して—」 The 14th International Conference of EAJS (European Association for Japanese Studies) 口頭発表（於スロベニア）

Japanese Language Education in Higher Education Institutions in Japan and Overseas; Mid-term Database Report 3

Japanese Textbooks and Problems in Teaching Japanese Language in Overseas Undergraduate School Education

Yukie Kobayashi (Tokyo University of Foreign Studies)

Mika Suzuki (Tokyo University of Foreign Studies)

【Keywords】 Undergraduate school education, Compulsory subjects, Japanese Textbooks, Problems in teaching Japanese language, Japanese language proficiency target levels.

This paper aims to organize information regarding Japanese textbooks as well as problems in teaching Japanese language in overseas undergraduate school education collected under the "Japanese Language Education in Institutes of Higher Education in Japan and Overseas (ICJS-TUFS) project. Target levels of Japanese language proficiency in the Japanese Language Proficiency Test (JLPT) were evaluated for N1 and N2 test students. Japanese textbooks frequently used in undergraduate Japanese learning education were also evaluated. Books included the widely used (in both Japan and overseas institutions) Japanese Textbook "Minna no Nihongo". Other original Japanese textbooks developed in countries where Chinese characters are part of the local language and culture were also evaluated. It was determined that there is a lack of appropriate textbooks for teaching Japanese language at many higher education institutions. In addition to this, problems regarding teaching Japanese language in undergraduate schools were examined. Such problems include the difficulty teaching and learning Chinese characters in foreign countries without Chinese characters in their local language and culture. "Keigo", the Japanese expression to show respect and modesty, was also determined to be difficult to teach and learn in overseas all higher education institutions evaluated. Finally, it was ascertained that there is a common lack of appropriate Japanese language textbooks in all overseas higher education institutions.

「e-Japanology の構築のための基礎的研究」活動報告

友常勉

【キーワード】 e-Japanology、クローラエンジン、デジタルコミュニケーション、メディアリテラシー教育

1 研究の目的と問題意識

科研費基盤研究 (C) 「e-Japanology の構築に向けた基礎的研究」(代表・佐野洋、2012年～2015年) の目標は、情報通信の技術革新とグローバル化に対応した日本研究・教育の積極的な発信、さらにクラウド技術を活用した情報基盤を構築することであった。それによって、研究資源の活用だけでなく、海外の日本学・日本研究に関心のある人びとを支援する教育機能の整備をめざした。具体的には、①多言語アクセスに対応した日本学・日本研究のコミュニティ基盤の構築 ②多摩地区の日本学研究教育組織と外国人留学生コミュニティを活用した学知の蓄積と知的資源の継続的な累加のシステムを試験的に実施することを課題とする、というものであった。研究メンバーは佐野洋(東京外国語大学)を代表に、辻澤隆彦(東京農工大学総合情報メディアセンター)、有澤知乃(東京学芸大学留学生センター)、友常勉(東京外国語大学国際日本研究センター)である。

本稿では、科研費による3年間の研究活動を報告し、その成果と課題を示したいと考える。

以下に示すのは、「e-Japanology」の構想にあたって、研究代表・佐野洋が作成した「日本学の学術コミュニティ基盤」の概念図である。

ネットワーク時代の参加型の交流推進、情報価値の創出

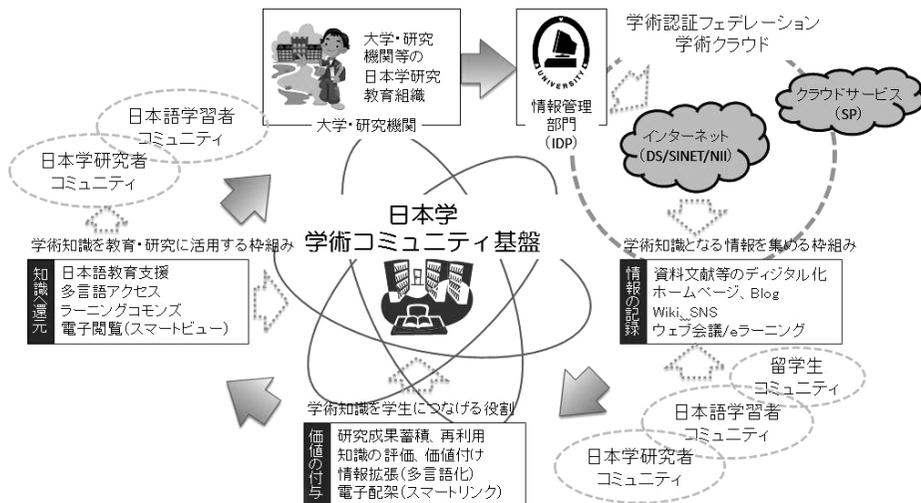


図1 日本学の学術コミュニティ基盤の概念図

また、この科研費による研究をスタートする前に、東京外国語大学国際日本研究センター比較日本文化部門・国際連携推進部門の主催のもとで、2010年12月11日シンポジウム「e-Japanology の構築にむけて」を開催した。講演者・演題は以下の通りである。

- ① 多摩地区大学連合における「e-Japanology」構想
佐野洋（東京外国語大学国際学術院教授）
辻澤隆彦（東京農工大学総合情報メディアセンター教授）
- ② 電子図書館構想と日本の学術デジタルコミュニケーションの現状
中山正樹（国立国会図書館総務部情報システム課長）
- ③ 海外の大学図書館からみた日本研究と学術デジタルコミュニケーションの課題
マルラ俊江（UCLA 東亜図書館司書）（予定）
- ④ 自然科学領域における電子ジャーナル・オープンアクセスの現状と課題
林和弘（日本化学会学術情報部課長）
- ⑤ 文化史のなかの〈知の電子化・電子書籍化〉
桂川潤（装丁家）

このシンポジウムでの各講演は国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第1号（2011年3月発行）に収録されている。各講演を通して明らかになったことは、国会図書館を中心に進んでいる人文系の学術知のデジタル化は評価できるとしても、電子ジャーナルのデジタル化・オープンアクセス化においては、自然科学に大きく遅れをとっているといわざるをえない現状があるということである。これについては、すでにマルラ俊江が海外における日本研究の国際的なステータス・プレゼンスの低下と、その要因としてのデジタル化の遅れとして指摘していた。したがって電子化の遅れの改善、発信型の研究・教育環境の整備が不可欠となる。さらに佐野洋はその要因を、大学全体の電子化の困難さという現状から把握していた。そこで、こうした現状を踏まえうえて、まずはアクセス環境の整備と実験的な事業を優先することが、「e-Japanology」構想において求められることが確認された。

2 取り組み

最初に着手したのは、以下のような課題である。

- i 日本学・日本研究の概念化・鮮明化とその国際環境の把握。有澤・友常を中心に、海外の日本学・日本研究の現状について、国際学界の研究動向の調査を行うこと。
- ii 「最適化プロジェクト」と国際日本研究センターによるコンテンツ作成事業への協力。東京農工大、東京学芸大とのあいだで、コンテンツ充実のための相互点検体制をつくる。
- iii メディア・テクノロジーを利用したコンテンツ配信のための技術支援。佐野洋と辻澤隆彦を中心に、遠隔教育システム、認証・検疫システムを構築するための試行を行うこと。

さらに、さきの佐野洋作成の「日本学学術コミュニティ基盤」のために、将来的に以下のような課題も必要であることが確認された。

- iv コンテンツ拡充のための仕組みと、構造化された知識にアクセスする手段の提供、知識ナビゲーション技術の開発。上記iiiの事業と連動して、フェイスブック、twitterによる学術

クラウドサービスの構築と、そのノウハウを整理・普及すること。

v 日本語、中国語、英語による海外の研究者・学習者に向けたアクセス・サービスの試験的提供。東京外語大、東京農工大、東京学芸大の留学生を対象に、デジタル・アクセス・サービスを行う。さらに試験的な配信事業を、海外大学において行うこと。

結論からいえば、上記の i～iii までは、それぞれの個人研究や、国際日本研究センターや東京外国語大学「最適化プロジェクト」など既に展開しているプロジェクトにもとづいて実践することができた。しかし、iv および v についてはほとんど手付かずのままとなった。その理由は総括点のひとつとなる（次節）。

また、課題の i にかかわって、日本発信型の文化商品の作られ方・流通過程を知るために、大手出版社のアニメ・マンガ担当者をお招きして、「文化商品の海外展開——アニメ・マンガ商品を題材に」と題する研究会を開催した（2011年11月4日）。ディズニーのような中央主義的な戦略に対して、著作権を守りながら海外展開する文化商品販売・流通の苦勞をお聞きするとともに、制作側が把握していない海外での展開を知ることの必要性もまた認識された。

さらに、さきのキックオフのシンポジウムにおけるマルラ俊江氏の報告を継承して、ライブラリアンの立場から、海外の日本資料図書館やデジタル情報環境の調査・研究に携わってきた国際日本文化センターの江上敏哲さん（国際日本文化研究センター資料課）をお招きして、「海外の〈日本リテラシー〉とデジタル・コラボレーションの未来」と題した講演を開催した（2013年7月11日）。

3 ejapanology.tufs.ac.jp の試行

もうひとつの主な取り組みは、課題 iii を実現することである。そこで開設したのが、ejapanology.tufs.ac.jp である。

これは、日本、日本学、日本語などを研究・勉強する世界中の人々との交流の場として、学習機能と SNS 機能の活用を目的とした。そのために Sakai CLE という学習管理プラットフォームを用いた。

ejapanology.tufs.ac.jp には、各ユーザーのマイ・ワークサイトという個人のページがあり、それに、複数のユーザーが参加しているワークサイトを保障される。ワークサイトは例えば、数人の研究者のプロジェクトの情報・資料・ディスカッションを集めたページや、特定のテーマに関する掲示板と参考資料を集めたページからなる。各ユーザーはワークサイトによって権限が異なる。すなわち、あるプロジェクトでは管理者だが、別のプロジェクトのワークサイトでは閲覧しかできない観察者という使い方が可能である。他の使用パターンは、プロジェクト進行中はプロジェクト関係者しかアクセスできないワークサイトを作り、それによって情報交換、レポートの共同作業をする。そして、プロジェクトが終了した後、集積した情報（データ、報告書など）を編集不可能に設定し、ワークサイトを一般公開する。この場合、公開にあたっての条件を設定ができることから、著作権問題や個人情報流出問題を防ぐことができる。

さらに、SNS として、交流サイトを開くことができる。交流のための基本的なツールはメッ

ページ（サイト内の個人・グループメール）とフォーラムとチャット・ルーム（文字によるチャット）である。さらに、そのワークサイトの参加者しかアクセスできないファイル共有のためのツールも備えた。

以下がこのワークサイトの概念図（図2）である。

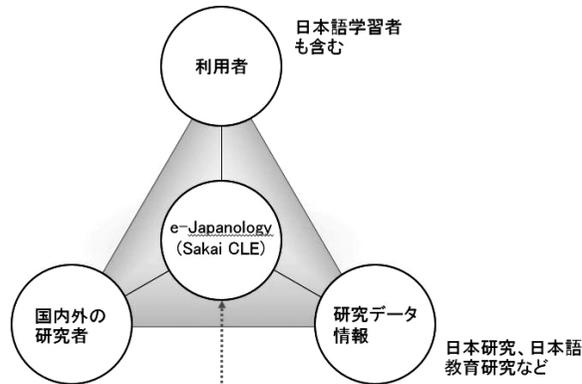


図2 ワークサイトの概念図

初発の構想では、東京外国語大学や他の協力機関が有しているデータベースを ejapanology.tufs.ac.jp のなかの Resources に許可を得てリンクしていくこと、さらに海外の研究機関から、ネット上で教育・研究の交流の希望などがあつたときに、本サイトのチャット・ルームを利用する、などの活動も考えた。そしてその場合には、ユーザーとしての登録も依頼するというものであつた。

佐野研究室と教務補佐によって開設され運営されたこのワークサイトを用いて、有澤は海外大学での講演などの機会を通して、アンケートを配布し、利用を呼び掛けた。また友常も、同様の機会を利用して海外の日本関連の研究者や大学院生に利用を呼び掛けた。ただし、継続的な運用にはいたらなかった。それは多忙で多様な研究活動をこのワークサイトに一元化できないからである。また、集積したデータベースは共同研究者が個人で作成した限定的なものに限られたことや、研究者自身が利用する他のデータベースとのリンクづけができない、大学全体の業務の電子化が進んでいないなどの条件に規定されていたことなどがあげられる。こうした理由で、課題を十分に実現するだけのインセンティブを付加することができなかった。

4 検索技術についての取り組み

上記のワークサイトの試行とともに意識化されたのが、多種多様なデータベースを統合する検索と情報発信基盤の開発である。辻澤隆彦はクローラエンジンの適用という観点からこの課題を実践した。その成果については、辻澤「クローラエンジンを活用した e-Japanology 情報発信基盤の提案」として、『日本語・日本学研究』4号（2014年3月発行）と題して論文化された。利用のイメージ図は図3のようである。

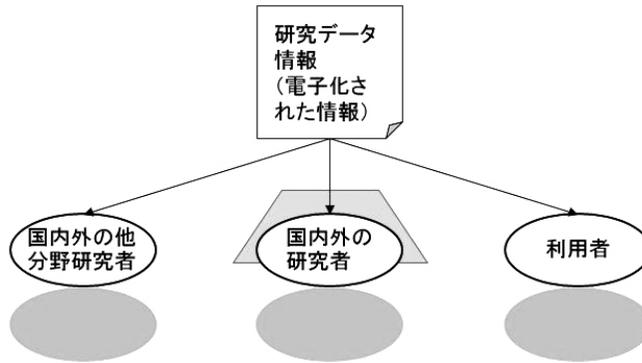
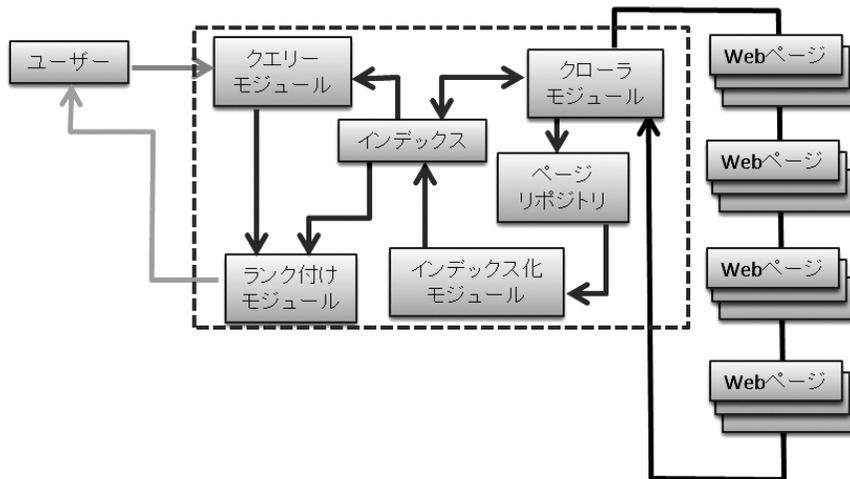


図3 電子データの利用イメージ

辻澤は、Web 検索技術として活用されているクローラエンジンによるデータベース構築技術を活用し、拡充を図っていく第一段階として、Web 図書館コンテンツをインデックス化したテストベッドシステムについて報告している。検索対象とした Web および Web 図書館は近代デジタルライブラリ (<http://kindai.ndl.go.jp/>)・デジタルライブラリ (古典籍) (<http://del.ndl.go.jp/>)・国際日本研究センター Web (<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/jp/index.html>)・京都国際マンガミュージアム (<http://mmsearch.kyotomm.jp/index.html>)・えむえむブログ (<http://d.hatena.ne.jp/kyotomm/>)・Japanese American National Museum (<http://www.janm.org/collections/>)である。

このテストベッドによって、個々の Web 図書館検索ページでの検索に対して、一つの検索窓から複数の Web 図書館情報を検索できることが確認でき、e-Japanology 構想を実現するプラットフォームとしての可能性を示すことができた。辻澤は検索エンジンについて以下のように図解している。

図4 Web 検索エンジンの概要¹

1 辻澤「クローラエンジンを活用した e-Japanology 情報発信基盤の提案」『日本語・日本学研究』4号(2014年3月発行)、200頁。

辻澤によれば、しかしながら、既存の Web ページコンテンツを対象とすると、Web ページによってはクローラをカスタマイズする必要があり、すべての既存ページコンテンツを対象とすることの困難さも明らかになったされた。また、既存のページと今後新規に構築する場合の対応についても述べられていおり、特に、そこで新規に Web ページ構築を行う場合の基本的な考え方について示した。そして以下のように結論している。

オフィス情報システムがそうであるように、クローラエンジン技術とインデックス化によるデータベース構築だけでは依然不十分ではある。今後、研究者の連携情報やサブカルチャー情報から日本語研究情報までの幅広い日本語研究情報を扱うための階層化表示機能など、プラットフォームが持つべき機能についての検討とテストベッドへの実装を通じた評価実験が必要になる。²

5 今後に向けて

本科研は、最終年度に、北海道大学高等教育推進機構・科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP・コーステップ) 特任講師の早岡英介氏をお招きして、「どのように映像制作を学ぶか～大学における映像コミュニケーション教育のあり方～」と題した講演会を開催した (2014年12月2日)。これは、自然科学・自然番組、理科教育番組やドキュメンタリーを制作してきた経験を踏まえて、北海道大学 CoSTEP で映像制作とコミュニケーション教育にたずさわっておられる早岡英介氏に、「映像制作スキルを学ぶ教職員研修」のための講義を実演していただくことを目的とした。「学内の電子化・アクセス環境の整備と実験的な事業を優先すること」という当初の課題にもとづき、実際に映像データを用いた教材作成のノウハウの習得を通して、デジタル環境の垣根をできるだけ取り払おうとするものであった。

あわせて、辻澤隆彦より、「e-Japanology」の後継プロジェクトとして、外国人留学生を対象にした日本理解のための教育とメディアリテラシー教育を大学間の連携により行うラーニングコモンズの実践が提起された。具体的には、①多摩地区の日本学研究教育組織を中心に遠隔講義システムを活用したラーニングコモンズの環境整備、②外国人留学生を対象に、ラーニングコモンズにおいて、日本の代表的コンテンツを主題とした教育とメディア開発および情報発信の実践、③大学間連携によるラーニングコモンズにおける教育の分析と評価である。

早岡氏の講演は、「e-Japanology」の課題に含まれているとともに、上記の次のプロジェクトにむけた足がかりという位置づけも持っている。

この講演会では、さらに、友常より、ejapanology.tufs.ac.jp のワークサイト開設・運営を通して意識された課題についての提起をおこなった。それは、デジタル・コミュニケーション、デジタル・コンテンツへのアクセス度・受容・理解度を向上させるためには、逆説的に

2 同上208頁。

3 菅孝行氏 (元河合塾講師、梅光学院大学特任教授) へのインタビュー (2014年12月1日)。

も、ピア=対面的なフォローを不可欠とするということである。実際、河合塾など大手予備校の実践をリサーチすることで³、ピアなコミュニケーションが、「不安解消・安心保障」という成果をあげていること、そのノウハウが新規に予備校産業に参入した大手予備校のなかで生かされていることなどが確認された。ランニングコモنزの運営にあたっても考慮されなければならない観点であろう。

以上、3年間にわたる科研費基盤研究(C)「e-Japanologyの構築に向けた基礎的研究」の活動を報告した。デジタル環境という観点から見た国際日本学・日本研究をめぐる現状の認識、ワークサイト運営の経験、検索エンジンの実践と開発、そしてそれらの研究実践の教育への展開など、成果とともに、多くの課題を認識することができた。冒頭に提示した「日本学の学術コミュニティ基盤」の実現については、まだその途上にあるが、より具体的なイメージを持つことができるようになったといえよう。共同研究者およびご協力いただいた多くの方々から感謝申し上げたい。なお本稿は科研費にもとづく共同研究と共同作業の報告ではあるが、最終的な文責は友常にある。

参考

科学研究費助成事業 課題番号24500292

研究課題：「e-Japanologyの構築に向けた基礎的研究」

研究期間：平成24年4月～平成27年3月（3年間）

研究グループ

名前	所属
佐野洋	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院
友常勉	東京外国語大学・国際日本研究センター
辻澤隆彦	東京農工大学・総合情報メディアセンター
有澤知乃	東京学芸大学・留学生センター

Report on Basic Research of e-japanology

Tstutomu TOMOTSUNE

Tokyo University of Foreign Studies

【Keywords】 e-Japanology, crawler engine, digital communication,
education for media-literacy

This paper summarizes three years research on the project of establishing a basic structure of e-Japanology by Grant-in-Aid for Scientific Research. The purpose of e-Japanology is to construct the information basis for Japan studies and education in accordance with the development of information technology and its globalized expansion, with using cloud computing technology. Through the research, following results were realized: recognition of actual conditions of International Japan studies/ Japanese studies from the perspective of completing digital circumstances, accumulating experiences of dealing with digital work site, proceeding the skills of crawler research engine, and applying these results to education. In terms of realization of the basis of academic community for Japan studies, this project is still on the way to the goal. However, these experiences provided the basic knowledge to achieve the project of e-Japanology.

夏季セミナー 2014 大学院生サマースクール報告および大学院生報告要旨

2014年7月29日～8月1日にわたって、夏季セミナー2014「言語・文学・社会」が国際日本研究センターの主催のもと、本学を会場に開催された。またこれにあわせて、国内外の大学院生の研究発表会であるサマースクールも開催された。

夏季セミナーは2012年から始まり、今年が3回目であった。今回はゲスト講師として、金鐘徳氏（韓国外国語大学）、蕭幸君氏（台湾東海大学）、任榮哲氏（韓国中央大学校）、タサニー・メーターピスイット氏（タマサート大学）、範淑文氏（国立台湾大学）、徐一平氏（北京外国語大学）、林明珠氏（シンガポール国立大学）、趙華敏氏（北京大学）、于乃明氏（国立政治大学）の各氏。また本学からは早津恵美子氏、高垣敏博氏、谷和明氏、谷口龍子氏、村尾誠一氏、野本京子氏の各教員が講義を担当した。それぞれ言語、文学、社会（教育・歴史も含む）各分野から、現在進行している研究テーマについて、刺激にあふれた講義が行われた。4日間ののべ参加者数は約480名であった。

国内外の大学院生の研究発表会であるサマースクールは2013年から開始されたが、今回は47名の大学院生が参加した。このうちアジアの各大学からは16名（うち、JASSOによる奨学金支援が13名）、国内からは本学学生のほかに、筑波大学、東京学芸大学、国際基督教大学から5名の参加があった。サマースクールは研究領域に応じて4つの教室に分けて行われ、教員によるコメントや助言を含む質疑応答が熱心に交わされた。終了後、アジアから参加した大学院生には、「サマースクール修了証」が発行された。また今回の夏季セミナー・サマースクールは大学院博士前期課程の集中講義「国際日本研究入門Ⅰ・Ⅱ」としても開講された。

さらにサマースクールにあわせて、7月27日、28日、8月2日に、海外から参加した院生を対象としたスタディ・ツアーも開催され、江戸東京博物館、多磨霊園、江戸東京たてももの園などの都内の文化施設や旧蹟を案内した。

サマースクール終了後の7月31日には、本学の円形食堂において、院生懇親会が、立石学長、海外の院生のホームステイに協力いただいた関係者の方々の参加も得て、盛大に開催された。

さらに8月1日は午後からジャーナル国際編集顧問会議が開催され、ジャーナル発行に関する議事のほかに、夏季セミナーについての意見交換も行われた。

夏季セミナーの各講義は国際日本研究センターのHPで見ることができる。

ここには二日間にわたっておこなわれた大学院生の研究発表の要旨を、各セッションの発表順に収録した。（編集委員会）

I 「言語」 ①102室 (2014年7月30日)

- 1 モンコンチャイ アッカラチャイ (東京外国語大学大学院博士後期課程)
名詞句の前に位置する場合のタイ語限定表現 *khêe* と *phiaŋ* の意味的特徴
に関する考察 — 日本語との対照を目指して —
- 2 マグスディ カーヴェ (東京外国語大学大学院博士後期課程)
日本語とペルシア語における動詞の自他交替の対照
- 3 揣迪之 (北京外国語大学北京日本学研究中心博士後期課程)
マーカーに注目する中日感嘆文に関する一考察 — “多么”型と「なんと」
型をめぐって —
- 4 張舒鵬 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
日中両言語における心理状態・属性を表す語のあり方の一考察
- 5 張正 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
複合動詞「-あがる / あげる」と中国語補語“-上”の意味拡張に見る空間
認知の相違
- 6 陳祥 (台湾国立政治大学日本語学科修士課程)
反復形容詞「長々しい」の意味用法についての一考察 — 「長たらしい」
との比較対照 —

発表概要 1

名詞句の前に位置する場合のタイ語限定表現 khêε と phiaŋ の意味的特徴に関する考察

—日本語との対照を目指して—

An Analysis of the Semantic Feature of the Limitation Expressions in Thai, “khêε” and “phiaŋ” Placed before Noun Phrase

— Comparative with Japanese —

モンコンチャイ アッカラチャイ (Akrachai MONGKOLCHAI)

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University of Foreign Studies

【キーワード】 限定表現、非到達性、主観的判断、客観的叙述、意味的特徴

Limitation Expression, Unreachability, Subjective Judgment, Objective Description, Semantic Feature

ある要素が唯一のものであることを示し、同類の他のものを排除するという「限定」の意味を表す場合、日本語では「だけ」「しか」「ばかり」などのとりたて助詞を用いて表す。それに対して、タイ語でこのような意味を表す時には khêε、phiaŋ、têε、chaphá³ などの付属語を用いて表現する。

名詞句の前に置く場合の限定表現 khêε と phiaŋ の意味的特徴については、先行研究においていずれも「ある要素が唯一のものであることを示し、同類のほかのものを排除する」という「限定」の意味を表すとされている。また、khêε と phiaŋ はその他に「価値がない、大したことではない」「限られた程度を超えない」「限られた数量を超えない」という意味も表すとしている。しかし、そのような意味分類は必ずしもこれらの限定表現の言語現象を十分に説明することができるとは限らない。そこで本稿においては、khêε と phiaŋ は対象となる「数量」が話し手のとらえる基準、または一般的な基準を満たさない段階にある場合の「量的非到達性」と、対象となる「事柄」が基準を満たさないととらえられる「質的非到達性」という「非到達性」が特徴的であることを指摘する。「非到達性」という観点から、「数量」と「事柄」を個別にとらえるのではなく連続的にとらえることによって、khêε と phiaŋ の意味的特徴についての的確に説明することができるようになった。

また、khêε と phiaŋ はどちらも「非到達性」を表すが、TNC (Thai National Corpus) から収集したデータによって khêε と phiaŋ の両者が用いられる文の性格の違いがわかった。すなわち、主観的判断文が比較的用いられることの少ない法案や学術論文では khêε がほとんど観察されず、客観的叙述文でよく用いられる phiaŋ の方が多く観察された。

発表概要 2

日本語とペルシア語における動詞の自他交替の対照 A Comparative Study on Transitivity Alternation in Japanese and Persian

マグスディ カーヴェ (Kaveh MAGHSOUDI)

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University of Foreign Studies

【キーワード】 自他交替、自動詞化、複合動詞、能格動詞、受動態
Transitivity Alternation, Intransitivization, Compound Verb,
Ergative Verb, Passive Voice

日本語では、接辞の違いによってペアをなす自動詞・他動詞が多く存在し、結果状態に着目した自動詞構文が卓越している。特に日本語の自動詞化プロセスによって作られた自動詞構文は、英語をはじめ、多くの印欧語族では、自動詞構文ではなく、受身構文や再帰動詞によって現わされる場合がよく見られる。しかし、同じ印欧語族のペルシア語では日本語同様に自動詞・他動詞のペアが多く見られ、有対他動詞が数多く存在する。

本発表は、Jacobsen (1991) の日英自他对応リストにおける -e- 他動詞とその他動詞から派生された -ar- 自動詞のペア (atataam-ar-u/atataam-e-ru, uw-ar-u/u(w)-e-ru 等) を基にし、日本語とペルシア語における自他对応を形態的なレベルで対照し、ペルシア語の自他交替における特徴を考察したものである。データ抽出の際、日本語の -ar- / -e- 自他のペアと同じ意味を持つペルシア語の動詞のうち、最も代表的でプロトタイプ的なものが選択されている。

日本語の -ar- / -e- 自他のペアに相当するペルシア語の動詞は「能格動詞」「使役化」「対応しない」といった幾つかの異なるグループに分けることができる。しかし、比較的にいうと、日本語の -ar- 自動詞がペルシア語では複合動詞の形を取っている自動詞で現われる場合が非常に多い。また、「非動詞成分 + šodan (to become)」(intr.) と「非動詞成分 + kardan (to make)」(tr.) のパターンで作られた複合動詞のペアは全体の半分以上を超えている点が特徴的だと言える。

つまり、日本語の -ar- 自動詞を表すのに、英語では受動態や能格動詞が多く用いられる一方、ペルシア語では日本語の自動詞を自動詞で表すことができる場合が多いが、その自動詞が単純動詞ではなく、複合動詞で表される場合が比較的多い。

参考文献

Jacobsen, Wesley M. (1991) *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Kurosio Publishers.

発表概要 3

マーカーに注目する中日感嘆文に関する一考察
 —“多么”型と「なんと」型をめぐって—

A Marker-based Study on Exclamatory Sentences
 in Chinese and Japanese
 — Focused on “DUOME” Type and “NANTO” Type

揣迪之 (Dizhi CHUAI)

北京外国語大学北京日本学研究センター博士後期課程
 Beijing Foreign Studies University

【キーワード】 感嘆文、多么、なんと、使用条件、中日対照
 Exclamatory Sentence, DUOME, NANTO, Usage Conditions,
 Chinese-Japanese Comparison

日本語の「なんと美しい花だろう」という文に対応する中国語が“多么漂亮的花啊”という文である。前者は「なんと」型感嘆文と呼び、後者は“多么”型感嘆文と呼ぶ。両者とも両言語における典型的な感嘆文であり、その間に存在する意味上と使用上の対応から、中国語を母語とする学習者は両者が完全な対応関係にあると考えがちなのである。

中国の大学で広く使用されている数種類の教科書および日本語で書かれた中国語の文法書を調査した結果、一方を用いて他方を説明することと「両者が相当する」というような解釈は多く見られる一方、両者の違いを含めたそれ以外の説明は一切ない。実際この二種類の表現に不対称な点が存在することに気づき、本稿は先行研究の指摘を踏まえ、中日対訳コーパス、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)、北京大学中国語言語学研究中心コーパス(CCLコーパス)からの例文を手がかりに考察を行い、以下のような結論を示唆した。

一.“多么”型感嘆文は意見を発表し、他者に関わろうとする伝達性があり、発話時の姿勢も含めて開放的な表現である。一方、「なんと」型感嘆文の発話では、話し手があくまで畏敬か拒絶かで距離を置き、または程度の甚だしさに圧倒されて接近する余裕がないまま、感動のことは放つ伝達性が薄く、言わば閉鎖的な表現である。

二.“多么”型感嘆文は非現実な内容に対応できるのに対し、「なんと」型感嘆文は対応できない。ただ、コーパスから数例の非現実な内容を扱う「なんと」型感嘆文が見られるため、この点は規則ではなく、原則として理解したほうがよいと考える。

三.「なんと」型感嘆文は必ず名詞を文の中心に据える一方、“多么”型感嘆文は、「属性概念を表す語+名詞」の構造でも、「属性概念を表す語」だけでも成り立つ。

四.人間の感情および欲求の程度が甚だしい場合、“多么”型感嘆文で表現できるのに対し、「なんと」型感嘆文では表現できない。

本稿の議論を概観すると、“多么”型感嘆文は「なんと」型感嘆文に比べ、使用上により包括的である。

発表概要 4

日中両言語における心理状態・属性を表す語のあり方の一考察

A Research on the Polysemous Meaning of Mental State Predicates in Japanese and Chinese

張舒鵬 (Shupeng ZHANG)

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 心理状態述語、多義的意味、対照研究、日本語、中国語
Mental State Predicate, Polysemous Meaning, Contrastive
Study Japanese, Chinese

日本語では「あわれだ—あわれむ」のような、語基を共有する形容詞—動詞のペアがあり、それぞれ述語になる時に次のような文を作る。

- 1) 戦争に巻き込まれた人々は実に哀れだ。
- 2) 彼女は戦争で親をなくしてしまった太郎を憐れんで引き取った。
一方、中国語の「可怜(かわいそうだ—同情する)」でも、次のような文を作ることができる。
- 3) 娘儿俩无依无靠真可怜。(親子2人は頼るものもなく本当にかわいそうだ。)
- 4) 他这是自作自受, 没人可怜他。(これは彼の自業自得だ。誰も彼に同情しない。)

このように、日中両言語においては、同じ語(日本語の場合は語基・語根を共有する形容詞・動詞のペア)を用いて、人間の心理状態(または生理感覚)と物事の属性の両方を表しうると考えられる。

本発表では、この現象に注目し、上記現象が見られるような語(または語のペア)を研究対象として、それらの語が述語になる時の、文に現れる名詞項目対述語の意味役割に基づく構文パターンの観点から、これらの語の多義のあり方を類型化した。なお、名詞項目の意味役割を確認する手段として、コーパス(日本語では『現代日本語均衡コーパス(BCCWJ)』、中国語では『CCL(北京大学中国语言学研究中心)語料庫』)を利用した。類型化した結果、述語となるときの構文パターンのあり方により、研究対象の語(または語のペア)は日本語では3つのグループ、中国語では5つのグループに分かれることがわかった。

参考文献

- 国立国語研究所(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
朱德熙(1982)『语法讲义』商务印书馆

発表概要 5

複合動詞「-あがる / あげる」と中国語補語“-上”の
意味拡張に見る空間認知の相違

A Study on Differences in Spatial Cognition as seen in Semantic Extension of Compound Verbs 「-agaru/ageru」 and Chinese Verb-Complement Structure “-shang”

張正 (Zheng ZHANG)

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 空間移動、上昇、時間、意味拡張、空間認知
Spatial Motion, Rise, Time, Semantic Extension, Spatial Cognition

日中両言語において、上昇を表す複合動詞の後項はそれぞれの代表として「-あがる / あげる」と“-上”が挙げられる。両者は「上への移動」という基本義を持っており、派生義において、いずれも時間に関わるものがある。「-あがる / あげる」と“-上”は空間から時間へ拡張する点で共通点を持っているが、時間に関わる派生義の中身において相違点が見られる。

複合動詞「-あがる / あげる」は完了・完成の意味を表すとき、プロトタイプの意味の中「うえ」という要素が「良い結果状態」に転換される。即ち UP=GOOD という意味へ拡張する。一方、中国語の補語成分“-上”は、結果意味を表すとき、「-あがる / あげる」と同様に、GOOD という「良い評価」に結びついている。このように、日本語においても、中国語においても、「うえ」から「良い」へ拡張するという派生の原理は同じであることが分かる。

しかし、結果意味において、“-上”は、「(達成しにくい) 目的をやっとのことで達成した」という意味を表し、「到達」TO のイメージが強い。また、時間に関わる派生義において、“-上”は「開始」を表すこともできる。「開始」を表す場合は、「うえ」が水平の「まえ」に転換され、前へ進み、到達するという具体的な空間移動から、新たな状態に移るといった抽象的な意味へ拡張し、「開始」の意味が派生される。このように、「開始」の意味においても、「到達」という TO のイメージがはっきりしている。

以上、日本語の複合動詞「-あがる / あげる」における時間に関わる派生義は、プロトタイプの意味に含まれている UP という概念から派生されると考えられる。中国語の“-上”における時間に関わる派生義が到達点を表す TO という概念から派生されると考えられる。

発表概要 6

反復形容詞「長々しい」の意味用法についての一考察 —「長たらしい」との比較対照—

A Study of the Semantic Usage of the Reduplicated Adjective “Naganagashii”: Comparison with “Nagatarashii”

陳祥 (Chen Hsiang)

台湾国立政治大学日本語学科修士課程

National Cheng chi University for Foreign Studies

【キーワード】 長々しい、長たらしい、意味用法、比較対照、共起関係
Naganagashii, Ngatarashii, Semantics, Comparison and Con-
trast, Co-occurrence Information

本研究は、「長々しい」と同じ語基「長」を持つ「長たらしい」の意味用法を中心に考察するものである。まず、辞書における意味用法を調べた。次に BCCWJ を利用し、「長々しい」と「長たらしい」の用例をそれぞれ抽出し、「長々しい」と「長たらしい」との共起関係や意味用法などの相違を検討した。主な考察結果は以下のようである。

①辞書での意味解釈を調べた結果は「長々しい」と「長たらしい」の意味範疇が異なることが分かる。「長々しい」は、具体的な「長さ」と抽象的かつややマイナスのイメージを表すのに対し、「長たらしい」は「マイナスや嫌な」などの抽象的な意味合いしか表さない。

② BCCWJ から抽出した用例を分析した結果、「長々しい」は13例のうち、終止形がもつとも少なく、連体形と連用形の用法はそれぞれ6例ある。この現象は「長たらしい」にも見られる。「長たらしい」の用例数は合計16であり、そのうち、連体形は12例で、連用形は4例であるが、終止形は一例もない。

③「長々しい」と共起しやすい言葉は「説明、話、言い訳」などの伝達を表す名詞である。そして、「長々しく」と共起しやすい言葉は、「解釈する、述べる、言う」などの伝達行動を表す動詞である。それに対して、「長たらしい」はマイナスイメージを持つ「論争、詫び言、飽き飽きする」などの言葉と共起しやすい傾向が見られる。

④「長々しい」と「長たらしい」の意味用法について、「長々しい」の意味用法は次のようにまとめられる。

- (1) 具体的な「長さ」であり、「非常に長い」という強調の意味を表す。
- (2) 具体的な「長さ」と抽象的な「ややマイナスイメージ」を表す。
- (3) 「簡明ではない」などのような抽象的意味を表し、「マイナスのイメージ」が含まれている。

それに対して、「長たらしい」の意味用法として次のようにまとめられる。

- (1) 「長々しい」よりマイナスの感情を強く表すが、置き換えられる場合が見られる。
- (2) 「ややマイナスイメージ」の用例が多い、「強いマイナスイメージ」と「マイナスイメージなし」の用例もある。

II 「言語」②103室(2014年7月31日)

- 1 ツォイ エカテリーナ(東京外国語大学大学院博士後期課程)
三者間の共同作業における言語行動 — 親疎関係による課題達成および対人関係調整の相互行為 —
- 2 大西秀幸(東京外国語大学大学院博士後期課程)
日本語とビルマ語の言いさし文に関する対照研究
- 3 孫思琦(筑波大学大学院博士後期課程)
発話行為理論から見た文末の接続表現の用法 — カラ・ケド・シを中心に
- 4 宗甜甜(東京学芸大学大学院博士前期課程)
日中両言語における再依頼に対する断り表現
- 5 鄔海宁(北京大学大学院博士後期課程)
視覚動詞「see」の対訳から見る中日の差異 — 認知スタンスを中心に
- 6 ウマロヴァ ムノジャット(筑波大学大学院博士前期課程研究生)
「依頼」会話に見られる談話展開のパターン — ウズベク人と日本人の接触場面の考察 —

発表概要 1

三者間の共同作業における言語行動

— 親疎関係による課題達成および対人関係調整の相互行為 —

Linguistic Behavior in the Situation of Cooperative Work
between Three Persons— Task Completion Oriented interaction and Personal Relation Oriented
Interaction Caused by Different Social Distance of Participants —

ツォイ エカテリーナ (Ekaterina TSOY)

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University of Foreign Studies

【キーワード】 談話分析、言語行動、三者間会話、親疎関係、共同作業
Discourse Analysis, Linguistic Behavior, Conversation
between 3 Persons, Social Distance, Cooperative Work

人間は社会的存在であり、日常生活で他の社会成員と接する中で共同の作業に取り組むことが多い。その際には、直接課題達成に関する相互行為や対人関係に関する相互行為が行われる。本研究では、友人同士と初対面という異なる関係が存在する三者間会話データを用い、共同作業における言語行動や参加者の親疎関係の差による相互行為を分析した。

共同作業の会話は「課題確認」—「課題達成方法の確定」—「ストーリー作成」—「ストーリー確定」という流れで展開していた。「課題確認」の談話では、主に「推進」の言語行動が行われた。発話内容としては課題の確認であったが、観察された相互行為では、初対面の参加者と接触を試みる対人関係の調整が行われた。

「ストーリー作成」では、先行の提案と関連して新しい提案を提示する「引き継ぎ作成」、新しい提案を提示せずに先行の提案を発展させる「補助作成」、一人の話者が次々に出す提案に他の話者が同意する「単独作成」、という3パターンの課題達成の相互行為が見られた。「ストーリー作成」では、「提案」は、初対面の参加者が作業に入るための手段となっていた。一方、「検討」や「コメント」は、共感を表す言語行動として友人同士の対人調整の相互行為に多く見られた。

「課題達成方法の確定」と「ストーリー確定」の部分では、友人間の対人調整の相互行為が顕著に表れた。どのように課題を達成するか、最終的にどのようなストーリーにするかを決める際に友人同士の話者が互いにサポートを得ながら活動を推進していた。活動を推進する際に、友人のサポートがあるかないかで談話の流れが大きく左右されるので、「友人同士のサポート」という対人調整の相互行為が共同作業において重要となる。

発表概要 2

日本語とビルマ語の言いさし文に関する対照研究
Insubordination in Burmese
—Comparative with Japanese—

大西秀幸 (Hideyuki ONISHI)

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 対照研究、言いさし文、原因・理由、行為要求、打ち明け
Contrastive Study, Insubordination, Cause-Reason, Directives,
Utterance

日本語の助詞「から」とチベット=ビルマ系言語のひとつであるビルマ語の助詞 *lo* は、原因・理由を表す従属節を導くという機能を持ちながら文末にも実現し、所謂「言いさし文」を形成しようという点で、その意味と分布の仕方において類似している。本発表では、両者が文末に現れた場合に表される意味にも、一定の類似性があるのではないかという仮説を立て、実際の使用パターンから、「から/*lo*. 言いさし文」の用例を収集し、両者の異同を観察した。

日本語の「から言いさし文」には、聞き手に対する行為要求（要求が暗示されていたとしても）に、その要求を受け入れてもらいやすくするために追加的に条件を提示するような例、あるいは自己納得を表すような例がみられるが、いずれも（客観的には因果関係が見い出せなかったとしても）二つの事柄に対して、話し手が主観的に因果関係を持たせようとする機能の表出といえる。

ビルマ語の *lo*. 言いさし文においても「行為要求のための条件提示」、「自己納得」を表すような用例は観察できる。一方で、ビルマ語の *lo*. 言いさし文には、話し手が因果関係を持たせようとしないうような「打ち明け」の文脈で用いられる独特の機能がある。

以上の観察から、日本語の「から言いさし文」にも、「ビルマ語の *lo*. 言いさし文」にも因果関係を、話し手の主観によって主張し、聞き手や話し手自身を納得させる（且つ自分の要求を通そうとする）といった機能は認められるものの、ビルマ語の「*lo*. 言いさし文」は、必ずしも相手への要求を前提にせず自己の気持ちを打ち明けることを表現する機能も併せ持っているといえる。

発表概要 3

発話行為理論から見た文末の接続表現の用法

— カラ・ケド・シを中心に —

Reviewing the Usage of Japanese Conjunctions
from the Viewpoint of Speech Act Theory:
Sentence-Final Expressions of “kara,” “kedo,” “si”

孫思琦 (siqi SUN)

筑波大学大学院博士後期課程

University of Tsukuba

【キーワード】 発話内行為、文末表現、否定的感情、意図
Illocutionary Commitment, Sentence-final Expression,
Negative Emotion, Intention

本研究は、従来の日本語研究で十分な説明がなされていない文末のカラ・ケド・シを研究対象にして、オースティン（1962）とサール（1979）の発話行為理論を用いて、文中用法との相違を追究したところ、文末のカラ・ケド・シは、発話者の不満や否定的な態度が含意されるという新たな用法を持つことがわかった。

考察の方法として、テレビドラマ11話から抽出した用例を用い、カラ・ケド・シの前後に出現した「発話内行為」に注目する。主節に相当する内容が直接に現れない文末のカラ・ケド・シについて、文脈に照り合わせて主節の内容を再現する手続きをとった。

考察の結果、国立国語研究所（1951）などの指摘通り、文中、文末のカラとも「原因・理由・根拠」を表わすことができるが、主節がうまく再現できない文末のカラは話者の反論や苛立ちを表わすという、否定的な強い個人主張を相手に押し付ける特徴が見られる。一方、ケドは文中、文末を問わず、白川（2009）でも指摘されているように関連情報を追加する用法を持っているが、主節が再現できなかったケドは相手の考え方、もしくは行為上の変化を求めるといふ発話者の意図が読み取れる。シは文中にも文末にも話者の主張を聞き手に納得させるために説得性のある根拠を示す用法が主流であるが、主節が再現できない文末のシは発話者の不満が含意され、反論または否定的な態度表明を行う傾向が見られる。

カラ・ケド・シは従来、主節と従属節の間に使用される表現と見られ、論理関係を表わすとされてきたが、本研究の考察を通して、いずれも文末に用いられる場合に新たな否定的態度表明の用法も獲得していることが明らかになった。

発表概要 4

日中両言語における再依頼に対する断り表現 Refusal of Re-requests in Japanese and Chinese

宗甜甜 (Tiantian ZONG)

東京学芸大学大学院博士前期課程

Tokyo Gakugei University

【キーワード】 断り方、対照研究、ロールプレイ、上下関係、親疎関係
Refusal, Contrastive Study, Roll-play, Closeness Relationship,
Hierarchical Relationship

森山(1990)は、断り行為は最も相手に不快感を与える行為で、対人関係上の障害が生じないように配慮すべきだと述べている。断り表現は適切さを欠くとき、両者間の人間関係は危険性をもつことにもなりかねない(文2004)。そこで、中国人日本語学習者がどのような点に配慮して断りを行う必要があるか明らかにすることとした。本研究では、日本語母語話者(JS)と中国語母語話者(CS)がそれぞれどのように断りをするのかを探り、その共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

これまでの「断り」に関する先行研究は、調査紙を用いた談話完成テストによる方法で行われたものが多く、実際の会話の分析による研究は少ない。そこで、本研究は、より自然な会話を収集することができるロールプレイを用いることにした。断る相手との上下・親疎関係によって断りストラテジーが中国語と日本語でどのように異なるかを考察するため、「親しい先輩からの依頼」「親しくない先輩からの依頼」「親しい同輩からの依頼」「親しくない同輩からの依頼」の4場面を設定し、調査を行った。上記の四つの場面について、それぞれ3人のCSから断りデータを収集した。JSからも、同様に調査を行い、CS12件、JS12件、計24件のデータを収集した。

分析の結果、CSは、親しくない人からの依頼に対しては、相手の年齢にかかわらず、直接断るが、親しい人に対しては、依頼内容の確認、理由の陳述、代案の提示などにより、関係維持を考慮しながら断ることが明らかになった。一方、JSが比較的はっきり断るのは親しい同輩のみであった。したがって、断りの言語行動において、中国語母語話者は親疎関係を重視するのに対し、日本語母語話者は親疎関係、上下関係ともに配慮することが明らかになった。一回断った後再依頼された場合は、CSは代案を提示し、他の方法を考えて問題解決を試みようとするのに対し、JSは謝罪をし、断ることに対して詫げる傾向があることが明らかになった。

発表概要 5

視覚動詞「see」の対訳から見る中日の差異 — 認知スタンスを中心に

Distinction between Chinese and Japanese from the Perspective of Translating the Verbs of Vision 'See': by Focusing on Cognition

鄔海庁 (WU Haiting)
北京大学大学院博士後期課程
Peking University

【キーワード】 視覚動詞、視覚者、主観的事態把握、対照研究
Visual Verb, Observer, Subjective Construal, Comparative Analysis

池上 (2013) では、主観的事態把握の言語的指標として、<知覚者のゼロ化>と<知覚行為 (動詞) のゼロ化>が指摘されている。本研究ではヘミングウェイの名作『老人と海』の中日訳本を調査対象として、データの分析を踏まえ、視覚動詞「see」の対訳からアプローチして、語彙レベルの比較も交えながら、事態把握における中日両国の話者の認知スタンスの傾きを探ってみたい。

本調査のデータにより、『老人と海』における原形の「see」、過去形の「saw」と過去分詞形の「seen」を合わせて合計128語を数えている。使用数のトップ三位については、中国語の場合は、“看见”、“看”と“见”、日本語の場合は「見える」、「見る」、「目撃する」であることがわかった。日本語の訳語は豊かで、複合動詞、慣用句及び慣用表現が愛用されているが、脱落することもよく見られる。一方、中国語のほうは対応する動詞が限られているし、動詞の脱落化も四例のみである。

また、各バージョンにおける「知覚者抜きの状況描写文」は、主に二種類に分けられ、件数は以下のように示されている。

1 視覚者と視覚動詞の完全ゼロ化

	福田恒存訳	中山善行訳	呉勞訳	張愛玲訳
件数	3	1	0	0

2 視覚者と視覚動詞の不完全ゼロ化

	福田恒存訳	中山善行訳	呉勞訳	張愛玲訳
件数	2	4	0	0

日本語の話者は、老人に<自己投入>して舞台の中心 (オンステージ) に位置づけ、見られる情景だけを語っているので、自分を言語化する必要もなくなるが、中国語の話者は英語の話者と同じく、常に老人が演じていることを舞台の下から眺めている。

視覚者と視覚動詞の抜きにアプローチして見れば、恐らく英語話者と同じく、中国語話者は<主客対立>的な事態把握をしやすい。

発表概要 6

「依頼」会話に見られる談話展開のパターン
— ウズベク人と日本人の接触場面の考察 —

The Pattern of the Discourse Development in “Request” in
Contact Situations of Uzbek and Japanese

ウマロヴァ ムノジャット (Umarova MUNOJOT)

筑波大学大学院 博士前期課程研究生

University of Tsukuba

【キーワード】 談話構造、話段、意図理解

Discourse Structure, Story Unit, Utterance Interpretation

本発表では日本人とウズベク人の実際のコミュニケーション上で起こる摩擦を「車を借りる依頼」を対象に考察した。その結果、両言語における談話構造や方略が異なることを主張した。

猪崎(2000)は日本語の「依頼」の談話構造を〈依頼への予告〉〈依頼への先行発話〉〈先行発話応答〉〈依頼〉〈依頼応答〉の5つの話段に分けている。一方、ウズベク語における「依頼」の談話構造は〈依頼への先行発話〉〈先行発話応答〉〈予告〉〈依頼〉〈依頼応答〉の展開になり、最初の3つの話段の出現順に差異が見られた。また、こうした談話構造以外にも、両言語に異なる談話方略も観察された。ウズベク語では、相手の負担が大きいものほど直接依頼するのは失礼で自分の事情を述べたり、相手の事情を確認したりするなど、より婉曲的な表現を使い、依頼を暗示的に行う方略を好む。一方、日本語の場合は、「お願いがあるんですけど」などと依頼の予告を行い、その後続く発話は依頼に関するもので依頼会話全体を明示的に行うが、依頼の発話事態を暗示的に行う方略を好むのである。

このような談話構造や方略の差異を踏まえ、ウズベク人と日本人の接触場面を分析した結果、両言語には依頼の始まりの話段構造と〈先行発話〉、〈予告〉の機能に違いがあることが分かった。ウズベク語では、依頼は〈先行発話〉から始まり、〈先行発話〉を用いて暗示的に依頼し、意図理解を促すのに対して、日本語では、〈依頼〉は〈予告〉から始まり、〈予告〉を用いることで意図理解を促すのである。日本人にとって〈先行発話〉はただの事実を述べるにすぎず、〈先行発話〉を〈依頼〉と見なさない。両言語で〈先行発話〉と〈予告〉の機能と出現順が異なるため、期待のずれが生じたのである。このような誤解を生まないよう、目標言語の学習において、上記の要因を含めて教育が行われることが望ましいと主張する。

参考文献

- 猪崎(2000)「接触場面における『依頼』のストラテジー—日本人とフランス人日本語学習者の場合—」 『世界の日本語教育』 10

Ⅲ 「言語」 ③106室 (2014年7月31日)

- 1 トゥザ ライン (東京外国語大学大学院博士後期課程)
日本語とビルマ語の主語を表す助詞について — 日本語の「は」、「が」とビルマ語の「hà」、「kà」を中心に—
- 2 川村駿 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
「NP1の NP2」の用法：‘NP2 of NP1’の誤用と英語名詞句との対照的視点から
- 3 徐園園 (北京大学大学院博士後期課程)
「のに」の言いさし文について
- 4 荒川和仁 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
日本語と英語の時制 — 学習者の誤用に見られる時制・アスペクトスキーマ —
- 5 ハルナザロフ マムルジョン (東京外国語大学大学院博士後期課程)
ウズベク語の愛称形成について — 日本語との対照的観点から —

発表概要 1

日本語とビルマ語の主語を表す助詞について
 ー日本語の「は」、「が」とビルマ語の「hà」、「kâ」を中心にー
 A Study of Particles of Representing the Subject of
 Japanese and Burmese:
 by Focusing on “ha”, “ga” in Japanese and “hà”, “kâ” in Burmese

Thuzar Hlaing (トゥザ ライン)
 東京外国語大学大学院博士後期課程
 Tokyo University of Foreign Studies

【キーワード】 助詞、主題、主語、主格、無標
 Particle, Topic, Subject, Nominative, Unmarked

ビルマ語はSOV型であり、名詞類の文法関係などが後置詞によって標示されるなど日本語によく似ている。そのため、両言語における対照研究もなされている。本発表は、日本語とビルマ語の主語を表す助詞、「は、が」と「hà、kâ」の類似点と相違点を野田尚史(1996)の5つの原理から考察したものである。主に加藤昌彦(1997)の主張について再検討し、ビルマ語のkâは日本語の「は」または「が」に相当するが、hàは判断文の場合のみに日本語の「は」に相当することを論じたい。

日本語の「は」は基本的に主題を表し、「が」は主語を表すが、ビルマ語はいずれの場合もkâを用いるのが一般的である。判断文と現象文の原理では、日本語の場合、判断文には「は」、現象文には「が」を用いる。ビルマ語も判断文にはhàを用いるが、現象文には無標で表す。ただ、hàが判断文以外で見られる場合は単なる「見かけの口語」(澤田英夫: PC)と解釈すべきである。文と節の原理では、日本語の場合、主格が文末までかかるときは「は」、節の中は「が」を用いる。これに対し、ビルマ語のhàとkâをこのように文と節の原理で説明することは難しい。対比と排他の原理では、日本語は、対比のときは「は」、排他のときは「が」が使われる。が、ビルマ語はいずれの場合もkâが使われる。旧情報と新情報の原理及び指定と指定の原理では、日本語の場合、旧情報には「は」、新情報には「が」が使用され、指定には「は」、指定には「は」か「が」が使用される。一方、ビルマ語はそのような区別がなく、いずれの場合もkâが使用される。

以上、よく似ていると思われる「は」とhàの類似点は判断文の場合のみであり、「が」とkâの類似点も排他の場合のみである。相違点は、現象文では日本語は「が」で表すが、ビルマ語は無標で表す。このように、現象文での無標で表される場合を除き、ビルマ語のkâは日本語の「は」または「が」に相当し、hàは判断文の場合のみに日本語の「は」と相当する。

発表概要 2

「NP₁のNP₂」の用法
 ‘NP₂ of NP₁’の誤用と英語名詞句との対照的視点から
 On the Usage of ‘NP₂ of NP₁’
 from the Contrastive Perspective of the Error of ‘NP₂ of NP₁’
 and English Noun Phrase

川村駿 (Shun KAWAMURA)

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University of Foreign Studies

【キーワード】 日英対照研究、学習者誤用コーパス、「NP₁のNP₂」
 Contrastive Linguistics between Japanese and English, Learners’ Error Corpus, “NP₁ no NP₂”, “NP₂ of NP₁”

国際日本研究センター HP 上にて公開されている「オンライン英作文学習者コーパス・誤用辞典」にて日本人英語学習者の前置詞に関する誤用を検索すると、“of”に関する誤用が165件表示され、その数が特に多い。本発表ではこの“of”の誤用の内、名詞句と名詞句をつなぐ“NP₂ of NP₁”の用法に関する誤用に着目し、正用コーパスである“Corpus of Contemporary American English (COCA)”上での用法と比較しつつ、日本語の「NP₁のNP₂」の用法との対照研究を行なった。

誤用コーパスで見られた“of”に関する誤用の例として、“the examination of(→for) a private school” “trains of(→in) Japan”などがある。これらは日本語だと「私立大学の試験」「日本の電車」といったように「の」を用いて表現可能な名詞句であるが、ここでは「の」と同じ用法として“of”が用いられ、誤用とされている。この“NP₂ of NP₁”のNP₂と“of”の共起関係についてCOCAで検索すると、どれも多く検出されるためコロケーション自体に誤用があるわけではないと分かる。そこでこれらの語が“of”と共起する場合と共起しない場合でのNP₂とNP₁の関係性を調査すると、“of”が使用される場合は「名詞句NP₂が持つ意味を完成させるために必要となる要素」がNP₁に共起し、“of”以外の前置詞が用いられる場合は「NP₂にとって副次的な要素」がNP₁と共起する傾向があることが分かった。これらの区別は西山(2003)の「NP₁のNP₂」の分類の内、前者はタイプ[D]と、後者はタイプ[A]と類似しており、日本語ではどちらにも「の」を用いるが英語では“of”とそれ以外の前置詞で区別するといった違いがあると考えられる。

日本語の「の」は英語の“of”よりも用法が広く、必ずしも同様に扱うことは出来ないが、学習者の多くはこれらの区別を考慮することなく「of = の」で認識してしまっている事が多く、“of”の誤用が多く発生する原因となっていると考えられる。今後は英語教育の場において“of”の用法はもちろん、日本語の「の」との比較対照した用法や表現内容の違いなどの指導も望まれる。

参考文献

西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論 —指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房

発表概要 3

「のに」の言いさし文について

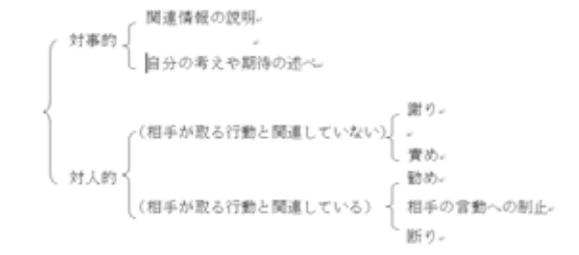
On the “Unfinished” Sentence with “Noni”

徐園園 (Yuanyuan XU)
 北京大学大学院博士後期課程
 Peking University

【キーワード】 「のに」、言いさし文、談話機能、発話意図、意味構造
 “Noni”, “Unfinished” Sentence, Discourse Function,
 Speaker’s Intention, Semantic Structure

現代日本語の「のに」は逆接の接続助詞として扱われることが多いが、実際の談話において、「のに」節のみで終了した「言いさし文」もしばしば見られる。長い間、「のに」について、日本語学習者は接続助詞としての用法を教えられたことが多く、終助詞としての用法を提示されても、予想に反した意外な気持ちや期待外れの不満というような不用意な説明が多いため、「のに」節による言いさし文は具体的な談話においてどんな機能をしているのかについて、解釈や使用が困難なところが少なくない。そのため、本発表の目的といえば、「のに」節による言いさし文の談話における機能を記述し、それは具体的にどのような発話意図を表せるのか、その意味構造をどうまとめればいいのかを明らかにしたい。

本発表において「のに」による言いさし文を研究対象に、小説やシナリオからその実例を収集して分析した結果、その談話機能は対事的な機能と対人的な機能に大別でき、また、対人的な機能に関して「相手取る行動と関連しているかどうか」という基準でさらに細分できることがわかった。「のに」の言いさし文の用法と各用法間の関係を整理すると、以下のよう示す。



さらに、その分析を踏まえ、「のに」による言いさし文の意味構造を「[p のに]で予想・期待が生じてくる合理性を強調することにより、相手の注意を現実の事態へ向けさせ、話し手の感情や態度（対事的、対人的）を表す」というようにまとめた。

発表概要 4

日本語と英語の時制

—学習者の誤用に見られる時制・アスペクトスキーマ—

Tenses and Aspects in Japanese and English:
an Analysis of Misuses by Japanese Learners of English

荒川和仁 (Kazuhito ARAKAWA)

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University of Foreign Studies

【キーワード】 誤用、テンス、アスペクト、学習者コーパス、英語教育
Misuses, Tenses, Aspects, Learner Corpus, English pedagogy

本発表では、2011年度の東京外国語大学の授業において収集された英語エッセイデータ(338ファイル、121,999語、執筆者70名)を活用し、日本語を母語とする上級英語学習者の持つ英語の時制スキーマについて考察する。誤用のカテゴリー分類とその分析から、英語教育への示唆を得ることが目的である。

Celce-Murcia et al. (1983) の時制分類に従い、本研究では3つのテンス(現在、過去、未来)と4つのアスペクト(単純、完了、進行、完了進行)の組み合わせを対象とし、誤用を抽出した。得られた295の誤用について、添削前と後で使用されている時制表現をもとにカテゴリー分類したところ、上位5カテゴリー(誤用全体の70%以上を占める)は単純現在、あるいは単純過去による誤用であると分かった。対照的に、完了の誤用は約10%にとどまった。

単純現在、単純過去による誤用の原因について、日本語と英語における時制表現を対照し検証した。まず、日本語での過去表現(動詞のタ形)は、過去の出来事の結果状態が今に維持されていることを表すことができる。そのため日本語母語話者は、英語でも単純過去によって行為・出来事の結果が残っている現在の状態を表そうとする。このような誤用例が多く見られた。

現在時制に関しては、同一文内で2つ以上の動詞が使用されている場合の誤用が顕著であった。英語では、主節動詞の時制を基準とし、従属する動詞の時制をそれとの相対的な関係性の中で決定する。しかし、日本語にはそのような時制を決定する規則はなく、現在も未来も同じ表現(動詞のル形)を用いて表せるため、このような誤用が起きたと考えられる。

本研究の結果から、日本語を母語とする上級英語学習者の誤用傾向と特徴的な要因が分かった。時制表現の教育的示唆として、カテゴリーを基に文法項目をペアにした指導、日英語の時制スキーマの違いへの注意などが挙げられる。特に、誤用の大半を占める5カテゴリーに留意し、単純現在及び単純過去の指導を充実させることが必要だと考えられる。

発表概要 5

ウズベク語の愛称形成について

—日本語との対照的観点から—

On the Terms of Endearment in Uzbek:

by Comparison with Japanese

Halnazarov Maamoorjon (ハルナザロフ マムルジョン)

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University of Foreign Studies

【キーワード】 対象言語学、愛称、ニックネーム、省略、接尾語
Contrastive Linguistics, Terms of Endearment, Nickname,
Abbreviated Form, Suffix

本発表では、友人などに対する呼び方としての愛称の形成法について、日本語とウズベク語の類似点と相違点を検討する。今回はウズベク語の愛称形成法の実態調査とその結果の検討が中心であり、日本語については安富雄平氏らの調査結果から得た例の検討に留まる。

調査は、ウズベク語母語話者14名を対象に、ウズベク人の名前492例を示し、それに対して回答者が知っている愛称形を回答してもらおうという形で実施したものである。調査によって収集した愛称形の実例をもとに構成法を分析した。調査の結果、ウズベク語の愛称は、大きく省略によるものと、接辞添加によるものの2種類に分かれることが分かった。また、ウズベク語の愛称を形成する接辞としては、従来指摘されていない3つの接辞が認められた。

日本語の愛称形成法と対照すると、共通に認められるのは省略と接辞添加による愛称形成である。また、日本語の愛称は姓・名両方から作られるが、ウズベク語の愛称は名からのみ作られ、姓からは作られない。

IV 「日本語教育・教育」 ①103室 (2014年7月30日)

- 1 白井直也 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
日本のアニメーションは海外でどのように日本語学習に用いられてきたのか — 元学習者へのインタビューからみる1980年代、1990年代のアニメーションを用いた日本語学習の実態 —
- 2 王睿琪 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
聴解ストラテジーに対する意識調査 — 台湾人日本語学習者を対象に —
- 3 張学博 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
日本語の「が」と中国語の「一個」における空間認知と事態把握 — 中国語の誤用コーパスからみた日本語の特質 —
- 4 ナンティポーン チャンチャルーン (タマサート大学大学院修士課程)
タイ人日本語学習者における接続表現としての「て形」の理解と運用能力
- 5 斎藤奈菜子 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
日本語学習者のスピーチレベルに関する考察 — スピーチレベルの設定に資する効果的な教材の作成に向けて —
- 6 金智善 (韓国外国語大学大学院博士前期課程)
韓国人日本語学習者における無声破擦音「つ」の発音に関する一考察

発表概要 1

日本のアニメーションは海外で
どのように日本語学習に用いられてきたのか
—元学習者へのインタビューからみる1980年代、1990年代の

アニメーションを用いた日本語学習の実態—

Historical Research on Oversea Japanese Language
Education through Japanese Animation:
by Analysing of Japanese Learning Practices with Japanese Animation
in the 1980s and 1990s Banded on the Interviews

臼井直也 (Naoya USUI)

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 アニメーション、日本語学習、海外、1980年代・1990年代
Japanese Animation, Japanese Learning, Overseas,
1980-1990s

本発表は、日本語学習におけるアニメーション活用の史的流れに焦点を当て、日本語教育でその人気認知される以前、1980年代、1990年代の海外における活用の実態を明らかにすることを目的とするものである。

本研究では、幼少期から日本の作品を見て育ち、1980年代から90年代に日本語学習を行っていたイタリア、フランス出身の元学習者2名を対象に、アニメーションやマンガと日本語学習の関わりについてのインタビューを行った。インタビューの結果、フランス出身のインタビューーからは、大学生の時、スタジオジブリ作品を家族や友人に紹介するためにフランス語字幕を作成した経験、また、大学での試験や卒業論文執筆のために日本から入手した関連著書を読んだ経験などが挙げられた。イタリア出身のインタビューーからは、高校への入学前後、日本のマンガが特集された雑誌に載っていた片仮名の五十音図で日本語学習を始めたこと、また、その後、大学で開講されていた2年間の日本語コースに参加していた時期に日本にいる同年代の人と文通を行い、そこでアニメーションやマンガについて日本語で書いていたというエピソードなどが語られた。

分析の結果、イタリア、フランスという限られた地域の事例ではあるものの、①日本語の授業内ではアニメーションの活用がなく、教室外での活用が中心であったこと、②作品視聴時の日本語学習のほかに、アニメーションやマンガについて手紙を書くなどの「間接的な日本語学習」が行われていたことが明らかになった。これらの特徴には、1980、90年代の社会や教育現場のアニメーションに対する認識、また、作品への限られたアクセス環境、視聴環境が影響したことが推測される。

本研究では、これまで報告がなされていない1980、90年代の海外におけるアニメーションと日本語学習の関わりの実態を分析した。今後も多様な地域、時代の活用例を集め、アニメーション活用の史的流れを明らかにしていきたい。

発表概要 2

聴解ストラテジーに対する意識調査
—台湾人日本語学習者を対象に—
A Study on Awareness of
Listening Comprehension Strategies:
by Focusing on Taiwanese Learners of Japanese

王睿琪 (JueiChi WANG)

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 聴解ストラテジー、メタ認知ストラテジー、認知ストラテジー、学習環境、学習レベル
Listening Strategies, Metacognitive Strategies, Cognitive Strategies, Learning Environment, Learning Level

言語学習において4技能（読む・書く・聞く・話す）のうち、「聞く」という言語活動は他の3技能の言語活動とは異なり、自分のペースで活動を進めたり中断したり反復することが困難である。

本調査は主に学習環境と学習レベルにより、聴解ストラテジーに対する意識は異なるのか、もし異なるとすれば、どこが異なるかを調査することを目的とする。調査の対象者は中国語を母語とする台湾人日本語学習者であり、計224名である。調査は質問紙を用い、台北と東京で実施した。その結果、学習環境により学習者はメタ認知と認知の使用頻度が異なり、JFLはメタ認知のほうが高い一方、JSLは認知のほうが高いことが分かった。特にJFLはJSLよりメタ認知の使用が高く、細部まで聞き取ろうという傾向が見られた。学習レベルが上がるにつれ、ストラテジー毎に個別にみると、それぞれ多くなったり、少なくなったりする変動があったが、一般的には中級に上がると一時的に下がるものの上級に上がると再び上昇する。また、初級はメタ認知と認知を使用する最も高い意識を持っていることが分かった。

学習者の多くは正確に聞き取ろうという傾向があり、特に教室外では自然な日本語に接する機会が少ないJFLと学習レベルが低い初級の学習者ほど、注意深く聞き取ろうとするために、メモを取ったり、保留をしたり、あらゆる手がかりを探ったりする。特に「メモを取る」意識が高く、このストラテジーは認知のカテゴリーの中で最も使われているストラテジーである。しかし、メモすることに意識が向き後続の情報を聞き漏らす可能性がある。そのため、ノートテイキングのスキル、つまり簡略化したメモを取るスキルの養成は差し迫った課題である。そして、推測のカテゴリーの中に「母語語彙知識からの推測」の使用頻度は極端に高い。しかし単に母語の語彙知識からの推測は内容と異なった方向に推測する恐れがある。従って、単独のストラテジーを使うのではなく、ほかのストラテジーと併せ同じ箇所に複数のストラテジーを併用するよう、本研究の成果として推奨したい。

発表概要 3

日本語の「が」と中国語の「一個」における空間認知と事態把握
— 中国語の誤用コーパスからみた日本語の特質 —Spatial cognition and overall analysis of “Ga”
from Japanese and “Yige” from Chinese:

Analyzing the Features of Japanese Based on the Corpus of Misused Chinese

張学博 (Xuebo ZHANG)

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 数量詞、一個、ガ格、空間認知、個体化機能
Chinese Numeral Classifiers, Yige, Ga-case, Spatial cognition,
The Function of Individuation

日本語を母語とする中国語学習者は、「一個」の欠如が非常に多いことが誤用コーパスからよく見られる(例:最近在车站附近开了(一家)中餐馆。 訳文:最近、駅の近くで新しい中華レストランが開店した。)。しかし、このような例文は意味上数量詞が必要ではないかもしれないが、文法上数量詞が欠如していると非文となる。

中国語の数量詞の用法には個体化機能(大河内:1985)が学習者にとって、とりわけ習得と理解が難しい。抽出した誤用文のタイプは殆どこの機能に属していることがわかった。

認知論的なアプローチの視点から見れば、人間の認知の焦点は、ある境界線を越えて出現するもの或いは消失するものの上に強く注がれる(古川:1997)。その動くものは動かない背景から独立した個体として知覚される。その目立っている個体はある種特殊な構文を用いる原則に基づいて、個体の顕著性に対する言語の有標性は、中国語の場合では名詞への数量詞限定という文法的な方法を経て実現する。日本語の場合では、「が」が常に新情報を表わすものとしている(久野暲:1973)。認知的な観点から見れば、やはり「が」は目立っている事物を認識できると思う。

そこで、中国語の存現文と主語文における「個体化」機能の「一個」と日本語の「が」の間に、認知的には「目立っているもの」としてある程度の対応関係が存在している。しかし、「個体化」機能の「一個」が使われている文はすべて存現文と主語文に存在するとは限らない。それゆえ、学習者にとって「一個」を把握することが困難であろう。そこで、完全ではないが、認知的な「目立っているもの」の観点から考えると、一つの示唆を与えることができよう。そして日本語話者には「個体化」意識があって、言語化にすると、標識がはっきりしていないともいえる。日本語では名詞には常に「個体化」意識が含意されている可能性があるかもしれない。

発表概要 4

タイ人日本語学習者における接続表現としての
「て形」の理解と運用能力
Comprehension and Application of “te”
by Thai Learners of Japanese

ナンティポーン チャンチャルーン (Nuntiporn JUNJAREON)
タマサート大学大学院修士課程
Thammasat University

【キーワード】 て形、接続表現、日本語学習者、理解、運用力
Te-form, Connective Expression, Japanese Learners,
Understanding, Using

論理的に自分の意見や経験を述べるためには、適切な接続表現を使う必要がある。初級前半で導入されている重要な接続表現の一つは「て形」である。「て形」は「継起」「付帯状況」「因果関係」などいろいろな用法があるため、外国人日本語学習者にとって運用は難しいかもしれない。それに、母語の干渉は誤用の要因の一つである。

市川 (2005) では、「寒くて、ヒーターをつけよう。」という「から」との混同により、タイ人学習者の誤用が見られた。初級で学習しても、「て形」の用法や他の接続表現との違いがまだ深く理解できていない。だから、本研究では、「て形」と「てから」「ながら」「から／ので」と3つの授業を行い、タイ人日本語学習者の「て形」の理解と運用について調査をした。対象者は、約200時間程度で学習した、又は国際交流基金バンコク日本文化センターが作成した『あきこと友だち』の第27課まで学習した初級日本語学習者6名を対象にした。全員が高等学校で日本語を専攻とする3年生である。

「て形」の理解テストの結果、授業前の点数と授業後の点数を比較した結果、全体として、授業後の理解テストの点数は授業前の点数より高かったことが明らかになった。本研究で行った授業は有効であることが示された。3つの理解テストの点数を比較すると、「て形とナガラ」の点数は最も高かったことが分かった。次に高かったのは「て形とテカラ」と「て形とカラ／ノデ」である。「て形」と「ナガラ」との違いは「て形」と「カラ／ノデ」との違いより分かりやすいと考えられる。

「て形」の運用能力の結果については、「て形」の機能別の使用数から見ると、〈継起〉の「て形」の使用数は一番多かった。時間的に説明する時、学習者は「て形」か「テカラ」を使う。「て形」による接続が一文中に連続2-4回用られている。この回数は、鹿島 (2003) は適切な長さだと指摘している。そして、理解力テストの点数が最も高かった「て形とナガラ」は運用力テストでもよく使い分けられることが分かった。

発表概要 5

日本語学習者のスピーチレベルに関する考察
—スピーチレベルの設定に資する効果的な教材の作成に向けて—
A Study of Speech Level of Japanese Language Learners

斎藤奈菜子 (Nanako SAITO)

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 スピーチレベル、敬体、常体、日本語教材
Speech Level, Polite Style, Plain Style, Japanese Language
Textbook

日本語では会話者間で相手の年齢や職業、その場の状況といったさまざまな要素が考慮され、敬体、常体などのスピーチレベルが設定される。会話の相手や場の状況を適切にとらえてスピーチレベルを設定できるようにすることは、日本語学習者にとっても重要なことである。しかし、学習者の実際の会話データを用いて分析したところ、スピーチレベルを適切に設定することができていないと思われる学習者が、複数見られた。

このような問題を解決するため、まず多くの教育現場で使用されている主要な初級日本語教材である『みんなの日本語初級』、『新文化初級日本語』、『はじめよう日本語初級』を、適切なスピーチレベルを設定するための学習という観点から分析を行ったところ、問題点が複数見られた。たとえば、年齢・職業・社会的立場といった、スピーチレベルを設定する際に重要となる登場人物に関する情報が、十分には提示されていないといったことである。また、教材によっては同じ人物同士や同じ人間関係の人物が、ある課では敬語を使用して敬体で話し、別の課では敬語を使用せずに常体で話すなど、課によって異なるスピーチレベルが設定されている場合もあった。さらには、提示されている会話文において、会話がなされている場所やその場の状況に関する説明が十分には示されていないものが少なくないため、登場人物の職業や立場のみによってスピーチレベルが設定されている会話文もあった。初級日本語教材では、相手の年齢や社会的立場、会話が行われている場所によって、適切なスピーチレベルを設定できるよう指導する必要がある。そのためには、教材の中に登場する人物や場面に関する情報について、より詳細に明記したほうがよいと考えた。

今回は初級レベルに焦点を当て分析を行ったが、今後は初級から中・上級にかけての、スピーチレベルシフトに関する指導の有機的な連携に関して、具体的に探っていきたい。

発表概要 6

韓国人日本語学習者における
無声破擦音「つ」の発音に関する一考察
The Phonetic Study of Voiceless Affricate
by Korean Learners of Japanese

金智善 (JiSun KIM)

韓国外国語大学大学院博士前期課程

Hankuk University for Foreign Studies

【キーワード】 韓国人日本語学習者、無声破擦音、「つ」、「ちゅ」、音声実験

Korean Learners of Japanese, Voiceless Affricates, [ts], [tɕ],
Phonetic Experiments

日本語母語話者と韓国人日本語学習者の破擦区間と閉鎖区間の持続時間を対照する音声実験を行い、「つ」音の発音がいかに困難であるか確認することができた。

音声実験の結果を三つにまとめると以下のとおりである。

(1) 「つ」の破擦区間 [ts] の持続時間を測定し、語頭音節・語中音節・末尾音節別に持続時間の長さの違いがあるかを分析した結果、日本語母語話者は語頭音節>末尾音節>語中音節の順に長かったが、韓国人日本語学習者は個人差が見られた。しかし、同じ方法で「ちゅ」の破擦区間 [tɕ] の持続時間を測定すると、被験者全員が語頭音節>末尾音節>語中音節の順で一致していた。

(2) 「つ」と「ちゅ」が置かれている語中音節と末尾音節の閉鎖区間の持続時間をそれぞれ測定したところ、韓国人日本語学習者の特徴として目立った点は閉鎖区間の長さが日本語母語話者のそれに比べ非常に長いことであった。しかし、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の間で「ちゅ」の閉鎖区間長の差が10ms 前後にとどまる程度であったのに反し、「つ」の閉鎖区間長の差は2倍以上であった。

(3) 日本語母語話者の評価を通じて、実際に韓国人日本語学習者の「つ」の発音がどのように聞こえるかを確認したところ、多様なバリエーションが現れた。被験者によってその評価の結果が異なっているが、「つ」はおおよそ「ちゅ」>‘츠’または‘쓰’>「す」>「ち」のような順で認識されていた。また、「つ」音を正確に発音することが出来ず、「ちゅ」、「츠’または‘쓰’、「す」、「ち」のように不正確な発音をする現象は、発音上の困難さによるところが大きいことが確認できた。このような問題を排除するため、韓国語と日本語の調音位置や調音法の違いを正しく指導するなど様々な工夫が必要であろう。

また、「つ」を「ち」と発音する場合に関する先行研究はそれほどされていないが、いくつかの発音について「ち」に聞こえると評価したケースが確認できたため、それについても研究をする価値がある。これらについては今後の課題とする。

V 「日本語教育・教育」 ②104室 (2014年7月31日)

- 1 鈴木祐己 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
日本語教育と文学教育の連携 — 俳句を用いた授業の実践報告から —
- 2 村上昂音 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
P I S Aから日本の基礎教育を考え直す — 上海市の教育システムと比較して —
- 3 劉妍 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
学校教育における子どもの自立を育てることの意義に関する研究 — 小幡肇学級の卒業生へのインタビューを通して —
- 4 スイリクワン サグアンポン (タマサート大学大学院修士課程)
タイの私立病院における医療通訳者 (日-タイ) の現状と研修の必要性
- 5 王素蘭 (開南大学大学院修士課程)
台湾における日本研究 — 国科会全資料をもとに —

発表概要 1

日本語教育と文学教育の連携
— 俳句を用いた授業の実践報告から —The Cooperation with Japanese Language Education
and Literary Education:
a Case Study of the Class of Haiku

鈴木祐己 (Yuki SUZUKI)

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo university for Foreign Studies

【キーワード】 日本語教育、文学教育、俳句、連携
Japanese Language Education, Literary Education, Haiku,
Cooperation

本報告は、2014年度春学期に東京外国語大学留学生日本語センターにおいて、700レベルの学生を対象とした総合クラスの授業のうち、筆者が行った文学の授業の実践報告である。本報告では近代文学の授業における実践を通して、日本語教育と文学教育の連携の実践を報告するものである。日本語学習者に対する文学教育の実践報告や教材研究は数多くなされてきたが、本報告とそれらとの違いは、学習者が自己あるいは母文化を内省し、自身に引きつけて考えることで、素材をより深く理解する、というプロセスに重点をおいたことである。

学生たちのテキスト理解の過程には、大きく分けて三つの段階が存在した。①文字通りの意味を理解する段階、②季語を反映させて句全体の理解する段階、③自分の母文化を内省し、自身に引きつけて、より深くテキストを理解する段階、の三つである。①の段階はテキスト読解時及び提出されたタスク・シートの随所において見られる。②の段階は、テキスト精読時、季語が持つ意味を解説され、学生が理解した時に見られる。③の段階は、ディスカッションを通して、季語が持つ意味を自己の文化に引きつけて考えたときに見られる。授業では、「梅真白」という季語は寒気の中咲く花であるために、忍耐や、春の喜びを象徴する、と説明したとき、ある学生が「自国では Boychechak (マツユキソウ) が梅である」と発言した。このように、日本の季語が持つ意味を抽象化して、自らに引きつけて考えることに成功したとき、俳句という日本語文学を深く理解することができるのである。これは本授業の主たる目的であったが、概ね達成されたと考える。一方で、本授業では日本語教育と文学教育との「連携」を掲げたが、何をもちいて「連携」と言えるのか、ということについては答えを出せなかった。今後は日本語教育の授業において文学素材を扱うという一方向からの視点だけではない両者の相互作用について考えていきたい。

発表概要 2

PISAから日本の基礎教育を考え直す
—上海市の教育システムと比較して—
Rethinking Basic Education
in Japan through the Test of PISA:
A Comparison with the Shanghai Educational System

村上昂音 (Koon MURAKAMI)
東京外国語大学大学院博士前期課程
Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 PISA、基礎教育、生きる力、学力、上海市の委託管理
PISA, Basic of Education, Zest for Living, Academic
Achievement, Outsourcing Management of Shanghai

OECD生徒の学習到達度調査 (Programme for International Student Assessment, PISA) 2003年の調査で日本の順位が急落した「PISA ショック」をきっかけに、マスコミや政治家、評論家の多くは「日本の子どもの学力が低下した」という見方が次第に強くなった。その後「学力重視」の政策が勢いを増した。一方、教育評論家、研究者の間では「ゆとり教育」の根拠とされる「新しい学力」、「生きる力」などの育成及び問題解決能力、体験学習などを重視すべきとの声も根強く、PISA 調査の順位とゆとり教育は無関係との主張もある。こうした状況の中、PISA 調査の結果が神格化され、教育施策が目まぐるしく変わり、学校での教育の軸がぶれてしまう恐れも考えられる。

2012年の結果では日本の平均得点が「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」の全3分野で2000年の調査開始以降最も高く、順位も前回の2009年調査を上回った。この良い結果については、教育の方向性が正しいとの評価がなされ、前回の順位急落時とは逆に教育施策の停滞が懸念される。

これらの問題点を解決するために、PISA の結果をどのように日本の教育に活かしていくべきか。また、急速に1位となった上海市の結果では、レベル5以上の生徒が多く、レベル1以下の生徒が少ないのに対し、日本は習熟度レベルの格差が大きい。日本に比べ貧富の差も親の教育程度の格差も激しいにもかかわらず、なぜ良好な成果を上げることができたのか。このような上海市の取り組みも総括する。

日本の特性を活かし PISA 型学力を包含した21世紀を生きる総合的な人間力の継続的な向上に繋がる教育について考察する。

発表概要 3

学校教育における子どもの自立を育てることの
意義に関する研究
—小幡肇学級の卒業生へのインタビューを通して—
The Research on the Significance of Nurturing Independence
for Children in School Education:
Through Interviewing the Grade Obata Graduates

劉妍 (ken RYU)

東京外国語大学大学院博士後期課程
Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 学校教育、子ども、自立
School Education, Children, Independence

本研究の課題を「学校教育における子どもの自立を育てることの意義に関する研究——〇教師学級の卒業生へのインタビューを通して」と設定した。〇教師の承認を得たため、論文の中で、実名の小幡肇を使うことにした。先行研究には自立の意味についてはさまざまな定義があるが、本研究では、自立を他者とのかかわりの中で、主体性を発揮し、学び続けることと定義した。

本研究の目的には以下の二つがある。一つは、小幡学級の卒業生へのインタビューを通し、大人になった当時の子どもたちの中に残っている小幡教諭の教育実践の意味を明らかにすることである。もう一つは、当時受けてきた自立を育てる実践の当事者の中に、自立がどんな形として残っているのか、またどんな力に発展していたのかを検討することで、学校教育における子どもの自立を育てることの意義を明らかにすることである。

研究対象は、小幡教諭及び小幡教諭の送り出した卒業生（1995年奈良女子大学附属小学校入学）4人である。

研究方法は、半構造化インタビューである。具体的に、当時小幡教諭の教育実践を受けた当事者の卒業生に、小幡実践を振り返る半構造化インタビューを行う。そして、卒業生たちの証言を小幡教諭に報告し、小幡教諭に半構造化インタビューを行う。

まず、自立を育てることを包括的に把握し、なぜ自立が現代の学校教育の課題として重視されなければならないのかを検討した。そして、子どもの自立を育てることに関する注目すべき教育実践である古賀一公実践と築地久子実践を紹介した。そして、小幡肇実践を紹介し、小幡学級の卒業生へのインタビューを取り上げながら、卒業生にとって小幡実践の意味や卒業生の証言に対する小幡教諭のとらえ方を通して、学校教育における子どもの自立を育てることの意義を明らかにした。

発表概要 4

タイの私立病院における医療通訳者（日-タイ）
の現状と研修の必要性On the Current Conditions of Medical Interpreters
(Japanese-Thai) in Thailand Private's Hospital
and the Necessity of Training Programs

スイリクワン サグアンポン (Sirikwan SANGUANPHON)

タマサート大学大学院修士課程

Thammasat University

【キーワード】 医療通訳者、外国人患者、医療通訳の養成プログラム
Medical Interpreter, Foreign Patient, Medical Interpreter's
Training Programs

近年、タイでは、外国人観光客や在住外国人が増加し、医療ツーリズムも注目を集めている。医療従事者と外国人患者のコミュニケーションの橋渡しをするのが医療通訳者の役割である。医療通訳者がいることによって、患者の医療従事者に対する信頼感と医療への安心感が増す。その結果、患者はより適切な医療を受けられるようになる。

本研究の目的はタイ私立病院における（日-タイ）医療通訳者の現状や問題点について検討し、適切な医療通訳者訓練方法を提案することである。まず、日本人患者の受診が多い病院関係者を中心に調査を行った。8名の医療通訳者、9名の医師そして1名の通訳関連科目を教える大学教員を対象にした半構造化面接による聞き取り調査、及び、10名の患者と6名の日本語を専攻とする 大学生を対象にした質問紙調査を実施した。調査を分析した結果、医師が医療通訳者に望むことは「訳の正確さ」「いつでも必要なときにすぐ来てくれること」「医療知識を持っていること」などであることが分かった。また、患者が医療通訳者に求めるものは「正しく丁寧な日本語」「細かい気配りがあること」であった。医療通訳者の仕事上の問題点としては「精神的な疲れ」「医療従事者との人間関係」などが挙げられた。医療通訳者の現状については「医療通訳者の養成不足」と「医療に関する仕事は難しいというイメージがあり、求人への応募が少ないこと」という問題点があることが分かった。現在の課題はタイにはまだ通訳資格制度や医療通訳の専門的なテキストや本格的な研修がなく、医療通訳者は現場実習を受けるだけであることである。タイに住む日本人が安心して暮らし、国際水準の医療を受けられるように、実際の医療通訳現場に適合した医療通訳の養成プログラムを開発・実施することは急務と考える。

発表概要 5

台湾における日本研究
—国科会全資料をもとに—A Study of Japanology in Taiwan
based on National Science Council's Data Bank

王素蘭 (WANG SuLan)

開南大学

Kainan University

【キーワード】 日本研究、日本語学、日本文学、日本文化、国科会研究
助成

Japanology, Japanese linguistics, Japanese Literature, Japanese Culture, National Science Council's Research Grant

台湾国科会（2014以降科技部と改名される）は台湾の学術振興の中核を担う日本学術振興会に相当する機関として1999年まではもっぱら研究論文、2000年からは主に研究計画助成金事業などの学術研究への助成や特約研究員採用、若手研究者養成、国際シンポジウム主催を実施している。特に毎年一回の研究計画申請の可否はもはや台湾研究者の学術レベルを左右する一大事と言っても過言ではない。

本稿の目的は台湾国科会の1991年から2013年までの22年間にわたる学術研究論文・研究計画助成総数622件と台湾全国の総合大学317人と技術大学184人を合わせた日本語学科専任教員総数501人に基づいて、教員の量と質を分析することによって、狭義的には日本語教育を含めた日本語学・日本文学・日本文化、広義的には日本研究に寄与するところにある。

1963年に中国文化大学に初の日本語学科が設けられたものの、1987年に言論統制、反日思想を背景とした戒厳令解除をきっかけに、現在では総合大学「日本語文学系」の25校と、主に昔の五年制高等専門学校から昇格した技術大学「応用日語系」の17校を合わせた42校には、学科名こそ違え、実質的に日本語学科が設置されるに至った。

右の表から分かるように、一人につき、教授>副教授>助理教授>講師というように、職位が高いほど、研究成果が上がるという結果が明らかに見られる。

	人数	研究助成数	1人につき
教授	27	266	10
副教授	53	210 (20)	4
助理教授	69	142 (6)	2.1
講師	3	4	1.3

なお括弧内の20件と6件はそれぞれ技術大学の副教授と助理教授の助成を受けた件

結論として①日本語学分野では総数356件のうち総合大学の東呉大学は75件、技術大学の台中科技大学は26件、日本文学分野では総数175件のうち総合大学の台湾大学は50件、技術大学の南台科技大学は14件、日本文化分野では総数91件のうち総合大学の輔仁大学は14件、技術大学の文藻外語大学は8件の首位をそれぞれ占めている、②日本語学・日本文学・日本文化の分野別研究助成比率は約3：2：1となっている、③日本語学科の日本人専任教員人数の比率は総合大学では87人の27.9%、技術大学では42人の22.8%と高いわりに、日本文化研究指向が見られるなどの三点が挙げられる。

VI 「文化」 104室 (2014年7月30日)

- 1 ファスベンダー イザベル (東京外国語大学大学院博士後期課程)
現代日本社会における若者の性意識とジェンダー規範 — 避妊行動にみる男女間の非対称性 —
- 2 ノルマリス アムザ (シンガポール国立大学)
日本企業の広告における語彙分析
- 3 鄭盛旭 (韓国中央大学大学院博士後期課程)
海外映画タイトルの韓・日比較 — タイトルの構成を中心に
- 4 秦石美 (北京外国語大学・日本学研究センター博士後期課程)
「積極的平和主義」を正当化させるための言語的ストラテジーに関する一考察 — 2014年安倍内閣施政方針演説の批判的談話分析を通じて —
- 5 廣瀬龍 (東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程)
多文化共生社会と排外主義の台頭考察
— 昨今のヘイトスピーチを中心に —
- 6 劉品宜 (国立台湾大学大学院博士前期課程)
徳富蘇峰と中江兆民における自由民権論 — 『将来之日本』と『三酔人経綸問答』を中心に—

発表概要 1

現代日本社会における若者の性意識とジェンダー規範
— 避妊行動にみる男女間の非対称性 —Sexual Consciousness and Gender Role Understanding among
Adolescents in Modern Japanese Society:
Gender Asymmetry as Seen through Contraceptive Behavior

ファスベンダー イザベル (Isabel FASSBENDER)

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University of Foreign Studies

【キーワード】 ジェンダー、セクシュアリティ、性意識、性に関する権利、避妊
Gender, Sexuality, Sexual Consciousness, Sexual Rights, Contraception

現代日本社会が孕む、女性の「性の商品化」と若者の「性のタブー化」という矛盾を、「性に関する権利」という概念に着目しながら考察する。マス・メディアや流通業などの消費の現場において、「性」は「商品」として扱われ、偏った情報が流通している。にも関わらず、学校の性教育も、家での性教育も「性」に対して消極的であり、不十分である。とりわけ2000年代前半から現れた「ジェンダーフリー・性教育バッシング」という現象以降、性の危険性が強調されてきた。この「性のタブー化」の流れの中で、青少年が性について備えるべき知識を獲得するのは困難になっており、性意識の形成はポルノ、インターネットといった偏った性表現の溢れるメディアに依存している。皮肉にも保守的な性の管理が、偏った性情報の氾濫に若者を無防備で晒すことの大きな一因となっている。

こうした矛盾した状況の根本にあるのは、「性に関する権利」の欠如であると報告者は考える。「性に関する権利」とは、各人が性における決定を主体的に行うことができ、その環境が社会的に保証されていることである。しかし、今日の日本社会は、こうした条件とは程遠いところにあるようである。本報告は、若者の性意識に関する調査データなどの分析により、若者の「性」に対する消極化、「性」についての否定的イメージの増大、性に関する知識の減退、コミュニケーションの貧困化、固着されたジェンダー意識という傾向を明らかにした。

この問題における具体的側面を検討するために、本報告は若者たちの「避妊行動」に焦点をあてた。ここでは、女性の「生殖における負担」（出産・育児・中絶などにおける精神・身体的負担）の重さにもかかわらず、男性が避妊における「主導権」を握りがちであるという矛盾が明らかとなった。ジェンダー不平等性の下で、女性は抑圧された立場におかれ、望まれない妊娠などの問題が際立っている。こうしたダブル・スタンダードの克服が求められるが、それには「性に関する権利」が社会的に共有されることが不可欠である。

発表概要 2

日本企業の広告における語彙分析 Lexical Analysis of Japanese companies' green advertisements

ノルマリス アムザ (Normalis Binti AMZAH)

シンガポール国立大学日本研究科博士課程

National University of Singapore

【Keywords】 Lexical Analysis, Japanese Companies Green Communication,
Green Advertising, Japanese Part of Speech

This paper will highlight the result of the content analysis of 200 samples of random Japanese companies green advertisements namely print advertisements and television commercials from 2008 until 2013. The content analysis focuses on the lexical analysis of the 100 most frequently used words in the samples. The analysis calculates the categories of part of speech and further analysis the part of speech based on Halliday's systemic functional linguistics framework. Findings show half of the most frequent use of words are noun followed by verb and small percentage of adjective. Further analysis shows environmental communication by Japanese companies tend to use tangible noun and material verb. Tangible noun is something that can be seen, listen, feel or touch and material verb is experiencing the external world as oppose to the mental verb such as think, hope and analyze. The result suggests that in expressing their environmental values, Japanese companies tend to emphasize on concrete action of implementing green activities instead of merely uttering abstract conceptual pertaining to environmental values.

発表概要 3

海外映画タイトルの韓・日比較

—タイトルの構成を中心に—

Comparative Study of Movie Titles in Korean and Japanese

鄭盛旭 (JUNG SungWook)

韓国中央大学校大学院博士後期課程

Chung-Ang University

【キーワード】 命名学、ネーミング、映画タイトル、文字表記、大衆文化
 Onomastics, Naming, Film Title, Use of Characters, Popular Culture

映画のタイトルを付ける時、文字がどのような形で組み合わせられ、使用されているかについて比較し、年代別、構成別にその変化の推移を考察した。映画タイトルを通じて表記の変化を観察することは、現在も猛スピードで変化している表記の一断面を鑑みる良い資料になるであろう。結果は以下ようになる。

1. 映画の製作国別：アメリカ、フランス、英国の順。初期は各国が単独で映画を製作していたが、1960年代から徐々に共同製作が増え、2カ国が共同制作している場合が多い。

2. 類型別：映画のタイトルには国別に若干の差はあるものの、単純形が優位を占めている点は共通している。

3. 表記別：外国は「ローマ字」が94%、韓国は「外来語」が66%、日本は「カタカナ」が75%であった。原作名を直接使用するより変換し、読みやすくするためだと考えられる。

4. 類型別と文字別：映画の特色を生かすことより、外国語を自国の言語に置き換えてわかりやすく、読みやすいように形だけ変えているケースが多い。

映画は、原作のタイトルを生かすより、観客の興味を誘発し、頭に残すため、適切な語彙を選定する必要がある。それによってタイトルの構成にも変化が生じたと思われる。特に表記別では、外国からのタイトルが直訳されて同じ意味を表すタイトル¹が多かった。一方、両国とも原作品のタイトルとは全く違った形にも拘らず、同じタイトルになっているケース²も多かった。両国が隣国であるため、互いに影響し合っていると考えられる。

1 <Roman Holiday (로마의 휴일)(ローマの休日) (1953) [米]>、<La Vita e Bella (인생은 아름다워)(ライフ・イズ・ビューティフル) (1997) [伊]> など。

2 <Bonnie And Clyde (우리에게 내일은 없다)(俺たちに明日はない) (1967) [米]>、<The Apartment (아파트 열쇠를 빌려드립니다)(アパートの鍵貸します) (1960) [米]> など。

発表概要 4

「積極的平和主義」を正当化させるための
 言語的ストラテジーに関する一考察
 —2014年安倍内閣施政方針演説の批判的談話分析を通じて—
 A Study on the Linguistic Strategies Used in the Justification
 of “Proactive Pacifism”

秦石美 (QIN, Shi Mei)

北京外国語大学・日本学研究センター博士後期課程
 Beijing Foreign Studies University

【キーワード】 「積極的平和主義」、正当化、批判的談話分析、倫理的評価、権威化
 “Proactive Contribution to Peace”, Legitimation, Critical Discourse Analysis, Moral Evaluation, Authorization

安倍の施政方針演説に度々用いられている「積極的平和主義」のあり方やなされ方に対する説明や弁明の正当性が、どのように述べられているかについて、CDAによって明らかにすることを本発表は目的としている。本報告はFaircloughの「正当化」のストラテジーを参照し、2014年1月24日第186回国会安倍内閣総理大臣による施政方針演説の中の「積極的平和主義」に関する論述を取り上げ、その正当化させるための言語的ストラテジーについて考察したものである。主な考察結果は以下のようなものである。

倫理的評価

「積極的」、「平和主義」、どちらも望ましい評価を表す語彙である。このプラスのニュアンスの「積極的平和主義」を自分の政治活動に借用するのは安倍の戦略的行為である。

権威化

方針演説そのものが首相としての「権威性」を表している。その「権威性」は演説のモダリティにも示されている。また、演説者は首相としての「権威」だけではなく、国際社会の「権威」(ASEAN・アメリカ)によって「積極的平和主義」の「正当化」をはかっている。

合理化

「積極的平和主義」という本題に入る前、自衛隊の活動についていろいろ論じている。その行為の「有用性」がしばしば字面から読み取ることができる。「世界の平和と安定」という目的の達成に、手段としての「自衛隊の活動」が有用であると主張しようとしている。

必要化

「中国脅威論」「北朝鮮脅威論」によって、反面的に「積極的平和主義」の必要性を述べる。

発表概要 5

多文化共生社会と排外主義の台頭考察

—昨今のヘイトスピーチを中心に—

Study of the Rise of Xenophobia and
Multicultural Symbiotic Societies:
Focusing on Hate Speech in Recent Years

廣瀬龍 (Ryu HIROSE)

東京学芸大学大学院教育学研究科 (修士課程)

Tokyo Gakugei University

【キーワード】 多文化共生社会、ヘイトスピーチ、排外主義者、在日コリアン、在特会
Multicultural Symbiotic Societies, Hate Speech, Xenophobia
A Korean Resident in Japan, Zaitokukai

日本政府が国際化政策・グローバル化を推奨し始め、30年近くになり、国際社会における新自由主義経済の弊害として社会格差が広まり、進む競争主義とともにグローバル人材を重んじる多文化共生社会が展開された。日本には2007年以降、200万人を超える外国出身の移住者が住んでおり、日本の多文化共生社会への動きは活発になっている。2013年末現在で、日本における外国人登録者数は約206万人（法務省在留外国人統計2013年12月末 [http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html]）で、総人口の1.6%を占めている。また2020年の東京オリンピックの開催が決定し、日本人留学生倍増計画を代表するように政府もグローバル人材の育成に力を入れ、日本はさらに多文化共生社会を目指すと考えられる。

しかし、90年代のバブル崩壊後の経済的・社会的不安や失業者の増加、雇用縮小への不安、国際化時代における激しい競争主義の助長といった理由から社会の閉塞感や社会からの疎外感を感じ、不満をもった人々がインターネットを通して繋がり、排外的差別表現を街宣し、憂さ晴らしをするヘイトスピーチが台頭し始めた。そしてこのような排外主義運動への動きが拡大している現状も存在する。

特に韓国との関係は顕著である。2002年のワールドカップ共催から韓流ドラマや K-POP が日本の茶の間を賑わせ、日韓相互関係が緊密になって行った。ところが、過度な韓流文化の紹介などに違和感を覚える人々が増加する中、日韓両国の歴史的・政治的葛藤が生じ、いまや両国間の溝は深まるばかりである。そして「嫌韓・嫌在日コリアン」へとその不満の矛先が替えられ、インターネットを利用した排外主義運動への動きが拡大するが、中でも「在日特権を許さない市民の会」（通称「在特会」）による東京や大阪・京都・福岡など、日本各地でのヘイトスピーチが繰り返され、また一部のメディアや SNS では韓国や在日コリアンの政治や文化を揶揄しつつ、強い自民族優越主義を促している。国境がますます低くなって行くグローバル社会における今後のあり方を、昨今のヘイトスピーチを通して考察する。

発表概要 6

徳富蘇峰と中江兆民における自由民権論
 一『将来之日本』と『三酔人経綸問答』を中心に—

Argument on Democratic Rights

by Tokutomi Soho and Nake Chomin:

by Focusing on Future Japan and Three Drunks' Discussion
 on the Government

劉品宜 (LIU Pinyi)

国立台湾大学大学院博士前期課程

National Taiwan University

【キーワード】 将来之日本 三酔人経綸問答 自由民権 平民主義
 ナショナリズム

Shorai No Nihon, Sansuijin Keijin Mondo, Nationalism, Free
 Civil Right Movement

本論の目的は、『将来之日本』と『三酔人経綸問答』の間で二人の思考方法を分析し、その思想の根底を探求したいと思う。

『将来之日本』では、蘇峰は生産機関と武備機関を二元性の概念に分割する。彼は生産＝平民、武備＝貴族と考えている。生産機関に基づくとした国家は、平等主義支配下の平民社会を実現できる。逆に武備機関に基づくとした国家は、最も不平等主義支配下の社会である。蘇峰は人民が生活を維持するために生産型社会によって国家を作ろうと主張した。ここから提出した蘇峰の二元性論述は極端な主張を持つと見られる。こうして、彼は思潮に乗っている途中、逆に反対側に転覆した可能性が大きい。要するに、蘇峰の思考方法は黒でなければ白であると言えよう。結論から見られる、日本は平和主義を取るべき、商業国（平民国）となればこそ、人民の生活が確保でき、皇室の尊栄も益するはずである。国民がもし世界の犬勢に従わなければ、碧眼紅髯の人種に侵入される結末となる。ここで彼の思想の根底は始終ナショナリズムであると思われる。後期の蘇峰が帝国主義へ転向したのも理解できる。

『三酔人経綸問答』が出版された明治二十年前後から見ると、この時期の思想は自由民権運動によって影響され、しかしこの運動の思想は「皇室中心」と「国家論」も含まれている。国家の政体がまだ制定されていない上、『経綸問答』に現れた三つの道筋は、それぞれ将来の日本になる可能性を持つ。ただこの三つの道筋にも、それぞれの欠点がある。例えば、紳士君の道は楽天的に過ぎ、豪傑君の道は横暴に過ぎ、南海先生は解決の方法は提出していないということであった。そして『経綸問答』の民権について考えると、兆民は、明治時代の日本は、民権が天皇から与えられた恩賜の民権であるが、国民の権利意識を高めつつ次第に民権を拡大することによって恢復的民権に近づくことができると考える。

蘇峰の民権思想は国家主義の下で形成され、言い換えれば、民権は国家主導の下に実現できる。兆民の『経綸問答』には彼の国家主義思想があまり見られないが、彼の考え方は、社会の教育によって人民を連れて、民権を恢復し、民権は人民の所属した社会に属する。一つは国家の下の民権、もう一つは社会の下の民権である。

Ⅶ「文学」105室 (2014年7月30日)

- 1 藤井嘉章 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
『古今集遠鏡』と宣長の歌論
- 2 李姣喜 (韓国外国語大学大学院日語日文学科博士前期課程)
雨夜の品定めの予言的機能 — 高麗人予言との比較を中心に —
- 3 余祚延 (厦門大学修士課程)
竹内好の翻訳理論についての考察 — 『藤野先生』を中心に
- 4 ナザランカ カチャリーナ (東京外国語大学博士前期課程)
レフ・トルストイと日本の文学者
- 5 平原真紀 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
近世日本の読本と中国の白話小説 — 『椿説弓張月』における《楊家将演義》
受容の可能性 —
- 6 王薇婷 (台湾大学大学院博士前期課程)
『好色一代女』における嫉妬について — 構成と特性を中心に —

発表概要 1

『古今集遠鏡』と宣長の歌論 *Kokinsyu Tokagami and Norinaga's Poetics*

藤井嘉章 (Yoshiaki FUJII)

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 古今集遠鏡、もののあはれ、日野龍夫、口語訳、注釈
Kokinsyu Tokagami, Mono no Aware, Tatsuo HINO,
Colloquial Japanese, Commentary

本居宣長の研究史を見ると、『古今集遠鏡』(以下、『遠鏡』)という『古今和歌集』の口語訳テキストは、主に十八世紀の話し言葉資料としての研究対象であった。本発表では、『遠鏡』が宣長の学問と思想を考える上で有効な著作であることを、特に宣長の歌論をめぐる問題から示そうと試みた。

宣長の歌論、さらには彼の思想全体を代表するキーワードとして「もののあはれ」がある。しかし、日野龍夫氏の見解では、「もののあはれ」は当代文化において既にありふれた言葉であり、宣長も宝暦十三(1763)年に『紫文要領』『石上私淑言』で中心的に論じて以来、忘れるという意識もなく使わなくなってしまったとされた。本発表では、寛政六(1794)年成立と目される『遠鏡』の「例言」で、助詞助動詞以外の訳例としてあえて「あはれ」という語に関する条を立てている事、及びその記述が『石上私淑言』での「あはれ」の規定と同一であることに着目し、「もののあはれ」が宣長の中で、ある一時期に限定されるものではなく、終生保持し続けたものであったことの実証を試みた。

以上を前提とし、『遠鏡』中の宣長による具体的な口語訳を見ると、「あはれ」という語に対して二十三の口語訳例を見出すことができる。このうち、短歌における「あはれ」十七例を検討した結果、その訳出に、「ア、ハレア、ハレ」「ア、ハレ+ a」「ア、+ a」「アハレ」、その他意識、と言った様々なバリエーションが確認できる。この分析は、少数ながら『遠鏡』を宣長の思想と接合しようとする論一般が主張する、宣長における法則の過剰な一般化という性格規定に対する反証となり、柔軟な訳語を案出する宣長の一面を描き出す手掛かりになり得ると考えられる。

自らの学問・思想について多数の理論的著作を残した宣長は、一方で古典作品の解釈を示す注釈書も多く著した。注釈的著作は宣長によるテキストの読みそのものを研究対象にしている研究素材である。中でも口語訳という当時としては特異な形態であった『遠鏡』を通じて宣長論を再考することが、発表者の今後の課題である。

発表概要 2

雨夜の品定めの子言的機能
—高麗人予言との比較を中心に—The Prophetic Function of Rainy Day Fair:
Comparison with “Prophecy of Goryeo-Person”

李絳喜 (LEE Ji Hee)

韓国外国語大学大学院日語日文学科博士前期課
Hankuk University for Foreign Studies

【キーワード】 雨夜の品定め、高麗人、源氏、予言、女性
Rainy Day Fair, Goryeo-Person (komaudo), Genji, Prophecy,
Women

『源氏物語』は光源氏という主人公の宿命的な恋愛と栄華を描いた作品である。物語の前半部に登場する夢や予言、談話は単純なストーリー展開ではなく、物語全般にわたって必然的にその影響を及ぼしている。桐壺巻の高麗人の予言が第一部にわたって光源氏の栄華を先取りしているとしたら、帚木巻で取り上げられる雨夜の品定めでは源氏の女性観が長編的テーマを物語っているといえよう。

この研究発表では桐壺巻の高麗人の予言と帚木巻の雨夜の品定め機能について比較分析したい。特に「紫の上系列」は光源氏の「帝王像」という予言を起点に展開し、「玉鬘系列」は帚木巻の雨夜の品定めを起点に展開される様相を比較対照し、雨夜の品定め持つ予言的機能を究明してみたいと思う。特に帚木巻の雨夜の品定め談話形式によって展開される物語の論理を分析したい。

発表概要 3

竹内好の翻訳理論についての考察 — 『藤野先生』を中心に—

The Research of Takeuchi Yoshimi's Translation Theory: a Case Study of the Translation of Mr. Fujino

余祚延 (Yiyan YU)

廈門大学修士課程

Xiamen University

【キーワード】 竹内好、藤野先生、魯迅

Takeuchi Yoshimi, Mr.Fujino, Lu Xun

本稿は日本における魯迅研究の巨匠である竹内好の魯迅翻訳について考察する。

テキストの分析の視点から竹内の翻訳を見ると、原文の魯迅と異なる魯迅のイメージで訳されることが分かる。竹内好の魯迅翻訳の「土着化」が導いた結果は「中国人の魯迅」から「日本人の魯迅」への魯迅イメージの変化である。

なぜ、そのようになったか。一番主な理由は竹内好の独特な翻訳理論にあると考える。竹内は「創造的な翻訳」、いわゆる「我在走我的路で自分流にやるよりしょうがない」という理論を提出し、それによって訳者としての竹内は作者である魯迅以上の存在を訳出した。

竹内好の翻訳理論は大きな意義がある。それによって訳者の主体意識が樹立された。しかし、時代の流れにつれ、次第に「訳者を中心とする」翻訳になった。現在においては、アメリカからの「読者を中心とする」翻訳理論が流行している。いかにして竹内流の翻訳の良さを生かしながら、今の時代に一層相応しい「読者を中心とする」魯迅翻訳を生み出すことができるかを論じてみたい。

発表概要 4

レフ・トルストイと日本の文学者 Leo Tolstoy and Japanese Writers

ナザランカ カチャリーナ (Katsiaryna NAZARANKA)

東京外国語大学博士前期課程

Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 レフ・トルストイ、日露戦争、徳富蘆花、武者小路実篤、有島武郎
Leo Tolstoy, Russo-Japanese War, Roka Tokutomi, Saneatsu Mushanokoji, Takeo Arishima

レフ・トルストイは80年代後半に欧州の出版によって日本で紹介され、私小説を通して偉大な思想家として、その後物語作者として人気を得たというパターンが見られるが、欧米とは正反対である。その理由は作家自身にみられ、彼を訪れた出版者である徳富蘇峰に、長編小説より、社会的なテーマを巡った論文を推薦した。トルストイの思想が日本人に広く受け入れられた理由として、その時代の日本社会の変容や道德の危機が挙げられる。又、作品のほとんどの翻訳者が洗練された文体を持った作家であったことも、一般読者の間で好評を博す要因の一つであったと考えられる。

1904年に勃発した日露戦争は、平和主義を主軸とする信条の持ち主のトルストイに強い影響を与えた。世界中に反響を巻き起こした日露戦争反対の論文「悔い改めよ」は無論ロシアでは発禁となり、日本では幸徳秋水と堺利彦の翻訳で『平民新聞』に掲載され、社会主義者を鼓舞し、与謝野晶子の『君死にたまふことなかれ』執筆の契機ともなった。同じころ賀川豊彦はこの作品を読んで反戦思想を形成しつつあった。

徳富蘆花は1897年にトルストイについての本を発行した。代表作である『不如帰』にトルストイの影響が見られる。『思い出の記』にも『幼年時代』『青春時代』『青年』の影響があるに違いない。徳富はヤースナヤ・ポリャーナを1906年に訪れ、『順礼紀行』はそのときの貴重な記録となっている。

武者小路実篤の『その妹』等の作品からは明白な反戦的意思が感じ取れる。彼は1910年、反戦・シンプルライフ等の思想に感化された志賀直哉、有島武郎、有島生馬らと文学雑誌『白樺』を創刊した。トルストイの思想を実現しようという彼らの壮大な試みの1つに1918年の農業に基づく理想的に調和した社会というユートピアを目指した「新しき村」の建設があった。

有島武郎は『アンナ・カレーニナ』から得た刺激をもとに書かれた長編『或る女』は雑誌『白樺』に連載された。1922年、受け継いだ北海道狩太村の有島農場を農民に開放したのは正にトルストイの例にならったものと言える。

発表概要 5

近世日本の読本と中国の白話小説
—『椿説弓張月』における《楊家将演義》受容の可能性—

Yomihon of the Edo Period and
Hakuwa Shosetsu of the Modern Chinese:
“Chinsetsu Yumiharizuki”(The Crescent Moon) and “Yangjiajiang”

平原真紀 (Maki HIRAHARA)

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University for foreign Studies

【キーワード】 滝沢馬琴、椿説弓張月、楊家将演義、北宋志傳、楊家府傳、
Yomihon, Hakuwa Shosetsu, Bakin, Chinsetsu Yumiharituki,
Yangjiajian,

近世日本において初めて翻案され、様々な読本執筆の好資料となった中国白話小説と言え、《三國志通俗演義》の翻案小説として元禄二年に出版された『三國志』が挙げられる。このような翻案小説は、粉本となる中国講史小説が文語ではなく当時の俗語を交えた白話で書かれており、元禄前後の漢学者達も概してこれを読み下せないと言われ、当時の日本には僅かしか伝わらなかったとされてきた。しかし、江戸時代には多くの講史小説が翻案され、繰人形浄瑠璃や歌舞伎の台本作家や読本などの作家達が、そのほとんどに目を通していった可能性がある。

中でも、江戸時代の読本作家の一人である曲亭（滝沢）馬琴は、非常に多くの中国白話小説に目を通していったことで知られている。また、馬琴の代表作のひとつ『椿説弓張月』では、この《三國史通俗演義》や《水滸伝》などがその執筆の好資料になっていることが、すでに多くの先行研究によって周知の通りである。本発表では、この『椿説弓張月』において、従来、日本にその邦訳は存在しないとされ、その影響についてもほとんど注目されてこなかった中国明代の白話小説《楊家将演義》受容の可能性と大きな関係性について、改めて光をあててみた。

【主要な板本・テキスト】

- ・ 国立国会図書館所蔵・経国堂 『玉茗堂批點繡像南北宋志傳』
- ・ 北京大学所蔵・維経堂 『玉茗堂主人按鑑批點南北宋志傳』
- ・ 上海古籍出版社 『楊家府世代忠勇演義志傳』 1980年
- ・ 国立国会図書館所蔵 『鐫出像楊家府世代忠勇演義志傳』
- ・ 『通俗筆談二十一史』 早稲田大学出版会 明治44年
- ・ 国立国会図書館所蔵・春江堂 『椿説弓張月』 1911年
- ・ 日本古典文学大系『椿説弓張月』 岩波書店1962年

発表概要 6

『好色一代女』における嫉妬について
—構成と特性を中心に—

王薇婷 (WANG Wei ting)
(台湾大学大学院博士前期課程)
National Taiwan University

【キーワード】 女の好色、嫉妬する女、嫉妬物語の構造、攻撃性、擬装
Amorous, Woman's Jealousy, Structure of Jealousy,
Aggression, Camouflage

『好色一代女』は井原西鶴の代表作であり、女が好色生活に耽溺することを描かれた作品である。主人公の一代女が編ごとに変わっていく相手（あるいは買春する客）に対して、あまり執着せず、つれない浮世を潇洒たる姿で、物語を展開することが想定できるが、西鶴が描いた女の好色世界には時に、相手につよくひかれる女性に関する編章がいくつ描かれている。人間の本能をリアルに書いた西鶴には、嫉妬などの感情が、恋を豊かにするものである一方で、人間の醜く、真実な一面を持ち出せるものでもある。男性である西鶴にとって、女性の好色のあり方を具体的に描写するために、相手が奪われる恐れから生み出された強烈な感情である「嫉妬」は、最も説得力の持つテーマではないかと考えられる。

『好色一代女』における嫉妬物語を全般的にみれば、巻一の二の「舞曲遊興」と巻三の四「金紙ヒ髻結」の両章を嫉妬物語の終始とみなすことができる。そして、両章の構造は男女関係からの嫉妬ではなく、嫉妬からの男女関係というパターンで物語を進行し、「嫉妬」の言葉に内包した二種類の感情構造を読者に見せつけるのである。

また、『俳諧類船集』にあげられた「嫉妬」「恠気」の付合語を手掛かりして、「嫉妬」の特徴を「攻撃性」と「擬装」が挙げられたのである。そこから、一代女は終始「嫉妬する女」のような攻撃性をもって、好色生活を生き抜く強い女性像が現れたのである。そして、森山氏は巻三の一の考察で、一代女の奉公期は擬装と暴露を中心に発展したことを指摘したが、考察した結果では、巻二の三「世間寺大黒」の「擬装」は暴露せず、一代女が職業を遍歴するために不可欠な要素として、別の世界に出入りする方法でもある。

今後の課題として、巻三の二「妖孽寛闊女」に出現した周囲の人物の嫉妬をさらに吟味することで、西鶴にとっての「嫉妬」をより全面的に把握したい。

参考文献

- 森山重雄「『好色一代女』研究」(『西鶴の研究』 新読書社 1981年1月)
林進「蕭白『柳下鬼女図』『美人図』—嫉妬の図像学」(日本近世絵画の図像学—趣向と深意) 八木書店 平成12年12月
近世文学研究会編『俳諧類船集(全七集)』 京都大学近世文学研究会 昭和30年3月

VIII 「歴史」 105室 (2014年7月31日)

- 1 黄楚群 (東京外国語大学大学院博士後期課程)
戦前日本における農業団体の米価調節論 — 1930年代の議論を中心に —
- 2 内川隆文 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
戦前日本における電力国家管理と「経済の社会化」 — 永井柳太郎の思想
を中心に —
- 3 那須理香 (国際基督教大学大学院博士後期課程)
1893年シカゴ万国宗教会議とアメリカ社会 — アメリカ仏教伝播の観点
から —
- 4 倪逸舟 (東京外国語大学大学院博士前期課程)
村上春樹『女のいない男たち』試論 — 「シェエラザード」における比喩
表現を通して —
- 5 盧柏丞 (台湾東海大学大学院東海大学日本語言文化学系修士)
坂口安吾のアイデンティティ政治研究
- 6 李宜潔 (台湾政治大学博士前期課程)
日清修好条規の検討 — 清国、日本及び国際的視点より —

発表概要 1

戦前日本における農業団体の米価調節論
—1930年代の議論を中心に—The Debate over Rice Price Regulation of
Agriculture Organization in Prewar Japan:
by Focusing on the Argument in the 1930's

黄楚群 (Chuqun HUANG)

東京外国語大学大学院博士後期課程

Tokyo University of Foreign Studies

【キーワード】 米価調節論、帝国農会、小農経営、経済恐慌
The Debate over Rice Price Regulation, Imperial Agriculture
Organization, Family Farming, Economic Crisis

本報告の目的は、米穀政策の形成及び実施過程において、農業側が日本農業における米の地位、米価の変動などの現実状況を見据えて、どのような議論をしていたか、米価調節という主張の背景に、どのような農業ビジョンがあったのか、に重点をおいて考察することである。

1910年代以降、米穀問題をめぐり、様々な議論と運動が行われていた。米穀問題は社会問題として顕在化し、地主や自小作農などの農村の諸階層だけではなく、資本家のほか、労働者(消費者)などの一般大衆からも関心が寄せられた。本報告では、米穀統制法成立の1933年から食糧管理法成立の1942年までを中心とし、戦前の二大農業団体の一つである系統農会(帝国農会)に焦点を当てて、帝国農会が米価調節についてどのような議論を展開しているのかを検討した。それを通して、議論の背後にあった近代化過程における日本農業に対する農業団体のビジョンを探ってみた。具体的な考察対象は、帝国農会が政府に提出した建議、答申案、及び帝国農会の二人の幹事、岡田温と東浦庄治の議論である。

岡田、東浦の議論の検討から、自由経済と小農経営の矛盾が問題視され、それをいかに払拭できるのかが議論のポイントであることが伺えた。さらに、二人は、その矛盾が米価問題に集中しているという現実を見据えて、政治手段による米価調節を主張するに至った。これらの議論は帝国農会の建議・答申案にも反映された。ただし、両者はあくまでも小農経営という形態を前提としたうえで、資本主義に対応しようとする立場に立っていたことに留意したい。

発表概要 2

戦前日本における電力国家管理と「経済の社会化」

—永井柳太郎の思想を中心に—

“The Economic Socialization” and
Nationalization of Electricity in Pre-War Japan:
by Centering on the Thought of Nagai Ryutaro

内川隆文 (UCHIKAWA Takafumi)

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 電力、国家管理、社会化、永井柳太郎、所有と経営の分離
Electricity, Socialization, Nagai-Ryutaro, The Separation of
Ownership from Management

日中戦争勃発から約1年と半年後の1939年3月、日本電力産業の国家管理（国営化）が実施された。あらゆる産業、地域、そして社会階層に「豊富で低廉な電力」を供給することを目的に掲げ、5つの電力会社を強制統合した同政策の歴史的な位置づけは、経済史または経営史の分野においても今日まで定まっていなかった。本報告では同問題への糸口として、①電力と社会の関係、②国家管理の概要、次いでその裏にある③社会化という思想、とりわけ④政治家・永井柳太郎（1881-1944）の社会化論を挙げ、それぞれ解説を行った。

①では、20世紀に入り、先進各国では電力の使用が産業部門だけでなく生活領域へと漸次拡大した流れを説明した。また、電力特有の性質からそれを供給する電力会社の経営形態は各国の事情により異なることにも言及した。②では、国家管理の構想がアメリカを中心に20世紀初頭に喧伝された株式会社の「所有と経営の分離」論と不可分の関係にありながらも、それを倒置した形態—国家が経営し、民間が株式保有者、すなわち所有者となる—であることを説明した。③では、この特殊な形態を下支えした理論的支柱として20年代の欧州で育まれた「社会化」という思想について着目し、重要産業の管理を巡る思想が私益から公益追求へと転換する流れを確認した。④では、欧州由来の社会化論が1920年代の日本の思想的状況にどのように接ぎ木されたかについて触れたうえで、国家管理の実現に重要な役割を果たした永井柳太郎の思想に触れた。永井にとって、電力国家管理とは電力産業それ自体の修正に留まらず、資本主義経済全体の改造を目指すものだった。しかしながら、永井の社会化論は階級闘争の止揚をも狙っていた点、さらには電力産業の運営を労働者ではなく官僚と旧電力会社の経営者の合作により進めた点で欧州由来の社会化論とは決定的に異なっている点を指摘した。

以上から、本報告では電力国家管理構想の源流が戦争を必ずしも目的としたものではなく、むしろ社会・経済体制の根本的な改造に重点が置かれていたという結論に達した。

発表概要 3

1893年シカゴ万国宗教会議とアメリカ社会
—アメリカ仏教伝播の観点から—The 1893 World's Parliament of Religions
and the American Society:

from a Perspective of the Diffusion of Buddhism in the United States

那須理香 (Rika NASU)

国際基督教大学大学院博士後期課程

International Christian University

【キーワード】 シカゴ万国宗教会議、釈宗演、鈴木大拙、ポール・ケーラス、近代仏教
World's Parliament of Religions, Shaku Soen, Suzuki Daisetsu,
Paul Carus, Modern Buddhism

1960年代のアメリカZENブームは、鈴木大拙の影響で起こった日本仏教伝播の例としてよく知られている。それ以前にも日本の大乘仏教がアメリカ社会に受け入れられた歴史的な出来事があった。それが1893年に開催されたシカゴ万国宗教会議である。鈴木大拙の師であった釈宗演が、鈴木英訳の演説により、近代科学に合致した「近代仏教」を提示し、西洋に受け入れられたのである。

釈宗演(1860-1919)は臨済宗円覚寺の法主として伝統仏教に身をおきながら、慶応義塾で近代西洋知識を修得、スリランカでは上座部(小乗)仏教も修行するというコスモポリタンの視点をもった禅僧であった。また、スリランカではオルコットの「プロテスタント仏教」に遭遇、西洋的観点からの仏教理解を知ることにもなった。これらの要因及び日本における明治期の仏教衰退の危機感が、シカゴ万国宗教会議の演説によって「近代仏教」の世界に向けた伝播に、釈を駆り立てたものと思われる。

釈の演説は「仏教の要旨并(ならび)に因果法」(The Law of Cause and Effect, as Taught by Buddha)という題で、仏陀によって説かれた因果法を「宇宙の真理」として提示した。この演説で示された「近代仏教」は、マクハマンの「仏教モダニズム」の説における近代仏教の二点の特徴をとらえている。(1) 仏陀による一神教の側面、(2) 創造主を否定し近代科学に合致した側面である。

一方、シカゴ万国宗教会議の開催側であるアメリカキリスト教界は、「金箔の時代」と呼ばれた退廃した社会状況や、ダーウィンの進化論によって社会規範としての地位を揺るがされていたキリスト教の威信回復を意図して、約20か国、12の宗教を招待して宗教会議を企画した。しかし、釈宗演他アジア仏教の代表者たちの演説に感銘をうけたシカゴの聴衆は、仏教の近代的側面を受け入れ、仏教に帰依する者も現れた。その一人が、当時の著名な宗教啓蒙家のポール・ケーラスである。ケーラスはシカゴ万国宗教会議の翌年から、仏教啓蒙書を英語で多数出版し西欧の仏教研究に貢献した。これは釈が「近代仏教」の西洋伝播に成功した証拠と考えることが出来る。

発表概要 4

村上春樹『女のいない男たち』試論
—「シェエラザード」における比喩表現を通して—

An Essay on Haruki Murakami's "Men Without Women":
through the Metaphorical Expression of "Scheherazade"

倪逸舟 (YIZHOU NI)

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University for Foreign Studies

【キーワード】 直喩、文脈、メタファー、語り手
Simile, Text, Metaphor, Narrator

『女のいない男たち』は2005年に刊行された『東京奇譚集』以来、日本現代国民作家である村上春樹の9年ぶりの短編小説集で、今年4月に文藝春秋より刊行された。一見してみると、まったく繋がりのない六つの物語から成り立っているが、六つ目の書き下ろし作品で、また、この小説集の同名の表題作でもある「女のいない男たち」が示しているように、最初から最後まで貫かれている主題があることでもいえる。

その中でも、「シェエラザード」という作品はやや異色なところがあり、何かしら読み手の心に響かせるものがある。そこで、本発表は「シェエラザード」という小説に出てきた比喩表現をまとめ、それらの文脈はどういった特徴を有しているか、どのような主題を提示してくれるかを検討する。

本発表では、「シェエラザード」という短編小説の中に出てくる比喩表現をまとめ、その特徴や類型を探ってみた。まだ初歩的な研究ではあるが、結論として、まず、この小説において直喩表現はメタファーより圧倒的に多く使われていることが明らかになった。次に、33か所の直喩表現の中で、「語り手」による表現が13か所であることは、「語り手」を通じて作中人物を相対化しようという傾向だと考えられる。更に、直喩であってもメタファーであっても、登場人物「シェエラザード」がそれを語ったケースは極めて多い。これは『女のいない男たち』という本のタイトルと真逆に、実際に物語を作り上げるとき、「女」という存在を村上春樹が強く意識していることを示している。

言うまでもないことであるが、村上春樹文学における比喩表現を的確に理解するには、この作品だけではまだまだ不十分で、物足りないであろう。今後の方向としては、日本語における比喩表現コーパスも活用し、村上春樹が使う比喩表現の全般的特徴に関する研究を行いたいと考えている。

発表概要 5

坂口安吾のアイデンティティ政治研究 On Identity Politics in Sakaguchi Ango's Works

盧柏丞 (LU Bo-Cheng)

台湾東海大学大学院東海大学日本語言文化学系修士

Tunghai University

【キーワード】 坂口安吾、アイデンティティ政治、アイデンティティ、
天皇制、文化研究
Sakaguchi Ango, Identity Politics, Identity, The Japanese
Emperor System, Cultural Studies

坂口安吾がそれらの文章を書く目的を考えみると、彼は文章を書くことによって自らのナショナルアイデンティティや文化的アイデンティティがある種集団アイデンティティを作り、読者がそれらの作品を読むときに、坂口安吾自分自身のアイデンティティと読者のアイデンティティの間の差異を考え始め、読者にアイデンティティを再構成させるという目的があると思う。

坂口安吾の随筆の研究の多くは、天皇制言説、ナショナルアイデンティティや文化言説など一つのテーマに集中した研究がほとんどであるが、本研究は坂口安吾の随筆作品にあらわれた以下の四つの部分を考え直したいと思う、(1) 天皇と天皇制に関する言説 (2) 天皇と日本の関係 (3) 国家のあり方 (4) 日本人としての自己アイデンティティの構成である。この四つの部分から考え直す理由は、坂口安吾の戦後の随筆は、天皇制言説、ナショナルアイデンティティ、文化言説と歴史に関する作品が多いので、筆者は安吾が自分の作品によって、政治参加があると仮定するからである。これを明らかにするため、アイデンティティ・ポリティクスという概念から坂口安吾の作品を研究する。

安吾文学のアイデンティティ・ポリティクスという視点から研究するため、差異の政治、文化的アイデンティティ、そして文化の政治学という三つの側面から分析をおこなう。アイデンティティ・ポリティクスは自由に自分を認める身分を選び、その身分の確立に努力する行動であり、文学作品や芸術の作品も、アイデンティティ・ポリティクスの表現法であると考えられる。差異の政治、文化的アイデンティティ、そして文化の政治学という三つの側面から見て、坂口安吾の作品を読むとき、安吾の立場と読者の立場のあいだの対話の過程において、読者の考え方に変化が生じたかどうかかわからない。とはいえ、変わらない場合でも、自らの立場をより鮮明にすることにつながるだろう。

発表概要 6

日清修好条規の検討
—清国、日本及び国際的視点より—
Examination of an Amity Article
between Japan and the Ching Dynasty in 1871:
from the International Point of View of Ching Dynasty and Japan

李宜潔 (LEE IChieh)
台湾政治大学博士前期課程
National Chengchi University

【キーワード】 日清修好条規、日中関係、李鴻章、柳原前光、伊達宗城
Sino-Japanese Amity Treaty (1871), Sino-Japanese Relations,
Li Hung-chong, Yanagihara Sakimitsu, Date Munenari

日清修好条規は日本が中国と近代において結ばれた最初の平等友好条約であるため、中日関係において重要な意味を持っているものであるといえる故、日清修好条規に関する研究は日本でも台湾でも盛んに行われているが、日本も台湾も相手国の研究成果を容易に受け入れることができない。

例えば、日本人学者藤村道生は「日清修好条規の締結は日本の勝利とともに清国の失敗である」という学説を提出しているが、台湾人学者林子候は「日本が清国と条約を締結したいのは清国より最大の利権を取るためのみである。中には友好というものは全然持っていなかった」と考えている。

筆者の観察によれば、それは立場と視点が違うため生み出したすれ違いである。故に本稿は3つの視点より日清修好条規を検討して、客観的立場より両方とも受け入れる論説を見出すことを試みたい。即ち、1、明治維新後の日本の視点。明治維新の国権外交が日清修好条規の締結に対してどのような影響を与えたということを探究する。2、アヘン戦争後の中国の視点。中国がアヘン戦争後に直面した外交問題を分析し、それによって中国がなぜ日本と修好条約を締結したという理由を解明する。3、アヘン戦争後の国際的視点。列強がアヘン戦争後東アジアに対する態度の転換より、日清修好条規締結の意味を明らかにする。

これらの視点より中日両国が相互的理解を進めようとした。

東京外国語大学国際日本研究センター 『日本語・日本学研究』 第5号執筆者一覧

高橋圭子	東洋大学
林淑璋	元智大学
伊集院郁子	東京外国語大学
高嶋朋子	東京外国語大学
藤井嘉章	東京外国語大学大学院博士前期課程
トゥザ ライン	東京外国語大学大学院博士後期課程
劉妍	東京外国語大学大学院博士後期課程
那須理香	国際基督教大学大学院博士後期課程
小林幸江	東京外国語大学
鈴木美加	東京外国語大学
友常勉	東京外国語大学

『日本語・日本学研究』 国際編集顧問一覧（順不同）

趙華敏	北京大学
徐一平	北京外国語大学
蕭幸君	東海大学（台湾）
尹鎬淑	サイバー韓国外語大学校
任榮哲	中央大学校（韓国）
于乃明	国立政治大学
金鐘德	韓国外語大学校
陳明姿	国立台湾大学
タン・レンレン	シンガポール国立大学

編集後記 東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第5号をお届けします。今号への投稿論文の総数は12本（言語研究6、歴史3、教育2、文学1）、うち6本が採用となりました。また、2014年7月29日～8月1日にわたって本センターは夏季セミナー2014「言語・文学・社会」を開催いたしました。それにあわせて開かれたサマースクールの大学院生の発表要旨を本号でも掲載いたしました。国内外の研究者・大学院生のエネルギーに圧倒されるとともに、大きな刺激をいただきました。夏季セミナー、サマースクール、そして本号刊行にご協力いただいたみなさまに心から感謝申し上げます。（友常）

東京外国語大学国際日本研究センター
日本語・日本学研究 vol.5
Journal for Japanese Studies

発行：2015年3月31日

編集者・発行者 東京外国語大学国際日本研究センター

代表者 野本京子
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラ・グローバル 2F
Tel/Fax: 042-330-5794

印刷・製本 (有)山猫印刷所
〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 5-39-1
Tel: 03-5810-6945

Peer-Reviewed Articles

[Research Note]

Expression of Assertion in Opinion Essay by
Japanese and Taiwanese: The Analysis and Titles and
Textual Structure in Japanese and Taiwanese
Mandarin Writing

**Keiko TAKAHASHI, Shuchang LIN,
Ikuko IJUIN**

[Research Note]

“Language as a Bond” for Repatriates
—focusing on Young Amamian Repatriates from
Taiwan—

Tomoko TAKASHIMA

Peer Reviewed Articles of Graduate Students

‘Kokinshu Tokagami’ and Motoori Norinaga’s Poetics
Yoshiaki FUJII

The Differences between “hà”, “kâ” in Burmese
—Contrast from Japanese “Wa”, “Ga”—

Thuzar HLAING

An Education Practice Study

On Training the Basis of Self-reliance

—Based on Interviews with Obata Elementary School
Graduates

Ken RYU

[Research Note]

The 1893 World’s Parliament of Religions in Chicago:
from a Perspective of the Diffusion of ‘Modern
Buddhism’ by Soen Shaku

Rika NASU

Articles

Japanese Language Education in Higher Education
Institutions in Japan and Overseas; Mid-term
Database Report 3: Japanese Textbooks and
Problems in Teaching Japanese Language in
Overseas Undergraduate School Education

Yukie KOBAYASHI, Mika SUZUKI

Report on Basic Research for e-Japanology

Tsutomu TOMOTSUNE

**Abstracts of the Graduate Students’ Session
in Summer Seminar 2014**

Contributors

International Editorial Committee Members

Postscript